

ダンジョンに英雄を、
伴侶を、名声を、正義
を、混沌を。果ては出
会いなどを求めるのは
間違っている

七海香波

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

潜れ、地の底へ。

探せ、誰も知らぬ最果ての奥を。

地の上を揺らす細波オラトリアに心囚われるな。

炎の海を渡り、電の雨を駆け、毒の風を掻い潜り。

前人未踏の真実最下層へ至らんとするものこそ、真の冒険者なり。

目次

『深々層』 攻略編

ダンジョンに英雄を、伴侶を、名声を、正義を、混沌を。果ては出会いなどを求めるのは間違っている

だから今日も俺は迷宮に潜る

第239層『遊毒怪廊』、そして

38

やれるもやれぬも、等しくやり遂げね

ばならぬ

58

「冒険者は冒険をしてはならない」

68

【漆黒の雷弾】、カツコ良い詠唱は必要

じゃよネ！ by 変態エ○好々爺

76

熾天の蝕毒と英雄ならぬ冒険者

92

『暗黒期』編

決戦の予定と好ましからざる知らせ

122

神は踊らせ、人は踏み外し、歴史はまた

巡る

136

【神々の給仕（ゴッズプライド）】

147

「連中は俗に、一匹見れば百は居るとい

う」

168

最善を目指す『正義』と最短の『外道』

184

クレス・■■■■■と古の英雄紀

行 202

「崇高なるもの、汝の名は『食』なれば」

(サラ視点) 218

「餓える者は満ちるまで、食べぬ者は無

理をしてでも——」(サラ視点) 228

グルメホリックな戦闘給仕と偽典恩恵

(サラ視点) 243

真の心を引き出す(サラ視点)

260

神意を食らう悪意、それを食らう熱意

273

「——出来なければ貴様らに次の朝食

がないまでじゃ」(サラ視点) 284

狂乱の精霊は食卓へと還り、死の槍が

空高く飛翔する(サラ視点) 298

他力本願なぞクソくらえ、『運命』なぞ

超えてなんぼの冒険者道 by 迷宮馬鹿

荘厳なるかな九つの鐘、闇夜拓く明星

剣 311

「——悪いな、気が変わった」 324

さあ謡え。彼らは今日も、明日を征く

…… 361

【おまけ】クレスの三分（大嘘）??悪派

闊クツキング! 〓〓ももあるよ〓

367

間章：2023冬イベ

フロンティア☆クリスマスス〓深々と降

り積もれ、甘雪の祝福よ〓 386

『カリギュラの船』編

プロローグ：夜天に囁く + 静養の

冒険者 397

変態どもと怒れる乙女たちの、ちよつ

とした一騒ぎ 410

搜索依頼：【消えた少女の行方を追え】

426

「罪人狩り（クライム・ハント）の開催

をここに宣言しよう」 436

吟遊詩人マーカス・ダルサス（マルク

ス・ドウルースス） 454

水平線が太陽を呑み、世界は月の祝福

に満たされる 472

古の情景、実るは奇妙な『事実』

482

月下の号令 491

汝、星を穿つ白銀 503

《エーゲリアの受胎儀式》 519

【君よ、一を拓く炎熱たれ（アナムネシ

ス・イーリア） 530

エピローグ：かくして筆は置かれ、名も

なき英雄は次の冒険へ向かう ——— 549

幕間：それは希望が実る霊峰の巡礼

562

『双花魔人譚（モンスターム・オラトリ

ア）』編

絶対至死領域ドウアト・アヌビウム

576

恩恵封印

592

『深々層』 攻略編

ダンジョンに英雄を、伴侶を、名声を、正義を、混沌を。
果ては出会いなどを求めるのは間違っている

誰が呼んだか、オーバー・デッドライン死線を越えた死線——『深々層』。

第一級冒険者でさえ気軽に潜ることを許されない深層域の、更なる先。

迷宮都市オラリオにおけるかつての二大双傑、ゼウスとヘラのファミリアでさえ手の届かなかつた、人知の及ばぬ迷宮の奥深くを示すそのような言葉がある。

だが、それも考えれば可笑しな話だった。

この名称の存在を一般人が知れば、彼らは「ただ一括りに『深層』と呼称してしまえば済む話だろう」と首を傾げるに違いない。

されどこの名は、確かに誰かが存在意義を認めたからこそ生まれたのだ。

かつての最強さえ届くことのなかつた、アンノウン未知。

それと既知の領域とを明確に区別すべき理由があつたからこそ。

そう……公には決して語られることがない、秘匿されし冒険がそこにあつたから。

天より鳴り響く無数の轟雷と、見渡す限り大地を占有する灼熱の溶岩。

阿鼻叫喚の振動が空間を絶え間なく震わせて、焼け爛れ歪まされた大気が蜃気楼を生みだす。

空前絶後の災厄に挟撃された悪環境、未だ公的な名のない『フェステイバル雷火祭天』——ダンジョン迷宮第238層。

その辛く険しい世界を、かの冒険者はただ独り、己の葬つたモンスターの遺したドロップアイテム素材を足場に疾く駆けていた。

外見上は、20代後半ほどの男子。

揺らぐ炎の如く明滅する金と朱の外套を羽織り、背中に多種多様な武装が顔を覗かせている巨大背囊を負っている。

周囲に満ちる高熱から身体を守るためか、一切の素肌を見せないよう外套と同じ素材を由来とする布を顔面にまで巻き付けており、その表情は分からない。

しかし、唯一外に出した両の灰瞳だけが、注意深く世界を観察していた。

びり、と彼の肌に伝う僅かな刺激。

それを感じるや否や、反応が神経を伝って脳に届くより早く、彼は足場にしていた炎竜『バハムート・ルティヤ』の鱗から飛びのく。

刹那、落雷——眩い光と衝撃が、つい一瞬前まで彼の居た座標目掛けて降った。

それに目もくれず、彼は即座に撃ち落とした怪魔鳥『ガルーダ・フェノメノン』の落下中の身体を足場にして、少し離れた位置で溶岩に沈みかけていた炎竜の頭骨に飛び乗った。

文字通りの『雷スコール・ライトニング雨』、怒涛の雷が雨粒の代わりに降り注ぐ地獄絵図。されどこの程度は彼にとつての日常茶飯事であるが故に、慌てることもない。少なくとも十数層前の、一面が鏡張りの階層『鏡面世界ミラー・ワールド』にて虹色の光線をやたらめつたらに放ってきた難敵を前にした時に比べれば楽な方だと、彼は内心思っていた。

そんな彼の隣に、また別の炎竜バハムートの個体が溶岩から姿を見せる。

その目は煌々と赤く血走っており、嘴をカチカチと打ち付けながら、目の前の小さき狼藉者に対して怒りを露にしていた。

「……メスカ。番の敵を取りに来たと見える」

先に葬り去っていた個体オースとの僅かな違いを看破し、クレスは察する。

彼女は襲撃者クレスによって殺された夫の、敵を討ちに来たのだと。

モンスターオースの抱く復讐心。地上を闊歩する人間と何ら変わらぬその感情を前に、彼は

同情より早く己が武器を引き抜き様に振るう。

敵は溶岩を鎧代わりに身に纏う竜。這い出たばかりで熱を保つその鎧は柔らかく重く、斬撃より打撃の方が効率的と見える——となれば。

彼は背囊から選んだ名もなき大槌……地上の鍛冶師が見れば卒倒するほどの高級素材を惜しみなくつぎ込んだ金属塊を、口から熱線を吐こうとしていた炎竜の横つ面目掛けて叩きつけた。

——雷鳴と同等の重さを誇る衝撃が、空間に罅を入れ、竜の頬骨を粉微塵に砕く。

グギャ、と悲鳴を上げて溶岩に倒れかけた竜だが、それでも竜種らしい頑丈さで構わず口腔にため込んだエネルギーを解き放たんと、ヒレのような脚で溶岩の海をしつかと踏みしめ体勢を立て直す。

だが、すでにクレスは彼女の目前から姿を消していた。

果たしてその姿は彼女の背中にあり、次なる攻撃への準備を終えていた。

「——『プロメテウス』」

無詠唱。

加えて背後に展開した四重の魔法円を経て発動した炎が彼の指先に凝縮・装填され、極小の太陽が出現する。それを彼は一本貫手の要領で、冷えかけていた炎竜の背ヒレの溶岩鎧目掛けて解き放った。

溶岩に住まう炎竜バハムートの鱗は当然、高い炎熱耐性を持つ。されど彼は魔法で、冷めて頑丈
になっていた鎧を吹き飛ばせばそれで十分だった。

既に槌をしまった右手に改めて握った純緋ヒイロカネ々色金製の槍を、生み出した弱点目掛けて
滑り込ませる。

幾重にも重なった鱗と肋骨を潜り抜けた切っ先が、核たる魔石を穿った。

そうして炎竜バハムートの雌はあらゆる魔物の例にもれず息絶え、発達部位であった嘴を残して
黒い塵となり消えた。

「……ふむ」

地上にあればあらゆる魔道具作成者にとって垂涎の的となるそれに、クレスは只の足
場としての価値しか見出さなかった。炎竜バハムートの嘴を踏んづけて着地したクレスは、それが
溶岩に沈むのを放っておいて、次なる足場目掛けて跳ぶ。

そうして辿り着いた先で周囲を見渡し、またつられてやってきたモンスターを撃破し
て仮の足場を作る。

それがここ一か月近くの、彼のここ238層における探索目録だった。

彼が探しているのはむろん、下層へと続く階段。

しかし、この階層全体を覆う高熱による陽炎と蜃気楼がそれを妨げているのだ。

見渡す限り溶岩の平地、されど熱により光が歪められているせいで、正確に遠くを見

通すことが難しい。

一歩間違えれば溶岩ヘッドボンということもあつて彼の攻略は遅々とせざるを得ず、そのおかげで半年近くその存在を発見できず足止めを強いられているのが現状なのだった。

「……ちっ」

舌打ちを漏らしたクレス。

再び肌を襲った先走りの電流落雷の前触れから身を翻した彼の眼には、上階237層の足場たる

黒鉄雲アイアンクラウドからぬるりと降り立った積嵐蛇『サンダース・スリザリン』の群れが映っていた。

無数の鉄粒子が互いに擦れあうことで静電気をまとい、磁力を帯びて宙に漂う。それが積み重なって形成された雲の中を悠々のごとく泳ぐ彼らもまた磁力を纏っているのは自明の理。

あれらを敵にするには、金属製の武器は邪魔になる。

彼らの周囲に浮遊する鉄粉が刃に纏わりつき、切れ味が落ちてしまふが故に。

よつて、クレスはまた別の武器を取り出した。

生物由来の素材を糧に生み出された『呪武器カース・ウェポン』、魔剣【ネガ・ファトゥム】。

己が生存の可能性を代償に目前の勝利を手繰り寄せるといふ、異質な魔剣。

しかしもとより、冒険者とは黄泉路に張られた蜘蛛糸よりもか細い勝機をつなぎ渡る

者。

そのように考えるクレスは、必要とあらば躊躇なくこの剣を振るう。

【ネガ・ファトウム】の効果は運命属性^{フエイトリテイ}、斬った相手の運命を敗北に収束するというもの。

その力を開放して一振りで五十の群れを黒塵と化した彼の身体が、今度は強い横からの衝撃に押され吹き飛びかける。

「ぐっ——!？」

ちらりと見えたその攻撃の正体は、^{アタマンタイト}金剛石の巨兵『オベリスク』の拳。

その質量と速度を過剰に伴った一撃がクレスの身体を弾丸の如く階層に端まで吹っ飛ばしかけるが、そうは問屋が卸さなかつた。

残心からすぐさま剣を納刀したクレスはその強固な腕を回避するとともにむんずと掴み、武の理を以てその巨体を投げ飛ばした。

溶岩に背を打って倒れ込んだ巨兵^{オベリスク}、対して背負い投げの反動を利用して宙に飛んだクレスは再び大槌を取り出し、重力の勢いと更に縦回転を加えてその心臓部目掛けて衝撃を打ち込む。

敵の脅力を利用し隙を生み、残った余剰の力を注いで弱点を打ち据える。

その必殺技の名は。

「《グラウンド・ゼロ》」

破碎。

超高密度の鉍石の身体を豆腐のごとくひしゃげさせ、内部の魔石を槌の柄より伝えた浸透勁により粉々に打ち砕く。

ドロップアイテム
素 材も残さず消え去った魔物巨兵だが、残った所で足場にしかないので大した落胆もない。

適当に近くを泳いでいた炎 バハムートの幼体 魚を次なる足場にして、一休みする。

そうしてしばしそれが泳ぐがままに身を任せていると——突如、彼の眼が色めき立つ。

彼の視線の向かう先に存在していたのは、溶岩流の流れ込む滝壺だった。暴力的なまでに水飛沫が、否、溶岩飛沫が飛び散り舞う火炎の大瀑布。

「……あれは」

その淵に立ったクレスが目を凝らすと、流れ込む溶岩流の僅かな隙間に、ちらりと色の異なる黒い穴が見え隠れしていた。

それはようやく見つけたこの灼熱世界の異物にして、恐らくは次なる階層へと繋がる出口にして入り口に違いない。

そう考えたクレスは何の躊躇もなく、紅蓮の滝壺に自ら飛び込んだ。

「……」

この階層に潜るに相応しいステータスを以てすれば、大気を蹴るのも訳はない。まるで大砲のような音を鳴らしながら何も無いように見える空中を二歩ほど踏みしめ、彼は見えていたその場所へと立った。

そしてそこに存在していたのはやはり、階段であった。

本来ならば躊躇なくそこを下るつもりであったクレス——だが。

そろそろ主神より命じられている帰還の時であることを体内時計で察した彼は、ここでキリ良く冒険の中止を決定した。

「戻るか」

『深々層』においては、あまりに深すぎるが故に神フアラナの恩恵の繋がりによる感知が困難となる。だからこそ、彼は己の生存を知らせるため、一年に一度は地上へ戻らなければならない。

それが彼に自由な探索を許している主神との、数少ない約束の一つだった。

「【我は此処にありて、尚あらざる者なり】——【シユレディングー】」

その名を詠うとともに、彼の輪郭が徐々にぼやけていく。

存在が希薄化し、虚ろのように宙に溶け、やがてこの階層から完全にクレスの姿が掻き消えた。

「——という訳でようやく次への階段を見つけた。ロイマン、次からは239階層の探索を開始する」

「あああふざけるな貴様というやつはまた！ 聞こえんぞ、私には何も聞こえなかったからなあ！」

迷宮都市オラリオにおいて冒険者たちを統括するギルド、その実質的な支配者とはすなわち都市の長とも呼びかえられる。

しかしその肩書きに似つかわしくないほど醜悪に肥満化したエルフ族のロイマンは、かろうじて己が種族の証拠として残っている長耳を必死に両手で押さえつけ、目の前の常識外の言葉を記憶から忘れ去ろうとした。

しかし彼からして目と鼻の先に座り呑気に茶を啜っている件の冒険者及び、その身に纏う今のオラリオには縁の遠すぎる素材たちの放つ圧倒的な存在感が、彼の優れた知能にどう足掻こうと現実逃避を許さなかった。

「おまつ、お前、お前というやつは！ いったいいくら私に胃薬を買わせれば良いのだ!?! ゼウスとヘラのファミリアがいなくなつて停滞しつつある今のオラリオにて、平然と

「一步どころか二百歩も前を歩いておいて！ まだ先へと平然と進んでいくんじゃない！」

「知らん。冒険者とは冒険するものだ。ならばダンジョンを攻略する俺のどこが間違っている？」

「時代を先取りしすぎなところがだ」アンタツチャブル【禁忌】！

アンタツチャブル【禁忌】。

それが彼、クレス・カタストロフ——過去現在、そしておそらく未来に至るまで比肩する者のいないであろう、現オラリオ最高にしてレベル21の冒険者であった。

「まあた貴様のせいで秘匿しなければならなくなつた情報が増えた！ これもそれもあれもどれも第一級冒険者どころか神々にさえ隠し通さなければならぬものばかり！

こんなもの一々持ち帰ってくるなこの迷宮ダンジョン・ドラムカ狂いが！」

「何故だ。『深々層』の情報を持ち帰れと言つたのはお前だろう、ロイマン」

「持ち帰られても今のオラリオでこれを活用できるのが貴様だけな以上、その存在価値は無どころか負マイナスだからだ！ それが分かつて以降余計なものは何一つ持つてくるなど言つたはずだが——」

「ちゃんと言われた通り、余計そうなものは捨ててきたが——」

「まだ配慮が足らんのだと分かれ！ 良いか、今の停滞しつつあるオラリオにとつてお前とそれに付随する全ては劇物でしかないのだ！」

クレス・カタストロフの名とその偉業は、徹底的に隠蔽されている。

彼の存在を知るのは彼本人と彼の主神、ギルドの真の長たるウラノス、そして他のファミリアへの情報漏洩を完璧に防ぐために他のギルド員を使うことができず、否が応でも彼の担当にならざるを得なかったロイマンのみである。

ロイマンはクレスの提出した書類を全て読んだ後、彼の火プロメテウスによつて焼却させている。後は口頭でウラノスにその内容を伝えて、これで彼らの頭の中にしかクレスという冒険者の情報は残らない。

こうでもしなければ、どうなるか。

次なる覇権を求めるロキとフレイヤのファミリアの両方は彼を取り込もうとするだろうし、そしてクレスがそれらに対して反応する——それは控えめに言つて、オラリオの終焉である。

ロキはまだいいだろう。天界での評判はともかく、今の彼女はクレスに断られれば表立つての勧誘を諦めるほどには穏当な女神だからだ。

しかしフレイヤ・ファミリアはそうもいかない。アポロンほどではないにせよ、あの女神の見せる執着心は並々ならぬものだ。そんな彼女がひとたび彼にちよつかいをかけ、誤つて逆鱗にでも触れてみれば……これまでの秩序がドミノ倒しの如く崩れ去っていく。

そんなことが容易く想像できてしまいがゆえに、これまで通り甘い汁を吸い続けているロイマンはなんとしてでも現状を維持すべく、全てを己一人の身体に抱え込まなければならなかったのだ。

そりやあもう、肥満体になるのも無理はないストレスだった。

そしてそれを顧みることなく、今度は『深々層』から持ち帰ったのであろう未知の果実をお茶請けとして悠々とかじる馬鹿^{クレス}。

「ばくばく……ごつくん……ふうー。……そうか」

ロイマンはこの礼儀知らずな冒険者に、いつも通り内心で当たり散らした。

——これだから冒険者^{愚か者ども}は！

「そうか、ではない！ 貴様はいつも……自分が地上に与える影響^{ダンジョン}を考えろー」

「そうは言われてもな。俺は冒険をするだけだ。俺と同じだけの熱を迷宮^{ダンジョン}に注げばこれ

ほどのこと、他の誰でも出来よう。それをしない連中の怠慢の責任を俺に押し付けられても正直……困る」

今のオラリオに蔓延っている空気のことを、クレスは主神づてに聞き及んでいる。

そのどれもが、彼にとつては些^{ちとつてもいいこと}事だった。

「英雄^{オラトリア}」、「伴侶^{オーズ}」、「名声^{フィオナの代用品}」。【正義^{星輝}】、【混沌^{イヴァルス}】、【出会い^{ハーレム}】。そんなものを目的としてい

る限り、迷宮^{ダンジョン}の攻略はいつまで経っても終わらない。冒険者^{俺たち}は本来、ただそこにある

迷宮ダンジョンを攻略する者だ。その過程でついでに拾えるものを目的として、冒険者の意味をはき違えている限り、連中が俺に追いつくことはない。……それで、悪いのはどちらだ？」
 これで報告は終わりだと言わんばかりに、クレスは飲み切った湯呑を置いて席を立つ。

その背をロイマンは引き止めない。引き止められない。

何故ならギルドの権威を笠に着て言うことを聞かせられる相手ではないのだから。

今のギルドが率いることのできる最大戦力を、クレスは片手間に蹴散らすことが出来るのだから。

三大冒険者クエスト依頼すら「面倒だ」の一言で断ることを許される、傲慢。

それこそが触れてはならぬアンタツチャブルクレス・カタストロフという存在だから。

「ふんっ！」

ロイマンが一つ瞬きをした次の瞬間、クレスの姿は彼の前から完璧に消え失せていた。

どうせ来た時と同様に転移魔法「シュレインガ」で姿を消したのだろうと、鼻息荒く椅子に背中をぎしりと沈み込ませたロイマンは、愛用の胃薬を飲み込みながら今日も毒づく。

「好き勝手しおつて。……誰もが貴様ほど真面目になれるわけではないのだ、【禁忌】」
アンタツチャブル

これほどのストレスに晒されているのだから、やはりちよつとくらい不正など許さ

れてしかるべきだ。

そう考えて手慰みに帳簿上の数値を弄びながら、ロイマンは次に彼が帰還することになる一年後に備えてひと時の安寧に精神を委ねるのだった。

なおこの後の主神との適当な約束で半年後に突然戻ってきた彼の面会に不意打ちを受けることを、今の彼はまだ知らない。

ギルドが存在するバベルには、その利便性から数々の神が居を構えている。

クレスの主神もまた、その例に漏れなかった。

ただし彼女は「馬鹿と煙はなんとやら」と言い放ち、その他大勢が好む高層階とは真逆の地下20階をファミリアの本拠地として指定していた。

ウラノスの祭壇のほぼ真上に存在する、通常の昇降機操作では辿り着くことが出来ない階に降りたクレスは、一年ぶりにようやく己の家たる『時空の狭間』へと帰還した。

そこにあるのは、こじんまりとした疑似太陽によって、地上と変わらない明るさが広がる

彼が迷宮から持ち帰ってきた疑似太陽によって、地上と変わらない明るさが広がる地。

その中を家へと向けて歩を進める彼を、恩恵の近づく気配を察した主神が出迎えた。

「おかえりだね、クレス。今回も五体満足で帰ってきてくれて嬉しいよ」

「ただいま、我が主神カオス。幸いにして貴女の恩恵を上回るモンスターに出くわさなかったからな」

漆黒の長髪に波打つ青と赤の摩訶不思議なグラデーションが特徴的な、女神カオス。彼女が地上に初めに降り立った原初の神々たちの一柱にして、クレスの主神だった。

「では恩恵の更新を」

「ええ……それより先にご飯にしない？ 私の手作りだよ。冷めちゃうともつたいたいじゃないか」

「いや、先に更新だ。更新後のステータスに慣れるための時間は、一刻でも惜しい。それに、以前買った魔道具があれば元通り温めなおすこともできるだろう」

「そうだけどき……出来立てを食べてほしいのは神も人も変わらないんだからね。それでも君の我儘を優先してあげるんだからさ、もっとこの寛大な女神に感謝を捧げなよ」
「いつも感謝しているとも。だから俺がいない間に贅沢をするだけのお金をちゃんと残していつているだろう」

「そういうことじゃないんだよ！ ホント、どこで育て方を間違えたんだか……」

ぶつくさ言いながら、地べたに座り込んだクレスの背中にカオスが神血イコルを垂らす。

女心をまるで知らないド畜生だがそれでも愛してやまない眷属の前に、彼女はパパっ

と恩恵を更新する。

「……はい、終わったよ」

ヒエログリフ
神聖文字を転写した紙を受け取り、クレスはざっと流し見る。

クレス・カタストロフ

L v . 2 1

力：B 7 6 7 耐久：C 6 5 0 器用：S 9 8 9 敏捷：B 7 8 8 魔力：B 7 0 1

耐異常：A 精癒：B 回避：B 暗視：A 耐■：S

適応：C 心眼：A 合気：B 魔導：C 神秘：B

鍛冶：D 集中：B 耐魔：C 挑戦：D 節睡：E

『スキル』

アルミギア・ミドリレクス
【斬打巧撃】

・適正属性による近距離攻撃威力上昇。

・弱点特攻

【強魔弱人】
ダンジョンアタック

・迷宮産魔物との戦闘時、スタンジョン能力の大幅な上昇。

・地上における人間種との戦闘時、スタンジョン能力の大幅な低下。

【寡黙不語】
カタラヌモノ

・魔法の詠唱破棄可能。

・詠唱破棄時、魔法威力の減衰。

【深淵踏破】
オデユツセイア

・未知の環境を冒険する時限定で、幸運アビリティを一時発現。

・既知の環境を冒険する際、幸運アビリティを一時喪失。

【孤高独学】
ソロ・アタツカ

・仲間の不在時、迷宮攻略における能率超上昇。

・同じ信念を背負う真の友を得た時、このスキルを喪失する。

【■■■■■■■■】
????
????
????

・???

『魔法』

【プロメテウス】

・火属性。

詠唱式：『原初の火よ、人理の歩みを照らせ。大神より磔刑を受けし貴神あなたに敬意を捧ぐ』

う。精神こころ在る限り我が歩みは終わることなどなく、やがて英知の指し示す果てへと至ら
ん」

【シユレディンガー】

・非被観測時限定転移魔法。

・魔力消費量の多寡により移動可能距離変化。

詠唱式：『我は此処にありて、尚あらざる者なり』

【■■■■■】

・?????
詠唱式：『?????』

「相変わらず無茶苦茶なステイタスだねエ君は。神会デイトトクスで下らない言い争いをしている連
中に見せてやりたいよ。本当は私の眷属はこんなにすごいんだー、つてね。まあそんな
ことはしないけど」

「そうか。まあ、俺の関知するところじゃないし好きにすればいい。したところで俺の
冒険は何も変わらないしな」

「ははつ、まさか。冗談さ。君の邪魔をするとところは私の本意じゃないからね」顔を揃えてステイタスを写した紙を見ながら、カオスは思案する。

クレス・カタストロフは彼女にとって最初にして最後の眷属だ。

それは他の子どもたちを彼という劇薬に触れさせないため——そして彼という神時代の異物を誰よりも近くで見張るため。

クレスの恩恵は最初期に作られた、試作型にして実験体。最近の洗練されてきた恩恵と比べて複雑かつ、一歩間違えば子供を壊しかねない粗悪な設計となっている。

神々さえ意図しなかった不具合も多く含まれており、それが下界に存在する未知の可能性と運よく噛み合った結果が今の彼を形作っている。

四百年ほど前から不老にほぼ等しい存在となった彼は今、段々と地上の生き物の枠組みを超えて天上の領域に近づきつつある。

そんな彼に対して抱いている胸の重みは、罪悪感か、それとも愛に由来するものなのか——自身の感情を図りかねながら、彼女は彼の腕を自らの胸中に絡めとり立ち上がった。

「さ、用事も済んだしさつさと食事にしよう！ 年に二度の、大事な眷属との時間なんだ。これ以上削られるといくら温厚な私でも怒っちゃうよ？」

「ああ、すまない。それで、今日は何なんだ？」

「ふふん、驚きなよ。今日はタケミカツチから教わった極東料理さ。何しろあそこの子どもたちは食に関しては一倍うるさいからね、きつと君も気に入ること間違いなしだよ！」

「なら楽しみだ。なにしろ我が主神の飯はどれをとつてもうまいからな。それと元々うまい文化が合わされば、よりうまいことには間違いあるまい。それが楽しみで戻っているところもあるからな、たつぷり一年分味わわせてもらおう」

「……！ そうそう、こういうことなんだよ！」

「なにがだ？」

「さーてね？ ふんふーん、ふふーん！」

それでも、こうして馬鹿正直に主神の手作りの料理を褒め称えられるあたり、彼はまだひねくれた神とは違つて人間なのだろう。

——残念なことに、まだまだ彼は人間男としては失格に等しいけどね。

そんなことを想いつつ頬を緩ませながら、カオスはクレスとともに愛しの我が家に戻るのであった。

これは青年が潜り、女神が引き留める、ライブ・ダンジョン「迷宮攻略記」。

だから今日も俺は迷宮に潜る

迷宮第188層、『古骸戦場』。

それは迷宮に数ある闘技場の一つであり、最大の特徴は拓かれていること。

焼け落ちた紅色の空。吹き荒ぶ黄土色の砂風。そして、階層の端まで広がる巨大戦場。

かの『白宮殿』のように『大円壁』によって各種の戦いの広間に区切られていることが一切ない、階層の最端までを一目で見通すことのできる砂塵の平野。

次層への階段は何一つ隠されることなく、沈黙を貫きながら平野の中央に窪みのように鎮座している。

では、そこへの道程を隔たる障害とは？

語るまでもない。

無限に戦い、争い続ける、二陣営の竜牙兵軍団だ。

『『オオオ——ヲヲヲヲオオオツ!!』』

『『『キエエエエエ——ッ！』』』

東西に分かれた、それぞれ各々の竜牙將軍を頂点とした二勢力。

この地を攻略する冒険者は、彼らの勢力が衝突しあう最前線フロントラインを突破しなければならぬ。

肉を持たない骨の身体ゆえに疲労を知らない彼らは、永遠に戦い続けることで経験を延々と蓄え続けている。そのようなモンスターたちによる左右からの挟撃を耐え忍びつつ、階層中央の階段を目指すのが、この階層における正当な攻略法だ。

そして、そこにふらりと訪れた異邦冒険者の者が一人。

「今日も元氣だなお前らは。では、俺も混ぜるか」

下層からの階段を昇ってこの階層を訪れたクレス・カタストロフは手始めに、目の前で真つ向から骨剣で鏝迫り合いを演じていた二体の『スパルトイ・シニアエリート』の魔石をその緋槍で以て穿ち砕いた。

その断末魔は、普段であれば戦場の剣戟の音に紛れて消えていく些末な雑音ノイズだった。

されど今回のそれは、教会の天辺に据え付けられた鐘の音のように戦場の末端まで届き——それまで争いあっていた全ての兵力が動きを止め、その視線をただ彼一人に向けた。

モンスターの怨敵である人間の出現。異物ダンジョン母を攻略する無礼な輩を前にして、彼

らは虚ろな眼窩で以て互いの顔を見合わせ、頷き、団結したように見えた。

この場に存在する自分以外の全ての敵意が己に向いたのを自覚しつつ、その光景を睥睨しながら、クレスは己が武装を構える。

「収穫の時だ。そろそろ前の乱獲の損害も癒えてきたな？ 育ったお前たちの果^{ドロップアイテム} 実は、今回もさぞ良い素材となるだろう。……では、死ね」

その一言を切っ掛けに、再び古戦場の空気が爆ぜた。
乾ききった死の大地にて、死^{モンスター}せる戦士^{スライム}たちと生^{冒険者}きる人間による闘争が花開く――。

正面から迫る骨槍の連続刺突を掻い潜り、懐に迫ったのち左手に握る剣を一閃。

同時に背後から斬りかかってきた骨長剣の一撃を接近前に右手の緋槍で薙ぎ払い、肋骨の隙間に除く心臓部を寸分たがわず突く。急所を穿たれた竜^{スバルトイ・シニアエリート}牙強兵は滾る戦意むなしく爆散し、戦場の塵となった。

すかさず迫る別個体の群れに相對しながら、両手の剣と長槍を構える。

ワン・ソード・ワン・スピア
一 剣 一 槍

それがこのような人型モンスターとの乱戦時における、俺、クレス・カタストロフの最適解だ。

『キイイイツ!! ——グコツ?!』

『クカカカカカ——ツ!! ——ガキユツ?!』

『キキツ、クケケケケエエ——ゲキツ?!』

迷宮ダンジョンにて生まれ育つたモンスターは通常、初めて覚えた戦法を愚直に使い続けて極めていく。

天然武器ネイチャーウェポンの剣を手に入れた個体なら剣術ばかりに執着し、弓を手に入れた個体ならば狙撃ばかりに拘泥する。取り扱いの異なる別の武器種について、奴らは自ら手を伸ばさうとしない。現状の自分の攻撃手段が通じない相手がいたとしても、無謀ゴリに呐喊押しするか素直に撤退を選ぶかの楽な二通りに逃げる。

言わば、井の中の蛙。

現在いまの自分に出来ることはしても、出来ないことを無理に克服しようとまではしない。

発展や応用を行う知性こそあれど、まったく趣の異なる分野を学ぼうとする理性はない。

だからこそ、連中が己に残したままの弱点をつけるこの戦一剣い方が面白一槍いように決まる。

剣や槌、もしくは発達した鉤爪を振るう接近戦主体のモンスターについては、槍を以

てその攻撃が届かない位置から牽制しつつ迎撃する。

ハルバート
デスサイズ

戦斧や大鎌などを振るう中距離戦主体のモンスターについては、剣を以てその得物

が満足に振るえない位置にまで近づき攻め立てる。

メリット
デメリット

利点を奪い、不利を押し付ける。

それはモンスターには不可能な、冒険者だからこそ出来る戦い方。

アルミギア・ミドリフレックス

【斬打巧撃】——敵の性質に応じて適切な武装と技を使い分けることで威力を向上

させられるスキルをこの一对多の場において最大限発揮できるのが、これら剣と槍の組み合わせなのだ。

『ガキヤキャツ！』

迫る短柄の骨槌を持った竜スバルトイ・シニアエリート牙強兵が跳びかかってくる。

確かに、落下のエネルギーを加算した強打撃は『深々層』相応の膂力を伴って凄まじい威力を生むに違いない。

しかし空中に跳んだとなれば足の踏ん張りがきかず、自然と攻撃の軌道は固定されるものだ。

迫る槌の一撃から目を逸らさず、俺は相手の攻撃が完了するより早く、その魔石を槍で突き壊した。モンスターの摂理に従い、その身体は灰となつて素材スバルトイの骨片が残る。

それを拾う間もなく迫るのはまた別の、巨大な馬上槍ランスを掲げ突進を行う竜スバルトイ・シニアエリート牙強兵

だ。

『キエアアアッ!!』

金切声にも似た猿叫を上げながら迫る竜スバルトイ・シニアエリート牙強兵、その側面に回り込むように身体を仰け反らせ回避しながら、すれ違いざまに剣を振るう。

槍を引き戻す間もなく宙を舞う塵となった敵からは、発達部位である上腕骨が残った。

そこへ降り注ぐ、骨の弓兵アーチャーからの矢の豪雨。

「ふん」

槍の柄の中央付近を持ち、指先の動きで回転——疑似的な円形ラウンズ・シールド盾を形成して身を守る。

それを隙と見て襲い掛かってきた連中の獲物の軌道を、残っていた剣を用いて軽く誘導してやって相打ちにもっていかせる。互いの矛先で互いの魔石を貫いた骨兵らは、思わぬ同士討ちをさせられたことに苦悶の声を漏らして消滅していった。

そうして時折降り注ぐ矢雨の中を駆け抜けつつ、縦横無尽に戦場を駆ける。

切り裂き、貫き、薙ぎ払い、打ち砕く。

一撃必中。魔石という鍛えようのない明確な弱点をひたすらに、執拗に付け狙いながら。

軍と呼べどもその実態は単なる個の寄せ集めにすぎず、連中には訓練された連携など存在しない。協力、その出来ない軍勢などむしろ互いの足を引っ張るだけにすぎないということ、彼らは知らない。

隙間だらけの波状攻撃を俺という異物に喰い破られ足並みの乱れた彼らの一部には、互いに足を絡ませてすつ転んでしまい、知恵の輪のように骨の凹凸が噛み合つて動けなくなつてしまったものさえ見受けられる。それは俺にとつての絶好の的であり、足元に落ちていた骨片を戦いの最中に蹴り飛ばしてやれば、奴らは抗う術を持たないまま新たな素材を残して二体同時に消えていった。

戦いの趨勢は、どう見ようとこちら側に転がっていた。

俺が乱入するまでに骨勢が轟かせていた鬨の声は既に、蹂躪されるだけの悲鳴の重奏に変化している。

地面にまき散らされる数々の骨の欠片。やがて地を満たさんとする朋友の墓標の上に、新たな骸が次から次へと積み重なっていく。

その光景にはいくらモンスターと言えど、畏怖の念を抱かずにはいられなかったのか。

奴らの中に怯えの空気が醸成され、徐々に及び腰になりつつある輩が生まれてきたのを見て取つて、

「……そろそろ頃合いか」

打倒したのは三百と少し。これ以上の素材は、今回は不要か。

ならばあとは回収するだけなのだが、それを邪魔されると鬱陶しくて仕方がない。

続けて剣での立ち合いを挑んできた威勢のいい竜スバルトイ・シニアエリート牙強兵の魔石を槍の穂先で弾きながら、並行詠唱を開始。

「——【原初の火よ、人理の歩みを照らせ】」

振り下ろされた斬馬刀を踏みつけてその上を駆けあがり、一瞬獲物の自由が利かなくなつて硬直した相手の魔石を肋骨ごと蹴り碎いて。

「【大神より磔刑を受けし貴神あなたに敬意を捧ごう】」

モーニングスター打棘棍棒を扱う相手の一撃を跳び退つて回避してから反転、急前進し切り裂いて、
こころ「精神在る限り我が歩みは終わることなどなく、」

飛来してきた投げ槍をすかさず弾いて下から上へ跳ね上げ、宙でくるくると弧を描きながら落下してくるその尻を右足の甲で蹴り飛ばし相手先へと送り返して——。

「【やがて英知の指し示す果てへと至らん】——【プロメテウス】」

解き放たれるは、人に扱うことを許された規模の小太陽。

この古戦場の上空に満ちる陰の落ちた紅色を白く塗り替える、極光の顕現。

それは間を置かず地上へと向けて隕石の如く落下する。向かう先に存在しているの

は東方の勢力だった。

彼らは慌てて矢を射かけ槍を投げつけて太陽を打ち崩そうとするが……それは叶わなかった。

接地した巨大火球は瞬く間に炸裂し、その場にいたモンスターらを余すことなく焼き払った。竜牙強兵も竜牙隊長も、竜牙士官だろうが竜牙將軍だろうが、構わず、灼熱の波濤で全てを呑み込んで消滅させる。

更におまけとばかりに、余波たる熱波が西側勢力の一部をも溶融させていった。

「こんなものか」

上級冒険者を超えた、言うなれば超級冒険者の長文詠唱から生み出される戦略級魔法。

地上であればまず放つ機会の訪れない【魔法】は、一応迷宮が崩壊しない程度に威力を抑えていたものの、軽く三万はいた片側の兵力の全てを文字通り消し炭にした。

——それだけには留まらず。

「何を呆けてる？ 次はお前らの番だぞ」

長年の宿敵を刹那の間に失って啞然としていた西方の骨兵たちを、天に浮かぶもう一つの疑似太陽が睥睨していた。

デュアル・ソング。二重詠唱。口内で詠唱を反響させ、同時に二回分の魔法を唱える特殊技法。

そうして顕れた二つ目の落陽が、今ここに永年の戦争の終焉を告げた。
爆裂、そして碎震。

火と光の交わりあう二度目の大爆発が階層を満たし、それまでに骨々が軋み奏でていた戦慄の歴史の一切を無に帰した。

「よしよし、今日もそれなりの素ドロッパアイテム材が採れたな」

階層は変わり、第201層。

『深々層』の安全地帯であるこの場所に設けた一軒家に帰り、あの戦場から持ち帰ってきた大量の骨セーフティポイント
ドロッパアイテムを下ろして安堵の息を吐く。

これらの骨には極微量な神珍鉄シエンシエンチエが含まれており、それがここ最近の俺の武装の主な構成源となっている。先ほどの戦いはこれの回収作業だった、というわけだ。

次はこれを精製する段階であり、というわけでこれまた別の階層から獲ってきた加工道具を連れてくる。

『——グギャガアツ!?!』

「やかましい」

捕まえる時に一度懲らしめたはずだがまた暴れようとしていたので、殴りつけて黙らせる。

このモンスターは通称——とはいえ俺くらいしか呼ぶ者はいないが——光金龍『ゴルデン・ワイアーム』。

翼のない代わりに黄金の鱗を持ち、そして生まれ持った宝^{ストレージ・オーガン}袋と呼ばれる特殊な内臓に珍しいモンスターの素材や天然武器^{ネイチャー・ウェポン}を貯め込む習性を持っている。とはいえそれらを自前の火息^{ブレス}で溶かしてしまうという少々残念な一面もあるのだが……今回はそれが役に立つ。

「そら食え」

『アギヤオツ!? ……ウグゴオオオオオオツ?!?!?』

拘束具で無理矢理顎をこじ開け、そこに今回集めてきた骨を放り込んでいく。

喉奥^{ブレス}に存在する宝^{ストレージ・オーガン}袋へ目掛けてぽいぽいと投入していけば、時折変な呻き声とともに火息を伴う盛大なくしゃみを暴発させるのだが、それをひよいと避けつつまた投入を再開する。

後はこいつが勝手に体内で素材を鑄溶^{ブレス}かして、生まれた不純物を火息とともに吐き出し、最後に純粋な神^{シエンジエンチエ}珍鉄の塊が残るといふ訳だ。

『プロメテウス』でやってもいいのだが、いかんせん、火力の調整に失敗すると神^{シエンジエンチエ}珍鉄

諸共全部吹っ飛ばしてしまうから困る。事実188層にて魔法で焼き払った連中の居た場所には、一切の素材が残っていないなかったからな。

その点、絶妙な火力を吐ける光ゴールデン・ワイアム金龍はここ数十年の俺にとってかなりありがたい存在だった。

「よし、全部食ったな。後は二週間ほど放置して、取り出すだけと……」

間違つても眼の届かないところで吐き出さないよう開口具をきつく締めた後、連れてきた時と同様のわずらわしさを覚えることのないよう、先に殴つて気絶させてから拘束部屋に放り込む。

後できつと怒りを覚えて暴れ散らかすだろうが、そうしようとすればするだけ竜の体内温度は上がり、より早く素材が出来る。

恐らくこの光景をガネーシャ・ファミリアなどに見られればその残酷さに問い詰められたり本アイアム・ガネーシャ部に連行されたりと面倒が生まれるのだろうが、あいにくとここを訪れる人間は俺一人だけ。よって最も効率のいいこの作業を止める理由は、どこにもなかった。

「……さて、次の攻略に備えて携帯食料も作っておかないとな」

龍のことはさておいて、他の準備へと思考を巡らせる。

新たに潜ることになる第239層になにが待ち受けているのか、俺は当然知らない。

故に、想定されるあらゆる障害を乗り越えられるだけの準備を済ませておくのは冒険者として必然のことだ。

先ほどの行為についてもその一環で、238層の攻略中に破損した武器を修復するために必要なことだった。決して無意味な虐待を行っているわけではない。

そして栄養の補給について考えることもまた、俺が生き物である以上は避けては通れない課題だ。いくらレベルが上がっても、根本的な欲求を捨て去ることはできないのだから。

更には地図作成用の魔道具についても一度分解して整備する必要があるし、防具についてもあらゆる局面に対応できるように、最低十種類は整えておかなければならない。

他にも回復道具の調合など、やらなければならぬことは数多く積み重なっている。

「急ぐ」

地上オラリオで買い揃えられる品々の質は残念ながら、現状の『深々層』攻略には全くと言っていいほど間に合っていない。

必要な攻略準備の全てを、俺は自分一人で済ませなければならぬのだ。

そのため求められる知識は昔、他のファミリアの主神らに頭を下げて回って叩き込んでもらった。

武具の修繕から薬品の精密な調合まで、彼らから受けた恩恵は今も変わらずこの身で

覚えている。

なればこそ。

「より深く、底へと潜るために」

彼らからの恩により生じる感謝もまた、迷宮ダンジョンの攻略へと帰結する。

その行為から外れた雑念を抱くつもりはない。それらは、いざというときに迷いを生んでしまう厄介ものだから。

俺は冒険者だ。だから迷宮ダンジョンに潜る。今日の天気は悪くない。だから迷宮ダンジョンに潜る。

何かを斬るのは心地よい。だから迷宮ダンジョンに潜る。主神の持たせてくれた弁当がうまかった。だから迷宮ダンジョンに潜る。

昨日の夢は山登りだった。だから迷宮ダンジョンに潜る。実は猫を飼いたい。だから迷宮ダンジョンに潜る。

最近の趣味は武器に特殊機構を組み込むこと。だから迷宮ダンジョンに潜る。

雨は嫌いだし雪は大嫌いだ。だから迷宮ダンジョンに潜る。そういえば今日は土曜日だった。だから迷宮ダンジョンに潜る。

なんか迷宮ダンジョンにも飽きてきたな。だから迷宮ダンジョンに潜る。

明日もきつと良い一日になるだろう。

だから今日も、俺は迷宮ダンジョンに潜る。

それが俺、クレス・カラストロフの人生哲学であり行動論理。

「ふぁーあ……少し眠いな。じゃ、攻略準備の続きといくか」

身に纏っていた第238層『雷火祭天』フェスティバル 攻略用装備である、耐熱耐雷性に優れた『赤王竜の膜外套』ドライグ・クロークを脱いで家の中へ入る。

眠気をこらえて薬剤の調合を始めようとするが——その前に、中にいた影から声を掛けられる。

「おかえりなのじゃ、主殿。待つておったぞ？」

「……帰れ」

人一人訪れない『深々層』の仮拠点。

そこで勝手に柵から取り出した高級茶を啜りながら俺を出迎えたあまりに凶々しい客人に、俺は思わず脱いだばかりの外套を投げつけた。

第239層『遊毒怪廊』、そして――

新階層へと赴く時は、いつもこの胸中が震えてやまない。

未知へ足を踏み入れる興奮と、死の淵へまた一步近づいている恐怖。

子供心さながらの無謀ワクワクと成熟した大人の精神こころが訴える躊躇いが魂の奥底でない交ぜになり、拮抗して丁度よい塩梅となる不思議な感覚――この状態こそが俺、クレス・カタストロフという冒険者の絶好ベストコンディション調だった。

奮い立つ身体で階層を繋ぐ階段を一步ずつ噛みしめるように下りながら、逸る気持ちを抑えつつ俺は自らの身に纏う攻略装備をもう一度視線でなぞって確かめる。

耐炎、耐雷、耐氷、耐光……耐魔法・特殊攻撃用最外装『赤王竜の膜外套』。

耐斬打突及びその他諸々の耐物理攻撃用金属鎧『極光石の軽鎧』。

そして肌着兼、耐毒耐渴耐酸……耐悪環境用装備『樹精霊の護布衣』。

加えて背中に担ぐ巨大背囊には、各種の回復薬と最低ひと月は持つ携帯食料一式、そして遠・中・近と全ての距離に対応できる武器がそれぞれ予備を含めて最低五種ずつ詰め込んである。これらを身に纏うその重みは、いつものように昂る俺の身体を落ち着け

て深慮と安心感を与えてくれる。

何よりも己の生存を最優先に、かつ並行して攻略を推し進めることの出来る超級冒険者用の未踏破領域行軍用装備^{フロントライナース・セット}。

点検・修復を済ませたこれらの装備にはやはり出発前に何度も見返した通り一つの綻びも見当たらず、領きの代わりに両手を叩いて気を引き締める。

つまり、自身の準備に内面外面ともに瑕疵はない。

まさに絶好の攻略日和だ、素晴らしい。

そう結論付けて、俺はどうに辿り着いていた階段の最下段から、未知の階層^{第239層}へと恐る恐る足を踏み入れる。

最初にクレスを出迎えたのは、彼の視界一面を余すことなく満たす紫色の濃霧だった。

確かな視界が確保できるのは5M^{メートル}ほど先まで。それより先はぼんやりとした霞のカーテンが幾重にも重なって朦朧としており、奥に何が蠢いているのか真面な判別がつかない。

視覚の疑似的な遮断。

さつそく迷宮^{ダンジョン}が繰り出してきた厄介なそれ^{ギミック}に舌打ちする間もなく、首元に巻き付けていた『樹精靈^{ドライアド・クロス}の護布衣』のスカーフを鼻の所まで引き上げて顔の下半分を覆い隠す。

「……毒霧だな。それも、可燃性か」

鼻奥の粘膜がピリリと焼かれる辛い感覚と、甘ったるい腐敗臭の組み^クみ^ン合わせ^ホ。その意味をここに至るまでの経験で直感的に察し、彼は目を細めた。可燃性^{ガス}気体^ガが満ちている、つまりこの階層^{第239層}はどうやら火気厳禁のようだ。

となれば初手^開【プロメテウス^ホ】による露払いはずと控えられる。さて、どうしたものか。

悩みながらも、ひとまずクレスは足を先に進めようとして――ずぶり。

軟泥性の感触を以て彼を出迎えた地面に、その膝までが一息に沈みこんだ。付け加えれば、それでもなお確かな足場を踏みしめた感触^カがなかった。

「視覚封じに加えて、進もうとする脚まで封じるか。ふん、なるほどな」

すぐさま埋まった脚を引き抜いたクレスは、背囊から槍を取り出して足の代わりに地面に突き刺してみた。

しかし彼の身長を優に超えるその長物を尺代わりに用いてもなお、その底を見出すことが出来なかった。

つまり、底なし沼。

地上にも度々見られ、数々の人命を容易く奪っていく危険地帯もこの階層には存在しているようだ。しかもこちらにもまた溶解性の毒性を持つているらしく、槍の汚泥が付着した部分から細かな気泡がしゅわしゅわと発生していた。

それらの僅か一步、されど決して小さくはない一步で得た手掛かりを前に、クレス・カラストロフは。

「――よし、撤退だな」

己の準備不足を悟り、その場から上階へ向けて颯爽と逃走を開始した。

それは、もし迷宮ダンジョンに会話能力があるとしたら「えっ、ちよっ、待つ……は？」と思わず呟いて呆けてしまいたくなるほどの、目にも鮮やかな撤退だった。

「改めて、再挑戦トライだ」

撤退時にしれつと採取していた大気と地面の一部を拠点第201層に持ち帰り分析した上で、それらへの対策を身に着けたクレスがもう一度第239層に降り立つ。

前回に比べ、三倍の量を用意した解毒薬はもちろんのこと。

『樹精靈ドライアド・クロスの護符』の余りをフィルターとして詰めた鳥ペバの嘴ストを模したような被り物マに、鮭エッレド・ブーツ型モンスターから取れる弾水性の皮から作った水上歩行用足装備『跳鮭の長靴』。これ

らによつて毒霧を防ぎ、底なし沼の上を歩こうという心算だった。

そこには見た目の統一性などなく、美神は「美しくない」と軽蔑唾棄し、冒険者であればすわ「モンスター的一种か」と勘違いしてしまうような珍妙な装いフォルムがあった。

されどこの階層においてはこの格好こそが最も効率が良いからう、とクレスは判断した。

なればこそ彼は迷うことなく、今の死神にも似た姿で以て進軍を再び開始する。

「……」

背中の恩恵ファルナが、装備の内側でじんわりと熱を持つ。

スキルオデュッセイア【深淵踏破】による幸運アビリティの一時的発現。

それに導かれるようにして、彼は聴覚を主感覚、視覚を補助的感覚として慎重に歩を進める。評価値Aにも達する暗視アビリティがクレスにはあるが、彼はあえて見えないものを無理に視ようとはしなかった。それより楽に周囲の動きを捉えられる聴覚を素直に頼り、余った脳の労力を警戒により多く振り分ける。その方がここでは効率的だと、積み重ねてきた過去が考えるまでもなく彼にその手法を選択させた。

「……」

果たしてこの階層で最初の違和感を捉えたのは、彼の眼だった。

ただ見るだけでない、観察することの余裕がクレスに気づかせた変化。

それは、極僅かに盛り上がった地面だった。

液状毒を多く含んで粘性を得た泥の地面なら、通常、重力に慣らされて平坦になつていて然るべきだ。

しかし凸状になつている箇所がある……となれば、それは通常ではなく明確な異常である。

「(ならば、まずはこれで様子を見よう)」

この第239層は現状、前の層と違つて一般的洞窟型だ。

彼はその壁面から少々拝借した土をこねこねして団子を作り、異常目掛けて投擲する。

毘であれモンスターであれ、まず何らかの衝撃を受ければ反応を見せるだろうと考えて。

『……ズ。ズ、モオオオ……』

異常のド真ん中にぴつたり着弾したクレスの土団子。それは、触れている部分からゆつくりと捕食されていった。

急な攻撃をたわいなく受け止め、呑み込むように捕食しつつ、異常の正体がのそのそと動き始める。

起き上がったその姿は、地面と同じ濁った土色に染まっていた。

滴る雫のような輪郭を形作った汚泥が遅々としながらも蠢き、目のない顔でクレスを睨みつける。それは他階層でも見られる粘性体モンスター『スライム』に近い外見だが、色と質感がこの階層相応のものへと変貌を遂げている。

「(正確には『マッド・スライム』だな。物理よりも魔法に弱いモンスター。本来なら魔法で焼却してやるところだが、火気はここではよろしくない。ついでこの泥を取り込んでいるせいで、原種の液状体よりも粘性を増していそうだ。となれば奴に最適な武器はこれか)」

クレスが耐泥粘体用に取り出したのは、先ほど地面の深さを測るのにも使った長槍だった。

打撃が効かないは言うまでもなく、斬撃もあの身体に囚われて途中で止まってしまふ可能性がある。その点刺突チクであれば、一点集中で肉を貫いて核たる魔石を打ち抜きやすそうだと彼は見た。

脇の下に柄の後方を通す形で、重心より拳三つ分ほど穂先に近い部分を右手に握えて構える。

「……」

不定形である泥粘マッド・スライム体の魔石の位置は恐らく、他の同種に倣って重心に近い場所にあると考えられる。例外も多々あれど、第一に狙うべきはそこだろう。

ずると這うように距離を縮めてくる敵の動きを慎重に見定めつつ、その弱点の凡その位置にあたりをつけて。ちょうど穂先が魔石に至る位置まで泥粘体マッド・スライムが近づいた、その時。

クレスは腰を振るようにして勢いをつけ、槍を一息に打ち込んだ。

そして固い何かを砕いた感触を得ると同時に、すぐさま引き抜いて残心を取る。

万が一狙いが外れた時に備えて距離を確保しつつ、彼は泥粘体マッド・スライムの変化を見逃さないよう観察する。

『……ズ、ズ……』

どうやら貫いたときに彼が得た手応えは正しかったようで、刺突によつて開けられた穴から泥粘体マッド・スライムの全体に罅が走り、輪郭が解けて崩れる。そのまま泥粘体マッド・スライムの死体は地面に同化するように消えていった。

それ以上の変化——例えば死に際の自爆だとか——が起きる様子はなく、クレスは安堵して警戒態勢に戻った。

「環境に適応した特性はあれど、急に方向性の異なる進化を遂げたような特異性はなかった。ひとまずこれまでの常識が通じるとみてよさそうだが……油断せずに続けよう」

耳を澄ませ、目を凝らしながらクレスは先へと進む。

迷宮ダンジョンの気まぐれはいつでも冒険者の既知を未知へと変えて襲い掛かる。

加えて先例のない未攻略階層での進攻アタック……どこまでが知っているものなのか、どこまでが知らないものなのかさえ現状理解できていない。

不安に駆られる身体を勇氣で以て前に進めつつ、クレスはまず第一にこの第239層におけるその二つの境目を見極めようと集中する。

「……」

今度は、鼓膜を震わせるかすかな大気の流れの騒めきを察知。

その一部が先ほどから自分を追いかけてきていることを察して、クレスは振り向いた。

もうもうと視界を覆う毒霧……その一角に覗くやたらと濃度の高い霧が、標的に察知されたことを理解して急に速度を上げて襲い掛かってくる。

『……ゴ、オオオツ……』

唸るような叫びを上げて突進してくるそのモンスターは、意思を持った毒霧『スモツグ・ゴースト』。

実体のないかの怪物は呼吸を通して標的の体内に潜り込み、内側から毒と呪いカースで以て喰い殺す。

されどモンスターである以上は、魔石という弱点を持つことから逃れえず。

他の層で同種お仲間に遭遇した覚えのあるクレスは、慌てず懐から別の武器を取り出した。

「(……一点だけ存在する、やたらと霧が濃い場所)」

すなわち、防御膜弱点。

そこに狙いを定めた彼は、手に取った棒手裏剣に手首の捻りを加えて投げ放った。

流星のように宙を駆けた金属の閃光が、カキンと小気味良い音を立てて奥に隠れた魔石を破壊する。

散り散りになってほつれていく魔霧の身体。

それは本来、黒い塵となっていない以上素材ドロップアイテム『ゴーストリィ・スモーク』——地

上の呪術師が使う神事道具としての価値を持つのだが、今は回収している余裕がないので放置。

脳内のメモに既知「知ったものだ」の一言だけを書き加え、クレスは更に先へと行く。

それから彼が出会ったのは毒芋虫ホイスン・ウエルミス、痺蜘蛛パラライズ・スパイダー、翼針竜ウイングド・ベルダー、竜牙ドラゴニック・ヴァイパーなど、

どれも他の階層で遭遇したことのある毒虫系・爬虫類系モンスターだった。

むしろそれぞれにはこの階層に適したが故の少しばかりの変化が見受けられた。だが、戦い方に大きな転換を強いられるほどではなかった。

「環境こそ厄介極まりないが、これならば。モンスターに邪魔されることなく次の階層に辿り着けそうだ——」

——などという甚だしい思い上がりダンジョンが迷宮では死を招くことを、クレスは忘れない。慎重に慎重を重ね掛けして、かつ時には大胆に後ろに下がることも忘れず、彼は遅々としながらも自分の視界の及ぶ範囲を懐に入れてある光の導線が走る水晶へ着実に地図化していく。

魔法道具『ミラージユ・クリスタル』。魔力を込めることで記録した迷宮ダンジョンの構造を幻影として映し出すことの出来る、彼が魔法大国アルテナの古き知り合いに作らせた便利な魔法地図だ。

その最大の特徴は、指やペンによる物理的接触が不要であり、魔力による直接操作が行えること。

これによって攻略の手を止めることなく、行動アクションと並行しての記録レポートが可能となる。

『深々層』の行軍においてはまず欠かせない逸品に発見した情報を魔力の光で書き綴りながら、躊躇せず進行を続ける。

「(……これは)」

地図の作成と同時に襲い掛かってきた漆黒の毒サソリ『ダーカー・マンティコア』の群れをクレスが掃討し終えると、今度はかすかな甘い香りが覆面マスクを通して鼻についた。

念のために確かめようとそちらへクレスが顔を向けると、途端に視界視野が揺れる。

「……………」

ここまで毒霧対策に開口による発言を控えていた彼が、初めて声を上げる。

咄嗟に効果を發揮したのは『耐異常』アビリティと、それをなお貫通して異常をもたらず現状への『適応』アビリティ。その二つが自身の崩れかけた平衡感覚を持ち直したのだと神の恩恵と魂の結びつきから直感したクレスは、新たな敵の正体をそれから顔を背けつつ理解する。

迷宮内に自然発生的な地震はなく、先ほどの揺れは何か別の要因によってもたらされたもの。つまりこれは恐らく、モンスターによる攻撃——。

「——先ほど見えていたのは腐敗樹。そして、その果実に止まって汗を啜っていた……巨大な蛾。この状態異常の原因は、奴が背の翼に生やしていた二つの眼だ」

自然界に多々存在する眼状紋。

蝶や蛾などに主に見られるそれらは一般的に、見かけ倒しの威嚇に過ぎない。

だが、たつた今彼と相対したものは文字通り格が違っていた。

「(この階層に満ちる毒霧を平然と貫通して効果を及ぼし、睨まれたと察知したとほぼ同時に射竦められるような感覚を抱かされた。レベル21である俺が、一瞬とはいえ世界が震えるような錯覚に強制的に陥らされる……危険だな)」

それはかつて何処かで読んだ英雄譚に登場し、また迷宮にも階層主として存在する【魔眼将】^{パロール}を想起させる、『未知』^{彼の知らない}のモンスターだ。

「(名づけるなら睨羽蛾『バロールウイング・モス』、もしくは『モス・バロールビュー』か。決定は今度主神カオスにでも委ねるとして。まずは奴を仕留め、情報を得よう)」。幸いにも名前の元となる予定の『バロール』とは違い、あの睨羽蛾モンスターには階層主特有モンスターレックスの威圧感がなかった。

彼の目測にはなるが、レベルにしておよそ16から18、高くて19程度。となれば面倒臭さこそあれど、クレスに倒せないことはない。

彼は再び背囊から別の武器を取り出し、その弦に矢をつがえた。
ロングボウ
 長弓。

速射性に優れた短ショートボウ弓とは異なり、威力に優れたそれでクレスは睨羽蛾未知のモスを狙う。

『キユキユオオオツ……!』

毒鱗粉を舞い散らせながら飛び立った仮称：睨羽蛾は素早い動きで翻弄しようとしながらクレスに迫りくる。

対して彼は目を閉じ、視覚を覆い隠しながら後ろへ下がった。

未把握の地形が広がる先ではなく、地図作成で調査を終えている後方へ。

バロール・バタリン
 魔眼模様の影響を鑑みれば、瞼を下ろし、視覚を完全に封じながら戦うことが求められる。

ならばより把握している情報の多い場所で戦闘を行う方が、少しでも不利を減らせる

と見込んでの行動だった。

今回頼るのは此処に至るまで活用してきた聴覚、そして盲目戦闘における各種補正アビリティだ。

「回避と適応、集中に挑戦そして幸運か？ 毒を食らわず、まだ正常に戻らない平衡感覚のまま矢を的中させる。一見して難題だな。だが、それでこそ迷宮ダンジョンを攻略している実感があるというもの」

目を瞑りながら器用に後退するクレスの先には、当然新たに出現したモンスター後ろがいる。されど彼は、それらに衝突することなく間をすり抜けていく。既に彼らの気配は覚えていたから、睨パロールウイング・モス羽蛾を意識する片手間でその位置を把握することも容易い。

クレスは戦いの邪魔になるからと、彼らを殺すようなことはしなかった。

そも、素材ドロップアイテム目当てや情報回収などの明確な目的がなければ、クレスはそれほど積極的にモンスターを手にかけない。

冒険者敵の手口を覚えた迷宮ダンジョンが、より強力なモンスターを産もうとするのを防ぐためだ。

一部の例外を除いて、彼女の子モンスターが理性を持たず愚かなままでいてくれれば、力を振るうだけの木偶の坊でいてくれれば。弱者たる冒険者は優位を保ちやすいのだから——このように。

『キユキユツ……キユウンツ?!』

蜘蛛型モンスター、痺蜘蛛。パラライズ・スパイダー

クレスは先ほどそれらと遭遇した際、あえて彼らの巣のみを破壊して討伐そのものは避けていた。

当然彼らは得物を捕食するため、すぐさま新たな巣を作る。

『深々層』のモンスターに相応しい、強靱な糸と素早さで以て。

そして、以前とは異なる位置に設えられた彼らの巣のことを、その先に生息していたパロールウイング・モス睨羽蛾はまだ知らなかった。

クレスを追おうとするあまり速度を上げすぎて、毒霧に視界を遮らていたパロールウイング・モス睨羽蛾は、彼の予想通り新たな痺蜘蛛パラライズ・スパイダーの巣に突っ込んでしまう。その間をすり抜けた彼とは異なり、その身体は瞬く間に糸に捉えられて動けなくなった。

『キユ、キユ、キユツ……!』

「(無駄だ。蜘蛛の巣は逃れようと暴れるほどに絡まって、動けなくなる。そして連中は、哀れな得物に瞬く間に群がる)」

近くにいた三匹の蜘蛛が囚われのパロールウイング・モス睨羽蛾に殺到し、その身体を糸でぐるぐる巻きにしていく。パロールウイング・モス睨羽蛾も必死に彼らを追い払おうとするが、その度に逆に動けなくさせられていく。

捕食者と非捕食者の関係——そこにいる彼らの眼に今、クレスの存在は映っていない。

その隙を狙って、力を溜めに溜め込んでいた彼の矢がようやく射出された。

「(……隙だらけだ!)」

風を切る四つの鏃が毒霧に風穴を開けて、蜘蛛と蛾の胸中にそれぞれ存在する魔石を寸分違わず打ち抜く。

悲鳴を上げて命を失ったモンスターたちの肉体が滅び、死骸の一部だけが残った。

「(よし)」

今回残ったのは巣として張られた蜘蛛たちの糸と鋏角、そしてパロールウイング・モス羽蛾の翼だった。

初見のモンスターから素材を取れるのは結構有難いもので、後々持ち帰って活用の路を採すのに役立つだろう。

「(その為に蜘蛛糸を割くのは面倒だが、まあいいか。これも幸運アビリティの賜物と思っておこう)」

クレスはねばつく糸を丹念にはがし、残された翼膜を折り畳んで回収する。

それなりに凶悪な効果を持っていたパロールウイング羽蛾がその実レアモンスター希少種だったという可能性も否めない以上、ここで手間をかけて手に入れる必要性はあると彼は考えていた。実はそうでもなかった、としてもそれは後の笑い話にでもすればいい。

「あ、鋏角が一つ下に落ちたな。……まあ良いか。こいつは何度か見かけたやつだし」
 回収過程で足元の底無し毒沼に落としてしまった痺パラライズ・スパイダー 蜘蛛の鋏角を少しだけもった
 ことなく思いながら、クレスはお腹をさする。

そういうえばそろそろ昼飯の時間か、と腹時計で察した彼は背囊から手の平ほどの大きさの弁当を取り出して食器にカチャリと装填する。

「(行動食6号。食事をしている実感はないが、仕方がない)」

気体の圧力を用いて、濃縮した栄養素を直接体内に打ち込む形式タイプの食事。

これまた魔法アルテナ大国で開発させた拳銃型の食器を活用して、ものの数秒で彼は食事を終わらせた。

この階層で通常の食事を行おうとした場合、周囲の毒霧と一緒に取り込んでしまうことが考えられる。もちろんその毒は『耐異常』アビリティで無効化できるが、それでも蓄積の果てにアビリティの許容上限を超えてしまったり、他の魔物の毒と組み合わせられて凶悪な効果を発揮する可能性がある。

なんでもかんでも恩恵フェルトナ頼りで突破するのではなく、自分の知恵で避けられるものについてはなるべく工夫で避ける。常に余裕をもって攻略すべし、クレスの迷宮ダンジョン探索における拘りがここに現れていた。

「(……?)」

そこで、クレスははたと気づいた。

足元に落ちていた鍔ドロップアイテム、角の位置が、食事前と比べて少しだけズレている。

じーっと見つめていけば、それは徐々に汚泥に沈みながらも南の方向……未だ彼が探索していない迷宮ダンジョンの先へと移動している。

第239層こここの地面は滞留しているのではなく、何かしらの潮流を持っているようだ。

では、その流れの向かう先には何があるのか？

もしかしたら一つ上のよう第238層に滝壺があつて、その中に次層への通路があるのかもしれない。

もしくはそれとは逆で、未知のモンスターや罠が待ち構えている可能性もある。

「(いずれにせよ……向かつて確かめる以外に真実を得るすべはない)」

階層そのものの仕組みギミックが攻略の手掛かりになる事例も多い。

この謎を解き明かすこともまた、次へと進むために必要な鍵の一つになるかもしれないというのなら。

ならば行こう、とクレスは進む。

恐れつつも尚、先へ。

ひしめくモンスターたちを時には回避し、時には打倒して、退路を確保しつつ……先に潜む深淵の、その奥へ。

迷宮ダンジョンを潜れば潜るほど、階層ごとに探索しなければならぬ面積が増えていく。

加えて単独冒険者ソロ・アタッカーとして仲間の救助を期待できないために慎重な立ち回りが求められることから、彼の攻略速度は決して早いものではない。

クレスが第239層の探索を開始してから、およそ半年と二か月。

それだけの時間をかけてようやく、毒沼の潮が行く先を突き止める彼の旅が終わりを迎えるのだった。

階層の南方にぽっかりと開いた大穴。

そこにとめどなく流れ込む汚泥の濁流は、とある一匹のモンスターの食事場へと繋がっていた。

毒沼に沈むモンスターたちの骸と魔石。それらを残留する無念ごと優しく抱擁し、甘く咀嚼し、王の名の下に嚙下する、澱んだ泥の大海に浮かぶ巨体が、確かにそこにいた。彼はそれを知っていた。

その真なる名を知らずとも、その同属が保有する特有の威圧感を、彼の肌が覚えていた。

——それは、醜悪なる腐肉の塊だった。

上層より滴り落ちる汚泥とほぼ一体化した、ぬらりと輝く猛毒色の皮膚に覆われた身体。その体表の一部には、腐り落ちているかのように溶けた箇所と、ふつつつと気泡が弾けては膿のような体液を噴出させている箇所が見受けられる。

視点の定まらない無数の眼は天と地を平等に見下しており、全身を這う触腕のような力強い血管が不気味な脈動を伴って震えている。

彼の意識がクレスへ向いているかは、分からない。

されどクレスの方は、その内包する古き星の如き重厚な存在感に、強く意識を惹きつけられざるを得なかった。

新たな迷宮の孤王、モンスターレックス『毒沼の怪塊』が、こちらを覗いている。

やれるもやれぬも、等しくやり遂げねばならぬ

第239層直下、満ち満ちる猛毒ポイズンの底無し沼ファイールドにひっそりと鎮座する腐肉モンスターレックの塊王。

揺蕩う毒霧の奥に顔を覗かせるその巨体のなんと悍まじきことかと、吟遊詩人アオイドゥスは恐怖に怯え感動にうち震えながらも謡うだろう。

とめどなく流れ出る黄褐色の膿とともに、腐蝕した血肉が周辺のまだ無事な部位を巻き添えに自重でずり落ちる。かと思えばすぐさま内側からその欠けを埋めるように肉体が膨張し、無事を取り戻して……そしてまた、腐りゆく。

死と再生、命の輪廻を単体で完結させるが如きその在り様は超越存在デウス・テアにさえ許されぬ、モンスターであるからこそ成立し得る冒険的光景だ。

だが、この世に生を受けて以降永い時をかけて二百層もの試練ダンジョンを踏み越えてきたクレスの変容レベル21した精神は、もはやその程度では揺るがない。

烏頭ガスマスクが如き防毒仮面に嵌め込まれた水晶のレンズを通して、彼は感情の波が立たない平坦な眼差しで新たに出現した迷宮ダンジョン攻略の壁を観察する。

「……動かない。それも、微動さえしないか。モンスターの天敵にして宿敵である冒険

者が、こんなにも近くにいるというのに」

モンスターは冒険者を軽んじない。ごく一部の例外を除いて、彼らはひとたび母たる迷宮を侵す冒険者の存在に気づけば全力で以て抗体の役目を果たそうと襲い掛かってくる。それは迷宮の孤王であろうと例外ではない。

されど、目の怪物は動かない。

体表に無数に浮かぶ瞳の視線は忙しなく空間を行き交っており、クレスの姿を既に幾度となく捉えているように見える。だというのに、その本体は何一つ変化を見せることなく沈黙を守っている。

「(仮称を『紫毒の巨塊』とでもして。奴はもしかや、俺のことを見ているようでその実見ている……俺という異物に気づけていないのか？ 確か魚類など、目を開けたまま寝る生物もこの広い世界にはいるが……奴もその類かもしれないな)」

もしくは提燈鮫鰈のように、そうして油断させてから近づいてきたところをぱくり！と捕食する習性なのかもしれない。

いずれにせよ、不意を打たれないよう、かついつでも逃げ出せるように細心の注意を払いつつクレスは相手に近づいた。

穴の淵から跳び、紫毒巨塊と同じ地面に音もなく降り立つ。

「(いつそう異臭が強まったな……このマスク内の詰め物もそろそろ換え時か)」

呼吸を最小限に控えながら、取り出した盾を構えた彼はにじり寄るように相手に接近して、その様子をより近くで伺おうと試みる。

体型はおおよそ球体状。もし体表がグズグズに腐敗していなければ、かなり真球に近いだろう。

その下部三割ほどは、第239層上層から流れ込む毒沼の地面に沈んでいる。

そしてその毒泥の流れがキング・ポイズンスライム紫毒巨塊を中心として渦を巻くようにうねっている——その事実には気づいたとき、クレスの頭に天啓が走った。

「(腐り果て、再生し続ける。その根源はこれか)」

プレデター・リカバリ
捕食回復。

キング・ポイズンスライム紫毒巨塊は地面に接している足元の部分から——そこに見て分かりやすい口が隠れているのか、それとも彼の思い至った仮称スライムのように体表が捕食器官を兼ねているのかは不明だが——汚泥を啜り、それを栄養へと変えて、腐り落ち続ける肉体の補修に充てている。

だとすれば、無限にも見える再生行為にも納得がいった。

食らい、そして傷を癒す。足元の泥には上で死んだモンスターの魔石が無数に紛れているに違いなく、その栄養を吸収することで自己強化を行う……それは強化種と呼ばれるモンスターの出現と似た原理であり、また通常の生き物の道理にも通ずる話である。

「(だとしたら厄介だな。こいつにダメージを通そうと考えるなら、まずはこの無限に等しい再生能力を奪うことが前提になる。しかし、言うは易いが行うは難いぞ……?)」

紫毒 巨塊キツクホイスラフムの体長はおよそ15Mメートル。

加えて腐敗した肉体の隙間からはみつちりと凝縮された筋繊維が顔を覗かせている。決して見掛け倒しの風船などではない、超質量の隕石が如き肉塊だ。

その摂食行動を止めるには、地面との接触を完全に断つ必要がある——しかし、どうやって?

「(持ち上げる、なんて単純ストレートなのはまず通じندらう。そもそもあの常時腐敗状態で漏れた血やら組織液やらに塗れている肉体に触れて動かそうとしたところで、ズルつと手を滑らせるのがオチだ。そのまますっ転んでついでに弾みで腐り落ちた肉の塊に、上から押し潰されて毒沼に諸共沈む……ふっ、笑えんな)」

冗談を鼻で笑いながら、ならば逆転の発想をとクレスは考える。

紫毒 巨塊キツクホイスラフムではなく、毒沼の方をどうにかしてしまふのはどうだろうか。

——しかし、その思いついた手法は多少現実的であろうとも階層主を相手にしながら取るべきものではないと彼は諦めた。

「(上の穴を封じ、下に無理矢理新たな穴を開けて、毒沼を全て次の階層に排出してしまふ……だが、そこまで大規模な破壊をすれば必ず迷宮ダンジョンがキレて刺客を送ってくる。

ジャガーノート、ブレイクダウン
破壊者や殲滅者程度ならともかく、偽神デミ・ゴッドなんかを呼び出されたら正直やつてられ

ん」

偽神デミ・ゴッド。ひとたび出現すれば死ぬまでその司る『概念』による崩壊を無制限に撒き散

らす、クレスにとつての迷宮ダンジョンにおける疫病神ならぬ厄介者の一つである。

前に出現した時には三十層にも渡る阿鼻叫喚の地獄を創り上げた挙句、彼の文字通り死中に活を見出した逆転の一手によつて討たれたわけだが、それはさておいて。

「さて……適当にいくつかに案を論あげつてみたものの、どれも良案とは言えんな。となればひとまず、ここは引くか」

前にクレスが安全地帯第201層で休んだのは、もう三か月も前のことだった。

どこを見渡しても毒、毒、毒の第239層に徐々に体を慣らしながら、彼は潜るたびに滞在期間を増やしていた。しかし、前回の二か月半という記録をまあまあ超えた今、そろそろ健全な状態での活動の限界が近づいてきていると彼は冷静に自覚していた。

迷宮ダンジョンの攻略とは、決して限界への挑戦ばかりを意味するものではない。

必要とあれば休み、迷わず撤退する。軟弱だ臆病者だと誹られようが、クレスはそうした他人からの評価を気にすることなく着実に一步を積み重ねていく。その地道エクセリアな努力があつてこそ、いづれ遭遇する限界レベルアップを超える時に初めて死力を尽くせるのだと彼は理解している。

「今の段階で得られる情報^もだけ得て、あとは一度拠点まで帰ってから考えよう。熱い風呂にじつくり入って、飯をたらふく食って、ベッドでぐっすり寝る。そうすれば、きつとこの凝り固まった頭も良い案を思いついてくれるさ」

そのためにも「あと少しの我慢だ」と気合いを入れ直して、クレスは紫毒巨塊^{キング・ポイズンスライム}の分析に意識を戻した。

ぷちゅ、ぐぼつ……と弾けては零れ落ちる薄汚い大理石^{マーブル}模様の体液。

ぐじゅり……どろり……と腐り果て落ちては再生を繰り返す、完治を知らない禿肌。

常人であれば精神が軋み狂い、その不協和^{コーラ}重音が脳を揺らすような錯覚に囚われる光景。

それを前にクレスは平然と自分もまた食事^{注射}を行いながら、紫毒巨塊^{キング・ポイズンスライム}の周囲を回るように歩きつつ探索を続ける。

「(お、良いものを見つけたな)」

それはひと際多く膿み出た、紫毒巨塊^{キング・ポイズンスライム}の体液から出来た水溜まりだった。

毒沼の上に浮きながら強い悪臭で存在感を放っているその『未知』に、彼は物は試しと第239層で回収してきた素^{ドロップアイテム}材の余りをいくつかぽいぽいと放り込んでみる。

粘っこい水音を立てて沈んだそれらは間もなく、断末魔のような気泡を発しながら形を失っていった。

「やはりと予想していたが、溶けるな。第239層に適応したモンスタースターの肉体系をも軽く溶かしてしまう、凶悪な溶解毒……捕食した沼の毒素を濃縮して、肉体に溜め込んでいるのだろうか。さながらこの膿は溜め切れなくなった分が噴き出た、間欠泉みたいなものでもあるのかもな）」

それだけでなく、今度は少し離れたところに落ちていた自壊部位の下へも歩み寄る。

ほぼ腐敗し果てたその肉片の中には、まだ僅かに無事な部分が残っている。

その一か所を見据えたクレスは、手持ちの武器からいくつかを選んで攻撃してみた。

「叩けば固く受け止める。突くか切ろうとすれば今度は柔らかく受け止めてくる。剛柔兼ね揃えた性質とはこれまた面白く、かつ面倒な。腐りかけでこれとなれば、本体はより物理が通りづらいと見える。……ならば、今度は魔法でどうだ？」

クレスは背囊から四種の魔剣を取り出して、一振りずつ実験的に振るってみる。

水・土・風・氷と、この階層では大爆発を起こしかねない火属性及び雷属性を除いた一般的な属性の魔剣たち。それらは彼が『深々層』で採取した素材を元に、鍛冶・神秘・魔導アビリティを掛け合わせて無理矢理鍛った自作の武器だ。

打ち手が本職ではない故に、品質は低い。それでも希少な素材をふんだんに注ぎ込んだだけあって、寿命は短いもののそれなりの火力が保証されている。

咲き乱れる水刃、岩石流、真空波、そして吹雪——かの『クロツゾの魔剣』ほどではないにせよ強力な攻撃の数々が、色とりどりの軌跡を描いて標的たる肉塊に着弾した。

「(……なるほど。これでも、ほぼ無傷ときたか。だが、無意味ではなかったようだな)」
残念ながら、紫毒^{キング・ポイズンスライム}巨塊から剥がれ落ちた肉体の一部は、並みのモンスターであれば十分消滅させられるだけの勢いを持った魔剣の攻撃を見事耐え抜いてみせた。

切り裂かれず、穿たれずの堅牢な肉片。

されどクレスの眼は、今のやり取りでその一部が僅かながら削れたことを見抜いていた。

「(良し……今回の戦い方の方向性だが、僅かだが見えた。これは良い収穫だな)」

攻略の掛かり口を見出せたことに、クレスは仮面の下で満足そうに笑みを浮かべた。

後は推測される攻略手順から逆算して、必要な装備を入念に整え、万全の準備を潤沢に拵えるだけ。

手持ちの通常階層攻略用装備は、ほぼ総取替えしなければならないなどクレスは頭の中で算盤をはじく。

複数種の雑魚^{モンスター}に対応できる汎用装備から、一体の迷宮^{モンス}の孤王^{タイ}を徹底的かつ執拗に殺し尽くすための専用装備^{マードナーメイド}へ着替える——そのためには久々に、物づくりとしての腕を鳴らすことになりそうだ。

「素材回収、道具作成……いくつか装備の改修もしなければな。最近眠らせっぱなしの連中の錆も落とさなきゃならんし、こいつは大変だぞ。だが、やらねばならん。やれるもやれぬも等しくやり遂げねば、迷宮最奥の攻略など夢のまた夢」

クレスの直感は「この迷宮の孤王は放置しておくとかヤバイ系統だ」と警鐘を鳴らしていた。

外敵に侵されることなく、ひたすらに食事を続けて肉体に毒と栄養を貯蔵していく……時間が経つにつれ成長していく、将来的な危険性をこのモンスターは孕んでいる。ならば放置して先へ進むよりも、早々に討ち取ってしまった後顧の憂いを断つ方がいいに決まっている。

触らぬ神に祟りなしというが、どうせ迷宮の最奥を目指していればいずれ戦う羽目になるのが目に見えている。

「ならばさっさと始末をつけるのが賢明というもの。そのための算段、二重三重四重五重に立てて多少無理やりにも嵌め殺す。この階層の毒も鬱陶しかったが、その礼代わりの意味も込めて。俺の手持ちの毒を、こいつにはたっぷり馳走してやるでしょう」

猛毒地帯の踏破で積もりに積もった精神疲労は、やはり階層主攻略で発散するに限る。

そう言わんばかりに疲れた全身に活気を漲らせながら、クレスは勢いよく跳躍して

紫毒^{キング・ポイズン}巨塊の穴倉から上層へ、そして自らの拠点へと撤退するのだった。

「冒険者は冒険をしてはならない」

毒霧の奥に悠然と佇む異形の王。その御前に再び辿り着いたクレスの瞳には、揺るぎない自負の光が瞬いていた——「為せるだけの用意は全て終えてきた」と。

今の彼が五体に纏う武装はいずれも、目前の迷宮モンスターレックスの孤王ただ一個体のためだけに用意したものの。深緑と白銀入り混じる戦闘バトル衣も、腰と背にそれぞれ吊り下げられた数種の武器群も、ポーチ及び防具裏のスロットに収納された薬品類も……その全てが対紫毒キング・ポイズンスライム巨塊戦に備えて念入りに調整を施された逸品だ。

それらの階層主征伐用装備をかつちりと着込んだクレスが、纏わりつく毒霧を肩で切つて前へと歩み出る。

四肢に勝利への確信を。臍はらわたに生き残ることへの執念を。

そして気骨へと、迷宮ダンジョンの完全なる攻略への渴望を十全に漲らせて。いざ開戦の銅鑼ゴングを鳴らさんと、掲げた左手を垂直に振り下ろす。

「(取っ掛かりだ。まずは総数100振りの魔劍豪雨——これで環境を整える)」
天蓋に開く、本来ならば紫毒キング・ポイズンスライム巨塊に餌を与える用途で迷宮ダンジョンが設えた大穴。

しかし今この時において、それは彼が用意した戦場の仕掛けとして機能した。

穴の外側、現在クレスと紫毒巨塊がある下部の大広間とは逆の方に展開された簡易弩砲群。彼の放った合図を受けたそれらが、予め弦に装填されていた氷属性魔剣の矢を雨霰の如く戦場に射出する。

その光景はまさしく、藍氷の劍雨。

こと対迷宮の孤王戦において、出し惜しみなぞ愚の骨頂。

持てる力の限りを以て、お前を圧殺する——そう言わんばかりに容赦なく降り注ぐ青輝の魔法劍群は、着弾すると同時に砕け散り効力を発揮する。

魔剣にして低位の特殊武装。『一撃で使用不能となることを代償にその威力を増大させる』という極めて単純な足し引きを付与された刃の時雨が、瞬く間に戦場を塗り替える。

猛毒の沼が、霧が。

階層そのものが——極冷の白氷に閉ざされる。

「(疑似顕現、『凍棺氷獄』。かつてはその猛威に苦しめられたが、今回はお前に助けてもらうぞで)」

『凍棺氷獄』とは、『深々層』の一階層を形成する氷海環境。その氷山奥部より採取した白棺鉞を原料に打ち出された魔剣の数々は見事、クレスの思惑通りに仕事を為した。

足を絡めとる毒沼はぶ厚い氷層に覆われ、肺を侵す毒霧は冷気の流れによって払われ……今や一変した環境において、この階層最大の障害であった猛毒の脅威はほぼ意味を失っていた。

「ふう、寒いがこれでようやくマトモに息が出来るな」

副作用として呼吸制限と視野の狭窄をもたらしていた鬱陶しい被り物マスケを脱ぐ。

ここ暫くの友人であつた閉塞感から解放され、気分と合わせて少しばかり身軽になつた彼は続けて腰の両方からしやらん、と双剣を引き抜く。

美しき虹色の刀身を持つ姉妹剣『アブソリユート・デュオ』。

無論特殊武装であるそれらの柄頭に色合いの異なる二種の魔剣をそれぞれ取り付け

て、彼は周囲の環境と同じく凍り付いた紫毒巨塊キング・ボイズンスライムの足元を目指し駆けだす。

「魔剣装填完了、属性刃出力開始。——行くぞ」

紫毒巨塊は外側こそ氷の層に封じられたように見えるものの、芯まで凍り付いて

いるわけではない。その肉体は相も変わらず内部で接触している地面から食事を続け、内側から膨れ上がることで自身を覆う氷牢を破壊しようとしている。

それが為されるより早く第一の作戦目標を達成しようとして、敵の懐へと潜り込んだクレスは猛烈な勢いで左右の剣を振るい始めた。

虹色から、藍と翠の単色へとそれぞれ色合いを変えて——透き通る氷と渦巻く風を一

時的に宿した二つの魔刃。

鋭く振るわれたその二連斬が、モンスター^{モンスター}の巨体に確かな瑕を刻み込む。

「柔らかく、されど硬くもある異質な肉体。だが、冷やし凝固させた上で衝撃を与えれば攻撃は通るのだったな！」

初回会敵時における実験^{情報収集}において、クレスは土の魔剣より放たれた岩石の一つが階層主の落下物の一部に傷をつけたことを見て取っていた。そしてそれは、コンマ数秒の差で先に氷の魔剣による一撃が着弾したことで凍り付いていた場所でもあった。

つまり、氷結＋物理攻撃。

その組み合わせを用いた時のみ、この強固なモンスターの肉体にダメージを通すことが出来る。

それを知った彼の選んだ武器^{双剣}が、着実に紫^{キング・ポイズンスライム}毒巨塊の肉体を傷つけていく。

『アブソリュート・デュオ』。通常魔剣の芯に用いられる触媒金属『虹色鉞』^{プリズムメタル}を刃に転用した特殊武装^{スベリオルズ}。その効果は、『柄に装着した魔剣に応じた力を引き出し刃に纏う』というもの。

左の姉剣が司る今の属性は氷。絶対零度の刃が、接した面を刹那のうちに凍らせる。

右の妹剣が司る今の属性は風。唸る疾風の刃が、凍結した紫^{キング・ポイズンスライム}毒巨塊の肉を華麗に

切り刻む。

また、『過剰共鳴』^{オーバーロード}——振るう一瞬にのみ担い手の魔力を込めることで、瞬間火力を増大させる絶技。

それらの複合した魔刃^{ブレイドダンス}の双舞が、孤独なる王の柔剛重なる紫の腐肉を容赦なく抉り削る。

弱点が存在しない？ ならば作り出して叩くのみ。

「冒険者は冒険^{無謀}をしてはならない」。その原則に基づいた彼の計算^{チャート}通り、瞬く間に紫毒^{キング・ポイズンスライム}巨塊の肉体は地面との接触を断たれていく。

「(切断面をすかさず再度凍らせることで、肉体と地面との間に氷の層を挟み込む。……

こうすれば、その厄介な捕食^{クソゲイ}回復は中断せざるを得まい)」

紫毒^{キング・ポイズンスライム}巨塊からの反撃がないのを良いことに、クレスの振るう左右の連撃は勢いの留まるところを知らず突き進む。

猛吹雪^{ブリザード}の如く吹き荒れる二属性の刃が、微かな軌跡の残光だけを残して彼の手元で閃く。

その勢いのままに、クレスはモンスターと地面との接合部を素早く剥がす。

外側から内側へと、着実に。抜かりの無いよう細心の注意を払いながら掘り進めて、肉体と毒沼の接する面積を徐々に狭めていく。

そうして切削し尽くした果ての、最後の一点を断ったところでクレスはぱつと飛び退

いた。

モンスター肉の肉体と地面との間に彼が作りだした空間、それが最後の支柱を破壊されて圧壊する。重量のある肉体が落下したことによって大きな衝撃が生まれ、小規模の地震が戦場^{ステージ}を揺らす。

その衝撃は同時に、限界を迎えつつあった紫毒^{キング}巨塊^{ボイスンストラム}の氷による封印を解いてしまった。

『……り、リリリイイ……』

「それがお前の鳴き声か。漸く聞けたが、さて……」

元より内側からの圧力で破碎寸前だった氷が、細かい飛沫となって散り果てる。

その向こうから漏れ出る、甲高い鳴き声。

それは、ついにこの空間の主が活性化したことを示していた。

クレスが粘性体^{スライム}のようだと評した肉体が、彼の視線の先でずると名残惜しむように食事を探して氷の大地を這い回る。されど、それは百の魔剣が生み出した氷の壁に阻まれており手が届かない。

——このような残酷な仕打ちをしたのは誰だ？

——住みやすい寝床をいつの間にか荒らしていたのは、いったい誰だ？

ここまでは視線を散乱させるばかりでまったく意味を成していなかった、

キング・ボイスンスライム
紫毒の巨塊の肉に浮かぶ百の目玉が一斉にクレスを凝視する。

『……リリリ、ケリ、リリリ・リリリ……』

ようやく邪魔な羽虫ケクレスの存在を覚した紫毒巨塊キング・ボイスンスライムが、それを排除しようと動き出す。ぐにゆりぐにゆぐにゆグチユグチユぐじゆり、と奇怪な音を響かせる悍ましい肉の蠢きを以て、その身体に蛸や烏賊のような触腕を生え揃う。——その総数、太長細短あわせておよそ200と少し。

どれ一つ取つても同じ縮尺のものが存在しない歪な手足の先端が、緩慢な動きで宙を揺蕩うように這い回る。その姿は生物としてあまりに異端と言う他なく、見る者によつては恐怖による一時的行動不能スタテンや何かしらの精神的異常が呼び起こされるかもしれないだろう。

それらの触手をクレスに向けた紫毒巨塊キング・ボイスンスライムが、啼く。

『ケリ、リリリ、テケリ・リリリリリ……テケ・リ・リ……い！』

胎動する紫毒の巨塊キング・ボイスンスライム。

その変化した異様な威容を前に、クレスはその攻撃形式バターンを見極めるべく一度双剣アブソリュート・デュオを引つめた。

続けて背から取り出した盾を右腕に構えて、防御・回避体勢に移行する。

「……までは実質準備運動。……からやつと、本番が始まるな……い！」

何が来ようと対処出来るよう、クレスは形態変化後の初動に備えて様子を伺う。

キング・ボーズスラム
紫毒 巨塊の一挙一動を見逃さぬよう、ひたすらに凝視する。

その視線が、まばたきで極僅かな間だけ遮られた——それは稀によくある、『深々層』における命取りの一つであつて。

『リ』

気づけば既に加速を終えていた触手による強烈な横薙ぎが、次に眼を開いた彼の視界いっぱいを占領していた。

【漆黒の雷弾】、カッコ良い詠唱は必要じゃよネ！ by 変態工〇好々爺

意識の間隙を穿つ一撃。

その不意打ちをクレスが凌げたのは、ひとえに積み重ねた経験の賜物だった。

「っー！」

直感的に、迫っていた紫毒巨塊キング・ボイズンスライムの触腕と身体の間、盾を持った右腕を差し込む。

それで防御を間に合わせた彼は、その衝撃が肉体の芯を捉えるより先に盾の角度を僅かに変えて攻撃の伝播する方向を側面へと逸らした。

しかし音速を超えた暴威は凄まじく、それだけで完全に威力を打ち消しきることはできなかった。

残った分の勢いを逆利用してクレスは、弾かれるような形で後方に距離を取ろうとした。

『テ・ケリ・リー！』

「……………」

されど紫毒^{キング・ポイズンスライム}巨塊の持つ触手の数は優に百を超えており、その内のたった一本を使った程度で相手が満足するはずもなく。

うねり騒めく数多の触手が続けざまに彼の下へ殺到、大気を引き裂く雷鳴のような音と共に衝撃波を撒き散らして四方八方からクレスへ襲い掛かる——！

『テケ・リ・テケリリイイ……ケケ・リリイイ——ッ！』

先ほどまでの「沈黙は金」を表した態度を脱ぎ捨てて、鞭と化した触腕の数々を恐るべき速度^{スピード}で振りかざす紫毒^{キング・ポイズンスライム}巨塊。

視界どころか空間そのものを埋め尽くす勢いで迫るその飽和波状攻撃に、されどクレスは落ち着きを以て目を凝らした。

「これだけの手数、先ほどの微塵切りの意趣返しのももりか？　しかし階層主であるのなら、まあ……これくらいは普通だな」

レベル21ともなれば、音速を目で捉えることなど赤子の手をひねるより容易い。

左右上下、左左上上下下右右。

右上左下右下左上、前方後方斜め正面2時3時7時8時……！

『テケ・リリ・テ・ケリケ・ケリリリ・リイイ……！』

「まだこの程度なら問題ない。さては奴さん^{やつこ}、まだ本気ではないと見える」

寄せては寄せる怒涛の連撃は、例えるならば一つの荒波を乗り越えた先にまたそれを

まるつと呑み込む大荒波が口を開けて待ち構えているようなものだ……と揉まれる側の立場にあるクレスは呑気に思った。

様々な角度から迫る触腕の勢いは振り回されるたびに徐々に勢いを増し、常人の眼にはもはや残像さえ捉えられない速さとなっている。もしその打撃が命クリンヒット中した場合、標的を挽肉ミンチより挽肉ひでえや状態に変えるであろうことは想像するに容易い。

しかし、その渦中に置かれた彼の五体は未だなお健在だった。

俊敏かつ破壊力抜群な触手の豪連打ラッシュだが、彼に言わせれば「まだ避けるだけの隙間がある」。

触腕ワッペン・タッチと触腕の間に存在する小さな隙間へと身体を捻じ込むことで、クレスは絶妙な立ち位置を維持しながら生き残っていた。

視覚のみならず、聴覚や嗅覚など五感の全てを動員して回避、回避、回避。

襲い掛かってくる触腕の中から完全に避けるべきものとそうでないものを見極め、一部の攻撃をあえて盾で受けて流すことで威力を掠め取って己の機動力に転化する。

評価値Sの器用アビリティは伊達ではない。一見して死地のような肉鞭の檻に身を置きながらも、彼は針の穴を通すような繊細な立ち回りで傷を負わないでいた。

またそうして逃げ続けながら、クレスは紫毒キング・ポイズンスライム巨塊本体の動向を少しずつ探っていた。

「——触腕はそれなりに動かしても、本体は未だ元の位置からほぼ動かずか。完全に固定砲台タイプ。そういう型なのか……いや、まだ決めつけるには早い。そして……」

『リリリリ……テ・テケリ・リリリ・テ・ケリリリ……！』

クレスは降り注ぐ触手の流星雨の中で、観察した触手攻撃の特徴を記憶に書き留める。

触手そのものは伸縮自在にして強韌無比。

本体に星の数ほどある目のおかげで彼を見逃すこともなく、一度得物に狙いを定めたらば決して逃がそうとせずぐんぐんと迫ってくる。

そして人の両手両足を合わせた指以上の数が並行して動かされているが、それら同士の衝突は今のところ一つも起きていない。

総じて、猟犬のような執念しつこさと蛇のような柔軟さを兼ね揃えていると言ったところか。しかし、どうやらその万能さにも限界がないわけではないようらしい。

回避と防御に専念しながらクレスが分析したところによれば、一つの触手の伸縮距離は最大30Mメートル。それ以上腕を伸ばそうとすれば紫毒キングドメインスラム巨塊の操作可能範囲を逸脱してしまうようで、その先端がぐずりと崩れ落ちるような兆候が見て取れた。

それを悟ったクレスが試しに攻撃の圏外に脱してみると、それでようやく、本体が追いかけてようとして鈍々のろのろと動き出す。

「二応、本体がまったく動かないわけでもない。……しかし意外だが、そちらの自己崩壊の様子は捕食が途切れても前と頻度ベイスが変わらないな」

当初の光景と変わらず、あまりに巨大なその図体からは肉片が剥離を続けている。捕食が出来なくなったからと崩壊が自動で止まるわけではないようだ。

そして落下した肉片は残る魔剣の冷気によって凍り付いて、そのまま氷の床に張り付いてしまう。

再吸収の出来ない自壊、となればこのまま「耐久戦で紫毒巨塊あつちが勝手に死ぬのを待つ」という手も考えられるが——クレスはその考えを一蹴する。

「そう都合のいい展開ことなど迷宮ダンジョンにあるはずもない。……ああ、やはりな」

クレスの予想した通り、なかなか彼を排除できない紫毒巨塊キング・ポイズンスライムが業を煮やして次なる一手を打つ。

『テケ・リリリ……テケリテケリ・ケリ・リリリイイ——!!』

一度触腕を全て体内に戻し、新たにぎゅるりと四つの触腕を生やす。それまでと比べて一回りも二回りも太く逞しいそれらは、どうやら特別製のものに見える。

更にその先端にはしつかりと、新たな攻撃手段が用意されていた。

「見覚えのある奴ドロップアイテムらがいるな……モンスターが一丁前に武装とは。だが、こと階層主に至ってはそれくらいする方が逆に不思議ではない」

記憶の中から各々の名称を引つ張り出したクレスが、納得と共にそれらを言葉にする。

「ウダイオスの黒王剣」に「クリユオサルの黄金帝剣」。あとは「セイリユウの厄潤胸核」と……最後の一つは初見だな。俺のこれまでの地図作成に見落としがなければ、更に深い階層の素材か？」

ウダイオス、クリユオサル、セイリユウ。

それらはいずれもクレスを知るところの、悪名高き迷宮の孤王だ。

となれば自ずと残る一つも、同程度の力量を持つモンスターなのだろうと判断をつける。

今名を上げた彼らが自らこの階層を訪れたのか、逆に紫毒巨塊の方から遠征に乗り出したのかはクレスには分からない。いずれにせよそれらは最終的に此処の主の贄となつて、骨の髄まで啜られつくして……使える、と判断されたのだろう。

「黒王剣のはまだ良い、頑丈なだけだからな。しかし黄金帝剣には斬撃を飛ばす能力があるし、厄潤胸核といったらあれは代名詞の高圧水流刃の発動に使う器官だぞ……まあ、わざわざ引つpegがして取っておくくらいだ。当然そいつも使えるんだろうな」

ひとまず高圧水流刃には気を付けないとな、とクレスは気を引き締める。

なにしろあれは軽く20階層分を貫く威力があり、初めてその存在を知った時には自

らの身体を以てであったという苦い経験が彼にはある。幸運にもその時には右腕を吹っ飛ばされただけで済んだが、敵の正体を判明させるまでいつまた水流が来るかわからず、ひととき慎重な攻略を強いられた。

『ストライクアウェイ飛翔する斬撃と高圧水流刃、この二つによってここまでの紫毒巨塊の弱点だった触手の可動範囲による攻撃制限』は失われた——そして。

「最後の一つは未知数……あれの効果を見るまで下手な反撃の手は打てんな。外観は鱗と結晶の生えた翼の膜部分、形状は蝙蝠のそれともドラゴンのそれとも見えるが。はてさて、どう動く?」

『テケリイイ——……』

視線の先の紫毒巨塊が、キング・ボイーンスライム武具の着心地を確かめるかのように腕を小刻みに振るわせる。威嚇のようにも見えるその動き——次の瞬間、黄金剣の斬撃と水流の刃がクレス目掛けて遠慮なしに振るわれる。

「ちっ、早速か!」

彼の所見によると、その威力は本家本元同様なら侮れるものではなかった。

現在の対毒重視装備で受けるのは厳しいと判断し、すぐさまその場を飛び退く。

独特の振動音を以て宙を駆ける高圧水流の方は容易く氷を切断し、浅くない傷を残す。

黄金剣による斬撃の方もまた、氷床にクレス2人分くらいの深さの凹みクレーターを刻み込んでいた。

「威力は間違いなく、先の触手攻撃を軽く上回っている。喜ばしいことではないな」

いずれもあまり乱射されると、当たり前所次第では氷のフィールドの崩壊を早めることに繋がってしまう。

氷下の毒液がそこから漏れ出したら元の木阿弥になりかねない……となれば。

「早々に決着を狙うべきか……いや、焦るな俺よ」

割れたり薄くなった氷床に控えの魔剣を振って補強しながら、クレスは隠された残り一つの能力を見極めようと前に出る。

キング・ホイズンスライムキング・ホイズンスライム 紫毒 巨塊は割と簡単に誘いに乗ってきて、彼に対してその謎の素ドロップアイテム材が纏われた

腕を振るってきた。開いた翼が鎌のように展開し、黒板をひつかいた時のような甲高い音を鳴らして迫る。

しかし、斬撃が飛んでくるわけでも、水流の刃が飛んでくるわけでもない。

その一撃をなんなく避けたクレスは首を傾げた。

「特殊能力がない？ いや、そんなことはないだろう……ふむ」

ひとまず背面に回った触腕から迫る一撃黒王剣を避けるべく、更に前に踏み込もうとしたクレス。

そちらは先ほど謎の触腕攻撃が通った後の場所であり、そこに近づいた瞬間。彼の胸元が、ぱつくりと裂ける。

「これは……!」

すかさず、傷を生んだ原因となる場所に目をやるクレス。

音速を見切る彼の眼が、結晶翼纏う触腕の軌跡に残っていた微かな空間の違和感を捉えた。

僅か一筋の黒い線が、そこに走っている。髪の毛の何百万分の一よりも細い、空間に刻まれた罅。

クレスは傷に回復薬をかけて止血しながら、その黒線へ向けて試しに足元に転がっていた氷の破片を蹴飛ばしてみた。

「む」

その線のような空間の歪みに触れた瞬間、氷は真つ二つに割れた。

まるで斬られたかの如く美しい切断面を見せて落下するその様子を見て、クレスはやはりかと頷いた。

「名づけるなら『設置斬撃』か。見えんことはないが、戦いの中で気を配るのは面倒なやつだ……ここは、後で出てくる厄介なモンスタートランプ・スラッシュの攻撃手段を知れたと楽観的に捉えておくか」

何はともあれ、これで敵の新たな攻撃手段は一通り知れた。

ただ頭丈な剣 飛翔斬撃 水流斬撃 設置斬撃
 黒王剣に黄金帝剣、厄潤胸核と結晶翼。

四種の斬撃の間を掻い潜りながら、それらを踏まえた上でクレスは変化した戦いを決着に導く方法を考える。

「とにかく、一番厄介なのは斬撃を置いてくる奴だ。いつまで残留するか……少なくとも一、二時間で消えてくれるほど生易しくもなからう。となれば、長期戦は不利。短期決戦を狙うべきだ」

ほぼ不可視の斬撃結界が完成した場合、それへの対策を持たない今のクレスは身動きが取れなくなってしまう。

その状況に陥るより先にこちらが紫^{キング・ボイスンスライム}毒巨塊を仕留めなければならない。

そう暫定的な方針を見据えた彼は、反撃にうつて出るべく再び『アブソリュート・デューオ』を抜いた。

触手の数を減らした弊害で、先ほどまでの特徴だった恐るべき手数も失われている。着実に攻撃を避け、迫る触手をすれ違いに斬ろうとするが、

「効かないだど？」

氷属性を宿した刃は、先ほどまでと違いほぼ効果を発揮することなく弾かれた。

激しい触手の動きが熱を持って、魔剣の冷気を以ても凝固点を下回れないのか……な

んにせよ、氷に対する耐性が変化しているようだ。

そうなれば、クレスは攻撃手段を考え直さざるを得ない。

しかし彼の顔には、悲観的な感情は写っていないかった。

「……曰く、世の中に完全な無敵つてやつは存在しない。あるなら最初つからそれを作ればいいだけの話だからな。どんな奴にも弱点はあるし作れる。そうじゃないから、迷宮は多種多様なモンスターを揃える……」

どこかで聞いた話を思い返ししながら、クレスは冷静な面持ちで改めて遭遇時に試した実験を執り行う。

発火性の毒煙を封じた今、火と雷を含めた全属性の魔剣を振って試す。

——その中で効果を示したのは、雷だった。

「雷撃による一時的な硬直。こいつを介せば攻撃は通るみたいだな。んでもって、速攻を狙う……ならば今の紫毒巨塊前に相応しい武器は決まった。こういうこともあるかと持ち込んでおいてよかったな」

双剣をしまったクレスが、腰の後方から取り出した折り畳み式の武装をガチャンと展開し構える。

その全長、およそ5M。メートル

長槍にも似たその形状だが、しかしこれは弓であった。

電磁加速式重弩、『ブラック・ブレット』。

その銃身には、かつて雷神が妻にお仕置きされていた中で流した神血イコルをしれつと拝借バクッして練り込んでいる。魔力を込めることで電流と磁場が発生し、装填された専用弾——神殺しの蠍の近縁にして深淵種である『ブラックロック・エスコルピオの重殻』から削り出したもの——を加速して撃ち出す。

問題なのは先の魔剣と同じく、一発限りのじやじや馬であること。一度撃つと銃身がプラズマ化して焼け付いてしまい、作り直しに近い整備メンテナンスをしないと次弾が撃てない。しかしその威力は、好々爺セウスの保証付きドン引きでもあった。

「最大充電まで最速十分。それまでにお前が俺を仕留めるか、そこまで至った俺がお前を仕留めるか。鬼ごっこと行こうか」

キング・ポイズンスライム
紫毒 巨塊に、その提案を拒むことは許されなかった。

パチパチと弾ける電子の嵐が、クレスの手の中で荒れ狂う。

その有様に秘められた威力を本能で察したのか、モンスター側からの攻撃頻度が更に上昇する。

なんとそれでも充電を中止させようとする紫毒 巨塊キング・ポイズンスライムの反応に、クレスは確信する——どうやらこの一撃は、奴を仕留めるに値するようだ。

やたらめつたらに振るわれる触手剣には通常冒険者の使う剣技の術理が存在せず、軌

道は複雑で読み辛い。

しかしその動きにまったくの規則性がないと言われれば、その認識には語弊があるとクレスは思う。

染み付いた癖、肉体の特性に寄る甘え。これまでは『深々層』の階層モンスターレックス主相応のステイタスによるゴリ押しで乗り切ってきたであろうことがありありと読み取れる、素人の剣捌き。

刃筋を立てるだとか残心を取るだとかをロクに知らない動きは、彼にとつてどうぞ手玉に取ってくださいと言われているようなものだった。

脅威であった設置斬撃も、それを振るう触腕が常に一定の範囲から抜け出さないように立ち回ることで封じられる。一部に危険地帯を集中させ、そこに踏み込まないようにする。

その他激しく猛追してくる攻撃の中を、クレスは宙に舞う木の葉のような動きで避け続ける。

決して、無理になるような機動は行わない。常に数手先の自分が無事である道筋を見定めて、そこに至るまでの道程を踏み外すことなく駆け抜ける。

彼の手中で脈動する疑似神雷ディオスケレスの輝きが、幾千の鳥の囀りのようにけたたましく鳴く。舞い散る電子の奔流がその手を焼くのも構わず、クレスは惜しむことなく魔力を注ぎ

込み続ける。

器用さを主としながら満遍なく能力値を鍛えてきたクレスの魔力は、近接戦闘手ながらも熟練の魔導士のそれに匹敵する。

己の作った武器の限界を見極めながら、潤沢な魔力を注いで。

注いで、

注いで、

注いで——来た。

「さて、あの好々爺エロジジイが言うからには事後承諾の条件は「儂の血を使うからにはカッコいい詠唱が必要条件！ それが出来んのなら使うのダメ、絶対じゃもん！ 大神わしに相応しい、超絶カッコいいの頼むからのー！」ときているのでな。ここで本邦初披露だ。理解できるかは知らんが、冥途の土産にでも聞いていけ」

古代には一時期、詠唱破棄の技法が流行った時期もあった。

しかしそれは自然と廃れた——何故か。

なにかと一部の冒険者バガと神どもが「それじゃキメラられねえだろ！」と騒いだのもあるが、その本質は『魔法マジック円と同様、詠唱には魔法威力の向上にある』と認められたからだ。

声を出して詠うことで、戦いの空気に酔いしれる中でも魔力の流れを練習した通りに整えられる。その澱みない魔力の流れを用いることで、魔法の過剰消費ロスが減少しかつ威

力が向上するのだ。

そんな当時最先端の『学区』の研究成果を投資者の権利としていち早く手にいれていたクレスは、いざ必要となれば惜しみのない全霊の声で詠う。

「【盟約により我が手に迸れ^{はじ}天空の王よ】——雷装銃身^{ケラウンスレル}、充填完了^{セツト}」

散々^{ゼウス}大神とその眷属に駄目だしされた詠唱だが、彼は作り手なだけあってそれなりに気に入っている。

「【招来するは神意を滅ぼす魔蠍を穿つ^{イヒセカリ}嘶光】——三眼演算式^{システムトライクロパス}、照準固定^{オールグリーン}」

連中の要望として苦渋を噛み締めながら取り入れた詠唱外の文句も練習を経た結果、我ながら感心するほど流暢に詠えているものだ。クレスはふと過去を懐かしんだ。

「【万雷折り重なりて宙^{ソラ}を征けよ浄火】——射出準備^{トリガーセット、レディー}、完了……」

ほぼほぼ光の塊と化した銃身を構え、紫毒^{キング・ポイズン}巨塊^{スライム}の本体を正面にして。

そう言えばと試射の折、かつて建設途中だった巨塔^{パベル}を吹っ飛ばしてしまい「神の怒りだ」なんだと騒がれる黒歴史を生み出してしまった記憶がふと思ひ出されて——。

「——【ブラック・ブレット】、発射ア！」

引き金が引かれ、撃鉄が落ちる。

その合図とともに、装填された弾丸が溜め込まれた力場の影響下へ。

物理法則と魔法法則の累乗が常識を超えた加速を生み、漆黒の銃弾は雷鳴の如く銃身

を駆けて光となる。

超神速にして亜光速。

神域の狙撃に達した弾丸は、咄嗟に防御態勢を取った四つの触手をその装甲武装ごと纏めてブチ抜いて。

疑似的な長文詠唱に見合うだけの威力を以て、一瞬にして紫毒キング・ポイズンスライム巨塊の肉体を打ち抜き——風穴を開ける。

『!!!』

風穴より伝わる余波熱により、全身が瞬く間に沸騰。

内側から気化して膨れ上がる体積、その圧力に巨体が耐え切れるはずもなく。

超新星の如き大爆発が、洞窟内を白一色に染め上げた。

咄嗟に壊れた銃身を投げ捨て、身体を丸めて防御態勢に移行したクレス。

彼は光と衝撃が収まるのを待って、眩く。

「……やったか？」

熾天の蝕毒と英雄ならぬ冒険者

魔銃「ブラック・バレット」の齎した極光が収束するまで、たつぷり十秒程度を要した。

神アルカナムの力に限りなく近い電力エネルギーの暴嵐が徐々に落ち着き、世界に色彩が戻って。

——そこには、何一つ残っていないかった。

見る者に不吉な予感を抱かせて止まない醜悪なる肉塊の姿は、影の一つも見当たらない。

ただ水分と言える水分が蒸発し尽くして、干ばつ地帯のように罅割れた元毒沼だけが在る。

「……ちい、また作り直す必要があるか。少し調子に乗りすぎたな」

その中に一人佇むクレスは、熱雷の反動でほぼ炭と化して加護を失った樹精霊ドレイアド・ネクロスの骸衣を破るように脱ぎ捨てた。

晒された彼の上半身、そこには融けて捲れ上がった皮膚とその下に無数に走る惨たらしい樹状の火傷跡があった。

レベル21の耐久を易々と貫く、偽の神雷ケラウノスの代償。神経までもが焼き切れているおかげで逆に痛みはなく、その閲覧グ注意ウな自分の肉体に対してクレスは肅々と収納袋スロットから引き抜いた回復薬ポーションを振りかけて治療を施した。

——このくらいの代償は安いものだ。恩恵ファレドと『深々層』製の薬があれば、冒険者の身体はちよつと死の淵を乗り越えたとしても戻つてこられるのだから。

大事にされている神カオスに聞かれたら大目玉を食らうような、これまでの実体験...に基づく認識の下で。

彼は修復の始まった肉体が次第に生氣を取り戻し、またその過程でじくじくと痛みが復活していくのを堪えながら、今の今まで相對していた階層主薬毒の巨塊について思考を巡らせる。

「五体は無事、走馬灯死にかけてもも見えていない。使つたのは精々魔劍100本と、双劍に盾に重弩ポーションに回復薬数本……」

その、大戦果と呼んでも差し支えない今の自分の状況を振り返つて彼は顔を顰める。「少ない。あまりにも少なすぎる。だって、まだ用意した装備の半分も消費していないんだぞ?」

これで決着がついたとすれば、いくらなんでもあつけなさすぎる——そう、有り得ないほどに。

もし、今の戦いが予め情報を仕入れた上で挑む『既知』の階層モンスターレックスマ主相手であれば分からないでもない。徹底的に分析した敵の戦闘思考アルゴリズムを誘導し、状態異常毒・麻痺や拘束罠などを活用して動きを封じ、露出させた弱点を粉砕する。そのような周回行為素材集めの時ならば、どれだけ強大なモンスターであろうとクレスにとつて鎮めるのは容易い。

しかし、今回は話が違う。

『未知』の迷宮階層の怪物を相手にしておきながら、大して苦戦もせず倒してしまえるだなんて。

そんな都合のいい話があるものか？ —— ああ、もちろんそんな訳がない。

クレスの直感が、これまでに積み重ねてきた経験が、叫ぶ。

思考回路に鳴り響く警鐘サイレンが、神フアールの加護ナ越しに甲高く訴える。

まだ、終わっていないと。

「——っ！」

彼の予想を、親愛なる迷宮ダンジョンの悪意は裏切らなかつた。

一滴の潤いもなく干上がり切り、生命の鼓動が消え失せたはずの洞窟が突如鳴動を始める。

乾燥して固まった毒沼の直下から……迷宮ダンジョンの奥深くから。

神フアラックの一撃に等しい暴拳を受けてなお健在であった、心胆を寒からしめる声がクレスの

耳をつんざく。

『——イイイ・リ・ティキリ・リリリイイ——』

それを聞いた彼が「やはりか」と納得するや否や、それは地面から盛り上がるようにして姿を現した。

「……随分と様変わりしたな」

少しばかりの間をおいて彼の目の前に姿を見せたもの。

それは、光沢放つ美しき真球体^{スファイア}だった。

一切の瑕疵が見当たらない、理想的な玉体^{ぎよくたい}……しかしそれから感じられるおどろおどろしい気配はまさしく、この場所の主である紫^{キング・ボイスンスライム}毒巨塊^{キョウクワイ}のものであった。

「第一形態^{捕食}、第二形態^{反撃}ときて第三形態^{新しい}か。まだ変化を残していたとは驚きだ。それにしてもあの黒雷^{ブラック・ラケット}弾を受けて、まだ核^{魔石}が無事だったとは。予想はしていたとはいえ、それもまた信じがたい」

とはいえ、クレスのやることに変わりはない。

また動きを一通り観察して、それから討伐までの手順を組み立てる。

そのために改めて取り出した盾を構えて、様子見の体勢を整える。

『……リリリリ……テ・ケリ・リリ……リリリ……』

彼の視線の先で、真球体の表面にびしりと一筋の罅が入る。

それを起点として、紫毒巨塊キング・ポイズンスライムが徐々に変貌を遂げていく。

先ほどまでの触手による猛攻が嘘であるかのような、どこか余裕さえ垣間見えるゆったりとした変態行為へんしん。

色合いだけは相変わらず不気味な紫色のそれが割れて、中身に隠れていたものが見えてくる。

紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの移ろいゆく様子を観察するクレスはなんとなしに、あの形状が意味している所を悟った——あれは、繭だ。

外敵から身を守る盾。絶対不可侵の防御膜。

それを今になって解くことの意味——それは。

「——まさか、これからようやく起きたのか？」

先ほどまでの形態はいずれも、孵化前の未覚醒状態スリープモード。

破れる殻の隙間から漏れ始める、これまでとは比べ物にならないほどの重く粘つくような殺意。

魂の根底を凝視し揺さぶってくる深き遠きもの意思……それを目の当たりにして、クレスはようやく「ここまで怪物は目覚めてすらいなかった」のだと理解した。

そしてついに、分厚い泥の揺籃を破って。

紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの真体が、ここに降臨する。

「あれは……天使？」

それは、とある神話体系に語られる主神デウス・テアの御使いの姿に酷似していた。

軋み擦れるような不協和音を立てて回転する汚泥の光冠。

滲み滴る体液に濡れ、ぬらぬらとした悪意の輝きを放つ八枚翼。

それらを生やす、見た目こそクレスと同じ人ヒューマンタイプ型であるもののどこか畏怖を禁じ得ない黄金比の肉体——。

繭の中から生まれ出でたその在り様は相変わらず悍ましく、そして——美神が聞けば怒りに満ち震えること間違いなしだろうが——クレスが思うに、理性を超越して万人を納得せしめる『美』をそこに感じさせた。

「……ヤバいな。あれは間違いなく、ここまでのより段違いで強いぞ……！」
 ここへ来て、クレスは自身の内側から鳴り響く警鐘が最大限に稼働しているのを察した。

肉体面の負傷は既に治療を終えている。構えた盾の裏で残る魔力不足を補うべくマジックポーションマジックポーションを精神力回復薬を急ぎ飲み干し、彼はここまで以上の集中力で以て相手の初動を見切ろうと目を凝らす。

その冒険者の姿を前に、繭の残骸を振り払った紫キング・ポイズン・スライム毒巨塊だったナニかが鎌首をもたげて。

何の前触れもなく、全身が爆ぜるかのように全方位全距離への弾幕を撒き散らした。
「くっ!？」

放たれた弾幕は超高速かつ、超高密度。

それは一つ前の形態において振るっていた触手攻撃の乱打よりも更に緻密に過ぎて
——回避不可。

かつ、直感的に防御ではなく切り払うべきだとの判断を下して、クレスは盾と入れ替えにして咄嗟に引き抜いた魔剣「ネガ・ファトゥム」を一閃。

超級冒険者の能力値ステイタスを全乗せした斬撃が、弾幕の一部に辛うじて彼一人分の隙間を作り出す。

その隙間を目掛けてクレスは身体を滑り込ませ、

そこには既に照準人差し指を向けていたを合わせていた元紫毒キング・ポイズンスライム巨塊の姿が先回りして——!

「——ちいっ!」

——それが何の兆候なのかは分からない、ただ確実に何かをするつもりには違いない
! すかさず回避行動に移ろうとしたクレス。

しかしそれが実行に移されるより早く、焼け付くような感覚と共に右胸の下を貫かれる。

「ぐうっ?!」

クレスの眼が捉えた攻撃の正体は、ウォーター・カッター 水圧砲。

しかも、これまた前の形態で「セイリユウの厄潤胸核」を司る触手が扱っていた高圧水流刃より威力が高い。

その一撃は迷わずクレスの脇腹を喰い破つており、すんでのところで心臓への直撃こそ避けたものの肝臓が傷ついている。傷跡からどくどくと流れ出す血液、それを意識して抑えながら彼はすぐさま不死鳥の涙を溶かし込んだ最上級治療薬ハイパー・ポーションを叩つた。

それで事なきを得たと一安心したのも束の間、傷跡に目をやった彼はすかさず追加で解毒薬を飲む。たった今塞がったばかりの傷跡……その周囲を侵食していたドス黒い変色部分が、薄れていく。

「水圧砲の中身はその腐った体液か？ 血か組織液か、なにを飛ばしているのかは知らんがここでの暮らして厄介な病原菌ウイルスを相当種体内に溜め込んでいるようだな。放置すれば俺でさえ敗血病である世へまっしぐらとは——がっ!？」

その厄介さに舌打ちするより先に、クレスは続く側面からの衝撃によって吹っ飛ばされた。

いつの間にか真横に移動していた紫毒巨塊キング・ポイズンスライムが、左足を振り抜いていたのだった。どうやら蹴っ飛ばされたらしい。

しかも最悪なことに、その直前の動向を彼は一切捉えられていなかった。

「く……ごほつ。ついに本体が動くか、それも眼の追いつかない速さでだと？　もう俺シュレインガーの転移魔法と変わらないじゃないか。なあ？」

これまでの戦いは全てお遊びに過ぎなかったのだと、その行動で以て語るキング・ボイス・スライム。
紫毒巨塊。

受け身を取って衝撃を殺したクレスが口に溜まった血を吐いて体勢を立て直す。

再び盾を構えながら相手の方へ目を向け直すと、なんとその姿が3つに増殖していた。

「分裂？　いや、残像か。器用な真似をするものだ」

その輪郭が微かにぼやけていることから、恐らくは高速軌道による残像だろうとクレスは見る。

レベル21の眼で以てしても捉えきることのできない、超加速移動……しかもその上、よくよく見れば本体からは細い糸のようなものが垂れていて常に泥沼と繋がっているときている。

「なるほどな、ここへ来てついに始まったか神回避と高耐久と超回復の絶望的階層主戦ハイパークックンゲーム。それだけじゃない、どうせまた耐久も上がってるんだろう？　神々でもこんな試練は与

えてこないだろうな普通……いや、やっぱやるかもしれんな。あいつら、自他ともに認

めるロクでなしだし」

そうまでして迷宮^母の奥に辿り着かせたくないのか、とクレスは自身を取り囲むように周囲を飛び交い始めた紫^{キング}・毒^{ポイズン}・巨塊^{スライム}の姿を前に呆れるように独り言ちる。

されど彼の眼には臆するだとか怯えるだとか恐怖だとか、そういつた類の負の感情は映らない。

「だが、神の試練を打ち破つてこそその人というものさ。迷宮^{ダンジョン}、また今回もお前に教えてやろう。どれだけ高い壁を用意しようと、人間は諦めさえしなければいつかそれを乗り越える。そしてその中でも特に諦めが悪いのが、冒険者^{俺たち}というものなんだとな！」

常人ならば絶望・失禁・発狂の三連続技^{コンボ}を返礼し、命を以て領域に土足で踏み込んだ無礼を速やかに詫びるところ。

しかしクレス・カタストロフという人間は——どうしようもなく救えない冒険者であつた。

そこに苦難があるならば乗り越える。

足を引つ張ろうとする奴がいれば踏んづけて引つpegし、立ち塞がる奴がいれば殴り飛ばして。

諦めようとする己さえ燃料にくべ、手が千切れようと足がもがれようと構わず、前へ。それこそ命^{タマ}を取られようが、未練たらたらに現世にしがみついて先の見えない明日へ

と挑む。

そうやって歩みを止めず進んできた。

そんな、これまで通りの冒険譚の一頁をここでもまた書き綴るだけ。

——それが迷宮ダンジョンに心囚われた者の定めなのだ、クレスはとうに覚悟を決めている。

「よし、行くか」

これまでと変わらず、クレスは頭を回転させる。

まず、絶対に避けるべきは汚泥ボイズンレザイ光線だ。触れればすぐさま回復のために余計な行動ワンアクションを挟まなければならなくなる。だが発射前にわざわざ人差し指を向けてきたりするなど、前兆が見切れるのなら理論上その後の攻撃も避けられる。

それ以外の単純な物理攻撃においては、先ほどの感触からして即死はない。

受け損ねても精々が内臓破裂くらいで済むと、口の中に隠していた濃縮最上級治療薬ハイパー・ポリシジョン

の密閉容器カプセルを噛んで考えを纏めたクレスは紫毒キング・ボイズンスライム巨塊キング・ボイズンスライムの前に立つ。

その目に宿る不屈の意思を叩き折らんと、本領を発揮した紫毒巨塊キング・ボイズンスライムが複雑な軌道

を描いて彼へ襲い掛かる。

『テ・ケリリリ……テケリ・リリ……！』

汚泥の天使が、毒の窟に舞う。

音も光さえも置いて宙を駆ける孤独なる王の歓待は、その渦中に身を置いたクレスの

肉体を思うがままに痛めつけ存分に弄ぶ。

迫る紫毒^{キング・ボイズスライム} 巨塊の手刀・殴打・蹴撃・体当たり^{タックル}・噛みつき等々……神秘的な見た目をしてゐる割に野生的な荒々しい攻撃の嵐に、なんとか防御を間に合わせながらも揉まれて吹っ飛ばされる。

そうして受け身を取った矢先、既にそこに待ち構えていた紫毒^{キング・ボイズスライム} 巨塊の次撃によつて再び体が宙を舞う。

「……………」

『テケリ・ケイ・リ——リリリ……リリリ……リリリ……リリリ……』

最低限、芯を捉えられることだけは避ける。

だがそれ以外の衝撃を逃がす余裕は、今の彼にはない。

「がっ！ ぐっ！ ふうッ！ ……くっ、効くなっ！」

以前までとは文字通りレベル^{レベ}が違う、段違いの攻撃。

より密度の高まった超質量^重×その巨体を支える超威力^{パワ}×音を超えた超速度^{スピード}。

その三つが重なって累乗的に破壊力を増し、レベル21冒険者の肉体に血反吐を吐かせる。

正面から迫る心臓狙いの正拳を体幹を振って右肩で受け、側頭部狙いの回し蹴りを腕に装着した丸盾で弾かれるように避け、目視できない後方下部から股間を狙って放たれ

た貫手を腰をずらして太ももに掠らせる——!

どれも凄まじい威力を伴うために、打撲痕は赤黒く染まり骨が折れ、裂傷からは勢いよく血が噴き出す。

その中でクレスは冷静に、数ある死の未来の中から許容可能な被害だけを選び抜く。それらを受けつつ、時には相手の攻撃で回復薬の容器を割らせて中身を浴びるなどという曲芸染みた動きもこなしながら、相手の動きを必死になつて覚える。

『テ・ケリ・リリ——Tekelilili——lilili!』

ひたすらに暴力の荒波に溺れさせられ続ける今のクレスの姿はまるで、巨大なモンスターの掌の中で良いように弄ばれる球（レンボール）のようにも見える。

しかしそのような状況下で自らの血に全身を染めながらも、彼は考えることを止めていなかった。

キング・ボイズスライム

紫毒 巨塊によつて好き勝手に撻られながらも、急所だけは絶対死守。

額から流れてきた生暖かい血で赤く染まる視界の中、クレスは少しずつ慣れてきた眼で観察する。

「……どうやら、俺の方からこの速度に合わせるのは正直言つて無理だ。おそらくレベルにして2つ分は、敏捷のアビリティが違う。そんなのに正面から向き合うことほど、無意味なものはない……だが、それはそれでやりようがある!」

ここへ来て、クレスは防衛一辺倒だった方針を変える。

殴られながらも己の内側で練り上げた魔力（怒り）に、スキルで以て点火する。

【寡黙不語（カタラヌモ）】、効果発動。

「——【プロメテウス】！」

詠唱を破棄された【プロメテウス】が、火花を散らして爆ぜる。

それは更に破れた氷の封印の向こう側から再び流れ込んできていた毒煙（ガス）を巻き込んで、大爆発。

激痛に苛まれる身体が紫（キング・ボイスンスライム）毒巨塊諸共焰に吞まれ、焼き焦がされて——その中で、クレスは乾く喉の奥から続けてその名を叫ぶ。

「——【プロメテウス】ッ！ 【プロメテウス】ッ！ 【プロメテウス】ッッ！」

詠唱破棄の四連打。

落とされたはずの火力は環境効果によって再び上方修正され、瞬く間に生み出されたその四恒星が空間全体を光と熱の暴威に溶融させる。

いくら炎に耐性があると言え、流石の紫（キング・ボイスンスライム）毒巨塊もその火力の中で無暗に動こうとはしなかった。否、動けなかった。

自爆覚悟という『未知』。本来生き物であれば取るはずのない不可解な動きを前にモンスターは踏み止まってしまい、その苛烈だった攻撃が一時停止する。

そして対照的に、自らの炎に燃やされる感覚を知っていたクレスはなほお平気な顔で動いていた。

「——そら行けッ！」

消えゆく焰光の中から姿を現したクレスが、いつの間にかその両手の指の間に握っていた都合八つの小さな球ボールをばら撒く。

その速度は紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの平均速度と比べればお粗末にも早いと言えるものではなく、当然のように相手は自らの方に跳んできたその球ボールを払い除ける。

それにも構わず、クレスは懐から更に同じものを取り出しては投げ、投げて投げ続け——紫毒巨塊キング・ポイズンスライムは困惑しながらもそれを防いで。

ようやく投げ終わったクレスを再び攻撃しようと瞬間移動した、その時。

紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの肉体が、七つに裂けた。

『L i l l i i i i i ——テ・K e r l l i l l i i ……？』

すぐさまその身体は泥の補充によって元通りの形に戻ったものの、紫毒巨塊キング・ポイズンスライムは続けて動こうとはせず不可解そうに立ち止まる。

それを前に、クレスはようやくやく今の一方的な死合ワンサイドゲームに一区切りつけてやったと不敵に笑った。

「追いつけないなら、追いつく必要をなくせばいい……。今の俺は動けないが、お前もも

う動けない。気を付けろよ、なにせ此奴は千切れ壊れないことに定評があるからな。下手すれば体内の魔石が細切れになるかもしれないぜ？」

紫毒 巨塊は気づく——己の身体を切り刻んだものの正体に。

それは一つ前の形態で自分が使っていた、『設置斬撃』に近いものだ。

よくよく目を凝らせば、この空間一帯にきらきらとした細い線状の何かが張り巡らされているのが分かる。

自身の目の前にあつたそれを指先でピンと弾いたクレスは、親切にも説明を口にした。

「俺がさつきそこらに撒いたのは「キプト・アルウィン」。昔のそのまた昔に鍛冶アピリテイの実験で作った玩具おもちゃの一つで、その時は不壊属性デュランダルがどんなものに付与できるか色々試しててな。こいつはその過程で出来た不壊属性デュランダルを付与した緋々色金製の弦系ヒヒイロカネを、何重にも巻きつけた球ボールなんだよ。投げれば糸が解けて伸びて、周りの地形に引つ掛かつて即席罨トラップを作れる。今みたいにな。どうだ、「面白いだろう？」

「何がいつ役立つか分からんものだな」と、これを作つてかつ捨てていなかった過去の自分を褒め称えていたクレスは雄弁に語る。

ただ、これはあくまでも実験おもちゃ作に終わつたものだった。

興イグが乗つて当時のギルド長に見せびらかしたところ、邪神イグイルスの眷属による悪用と撤去困

難による二次被害を防ぐためにとその場で直々に使用禁止を言い渡されてしまったからだ。

クレスはそんな大昔の己の発明品を、先の「プロメテウス」による光を目晦ましとして「シユレディンガー」で拠点から回収してきていたのだった。

無論、持ってきたものはそれだけではない。

『テ・ケリ・リ……Teke——li——li——li——!!』

「はっ、段々その五月蠅い声の聴き分け方も分かってきたぞ。そうかつかかと焦るなよ。さて、ここからのお前の取れる行動は二択だ。また触手を出して糸の隙間を潜り抜けさせるか、もしくは水圧砲ウオーター・カッターを使ってくるか……」

キング・ボイズンスライム
紫毒 巨塊の取った選択肢は後者だった。

構えた両手両足の指先から、広げた翼に生える羽のようなものの先端から。身体の内
で圧力をかけた体液を無数に射出し、周囲に展開された糸に構わず遠距離攻撃を放つてくる。

デユランダ
不壊属性を付与された糸はもちろん切れないものの、水はそれを擦り抜けてクレスの下へと飛来する。

それらに対して彼は、「キプト・アルウィン」のほかに回収してきていた大盾の内側に身を隠して水流攻撃を防ぐ。銘こそ与えていなかったものの、下部の杭パイルを地面に打ち込

んで固定化する特殊な機構を持ち合わせている盾だ。それは同じ不壊属性デユランダによって、見事紫毒巨塊の砲撃を防いでのけた。

『テ・K e e r i ・ r i l i l i i ……』

悩むような鳴き声と共に、砲撃が止んで場が静かになる。

「……………ふむ？」

クレスが盾の淵からこつそりと顔を出して様子伺つてみれば、紫毒巨塊は触手のように伸ばした不定形の翼と手足を毒沼に深く突き刺して大口を広げていた。

それは彼の盾の設計と同じ思想……………すなわち、対象をその場に固定する役割を持つ。

そして、砲身に見立てた口腔内に、傍から見ても分かるほどに膨大な圧力が凝縮されていき——魔力の燐光が迸り出す。

「まだそんな手を隠し持っていたのか。しかもこの威圧感……………来るか、必殺技が」

盾の中に完全に身を潜め、クレスは唸る。

経験を積んで成長したモンスターの中には、冒険者と同じように切り札とも言うべき奥の手を隠し持つ個体がいる。

今から放たれるのは紫毒巨塊のそれだと読んだクレスは、その発射を秘かに待つ。相手の魔力の波長を心眼アビリティで見抜き、その揺れ幅から威力の触れ具合を察し

て——今。

しかしその威力は蝕毒瘴息ブレレスの反動のせいか前と比べて落ちてきており、彼の力でも受け流せる程度になってきている。

「……こっちは牽制のつもりか、その裏でまた別に蝕毒瘴息ブレレス用の力を貯めているみたいだな。ふうむ」

更に相手の行動を縛るべく盾の裏から「キプト・アルウィン」の糸を緻密に張り巡らせながら、状況を膠着にもつれ込ませた生まれ思考の余裕の中でクレスは先の光景を思い返す。

——そもそも、「ブラック・ブレット」を食らって魔石が無事だったのは何故だろう？あの段階で戦いが終わるといいうのもあり得ない話だったが、それと同等に彼にとつてはこの事実が不可解だった。

もしあの瞬間に魔石へ守りを集中させていたとしても、それごと纏めて破損させる自信が彼にはあった。

「とはいえ事実として、魔石が生き残っていたからこうして奴も俺に攻撃してきているわけだが。それでもまるつきり無事だったとは思えない。少なくとも欠けとか罅とかは、間違いなく入っているはず。それでも構わず、超高火力の蝕毒瘴息ブレレスを放てるから元気を維持できる絡繰りはなんだ？」——と」

考える内に、どうやら二発目の蝕毒瘴息ブレレスの蓄積チャージが終わったらしい。

「シユレディンガー」

『T e k e ————— !!』

再び転移でそそくさとその場から回避しながら、クレスはついだとばかりに持つてきた二十個近くの大盾を予備兼身代わりとしてそこら中に設置する。

索敵をあれだけ多かつた目に頼っている紫毒巨塊キック・ボイセンスライムはどの盾の裏にクレスが潜んでいるのか分からなくなったよう、案の定、怒ったかのように見境なく全てを攻撃し始める。

その中でクレスが相手の動きをちらちらと伺っていると——気づく。

「……なんとというか、隙だらけだな。守ろうとする様子が微塵もない。確かに肉体の耐性はまた上昇しているだろうが、さつきまで殴られていた感覚だとまだ「ブラック・レット」はギリ通じそうな感じだったはず。二発目が怖くないのか？ まあ、あれは今回はまだ撃てないし恐れなくて正解なんだが……」

一度撃てば大きな整備が必要となる、その事情を紫毒巨塊キック・ボイセンスライムが知っているはずがない。

つまりそれは……もう一度魔弾に穿たれることを恐れていない、ということ。

「ブラック・レット」によって己の魔石を仕留められることを、予想していない。肉体を粉々に吹き飛ばされても、魔石は無事。

「……」

その刃に魔力を込めた彼は、心眼・集中アビリティなどを総動員して相手の気配を読む。

そして、計三発の蝕毒瘴息ブレレスを撃って疲弊中の紫毒巨塊キング・ボイズンスライムの隙を見計らって、投擲。音もなく、影もなく。

攻撃とさえ呼べるはずもないその小さな一撃は紫毒巨塊キング・ボイズンスライムの身体さえ狙わず、地面に突き刺さって——。

『Te?』

地の奥深くに潜り込んだ後、パキンッ！ と彼の狙いすました通りに固い音を響かせた。

『Te・Te・Te……TekeliiiiiiTekelelliiiiTekelelliiii
iiiiii——!!!???』

「読みが当たつたな」

これまで【ブラック・ブレット】を覗いてクレスの攻撃に一切応えた様子を見せなかった紫毒巨塊キング・ボイズンスライムが、突如苦しむかのようにその身を悶えさせ始めた。

周囲の糸に身体を切り刻まれることさえ意に介さずジタバタと足掻く様を前に、クレスは盾の内側から姿を見せる。

「今俺が投げたのは「アーベント・シユナイド」。治療専用のメスさ。ただし俺専用の……レベル21の身体をぶった切るための、とっておきのな。属性は祝福属性^{アグアロン}。呪詛^{カリス}やデバフを物理的に斬って解呪するんだが、もう一つ追加効果があつてな。込めた魔力を刃先に一点集中することで、切断力が際限なく上がっていくんだ。まあ、こんな地面くらしいものともせず潜つちまうくらいにな。

それで毒沼の底に隠れてるお前の魔石を貫いた、つてわけだ」

乾いた泥の地面をよく見れば、水圧^{ウォーター・カッター}砲の跡が妙に少ない区画があつた。

まるで意図的に狙いを逸らしているかのような、不自然な一帯。

そこにクレスは疑問を抱いた——攻撃をしないだけの理由がそこにあるとすれば、それはなんだ？

攻撃を当ててはならない、当てたくはない……当ててしまつては困るような場所。

それはつまり、弱点と同義ではないのか。

そう考えた時、クレスの脳内で点と点が繋がつた。

「全身が爆散しても魔石が無事……つまり、だ。今のお前の身体の中には魔石はないつてことだ。じゃあどこにある？ その答えはお前と毒沼を繋いでる線^{ライン}にあつた。俺はつつきり毒を補充するための食道に過ぎないと思つてたが、違うんだろう？ それは外に出ている天使型の触手と毒沼の奥なる本体の魔石を繋ぐ、神経でもあつたんだ」

少なくとも第一形態の時には、まだ魔石は体内にあった。

でなければ毒沼との接触を断つた際に、見えていた身体が崩壊していたはずだから。恐らく、魔石の位置が動いたのは第二段階になってからとクレスは読んでいた。

素早い触手の動きで相手を翻弄し、そちらに目を惹きつけておいて。その裏で強かに、動いていなかった肉体の下でこつそりと氷を掘り進めていたに違いない。そうして魔石をやられる可能性の高い地上から地下へと移したのだ。

「目に見える姿から、地上の天使がお前本体だと騙されていたよ。いやはやこの年になつても勉強になることはあるものだな。……その様子からして、長くはもつまない。俺は怪物趣味でも、ましてや加虐主義者サディストもない。せめて介錯くらいはしてやろう」

とはいえ、敢えて近づきような危険を冒すつもりもない。

クレスは二振り目の葬呪用メスを取り出して安全と見立てた距離から投擲の構えに入るが、それを見た紫毒キング・ボイスンスライム巨塊ののたうち回る動きが止まる。

「むっ！」

その天使を模した泥体の眼が、確かにクレスを捉える。

そこに移るのは死を目前にした諦観でも、介錯を希う弱弱い光でもない。死なば諸共道連れにしてくれようという、爛々と輝く狂気の燐光であった。

天使の身体が崩れるのにも構わず、全身から触手を伸ばしてその場に肉体を固定。

その顎が喉元までぱっくりと裂けた悍ましい口腔に、これが最後ということもあつてか余すことなく魔力を充填し始めて――。

「ちっ、隠れ――なにつ」

いつの間にか伸びていた触手の一本が糸の隙間を掻い潜つて、クレスの側の盾を彼の手の届かないところにまで弾いた。

身を隠す場所のなくなつた今、彼が紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの認識から逃れる手段はなく、「シユレディングァー」の発動条件を満たせない。

眉を顰めたクレスは、その手の刃を握りしめながら発射体勢に入った相手を前に口を小さく開く。

「よく足掻くな。しかし……:よりによつて最後に選ぶのが道連れとは。ここで死んだぶりでもして、秘かに傷を癒し生き永らえることもできなくはなかつただろうに。と、共通語コイネを理解できないお前に言つても詮無きことか」

その態度を潔いと見るか否かは、人によつて意見の分かれるところだろう。

しかしクレスは紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの選択肢を好かなかつた。

もとより命運を共にする道理もないと、彼は同情を一かけらも見せることなく速やかに手にしていた「アーベント・シユナイド」を放つた。

地中に存在する魔石に二つ目の楔クワが撃ち込まれ、元々生まれてきた罅ヒビが更に広がって

げつけて、クレスは相手が完全に絶命したのを確認する。そうして今度こそ第四形態なんてものがないことを理解してから、彼は目の前の紫毒^{キング・ボイスマスライム}巨塊^{キング・ボイスマスライム}だったものの残骸を見る。

額を流れる血汗を拭い、クレスは今回の戦いを振り返る。

計三段階にも至る形態変化と、その過程で上昇を続ける物理・魔法耐性。

加えて異常な速度と回復能力を有する、深淵の孤王の名に相応しい在り様。

本当に苦勞させられたものだ、と全身に疲勞がどつと重く押し掛かる。

「だが、休むのは拠点に戻ってからだ。……さて、^{ドロップアイテム}素材はあるか？」

これだけ強力な相手だったのだから、きつとその素材も相応の価値を有していることだろう。

それを元に何が作れるだろうかと考えながら、クレスは紫毒^{キング・ボイスマスライム}巨塊^{キング・ボイスマスライム}の死骸に近寄って積み重なる黒い塵の中を漁っていく。

「やはり此奴から作れるとしたら毒武器だろうか？ いや、逆に徹底的に毒を抜いて耐毒の防具として運用するのもありか……となるとまた毒消しの素材をかき集めてこなきゃならなくなるか。ううむ、解毒薬でその手のものは大概使い果たしたからなあ、また一からとなると少々面倒だ。やはりかねてより考えていた迷宮開拓計画を……しかし……」

ぶつくさと言いなから手際よく戦利品の回収を進めていくクレス。

その頭は既に次回以降の討伐手順の策定及びギルドへの報告書をどう書こうかといった内容で占められており、最後に紫毒巨塊が見せた足掻きについての想いは既に消えていた。

——死んでもことを為そうとする。

その行為を否と断じ続けてきた結果が、今の彼なのだから。

自分の願いを誰かに託すことほど無責任なことはない。

己が願い、己が背負い、己がいずれ叶えるのだ。

かつてクレスを「英雄の戦いを知らぬ愚者、死の誉れを知らぬ臆病者」と誹る神がいた。

彼は答えた——「死した程度で終われるとは、英雄とはなんと気楽なものだな」と。

諦めることなく夢を追い、神の定めた終わりを超えてなお己が両足で歩み続ける者。

それこそが冒険者なのだと背中語りながら、荷物を担いだクレスは拠点に帰還する。

幾度の絶望を乗り越えてなお歩みを止めない冒険者。

その隣に肩を並べる仲間は今、誰一人として存在しない。

その孤独な背中が、大きく見えるか小さく見えるかは定かではないが。

その歩みが明日もまた続くことだけは、確かなことだった。

『暗黒期』編

決戦の予定と好ましからざる知らせ

——正義とはなにか。

——悪とはなにか。

それは数多の人間が、神が問い続け……未だ純然たる一の解答が示されない難問。

ある者は静かに考える、「正義とは怪物を殺し尽くすこと」だと。
少女

またある者は捻くれ様に語った、「正義とは犠牲を許容し、救えるものを救うもの」だと。
剣士

そしてある者は高らかに宣言した、「正義とは巡り受け継がれるもの」だと。
高潔

ある者は嘯く、「悪とは気持ちの良いこと」だと。
神

またある者は叫ぶ、「悪とは血の宴に酔い、恐怖の戦慄を刻むこと」だと。
殺戮者

そしてある者は求めた、「悪とは世界を美しき赤に染めること」だと。
破壊者

まさに十人十色。

それを掲げる人によって千差万別に姿かたちが異なる解答信念であり、

それらは決して譲れぬ彼らの魂（誇り）であった。

故に、時に異なる『正義／悪』が交わり、言葉や刃となつて衝突することは世に必然の理と言えよう。

その道理がひと際大きく揺れ動いた激動の時代——英雄（オラリオ）の都、暗黒期。
神はまた、問う。

「正義とは何ぞや？」「悪とは何ぞや？」と。

冒険者は答える。

「そんな下らない問答に時間をかけるくらいなら迷宮（ダンジョン）へ潜れ、全ての答えはそこにある。

迷宮（ダンジョン）だ。

迷宮（ダンジョン）だ。

迷宮（ダンジョン）だ。

迷宮（ダンジョン）へ潜れ——話はそれからだ」

主神（ゼウス）とその妻（ヘラ）という巨蓋を失つた当時の迷宮都市（オラリオ）には、病毒（やまい）が流行（はや）っていた。

その名を『悪派閥（イヴイルス）』。

神に与えられし恩恵を悪用し弱者を虐げる、冒険者英雄にあつてはならない悪徳を極めし者たち。破壊活動、人身売買、薬物密輸等々、有り余る罪を重ねてなお憚ることを知らない逆賊テロリストどもが、そこかしこに跳梁跋扈していた。

しかし、そこに先立つ『悪』があれば、後に対抗する『正義』が立ち上がるのも世の道理。

心に秘めた義憤を燃やし、世に混乱を齎す悪を討つべく一堂に会した『正義』側の者たち。

彼らの、これが最後になるであろう作戦会議が今まさに——終わろうとしていた。

「作戦の開始は——三日後」

数多の眷属ファミリアに見守られる中で、『勇者』ブレイバフィン・デイルムナが宣言する。

数え切れない犠牲を積み上げてついに掴んだ敵の拠点三つ、それらを同時に叩いて今後一切の禍根を断つ。強力な冒険者を有する『ロキ・ファミリア』『フレイヤ・ファミリア』『アストレア・ファミリア』『ガネーシャ・ファミリア』を核に据えた、失敗の許されない作戦。

その実行日を力強く宣言した彼の碧眼には、「これ以上自分たちの街に邪悪なる者たちをのさばらせることを認めない」という意志が爛々と輝いていた。

「それでは、解散」

会議の主導者たる彼の決定を受けた各々が、覚悟を胸に秘めて席を立つ。

迫る決戦に備えて戦意を滾らせながら、彼らは会議室の出口へと姿を消していった。

その裏では本来非公開であるはずのこの会議を傍聴盗聴していた間諜スパイも上司へのたつた一度きりの報告に向かうべくこつそりと去っていき、そしてそれに誰も気づくことはなかった。

ただ、不幸中の幸いとして。

間諜スパイの上役である悪派閥イヴィルスの女幹部は、彼らにとつて最も重要な情報をこそ得られなかった。

部下が「既に会議の結論は下された」と判断してしまい、聞き逃してしまった一幕。主題の後に続く些細なそのやり取りにこそ、彼らの今後に多大な影響を及ぼす兆候しるしが秘されていたというのに。

「——む。なんだ、あれは？」

その気配に目敏く気づいたのは、フィンの横に控えていた『九魔姫ナイン・ヘル』リヴェリア・リヨス・アールヴだった。

天井を見上げた彼女の眩きに続いて、場に残っていた上級冒険者たちは一様にそちらに目を向ける。

彼らの集う会議室の一角、シャンデリア装飾魔石灯デリアの光が僅かに届かない暗所に眼を光らせていた

もの。

闇の中に姿を浮かばせるその生き物の正体は……一匹の蝙蝠だった。

「あら、可愛い迷い蝙蝠さんね！ まさかギルドの中に侵入しちゃうなんて、おっちょこちよいなのね！ それともこの強く可愛い私に惹かれて付いてきちゃったのかしら!？」

うーん、私ってば罪作り!」

「アリーゼの言うことはともかく。こんなところに入ってきて、ひとりでに出ていけるのか？ ……こちらで捕まえて、外へ放してあげた方がよいのではないでしょうか」

「けつ、たかが小動物如きいきやーきやーと……女共が。やかましいんだよ」

「流石、一々他人の言うことに噛みついてばかりのやんちゃな猫様が言う違いますねえ」

「ああん!？」

「……止めないか、お前たち」

主にアストレア・ファミリアを中心とした面子が反応を見せる中、蝙蝠がぼつ、と羽を広げて宙に飛ぶ。

その行き先を彼らはまた自然と見つめて……小さな黒き翼は、ギルド長ロイマンの手の中に降り立った。

そして、その背に結んであった封書の筒が彼へと渡される。

「へえ……どうやらただの蝙蝠じゃないみたいだね」

「そうだな。今の様子だと使い魔か？ あの種のモンスターを使役するのは初めて見たが……送り主が気になるところだな」

フィンとリヴェリアが目を細める前で、ロイマンは手紙を開くことなく蝙蝠ごとポケットの中に素早く押し込む。その態度からして、ここで中身に目を通すつもりでないのは火を見るより明らかだった。

そのままであれば、傍から見ている彼らもギルドの内部文書の一つに過ぎないのだろうと見逃していたかもしれない。

しかし、この時のロイマンは日々重なる悪派閥イヴィルスの襲撃による心労のせいか、油断してしまっていたのだろう。

「ちいっ、なぜこのような時に……ッ！ 急用ができた！ お前たちには悪いがここで私は失礼させてもらうぞッ！」

急に滝のような脂汗を額に滲ませたかと思えば、青褪め、続けて頬を真っ赤に染め、また蒼白になる。

青↓赤↓青と顔色を立て続けに変えたロイマンは椅子を蹴飛ばすように立ち上がった。まるで逃げるかのような速足で部屋出口へ向かおうとする。

その取り乱しぶりを見咎めたフィンの親指が、ぶるりと震える。

自身の能力スキルが伝える直感に、彼はすかさずロイマンの進む道を塞いで問うた。

「なにかあったのか、ロイマン?」

「い、いや……な、なんでもないぞッ!」

「「「「(い)いや無理があるだろそれ……」」」」

その様子は誰がどう見ても、普段の傲慢かつ凶々しい在り様とは異なっていた。

あまりに精細さを欠いた彼の様子に、会議室の雰囲気イッイルスが切り替わる——すなわち、詰問の時間へ。

「その台詞セリフで「なにもない」、はないだろう。悪派閥イッイルスとの関係でなにかあったのか。もしそうだとしたら、この場で共有してもらいたいんだけどな。もしかしたら作戦に修正を加える必要が出てくるかもしれない」

「違ッ、その類では断じてないわ! 貴様らは気にせず先に説明した作戦の遂行に努めれば良いのだ! 分かったらさっさと拠点に戻って整備でもなんでも——」

「誤魔化そうとするな。その遂行のためにも、教えてほしいと言っているんだ。この親指の感覚……恐らくその手紙は僕らにとつて大きな影響を齎すものだ。君も知つての通り、この作戦は決して失敗できない。だからこそ前もってあらゆる不安の種を取り除いておかねばならない。分かるだろう?」

ピリピリとした雰囲気イッイルスを漂わせるフィンイッイルスの真剣度合いに、周りの者たちもまた俄然中

身が気になってきたようで鋭い眼を向ける。

彼らの視線を四方から浴びながら、ロイマンは少しづつ距離を縮めてくる小人族バルウムから距離を取ろうとするが——残念なことにこの場に逃げ場はなかった。

「……くつ、仕方あるまい。少し待て」

観念したように、ロイマンは一度しまった手紙を取り出した。

その封を切り、中に書かれていた文字を一読する。

「やはり……やはりそういうことかッ！ ええい、この忙しい時になんと忌まわしい！」
息を荒げ、手紙を瞬く間にくしゃくしゃにしたロイマン。

その目を素早く周囲に走らせた後、彼は怒り心頭と言った面持ちのまま丸めた手紙を口の中に放り込もうとした。

「——なっ!? か、返せ！」

「馬鹿が。俺たちの前で teme 如きに隠し事が許されると思うな」

それがすかさず都市最速ツァナ・フレイヤの手によって掠め取られてさえないなければ、彼の隠滅は間に合っていただろう。

しかし事実として、手紙はいつの間にかロイマンの隣に立っていたアレンの手中に収められていた。

「ありがとうアレン。それで、中にはなんと書いてあるんだい？」

「なんで俺が読み上げてやらなきゃいけないんだ。そつちで勝手に読みやがれ」

アレンアンデルから投げつけられた手紙を受け取ったフィンは、その中身に素早く目を走らせる。

「……まさか呑み込もうとするとは」

「あの我執の怪物がそうまでして隠したい秘密……俄然気になりますねえ」

どこか呆れたようなリユートと、面白いものを見たと目を光らせる輝夜。

彼らへの情報共有の意を含めて、フィンは手紙に書かれていた一文を読み上げた。

「……ヒエログリフ神聖文字で、『三日後に向かう』とある。作戦と同日だね……しかし一番大切な宛名がない。さて、誰が来るんだい？」

「……っ」

フィンの向ける厳しい視線に、ロイマンは逃げ場を探すべく視線を右往左往させる。

しかしイヴイルス悪派閥への対策関連で疲労困憊の頭ではうまい言い訳が見つからなかったのか、彼はやがて己の失態を心底悔やむようにため息交じりの重い口調で言葉を絞り出す。

「……今のお前たちには知る必要のない相手だ」

「その言い分が今この時において通じると思っているのか？」

「だろうな。だが、通じてもらわねばならん。こちらから言えるのはそれだけだ、それ以

上のことは何一つ言えん。もし更に知りたいたのであれば、貴様らの主神からウラノスへ話を通すが良い」

「ウラノスに関わる案件か。なるほど、重大だな……うん、分かった。君の言葉を信じるでしょう」

「ちつ、最初からそうしていれば良いのだ！ まったく、これだから——ごほんつ！ 分かったらこれ以上余計なことは考えず悪派閥イヴィルスの討伐に注力しろ！ 良いな！」

どたどたと捨て台詞を残して去っていったロイマンを見送ったのち、一部の冒険者から不審がる声が漏れる。

「結局お相手は誰だったのかしら？ 賢く可愛い私でも分からないわ！」

「はっ、つるし上げて吐かせりや良かったんだ」

「いや、残念だがそうもいかない。あれを吊るしてじっくりこんがり問い詰めたき上げたいのはここにいる大抵の者の本音だろうが、ここへ来て統率機関であるギルドを敵に回すようなことをすれば結末の崩壊を招きかねないからな。……それに」

漂わせていた雰囲気ロイマンの割にあっさりロイマンと引いたフィンの意見を、リヴェリアが補助する。

「万が一ここで我々が敗北を喫した場合、それはギルドの魔石利権も終わることを意味する。それをあの俗物ロイマンが易々と放棄するのをよしとするはずもない。共有すべきこと

があれば奴は包み隠さず共有するだろう」

「うん、ここはリヴェリアの言うとおりだ。みんな、ロイマンのことははいつたん置いておこう。余計なことは考えず自分の役割に集中してくれ。この決戦で、僕たちの都市の命運が決まるのだから」

彼の言葉にひとまずはこの場に漂った不穏な空気は解消されたかのように見えた。

しかし、ロイマンへ抱いた彼らの不信が完全に拭い切れたわけではない。

一つの黒い染みを残すような結果に終わった会議はその後、今度こそ自然と解散するのだった。

一方、痛む腹を摩りながら廊下を走るロイマンの顔は途方もない焦りを孕んでいた。すれ違う職員に奇異の眼で見られるのも構わず、彼は一直線に自分の執務室へと戻ってその内側から厳重に鍵を閉める。

「くそ、すっかり忘れていた……そろそろ奴が帰ってくる頃合いだということ。あまりに直視したくなかったせいかな、前回から一年が経つ事実をすっかり頭から消していた……くそつ、アンタツチャブル【禁 忌】め！」

ぶつぶつと独り言を漏らしながら自室の中をあてもなく彷徨い歩く彼だったが、やが

て諦めたかのようにソファーに腰を下ろした。

そう、先ほど彼が受け取った手紙とはクレスからの帰還の知らせだった。

一年に一度の『深々層』からの出張報告。それだけでも十分頭が痛い出来事だということに、今回はよりもよってそれが自身の膝元における一大決戦と同日というのは何の冗談か——ロイマンは割れそうなほどに痛みを訴える頭を両手で押さえつけるように抱え込んだ。

「もし奴がフィンらと遭遇した場合……まず敵対はない、はずだ。今回の作戦は迷宮攻略に利するもの、協力はせずともそれを妨げようとはしない。ただ……」

今度はぐるぐると不穏な音を鳴らし始めた自身の腹を懸命に摩りながら、想像する。

——それはクレスとフレイヤ・ファミリアが衝突するという、最悪の可能性。

ただでさえ血の気の多い連中が文字通り我が道を征くクレスと出くわした場合、どうなるか。

売られた喧嘩に買う喧嘩。つつかかる馬鹿アレキスと真正面から反抗する馬鹿クレス、そこから燃え広がる作戦そっちのけの戦争遊戯ウォーゲーム……その光景が容易く想像出来て、ロイマンは泣きそうだった。

「奴のことだ、どうせ女神フレイヤの威光も知らんとばかりに自然と言葉で連中を煽るに決まっている！　そこから先は……ああ、考えたくもない！　一応事情は説明して念

押しするとして……」

——無駄だろうな、と吐きかけた言葉を飲み込む。

一度口にしてしまえばそれが真実になってしまいそうだから、と。

「……願わくば、先に悪派閥イワイルスの方から喧嘩を売ってくれば助かるのだが」

そんな都合の良い妄想と異国から取り寄せた高級胃薬で頭やら胃やらその他諸々に走る痛みをなんとか抑えながら、彼は唸る。

知らせを聞いてからまだ十分も立っていないのにもう精神的疲労ストレスで体重が三分の一は落ちたような気がする、そんなロイマンであつた。

彼の気苦労が杞憂に終わるか否か、それはクレスのみぞ知る。

そんな地上の様子も知らないまま、火が消えて窓を閉めたことを確認したクレスは拠点を入念に施錠した。

結界型魔道具による異界化——一日で階層主三体分の魔石を消費する代わりに不可視かつ自動反撃機能付きという物騒な戸締り。

透き通るように姿を消していく自分の家を見送り、彼は報告用の荷物を入れた袋を背負った。

『ダーク・ヒュドラ暗黒毒竜』素材の毒抜き。『キング・ポイズンスライム紫毒巨塊』肉の浄化。『サザンカーズ千呪巫王』の杖と『セブンアークス七天光君』の剣の密封……ちやんとやったな」

一部の下処理に時間がかかる素材の準備に、放置しておくだけで危ない特級素材の厳重封印。

それらに忘れたところがないかもう一度思い返して、これで自分がいない間の一日も大丈夫だろうと彼は満足げに頷いた。

「よし、そろそろ行くか」

そして振り返った所に、声がかかる。

「——むう、遅いぞ！ わらわ妾をいつまで待たせるつもりだったのじゃー！」

「そんなに待たせた記憶はないが」

「い・ち・ね・んじゃ、一年！ 前の時からもう一年も経つのだじゃぞ！ その間妾がいくら駄々を捏ねても全部「また今度な」で済まされておった、その願いがようやく叶うのじゃ！ 逸るのも仕方なからう！ ……ふふふつ、それにしても久々の地上オラリオは楽しんじゃのー！ いざ行かん、約束されし楽園の地へ！ なのじゃー！」

星のように透き通って輝く銀の髪をたなびかせるその人影を横に、クレスは呟く。

「最近は地上もキナ臭い。……一応準備はしたが、使う機会がないことを祈っておくか」

神は踊らせ、人は踏み外し、歴史はまた巡る

地上への帰還を果たし、胃痛を抱えるロイマンとの間で報告を兼ねたいくつかのやり取りを終え、そして主神カオスの手料理をいつも通りたらふく平らげて。

拠点たる『時空の狭間』の自室で安眠から目を覚ました翌朝のクレスは、先に起きていた主神カオスからの熱烈な誘いで街中へと繰り出すこととなった。

「主神とその眷属が親睦を深めるのは絶対にして必然の宿命！ という訳でさあ始めようクレス君！ 古来より語られし、人と神とで執り行う神聖かつ不可侵の儀式——私と君との逢引きをね！」

「ふむ。別に付き合ってもいない只人の男と女神の組み合わせをそう呼ぶのが正しいのかは知らないが、それがお望みならば付き合おう。それが今日一日の存在する意味だからな」

「——ぐふうっ!? くっ、朝一番からきつついっ発をキメてくるねエ君は。ここまで女神を徹底して軽んじる下界の子どもはそうはいないよ？」

「軽んじているつもりは微塵もないが」

「それを特に申し訳なくしようともせず無表情で言えるところが軽んじているって言うんだよッ！……ホントにまったくこれだから、君ってやつは。ええい、それ以上余計な口を開く前に兎に角準備をしてさっさと出るッ！今日の夕方にはもう君は帰ってしまうんだから、時間は有限！急げや急げ、さあ急げ！」

そんな三文芝居を繰り返して、準備を整えていざバベルの外へ。

青と赤の反射光が走る神秘的な黒髪を一本の馬尾ポニーテールのように纏めた主神に付き従いながら、クレスは素顔を晒さないようフードを目深に被って久々となるオラリオの主要道路を歩いていた。

世界の中心と呼ばれるだけあって発展目まぐるしいこの街は、一年経てばそれなりに見違える。その活気ある変化を適度に眺めながら、積もり積もった女神のご要望に一つ一つ応えて機嫌を取っていく——それが普段の、帰還した彼の地上での主な過ごし方だ。

しかし、今回は少しばかり様子が違っていた。

「……なるほど、ロイマンの言っていた通りか。カオス、失礼するぞ」

「おや、なにかな？——って、ちよつ!？」

主神の身体を半ば強引に引き寄せ、彼女と自分の腕を強引に絡ませる。

手つなぎから一つ段階を超えた、男女人と神の腕組み。

——「これは逢引きデートなのか」などと戯けた言葉を吐いていた男のする行為か、これが!?

言葉と行動の伴わない眷属による突然の不意打ちに、カオスの思考回路が混乱ショートに見舞われる。

「い、いったいこれは何のつもりなのかな? まさかこんな人通りの多い往来でこんな所有権を主張するような行為など……ハレンチな! そんなに私が君神の女であることを周りに知らしめたいのかい!? そんなに君からの愛が深かったなんて……もちろん応えるつもりはあるんだが、その、実際にその場面に遭遇すると心の準備がだねっ!」

「何を慌てている? 俺眷属が貴女主神を愛する大切にのは当然のことだろうに。それよりも気をつけておけ。俺の側から離れるな」

「う、うん。もちろんだとも、私が君から離れることなどたとえ天地を切り裂く一撃を受けようと有り得ないよ! というか今さり気無く聞き捨てならない宣言をしていたよ
うな……クレス君?」

まさに頼れる男、と言ったような深いクレスの声色にカオスは感極まって彼の顔を見上げる。

だが、そこに浮かんでいたのは彼女の期待したような甘い甘い恋愛劇ラブコメテツク的な表情ではなかった。

それとは真逆の真剣な目つきを受けて、彼女は緩んでいた己の頬を引き締める。

「懐かしい、絶望の匂いがする」

「……」

「何度も嗅いだ、鼻奥が焦げ付くような嫌な空気。ここ暫くは臭うと言つてもまだ薄かったが……今回ののはひと際濃い。あの時代と同じだ。モンスターという破壊と隣り合わせにあつて、皆が息を潜めつつ必死になつて暮らしていた時代と。かつての都会イルコスや王都ラクリオスを思い返す……ロイマンから聞いてはいたが、これほどとはな」

クレスの厳しい眼には、今の街に表れている人々の不安が余すことなく映し出されていた。

店先に並べられた品が一つもない寂し気な商店——それは、外に置いておけば盗まれるから。

腰に、脇下に、背中に刃を潜ませて街を行く人々——それは、いつ襲われるか分からないから。

擦れ違うたびに血と汗の臭気を漂わせる警邏パトロール——それは、水浴びすらも満足に行えないほど彼らが切羽詰まっているから。

その哀しき光景を前に、クレスは黙考する。

目を閉じれば蘇る、古き悪しき時代の記憶が彼にはあつた。

怨嗟と殺戮、絶望と崩壊が連鎖を呼んだ時代。

人が人を支えるのではなく、競って相手の梯子を外そうと目論んだ過去。

過ぎ去ったはずのその歴史が再び顔を覗かせつつあるのが、今のオラリオだった。

「この神時代。極まった先に恩恵を背負った者が新たな脅威となることは火を見るよりも明らかだったし、事実これまでも何度かそうだったことはあつたが……今回はひと際だな」

そう呟く彼の瞳に映るのは——義憤でも、はたまた諦観でもなかった。

世の中とは所詮そのようなものだという、年を重ねればいずれは誰もが悟る一つの境地だった。

長き戦争と短き平和。その繰^{サイ}返^{クル}しが今再び、破壊の方に大きく振れているだけのこと。

また面倒な時期がやってきたな、とクレスはその現実に向き合いながら周囲に見えない警戒網を張り巡らせる。

恩恵という何よりも優れた鎧を着込んだ彼はまだ、どうとでもなる。

しかし全知全能となった今のカオスは、襲撃に巻き込まれればひとまりもない。

そんなか弱き主神を守護するべく目を光らせる眷属^{クレス}の溢していた言葉に、彼女は同調した。

「……そうだね。今はもう語る者もない、八百年前の『封神大戦』、五百年前の『巨災戦役』。そして直近だと、三百年前の『鍊魔戦線』か。どれも神とその恩恵を受けた人が起こした戦争だった。一応どの時も最後には「このような愚かな争いはもう止めよう」と手を取り合っていたはずなのに……またあんなことが起き始めている」

「今は爆発寸前と言ったところか。前の痛みを忘れた馬鹿のタガが外れ、周囲を巻き添えに暴発する……その三歩手前くらいには空気がヒリついている。戦後の再建に必死になつて貢献したあの時の連中は、今頃子孫の愚かしさを嘆いているだろうな」

「かもね。一つの脅威を退けた先の平和は人々子供たちが信じるよりずっと淡く儂くて、泡沫の夢に過ぎない。寿命の無い私たち神々と例外の君は実体験として戦争の齎す悲劇をずっと覚えていられるけれど、普通の子どもたちは定命だから……世代を重ねるにつれて、悲劇の経験を単なる知識に風化ダンジョンさせてしまう。だから、繰り返してしまふ」

一年の九割九分九厘を迷宮で過ダンジョンすクレスよりも、地上で活動するカオスはずっと人々のことを知っていた。

だからこそ、彼女は哀れに思いながらも、下界の人間たちのことを愚かだと責めはしなかつた。

悲しいことを忘れて前へと進む、それは間違いなく子供たちが持つ美德の一つでもあつて。

「そうして過ちを繰り返しながらも、彼らは小さな一步を刻んで着実に前へと進んでいるのだから——と。」

されど、そこに与する一部の同胞神々については別だった。

表情を一転させ、彼女は今のオウリオの裏で蠢く悍ましき邪神たちについて明確な嫌悪を示す。

「だけど、今回は少し話が違う。神々の井戸端会議デナトクで小耳に挟んだんだけど、今回は複数の邪神が積極的に裏で糸を引いているらしいんだ。神が人を思いのままに踊らせて……それがまともな結果に終わった試しはない。君も知っているようにね」

「ああ……」

その時、これまで仏頂面だったクレスの顔がはつきりと歪んだ。

眉間に皺を寄せ、立ち止まり、瞑目。

——唾棄すべき邪悪。追放すべき悪辣。自らを正しいと信じて止まぬ賢神が犯した愚。

それに振り回された昔日の愚かな自分が、臉の裏に蘇る。

迷宮ダンジョンに囚われていたクレスが唯一地上に残していた心残り英雄譚と、それにまつわる悲劇。

人と『異端』の交差。隻眼神の謀略。そして——終焉■の時。

「そうだな。嫌な過去だ」

「思い返させてしまつてごめんね。でも、この今のオラリオを取り巻く現状を語る上で敢えて避けたところで、君は否が応でも思い出すだろうから」

「いや、構わない。あれは確かにあの時の俺が選んだ選択で、負うべき咎は貴女ではなく他の神にこそあるのだから。……しかし、道理でやたら嫌な予感を覚えるわけだ」

とはいえクレスには、今のこの街で起きている変化に介入するつもりはなかった。

彼がロイマンから聞き及んでいる、『正義』と『悪』の戦争。

それは一度入り込めば深く足を囚われてしまう泥沼のようなものだ、彼はその身に深く学んでいた。

善と悪の争いは、始まつてしまえば相手を徹底的に叩き潰しきるまで終わらない。

ほんの指先一つ分でも関わってしまうだけで、際限なく迷宮攻略ダンジョンの時間が削られて行つてしまうことが目に見えている。

自らの身に関わつてさえ来なければ、構わない。

やりたい奴が勝手にやっつていれば良い——それが迷宮第一主義者たる彼の立ち位置スタンスであつた。

「まあ良い、どうせ俺たちが積極的に関わることもないんだ。この話はここまでにしよう。それに、せつかくの一日をこんなつまらん空気で過ごすのも我が主神の望むところではないはずだ」

「……うん、そうだね！　こんな話をしてたつてなんにも変わりはない！　今日は一年に一度の私たちの絆を深めるための日なんだから、もつと有効活用しないとね！　そのための逢引きなんだし、もつと明るくいこう！　気にしない気にしない！」

ここはクレスの言う通り、下界の子どもたちに倣おうとカオスは笑う。

暗い過去はさておいて、明るい今の時間をこそ楽しもうと。

その輝かしく尊い神意に従うように、彼もまたフードの下で意識の矛先を転じるべく頭を働かせた。

「そうだとおも。貴女にはそちらの笑顔の方がよほど似合っているからな。という訳で話題を変えるか……そうだな。カオス、そういえば今の俺たちはそもそもどこへ向かっているんだ？」

「ああ、言つてなかつたつけね。今向かっているのは食事処さ。たまには君も私以外の料理以外も食べたいかなーって思つて、今のオラリオで一番人気なお店を予約してあるのさ！　……つて、ん？」

「ほう、そうなのか。しかしだな。その心配は杞憂だし、なんなら我が主神の手料理が俺の中で最も美味であつて感謝こそすれ不満など何一つないのだが……まあ良いか。その想いは想いでありがたく受け取るとしよう」

「やっぱり聞き間違ひじゃ——かふつ！」

そして、先ほどまでの真剣味シリウスは何だったのかと言わんばかりの眷属の一言にまたもやぶん殴られる主神ノックアウトされるカオス。

「き、君はまた……っ！　また平然と私の心を射抜いてくるなんて……このカオス、一生の不覚だよっ！」

「？」

「なんでそこで分からないといった顔が出来るとかなあ!?　もう、はあ……なんだ。君は一度、いや五十回くらい刺されてきた方がいいと思うよ」

「そんな神ゼウスのような扱いをされるような話をしていたか、今の俺は？」

「たぶんアレよりもっとたちが悪いよ……」

訳が分からないよ、といった様子の子の真面目腐った顔に戻ったクレスを一度ぶっ飛ばしてやりたい衝動にカオスは駆られた。

しかし殴った所で自分の手が痛むだけ。むしろそれどころか労わられながら「大丈夫か？　今朝からやたら情緒不安定に見えるが予定を取りやめて治療系ファミリアで診察でも受けてくるか」などと変な心配をされるのが目に見えていたので、すんでのところで彼女は超必殺☆マジカル女神パンチ（今命名）を取り止めたのだった。

そうこうしている内に、二人の足は目的地へと迫り着く。

その酒場には、一つの立派な看板が掲げられていた——『豊穡の女主人』。

「聞き覚えがあるな……ああ、ここがあいつの言っていた楽園か」

騒がしい隣人の声かふと耳元にちらついたりしたような気がして、クレスは興味深そうにフード下の眼を揺らした。

【神々の給仕（ゴッツプライド）】

「へえ、驚いたよ！　ここは君が来るようなところじゃないだろうに、よく知っていたね？」

まるで『豊穡の女主人』を予め知っていたかのようなクレスの口ぶりに、カオスは驚く。

それもそのはず、彼が迷宮ダズンジョン以外のことに興味を見出すのは並々ならぬ一大事であり、カオスにとってそれは天変地異にも等しい衝撃シヨックであったからだ。青天の霹靂にして前代未聞、明日はクロツゾの魔剣でも降るのではなかるうか……などなど、ついつい失礼な印象すら思い並べてしまうほどに。

「てつきり君が地上オラリオに帰ってきて足を運ぶなんて、精々がゴブニユかディアнкеヒトのところか、後はいくつかの商業系ファミリアくらいだと思っただけど……」

「いや、それは間違いなく正しいさ。ただ、ここはあの騒がしい馬鹿の仕事先バイトだと聞き及んでいてな。なにせ迷宮で顔を合わせるたびに「また連れていけ」としつこく連呼してくるものだから、流石に覚えてしまったんだ」

「……あー、彼女の影響か。そういうえば、ちよくちよく噂にもなつてたつけ。そういうことか」

クレスの語る理由に、カオスは先ほどまで抱いていた驚愕とは裏腹にすんなりと納得した。

——なぜなら、彼女以外にクレスに影響を与え得るその存在は、カオスもよく知るところだったから。

恩恵こそ与えていないものの、自身の眷属かぞくに等しい娘こ。

カオス・ファミリアがウラノスにさえ存在を秘している、謎多き下界の『未知なる可能性』の一つ。

主神を除けば最もクレスと触れ合う時間が長い、あの子の影響ならば……と、カオスは七光に瞬くその虹セブテクロミアの瞳に理解の色を示す。

「せっかくだ、奴のここで働いてる様子も見ていくか」

開かれている入り口から中に歩を進め、クレスは主神に先んじて酒場全体の様子を伺う。

彼らを出迎えたのは果たして——静かな外からは想像も出来ないほどの大盛況ぶりだった。

行き交う喧噪、むせかえる酒精の匂い。その隙間を忙しなく往来するウエイトレス。

イウイリス

悪派閥の脅威による経済的委縮が嘘であるかのような活気が、そこには満ちていた。

「はい、いらつしやいませー! と、予約のお客様ですな! カオス様と、その……お連れ様? どうぞあちらの席へお進みください!」

ちようど出来立ての料理を運んでいた獣人のウエイトレスの一人が彼らの姿を認め、『予約』の札が置かれていた席に案内する。

どうやら顔を覚えられる程度には、カオスはここに足繁く通っているようだ。

一方、店内に入ってもフードを脱ぐ様子を見せないクレスにウエイトレスは時期もあつてか一瞬間を擧めるものの、常連である彼女の知り合いならばと特に問い詰めてくることはなかった。

「ご注文は適当なウエイトレスを捕まえてお願いします! それとこちらがお冷になりますね! それではどうぞこゆるりとお過ごしください! ——あ、いらつしやいませー!」

すかさず案内を引き継いだ別のウエイトレスがきつと説明を済ませて、流れるように次なる客を出迎えに小走りで入り口に向かう。

その背中を見送つて、他の客の奏でる騒々しさから離れた壁際の席に座らされた二人はテーブルに置かれたメニュー表を揃つて覗き込んだ。

「こほん、それでクレス君。何が食べたい? ここは季節にもよるけれど、古今東西大概

の料理が揃っているんだ。メニューになくても言えばたぶん出してくれるし、好きなものを頼みなよ」

「なんでも良い……と言うと、こういう時は困るんだったか。ならばとりあえず肉と炭水化物系統のものを希望しておこう」

「オツケー！ うんうん、やっぱり男の子だねエー。よしそれ・な・ら・ばつと……あつ、ちょうど彼女がいたよ！ おーい、サラ君！ こつちこつち！」

「——はい、なのじゃー！」

カオスが手慣れた様子で呼びかけた一人のウエイトレスが、ちょうど相手をしていた男神の下を離れてクレスたちのテーブルに近づいてくる。

腰まで伸びる穢れなき銀髪を最後にリボンで纏めた少女。

前髪の隙間からは鮮血のように赤い瞳を覗かせており、染みのない肌は新雪のように白く、またその四肢は神々から見ても思わず感嘆の息を漏らしてしまうほどに均整が取れている。

そして、現在着用している女中の制服から溢れ出る^{オーラ}雰囲気は素朴な町娘のそれよりも、流離する亡国の貴族に近いものを連想させ、ドレスと宝石で飾り立てられて豪華な椅子にふんぞりかえっていた方がよりらしいのではないか——見る者によつてはそのような感想を抱くこともある、可憐なウエイトレス。

そんな彼女は素早く二人の席に近づいたかと思えば、クレスの方を見て意外そうに目を丸くする。

「待たせたのじゃカオス様よ！ それと……我があるモゴツ！」

「ここでその呼称を使うな、目立つだろう」

すかさずクレスがグラスの中から飛ばした氷が喉奥に見事命中して、少女は刹那の苦悶に喘ぐ。

やや少し経って喉の調子を落ち着け、改めて彼のことを「いらっしやいませなのじゃ、クレス様……けほけほ」と彼女は涙ぐみながら呼び直した。

それから彼女は『男と女の二人が仲良く席を同じにしてここにいる』という揺るぎのない事実から、主にカオスの方を見ながら察したかのような素振りて手を打つ。

「何故ここに来たんじゃ、と思うたがアレか。カオス様に誘われてきたんじゃな、となれば逢デイト引きの最中かの？」

「ふふん、そうだよサラ君。君は実に見る目が良い、まさにその通りだとも。という訳で今日は私たちのことをそのようにもてなしてくれたら嬉しいな」

「分かつたのじゃ。だがのう、しかし……」

と、サラと呼ばれた少女はちらりとクレスのことをもう一度見る。

その疑るような視線を受けた彼はとりあえず、思った通りのことを素直に口にした。

「なんだ？ ……ああ、随分とここに馴染んでいるみたいだな。その制服もよく似合っているぞ。その様子で今後でも頑張ると良い」

「……やはり、そういうことかの」

「……うん、そういうことさ」

——駄目だこの朴念仁めこりや。

二人揃って溜め息を吐くその様子に、クレスは不可解そうに首を傾げた。

「どうした二人とも、そんな呆れたように首を振って。幸せが逃げるぞ」

「なんでもないよ」「なんでもないのじゃ」

「そうか、ならば良いが」

「いや良くないのじゃ！ どうしてそう変なところで鈍いんじやか……というか、その、じゃな。なんでもなくとも一応伝えておくが、あれじゃ。正直妾はお主より世間知らずで、そんな身で語るのもおかしな話じゃが……女の服を褒めるのは時と場所を選んだ方がいいと思うのじゃよ」

彼女らの言葉を真に受けてさらっと話を進めようとした彼に待ったをかけるサラ。

詳細はカオスの名譽のために伏せつつも、善意で「気づけ」と念を送るようにジト目でクレスに助言を送ろうとする。

しかし、迷宮馬鹿に女の心は分からない。

「ん、今はなにか拙かったのか?」

「拙いのう。拙い、拙過ぎる。ぶつちやけ絶品のチョコレートケーキにいきなり醤油をかけるくらいの冒瀆的なことをしたという自覚を持った方が良いのじゃ、今のは」

「……? よく分からんが、気分を害したようですまなかつた。それはそれとして注文をしたいんだが、口頭で伝えればいいのか?」

「あー、うん。そうだね……しようか、注文。ありがとうねサラ君、私のことを気遣つてくれて。クレス君の方はもうそれで良いよ。とりあえず、私は季節の魚料理を頼むね。彼の方は肉とご飯や麺系統を、ご所望とのことだから、ひとまずメニューの……ここからここまで」

「カオス様がそう言うのなら妾は構わんが。——はいはい、奈落と変わらずクレス様は大食漢じゃの。承りましたなのじゃ! そうしたら妾の腕によりをかけて作つてくるからの、楽しみにしておれ!」

ささつと手元に注文内容を書き留めて、サラは厨房へと引つ込んでいく。

しかしその様子に待つたをかけるかのように、他の席から大きな悲鳴が上がった——主に、うだつの上がない男神どもから。

「あ、サラちゃん!? その前に……つちに来てくれよおおおつ!」

「サラちゃん!」

「サラちゆわあああん!!」

「あー、申し訳ないがこれから妾はしばらく調理に入るのじゃ! 皆の者、すまんのう
!」

「「そんなあー?!?!」」

手を振つて消えていった彼女を見送つた情けない彼らから響く、見苦しい嘆き声の
数々。

だが、それも仕方のないことなのかもしれない。

なにせ、見目麗しい彼女からの酌を受けられなくなつた今、周りにいるのは同じよう
な目的で集まつた馬鹿どもばかり。

そのむさ苦しい空気から目を逸らすようにひとしきり泣いた後、彼らは揃つて手元の
酒を浴びるように呷り始めた。

どうやら彼女という存在は本当に、ここの酒場で愛される存在であるようだ……それ
がいい意味か悪い意味かは別として。

欲望に忠実な神々の無様な姿をよそに、二人は水で口を潤わせながら銀髪の少女につ
いて話す。

「騒がしいな。しかし、ここまですまなく溶け込んでいるとは思つてもいなかった。連中、
あいつの正体には一切気が付いていないのか?」

「うん、まあね……ほら、男神連中ってタケミカヅチみたいな一部の生真面目な連中を覗いて基本馬鹿ばっかりだし。非公式で「神々の給仕」^{ゴッズプライド}なんて二つ名で呼ばれてもいるらしいよ？ なにせ私たちみたいな『美』の権能を持たない一般女神の容貌に軽く並んでくるくらいには綺麗だし、なにより一年に一度しか現れないってまるで誰かさんみたいな物珍しさが、彼女の価値を彼らの中で最大限高めているみたいだね」

サラの消えていった厨房へと熱い視線を向ける男神たちの様子を伺えば、彼らは一転して先ほどの泣きつ面はなんだったのかと言わんばかりの様子でやんややんやと酒杯を片手に騒いでいる。

「くそう、早く戻ってきて俺にあーんってしてくれー！」

「ずるいぞー！ 俺にもケチャップでオムライスに『愛しの神様へ♡』って書いてくれ！
そしてラブ注入してくれエー！」

「気持ち悪いぞお前たち……はあ、愛しのサラたん。こんな馬鹿どもの相手なんかしてないで、早く俺の拠点^{ホーム}へ来て俺だけの給仕になってくれればいいのに」

「「は？ テメエは今ここで処す!! サラちゃんの笑顔は俺の物だ——あああん!」」

「——やかましいよお前たちイッ！ 飯食わずに騒ぐだけならとっと勘定済ませて出ていきな——」

「「サーセンつしたあーっ！ あと酒お代わりでお願いしまーすっつっ！」」

雷鳴一喝。

馬鹿騒ぎしている男神たちを、厨房の奥から姿を現した大柄な女性が一声で封じ込めた。

「……ほう、旨そうな匂いだ」

その彼女は遅しくも美しい腕にたくさんの皿を載せて、クレスらのテーブルの元へ近寄ってくる。

「はいよ、注文の品さ！ たあーんと召し上がりよ！」

酒場にしてはらしくない、繊細な盛り付けのされた魚の煮つけ定食をカオスの前に。

そして逆に頭の悪^{ジャンキー}そう^な、いかにも冒険者ウケしそうな挽肉たつぶりの山盛りパスタと巨魚の丸揚げをクレスの前に。

それぞれ並べた彼女こそは、この酒場の主人ミア・グランドだった。

「そっちの女神サマの注文通り、残りの皿も今あの娘^サが作^ラってるけど。本当に食べ切れるのかい？ こいつはまだ序盤で全体の1割にも満たないし、ウチは持ち帰りとかやってないからね。お残しは許さないよ」

「分かっている。俺も素材を無駄にすることは嫌いだ」

初見の客であるクレスを探るような眼で見る彼女の前で、彼は一緒に置かれたフォークとナイフを手にとってさっそく食事を始める。

最初に手をつけたのはパスタ。人の頭一つ分はあろうかという山の、その三分の一を軽く一回で団子状に巻き取ってまるっと頬張る。

次に魚の揚げ物をぎっくりと三等分に切り分けて、骨やヒレごと構わずばくんつ！と喰らう。

勢いの良い食べっぷりは一見して野蛮に見えるものの、汁の一つも飛ばしてはいない。

そこには確かな目の前の料理に対する礼儀と、それを平らげるだけの旺盛な食欲が店員の問いに対する答えとして映し出されていた。

「——へえ、面白いじゃないか。良いだろう、じゃんじゃん持つてきてやるよー」
その様子はどうやら彼女のお目になつたようで、ミアは鼻を鳴らして厨房へと戻っていく。

それから少し遅れて、他のウエイトレスが立て続けに注文した通りの料理を運んでくる。

ハンバーグにステーキ、牛すね肉の煮込みから、魚介スープ、激辛麻婆豆腐など多種多様な料理が彼の前に並ぶ。そしてそれらはまた順番に、彼の胃の中に消費されていく。

まるで海の大食らいのように皿の中身を次から次へと頬張っては呑み込んでいくそ

の様子に、お代わりを運んでくるウエイトレスは空いた皿を回収しながら目を丸くしていた。

「……よく食べますねー、お客さん」

「ああ、美味いからな。それに作り手からの心配りもある。こういう心配りも出来るようになったか、成長しているようだな」

「心配り、ですか？」

ちようど今ある皿を開け切って一息ついたところで、クレスは側にいた鈍色の髪をしたウエイトレスの疑問に答えた。

「そうだ。持ってこられた中であつたトマトクリーム Pasta、巨黒魚ドトバスの稚魚の南蛮漬け、ボルシチ。これらには共通して、通常のレシピより酸味が足されている」

「ええと……それにどんな意味があるんですか？」

「酸味には食欲増進の効果がある。それで俺の胃がもたれないようにしているんだ。こうした小さな心遣いが客にとっては店を選ぶ際の決め手にもなるくらいには、大切なことだな」

「なるほどなるほど、よくご存じなんですね！」

「まあ、自分でも作ったりするからな……それより良いのか？ あつちから「出来上がつた次の料理をさっさと持っていけ」と目で言われているが」

「はっ！　そうでした、すみません！　では私はこれで！」

サラや他のウエイトレスからの「サボるな、○すぞ」という視線に射抜かれて、彼女は颯爽と己の戦場に戻っていった。

——それにしても、とクレスは去り行く彼女の内に潜む気配を見て思う。

「珍しいものを見たな」

「なにが？」

「気づいていないのか、貴女ともあろう神が。……いや、なんでもないさ」

「そう言われるとなおさら気になるんだけど!？」

そんなやり取りを挟みつつも注文した分を一通り胃袋に収めて、クレスは口元をナプキンで拭う。

その満足げな様子を見て、厨房から出てきていたミアは呆れたような声を漏らすのだった。

「ははっ、まさか全部食べちゃうとはねえ！　驚いたよ、見覚えはないがアンタも冒険者かい？」

「まあそんなものだから、これくらいは訳ないさ。今日の所はひとまず健康のために腹八分目と言ったところだ。本音を言うとまだ食べ足りないが、これ以上厨房の稼働率を上げて他の客の邪魔をしても悪いからな」

「本気で言ってるのかい？ たまげたね！ とんだ健康家じゃないか、【暴喰】の奴を思
い出すよ……」

【暴喰】？」

「知らないのかい？ 最近オラリオこっちに出てきた新人だったか……ならどのみち気にしな
くていいよ。それよりも、こいつはあたしからの面白いモンを見せてもらった礼さ！」

最後に彼女が持ってきた皿がドン！ と二人の間に置かれる。

クレスとカオスの注文した記憶のないそれは、たつぷり一ホールの林檎パイだった。

じっくり砂糖で煮詰められた黄金色の林檎が所狭しと敷き詰められ、さらにはその隙
間を埋め尽くすように濃厚なカスタードが注入されている。

上には網目状にかけられた蜂蜜が煌びやかにその存在を主張しており、焦げた糖分の
香ばしさがぶうんとクレスの鼻をつく。

「と、出しておいて今更だけど甘いものは苦手だったかい？」

「いや。大好物だ」

「大好物もなにも、クレス君は基本なんでも喜んで食べるからねー。あ、私にも一切れく
れよ」

「もちろん。美味しいものは共有した方がより美味くなるからな。……ああ、世の中の
大抵の食べ物ありがたいがたくいただくさ。他の連中が嫌悪するような臭みや苦みも見方を

変えれば旨味の一つ、俺は食らわれない気にはなれん」

主神の下命に従ってパイを切り分け、小皿に分けて渡す。

その流れを滑らかにこなしながら、「ただ、しかし」と前置きをつけてクレスは後半の台詞を続ける。

「さすがに素材を無駄に捏ね練り回した拳句不味くするような、料理とは名ばかりの奇天烈なモノが出てきたらキレることもあるかもしれないがな」

「あー、そんなこともあったねエ。データーテったら、肉付きのいい尻を百回も叩かれた拳句みつともなく普段の二倍近くに腫らして泣き喚いてたっけ……」

「あれはせつかくの新鮮な生野菜をくたくたになるまで煮込んだりウナギを下処理も味付けもせずゼリー寄せにしたりして、結果魔女の暗黒儀式みたいなフルコースを出してきたからだ」

「……なるほど、そいつは確かにアタシでも拳骨を落とすたくなるね」

隅っこで様子を伺っていた鈍髪の少女がなぜかびくつと身体を震わせる謎の光景をよそに、クレスはさっそくパイを切り分けて口元に運び、よく味わったところで一緒に持つてこられた紅茶を呑む。

茶特有の渋みが残っていた林檎の甘さを引き立てると共に洗い流して、また舌が次の甘さを求める。その癖になる味わいに、彼の手は立て続けにパイへと伸ばされた。

そうしてクレスが自分用に残した8分の7を別腹に収め切ったのは、ちょうどカオスが分け与えられた8分の1の最後の一口の余韻を紅茶で流しきった所だった。

食った食ったと彼が腹を撫でおろしていると、注文を全て運び終えたはずなのにまだミアが側に残っていた。

「お粗末様。……とところで一つ聞きたいんだが、良いかい」

「なんだ？」

「サラとアンタ、どういった関係性だい？ それなりに深い繋がりがあるんだろうが、それがアタシには分からなくてね」

「む……流石に雇い主ともなれば誤魔化せないか」

「当たり前だよ、あんだだけ熱烈な視線を送りあつてたらね。厨房のあの娘とアンタとでちらちら互いに様子を伺いあつてたことくらい、こつちにはお見通しだよ」

彼女は側にあつた空き椅子に腰かけて腕を組み、クレスと向き合う。

サラが厨房から出てくる時を待って酒を呑み続けていた男神たちはつい先ほど財布の中身が消え、泣く泣く帰っていった。

その他の客もいったん途切れており、店の中は落ち着いている。

その余裕の中で、ミアはこの短時間で観察したクレスとセラの関係性を並べた。

「男と女の関係性じゃあなさそうさ。見てた感じだと、あの娘は自分よりそつちの女神

さまの方を優先してたしね。とすれば、それ以外の関係で男と女がくつつく理由が思いつかない。じゃあ一体なんなのか、って気になっちゃってね」

「そうだな……では聞くが、貴女はあいつのことをどこまで知っているんだ？」

「サラ・ブラッドルーラー。出身不明年齢不詳、種族は自称只人の女。あとは初めてアタシの料理を食べた後に突拍子もなく「弟子入りしたいのじゃ！」なんて頭を下げてきた馬鹿娘、ってことくらいだね」

「であればそれだけで十分だろう。俺とあいつの関係を貴女に語る必要性が見当たらないな」

ミアの問いかける視線に、カップに残っていた紅茶を呑み切ったクレスはすばつと断言する。

——単に酒場の経営者とその従業員として見るならば、それ以上の深入りは不要だ。彼女の事情を知る者としてそう回答したクレスに、されどミアは引き下がらなかつた。

「……そうだけどね。アタシだって普段ならこんな野暮な真似はしないさ。だが最近はどうも世間が騒がしいのをアンタらも知ってるだろう？」

「悪派閥か」

「そうさ。そして、そいつらを含めた一部の色ボケ共がああ娘を狙ってるって噂がある。

一年に一度しか現れない、神をも魅了し得る謎の店員。使い道は色々あるだろう。それをアンタが守るのか、守らないのか。アタシが知りたいのは率直に言ってそれだけだよ。まがりなりにも弟子入りを認められた師匠として、覚えのいい意欲のある娘の安全を気にするのは当たり前さ」

「そういうことか、では答えよう。俺はあいつを守らない」

すんなりと放たれたクレスの言葉は、ミアの予想とは完全に真逆のものだった。

一瞬呆気にとられながらも、すぐに持ち直して彼女は理由を問うた。

「……それはどうしてだい？」

「その心配が無用だからだ。そもそも勘違いを正しておく、サラ・ブラッドルーラーという生き物は貴女が予想しているような弱者ではない。そして美味かった食事の礼としてもう一つ教えておこう。それに気づけないのは、貴女自身があいつを恐れるが故に本能的に目を逸らしているからだ」

「……」

彼の有無を言わさぬ物言いは、それ以上ミアの耳を近づけさせない。

一切の陰りのない言葉。心の底から疑うまでもないとサラを信じ切っている、クレスの眼。

そこから放たれる圧力は、デミ・ユミル上級冒険者の心配を真つ向から否定してのけた。

「詳しく知りたいのなら、まずは正しくあいつと向き合うことだな。——以上、もういいだろう。会計を頼む」

「……そうかい。分かったよ、よく分らないってことがね。だが今はアンタのその、真面目腐った態度に乗せられておいてやる。——サラ、交代だよ！ こちらのお客様がお帰りだ、おあいそして見送って差し上げな！」

「はいはい、今行くのじゃー！」

厳しい顔で厨房に戻っていったミアと入れ替わりで、手についた水分を拭きながらサラがばたばたと駆け寄ってくる。

「えーと、合計で10万と8千ヴアリスなのじゃ！ また随分と食べたのー。それで、さっきまでお師匠となにを話してたのじゃ？」

「保護者と師匠との内密な世間話さ、気にするな」

「ほーん……まあ、後でお師匠に聞けばいいだけの話じゃな。で、勘定はどつちが持つんじゃ？」

「それはもちろん、私が誘ったんだしこは」

「俺が持とう」

財布を取り出そうとした主神を差し置いて、クレスが懐から取り出した金貨をサラに手渡す。

「クレス君？ ふつ、やつぱり君ってやつは——！」

「間違えて単位の大きい貨幣を持ってきてしまつていたからな、後で商店を回る時のためにこういう所で少し崩しておきたかつたんだ。助かるカオス、この不測の事態にも対応できるような予定を組んでいてくれて。やはり貴女は最高の主神だ」

「——君ってやつはア……！ ホントに親孝行過ぎて困っちゃう息子だよッ！」

「主様あ……少しはその口を閉じた方がよいと妾は思うぞ？ いやマジで」

「なぜだ。これ以上ないまでの感謝を示しているというのに」

「その口くすつぽ考えずに口を開く癖を止めろと言うとるんじゃ！ 人を褒めるならなんでもそのまま言えがいいと思つとるんなら大間違いじゃからな！」

呆れた顔でお釣りを持つてきたサラに見送られ、酒場を出る。

なぜかその際、疲れた様子のカオスの肩を彼女が支えていたのだが……その姿に、クレスは首を傾げるより他になかった。

どうしてただ食事をしていただけで疲労してしまう事態になり得るのか、彼には心底さっぱりだった。

「それではありがとうございました、なのじゃ。また来てくれると嬉しいぞ」

「ああ、また来よう。ここの味は気にいったからな。それと」

立ち去る直前。

クレスは周囲には聞こえない小さな声で、サラへ囁いた。

「後で裏に荷物を置いておく。見つからないうちに回収しておけ」

「——分かったのじゃ。しかし、良いのかの?」

「構わん。あと、場合によつては迷わず封印を解け。カオスに傷をつけさせるような事態には決してさせるな」

「ほう……それは血が滾るのじゃ。あい分かった、事態はそれだけ切迫しているということじゃな。地上は妾に任せよ。主様はいつも通り、存分に迷宮ダンジョンに集中するがよいぞ」
「無論。……あと、飲食店は衛生管理が第一だ。ゴミ処理をしたら、最後まできちんとやっておけ」

そう言い残し、一人と一柱は去っていく。

その姿を見送ったサラは、店の中に戻る前にちろりと舌なめずりをした。

「此度の主殿は随分と気前が良い。まさか封印を解いてもよい、とはの。よほどの何か起きるといふことか——面倒ごとには妾も嫌いなんじやがの。それよりも旨い飯で腹を満たしておる方が、よっぽど楽しかろうに。のう、お前もそうは思わんか?」

いつの間にか手先に止まっていた、黒き小翼へと彼女は微笑む。

その美しき支配者の姿を、側の路地裏にてこと切れていた狂信者の虚ろな瞳だけが見ていた。

「連中は俗に、一匹見れば百は居るという」

まだ、神々が下界に降りて間もない頃。

地上に蔓延るモンスターたちを一掃すべく形成された彼らの派閥ファミリアの間には、今のよう
な政治的・神話体系的な軋轢は存在しなかった。

皆が一体となつて下界に平和を齎そうと奮闘したあの時代においては、本来ならば相
容れぬ他派閥であろうと頭を下げて助力を請うことが何一つ恥ではなかったのだ。

だが、それでも。

鍛冶ゴブ・ニユの神に、武スカサハの神に、医療ディアンケヒトの神に……現代においておよそ冒険者に必須とされる
技能スキルを司る数多の神々に対して、いつそ厚顔無恥と呼べるほど節操のない弟子入り懇願
を敢行した大馬鹿者はクレス・カタストロフを置いて他にはなかった——。

「——久しいな。良からう、炬を貸してやる。……進歩を見せろ」

「——ふははははつ、さあ今回は何を手に入れたか早速見せてみる!! そのついでに貴様
の腕もなまつておらんか見てやらんでもないぞ、ほんのちよびつとくらいならばな!」

「……久しい師との顔合わせも済ませた。ならば後は資材の買い込みだけ、商会のある第六区画へ向かうぞカオス」

「うん、クレス君。……しかしいやア、二ふたり神とも相変わらずだったねエ」

現在のオラリオにおいて未だ健在であるゴブニユとディアンケヒト。

かの偉大なる二柱から徐々に教えを受けた後、クレスはカオスを連れて残る目的地であるオラリオの商業区画へ向けて歩いていった。

その道中で話題となるのは必然、先ほどまで彼らが顔を合わせていた神々のことだった。

「ゴブニユは寡黙で職人氣質で、ディアンケヒトの奴は底抜けの守銭奴根性ぞくぶつで。ホント天界にいた頃からそのままだったよねエ……。特にディアンケヒトの方なんか、クレス君の持つ『フェニクスの涙』をあの手この手で買い取ろうとしてくるあのしつこさだった」

保護者気分で神々とクレスとのやり取りを眺めていたカオスが、特に片方の神について呆れたように言及する。

一方鍛冶神は水の如く静かに弟子の腕を見るのに対して、一方医療神は猛火の如く弟子に詰め寄りその持ち物を強請る。その性格は正反対にして、両極端。

そんな彼らがクレスという共通の弟子を認めている——その理由は偏に、彼がそれぞれの要求に対して誠実に向き合い続けているからだ。

ゴブニユの求める、『真摯に己が剣と対話すること』。

ディアンケヒトの求める、『派閥の運営資金の三倍を支払う』こと。

求められたそれらの供物を一切の嘘偽りなく捧げているからこそ、彼らもまたクレスの求める神の在り方を順守する。鍛造修行や調合の相談を請け負い、時に褒め時に慈愛の眼を向け、時に叱り時に唾を飛ばしながら、彼の進歩を各々なりの態度で見守る師匠として。

しかし弟子と言つても、なんでもかんでも師匠の意に沿う従順な機械ではない。

カオスの語る印象に同意するように、クレスもまた声になかなからぬ面倒臭さを含ませる。

『深々層』素材の個人的な売買はウラノスとの契約で禁止されていると、こっちの口にタコが出来るほどには何度も言っているんだがな。『身に余る力はやがてその身を滅ぼす。今のオラリオの冒険者に与えることは好ましくない』……せめて誰か一人でも今の奴らが100層を突破してくれば、この契約も緩くなるんだが」

「神時代以来一番進んでたゼウスとヘラの派閥も、黒竜にやられちゃったからねー。それが叶うのもまだまだ先の話、チートで近道しようつたってそうは問屋が卸さないって

ね」

「ここはウラノスに正当性があるからな。過ぎたるは猶及ばざるが如し、薬も転じて毒薬となるとはよく言ったものだ。事実、それで身の程を弁えずに結果無念の屍を晒した連中は昔からよくいた。今もそれは変わらんだろうからな……いい加減にしてほしいものだ」

時刻はそろそろ夕方に差し掛かる頃。

暮れかけた夕日が空を茜色に灼いて、深まった影を伸ばしながら二人はオラリオの中で第六区画と称される地帯に踏み入った。

ここでのクレスの目的は、迷宮内では入手不可能な香辛料などの一部消耗品を入手すること。

雲菓子ハニークラウドに代表されるように、過酷な迷宮環境ダンジョンに生息する動植物の中には生命力が強すぎて逆に身体に合わないものもある。そういった類の劇物を無理矢理活用しようとするくらいならば、クレスは素直に便利な既製品に頼って楽をする派だった。

しかし、ここ暫く彼が「好みの品揃えをしている」として懇意にしていたとある商会の拠点だった巨館は——既に放棄されて久しい廃館となつて、今年の彼らを出迎えたのだった。

「ここもついに潰れた、か。次は南方の珍しい乾物を取り揃える予定だといふから、期待

していたんだが……残念だな」

「というよりも、「潰された」の表現が正しいね。見なよほら、襲撃の跡がいくつも残っている。可哀そうに」

クレスの記憶にある、かつて店員が声を張り上げて活発に集客を行っていた商会の姿は影も形もない。

そこにあるのは、賑やかな人だかりが消えて代わりに埃と瓦礫が辺りに散らばるばかりの廃墟。

野晒しとなっている陳列用の木棚には焼け焦げた跡が散見され、また館の壁の至る所には穴が開いて、雨水が溜まり腐蝕している様子が伺える。

恐らくは略奪目的の暴徒にでも襲われて、挙句焼き討ちの憂き目にまで遭わされたのか。

そうして残された、ただひたすらに虚しさを感じさせる灰色味がかった夢の跡。

イウイルス 闇派閥が頭角を現しているこの時代、このような光景はままよくあることだ。

しかし今日この場所に限っては、建物を取り囲む周囲の様子が他とは異なっていた。

「……あれはガネーシャと、アストレアの所の子たち？」

物陰に身を潜めながら廃館を取り囲む、なにやら物々しい雰囲気の冒険者集団。

複数の眷属ファミリアが徒党を組んだ彼らが、鼠一匹すら逃さぬといった剣呑な瞳で館を睨みつ

けている。

その光景を彼らに気取られない場所である近場の屋上に移って、クレスたちは見下ろした。

「なんだかいつにも増してピリピリしているみたいだけど、もしかして何かあったのかな」

「……そういえばロイマンのやつが、今日がちょうど『計画』の日だなんだと言っていたな。思い出したぞ、ここがその実行場所の一つだったのか」

クレスは、年に一度の面会で必死に彼へと向けて叫んでいたギルド長の様子を思い出す。

ギルドを中心とした秩序側の派閥ファミリー・ユニオン連合が一挙に悪派閥イヴァイルスの拠点を攻め滅ぼす、一大計画。

ロイマンの説明によれば、激戦になること必死のその計画は計三つの手に別れて行われ、それらの趨勢がオラリオの今後を決めるとのこと。故に「協力しろとは言わん、ただ決して邪魔だけはしてくれるなよ——邪魔しても神々の如く暗にやれと言っているわけではな

いからなッ！」と、クレスは目を血走らせた彼から念入りに言い含められている。しかしそんな警告など我関せずとばかりに、彼は今ここに至るまでさっぱり忘れていた。

そもそも今更言われるまでもない。自分クレスから何かを仕掛けるつもりなど無いのだから、と。

こうして眼下の後輩たちが意気込む姿に遭遇しても、それは変わらない。

クレスには彼らの邪魔をするつもりもないし、進んで協力を持ちかける意思もない。

ただ自分の目的を果たすためだけに、彼は動く。

「その『計画』？ について私は詳しくは知らないけどさ。こうなったらもう、買う場所を変えた方が良いんじゃないかな。どうやらこのままだと、私たちはお邪魔虫になってしまいそうだし」

「……いや。連中が突入する際に紛れて、俺たちも行くぞ」

「ええっ、正気かい!? いったい何しに行くのさ、まさか彼らに協力するような殊勝さを思い出したわけでもないだろう?」

しばし逡巡するように顎に手を当てていたクレスによる思いがけない言葉に、カオスは彼に向けていた目をばちばちと瞬かせる。

その失礼な疑問について、彼は裏切ることなく「もちろん」とさも当然のように頷く。

「貴女の読み通り、そんなつもりは更々ないさ。ただ、よく見てみる。商会の連中、よほど慌てていたのかここを去る際に商品のいくつかを捨て置いていったようだ。壁に開いた穴の奥に、積み上がったままの木箱がいくつか見える。そこで運よく保存状態の良

いものを見つければ、今回俺が欲しかった品を回収できる可能性がある」
「ええ……火事場泥棒かい？」

やはりか、とジト目を浮かべる彼女にクレスは今度は首を横に振った。

「違うな、無駄なき再利用と言え。なに、いずれまたここにいた連中もしくはその後継と出くわす時もやってくるだろう。その時にきつちりと耳を揃えて代金を支払うさ。本来ならば失うはずだった利益を上げられるのだから、向こうからしても悪くない話だろう？ ——と、ちようど突入する所らしい。準備しろカオス、漁る際には貴女の手も借りるからな」

「遠慮なく主神に手を汚させるねエ君は……はいはい、エスコートは丁寧によろしく頼むよ」

差し出されたカオスの手を取り、素早くその腰に手を回して華奢な身体を胸元に抱え込む。

それからクレスは眼下の冒険者たちが一齐に突入する瞬間タイムシグに合わせて、立っていた高所から跳躍。高レベルの脚力によるひとつとびで、廃棄商館の上階側面に開いていた大きめの穴へと飛び込んだ。

身体を襲う一瞬の浮遊感、そして着地。

足元に散乱していた木片とガラス片を無音で踏みしめながら、クレス一行は内部への

侵入に成功した。

「しかし、どうやってこの広い中を探すつもりなのかな？ 外から見ただけでも地上部
分は五階あるのに、ここは地下だってあったはずだけでも」

「なに。大概どんな建物だろうと、大事なものを保管する部屋の場所はそう変わらん。
その辺であたりをつけて回れば、そう時間もかからないだろう」

クレスは最初に入った部屋にめぼしいものがなさそうだと踏んで、そのまま廊下へと
進み出る。

もちろん、闇派閥イツイルスの拠点として改造された館の内部には彼らの手によつて様々な罠が
設置されている。

警報を鳴り響かせるもの、侵入者を拘束するもの、通路を障害で塞ぐもの。

それらを手早く解除しつつ、既に階下で乱戦を始めている連中に見つからないよう気
を配りながら、クレスはカオスの安全を最優先にすすいと進路を確保していく。

「……」

「!?!」

その中で、気配を捉えた見回り役らしき悪派閥イツイルスの背後へぬると回り。

瞬時に悲鳴を漏らされないよう口を塞いで、そのままクレスは相手の懐から抜いた短
刀で持ち主の延髄を躊躇なく断つ。

相手は下手人^{クレス}の顔を見ることも、その存在を味方に伝えようと声を上げることも許さず、自身の身に何が起きたのかすら分からないまま、糸の切れた人形のように脱力した。

一瞬の無力化を終え、その場に抱きかかえた相手をゆつくりと下ろした彼は呟く。

「この手に限る」
不意打ち上等

「うわあ、エゲつない。これじゃどつちが悪派閥^{イツイルス}だか、傍から見れば分からないね」

「知るか。なんとでも言え。……さて、こいつを使って少しばかり楽をさせてもらうか」

クレスは手早く相手の装備を剥ぎ、武装解除ついでにその上半身をはだけさせる。

その過程で相手が女だったことが判明するが、彼が反応したのは身体の前方ではなく

後方だった。

女悪派閥^{イツイルス}の背中、そこには不吉な気配の漂う骸骨と鎌を基にした神^{フェアルナ}の恩恵が刻まれて

いる。

「まだ恩恵は生きているな。主神との繋がりも保たれている、よし」

クレスは彼女の首から短刀を引き抜いてそのまま拝借し、刃についた血を剥ぎ取った

布で拭う。

露になった刀身を指先で軽く撫でながら、目と並行においてその業物度合いを測つ

た。

「レベルにして2から3用の代物か。ここで使い捨てる分にはちようど良い。——カオス、^{イコル}神血を一滴くれ」

「ン、なにかな唐突に。別に良いけれど……こんな所で何をするつもりなのさ?」

「こういつた連中は俗に、一匹見れば百は居るという。ならば効率的に、大元から叩こうと思つてな」

カオスから頂戴した^{イコル}神血と『深々層』から持つてきていた素材の粉末を近くで見つけた皿の中で混ぜ合わせ、その中に指を浸す。

そうして簡易的なペン先とした爪を用いて、彼は手に持った短刀の腹に呪紋を刻んで詠った。

「——【契約に応えよ、原初の呪よ。我が意の下に血鎖を穿ち、命脈を枯らせ】」

刻まれた血紋が、焦げるように煙を上げながら紫に輝く。

^{フアルナ}神の恩恵に頼らない、古式の^{カリス}呪詛。

その呪われし刃を、クレスは無防備となつた^{イツイルス}悪派閥の恩恵目掛けて振り下ろした。

【ストライク・ブラッド】

その効果は——『^{チェイン}連呪属性』。

恩恵越しに心臓を貫かれた女の身体が一度大きく跳ねたかと思えば、階下の冒険者たちから次々に困惑の聲が響き始める。

「——なんなのこの人たち!!」 みんな、一樣に心臓を抑えて……う?」

「動きが悪くなった? ——構わん、これを好機として一気に畳みかける!」

クレスは続けて、目前で苦悶に喘ぎ空呼吸を繰り返す女性の腿を切り裂く。

その結果、今度は悪派閥イヴイルスの側から驚きと困惑の悲鳴があがる。

「ぐうつ!! こ、これはいったい何が——!」

「手が、足が、思うように動かぬ?! 何故だあああつ!!」

——「ストライク・ブラッド」。

その効果は、『同じ神血を受けた同胞ファミリアへ対象の苦痛を伝播させる』というもの。

今、階下の悪派閥イヴイルスたちの多くが心臓と四肢を襲う謎の幻痛によって動きを鈍らせてい

る。それは彼らとの戦いに心血を注ぐ冒険者たちにとって、あまりに致命的な隙に過ぎた。

次々に捕縛されていく悪派閥イヴイルスの怨嗟の声と、それを上回る冒険者側からの歓声。

それを一顧だにせず手元の作業を続けるクレスに、カオスは「おいおい」と目を見開いた。

「恩恵を介した共鳴りの呪詛? そんなもの、いつの間にも身に着けていたんだい?」

「だいぶ昔の話だが、地上に戻るのが面倒くさくなって、迷宮ダベンジョンの中で貴女の手頼らず恩恵が更新できないかと試行錯誤したことがあってな。結局は最後の最後で、わざわざ背

中に手を無理矢理伸ばしてまでするもんじやないかと気づいたが……これは、その過程で得られた成果の一つだ」

効力を発揮した短刀は、やがて呪詛の強さに刀身が耐え切れず砕け散る。

しかし、その効果は既に大元の発生源——すなわち女の恩恵全体フェルナに根付くように張り巡らされている。

彼女が生きている限り、その仲間は暫く身体デバフの低下に悩まされるだろう。

そして、たとえ延髄を断たれようとも神の眷属はすぐには息絶えない。

故に呪いを最大限活用しようと、クレスはあえて中途半端に彼女の傷を治したり栄養剤をその口につまみ込んで延命の処置を完了させた。それから彼は、彼女の身体を簡単に見つけることの出来ないように側にあった壁の割れ目に押し込んで、どこからか持ってきた大きめの絵画を以て全体を覆い隠した。

「神聖文字ヒエログリフからして、能力値ステータスはレベル2の後半。こいつの気力にもよるが、これから先の三日間は死なんだろう——これでよし。さあ、探索を再開しようか」

それらの外道を難なく済ませて手の汚れを打ち払ったクレス。

その眷属の在り様に、カオスはもちろんドン引きしていた。

「……君さア、もうちよつと手心とかないの？」

「加えたが？ 本来想定していた使い道に従えば、さっきの女を公衆の面前で磔にして

被害者に石を投げさせているところだぞ。きつと俺程度では想像もつかない凌辱の限りを尽くされて、尊厳を冒された連中はようやく自分たちの犯した罪の重さを知るだろうとな。そこまでしなかったことが、俺の手加減の証明だよ」

「……それって実は面倒くさかったからだったたり？」

「そうだな」

「いやいやいや……えー？　本当にどこで教育を間違えちゃったかなあ、私ってば……おつかしいなー？」

悩むカオスをよそにクレスは新たな部屋の扉を開けて、その中を一通り物色している。

釘で封じられた箱の蓋を次から次へと素手で引っぺがし、内側を除いては無事そんなものを探すの繰り返し。

下の騒がしい剣閃の響きを置いて、彼は呑気にがさごそと積み重なる木箱の中を漁るのだった。

「——ぐつ、くううつ……！　まだ終われるものかッ！　死ねえ冒険者！」

「——死なないわ！　だって伝説的に可憐な私の伝説は今後も美しき冒険者として続くもの！」

「むう、中々良い感じの物は見つからないな……」

しかし残念なことに、中身があつたとしてもその多くは消費期限が切れていたり、雨風の浸食を受けて腐っていたりと役に立たないものばかり。

お目当ての希少な調味料なども中々見つからず、彼らは次第に商館の奥へと進んでいく。

しかし秩序と悪の決着もまた、同じようにそちらへともつれ込んでいたのだった。

「おつと……まだ終わらないのか。相も変わらずしぶとい連中だ、この様子だと探せないな」

彼らが最後に辿り着いた貯蔵庫では、一足先にこの商館における決戦が始められていた。

冒険者と悪派閥が一堂に会した乱戦。

複数の戦いが一度に行われている、元は商会の品々を補完することが存在意義であつただろう空間を覗き見てカオスは目を細める。

「うわあ、流石にあそこには行けないかな？ どう隠れようとしたって巻き込まれちゃいそうだし」

「そうだな。とは言えそれなりに手付かずの箱も見える、雨漏りもしていないようだし一切探さないのも惜しい。しかし他の所はもう粗方探し尽くしたし、ここは退散して後でまた——いや」

突如言葉を区切ったクレス。

その視線の先では、今まさに剣戟を繰り広げようとしていた一組の冒険者少と悪派閥幼が
いて――。

「クレス君？」

「何を呑気に手を伸ばして……いやまさか、連中、気づいていないのか……？」

最善を目指す『正義』と最短の『外道』

「——ダメだ、君みたいな子供がこんな悪い大人たちの言うことを聞いちゃいけない！
武器を捨てて！ 私たちと一緒に来よう？」

ガネーシャ・ファミリア所属、【象神の詩】ヱイヤールサアーデイ・ヴァルマは語りかける。

貴き精神性の持ち主である彼女は、たとえ大事な殲滅作戦の最中だろうと、そこに救いが与えられるべき子供がいるなら当然のように手を伸ばす。

その刃を向ける小さな身体が、悪派閥イヴァイルスを示す白濁色のローブを纏っていても。

その隠れた背中に、悪しき神の恩恵が輝いているとしても。

——その心が、邪神と交わした契約に抱擁神されていても。

人は一度『悪』に落ちたとしても、誰かの優しさで再び『善』に戻れるのだと信じているから。

己が信念に基づいて片手セイクリッド・オース剣を下ろし、闇に堕ちた幼き悪派閥イヴァイルスの少女を再び光の道へ連れ戻そうと、親身になって言葉を投げかけた。

しかし、彼女は気づかなかつた。

邪神が親を喪った少女に齎した心の安寧は、如何に優しい冒険者の言葉であろうとも、容易く覆せないほど強固に魂に染み付いていたことに。

彼女は知らなかった。

『冒険者を道連れに死ねば、あの世で父母に会わせてやる』という……邪神と少女の間で秘かに交わされていた、耳を蕩かすような甘く柔らかな約束を。

アーデイのかけた優しさに一瞬、少女の瞳が潤むように揺れて——その懐に手が伸ばされる。

「……かみさま」

胸の辺りに隠された、盗品である火炎石と撃鉄装置から作られた簡易自爆装置。

最後に脳裏によぎった邪神かみさまとの約束が麻薬のように少女の頭を犯して、その手を動かす。

「おとうさんとおかあさんに、あわせてください……」

その様子を傍から眺めていた【殺帝アラクニテ】ヴァレット・グレーデが、これから起こるであろう悲劇祭の幕開けを未来視して秘かに嘲笑する——『善』の失墜、『悪』の喝采。これよりオラリオに地獄の窓が開く、その華々しい幕開けがここから始まるのだと。

少女の孤独に惑う瞳を受けて、アーデイが硬直する——相手の眼から、一歩先に自分の死が待ち受けているのだと悟ってしまいながらも。それでも少女を救いたいと思っ

て……その場から、逃げ出せなくて。

動く少女の指が、そして。

今まさに神と結んだ契約を履行するべく、爆弾の起爆スイッチに吸い込まれる——。

「会いたければ一人で会いに行くんだな」

「——え？」

光が、走った。

己の死を予感して動きを止めてしまったアーデイの横を、閃光が通り過ぎる。

その上級冒険者の眼では一切を捉えられない光は、彼女と相對していた幼い悪派閥の姿を一瞬のうちに視界からかき消して——遙か空高くから、何かが炸裂したような轟音が響く。

突然の衝撃を受けて建物が揺れ、誰もが咄嗟に倒れないよう踏み止まらなければならなかった。

「くっ、なんだ——!？」

「爆発? でも、なんで真上で急に……っ!？」

剣戟が一時的に鳴り止み、誰もが爆音の正体を探そうと周囲を見渡す。

そして彼らは、アーデイの目前に新たに姿を現していた一人の異物へ目を止める。

その視線の中で、光の正体だったフード姿の男——立ち止まったクレスは、背後で動

けないでいる後輩^{アーデイ}へと忠告を送る。

「何を呆けている。たつた今死にかけたんだぞ、お前は。狂信者を相手取る時に自爆や道連れの可能性を忘れるな」

「あ、えつと……ええ？」

アーデイは今日の前で何が起きたのか、すぐには呑み込めなかった。

気づけば自分が救おうとしていた少女が消えていて、そして爆発音が鳴り響いて。

見慣れない人影が立って、自分に言葉をかけている。

何がどうなっているのか——頭がうまく回らず、反射的に彼女の口をついて出た言葉は、自分のことではなく今の今まで相對していた悪派閥^{イザイルス}の少女のことだった。

「今の、娘は……？」

「死んだ。今の爆発がそれだ。お前を巻き添えに死のうとしたあの娘は、空高く俺に蹴飛ばされて死んだ——もうどこにもいない」

彼女が彷徨わせる視線の、向かうべき先。

たつた今起きた現実を指し示すかのように、クレスはその指先を真上へと掲げた。

天井に空いていた、ちょうど少女一人分の穴——その向こう側から偶然か、焼け残った少女のロープの切れ端がゆっくりと落下してくる。

それは己が救おうとした少女の死を、明確に示している。

その事実を自覚してアーデイが呆然とする中、最も早く自意識を取り戻したヴァレッタが叫んだ。

「——オイオイオイ!! 何だつてんだよ今のはア!! なんでその女が生きてやがる!!」
「下らん問いだな。俺が間に合ったから、この女は生きている。それだけだ」

気持ちのいい企みを潰されて怒りを露にするヴァレッタに、お前の気分なぞ知ったことかと淡々と言い放つクレス。

罪悪感の欠片も含まれていない彼の声に、事実をようやく察した他の者たちは皆、冒険者も悪派閥イヴィルスの構成員も等しく啞然とする。

「はッ、冒険者サマを救うために簡単に悪派閥こっちを切り捨てるたあちつと驚かされたが……その冷血ぶり、テメエまさかアバズレンフレイヤとところの隠し玉か? ヒヤハハッ、まさかこんな奴がまだ隠れていたとはなア!! 大事な大事な作戦、いよいよ奥の手を投入する気に——」

「勘違いするな。俺はお前の言うどこぞの女神の眷属じゃない。だが、お仲間を殺されたのがそんなに不思議なことか? 『悪神の眷属は見かけ次第即斬り捨てよ』くらい、今の時代も普通に標語としてあるかと想像していたが……」

「……はア? なに言つてんだ、テメエはよ? んな野蛮な価値観、今のオラリオのお優しい冒険者どもとは到底思えねえな……何時の時代の人間だ、あア?」

「無論、お前たちと同じく今を生きる人間だが。しかし、そうか。他者を平気で害する連中などいくら雑に扱ったところで非難されることなどないと思つていたが……：：：：そうでもなくなつたのか。覚えておこう」

ヴァレッタに対して敵意を持つことなく語らいあい、率直に「悪なぞいくら殺しても問題ないと思つていた」とさえ言い切つたクレス。

人の命を天秤にかけて片方を選ぶ……その辛い偽善に対して、自問自答自虐自嘲を重ねつつ真つ向から向き合つてきた者たちも。また、その覺悟を嘲笑つてきた者たちも。そのあまりに端的な彼の態度に、どこか自分たちとは違うものを見て——共通の恐れを抱かされる。

——なぜああまで、何の躊躇もなく。

——貴いハズの……：：：：それも、未来ある幼き命を簡単に手にかけて平然としていられる!?

数多の恐怖の視線を受けながらも、その中心にいるクレスに委縮する様子は見られなかった。

「亡き親に会いたいと願う子の心を利用する悪派閥^{イヴァイルス}。かつての知り合いどもなら「許せんツ！」と即刻弾劾しにかかるころなんだろうが、俺は別にそうは思わん。

むしろお前たちの描く悪辣さには、割と感心させられることが多いよ。——人の悪に

終わりなどなく、煮詰め凝縮された闇はやがて神を凌駕する一つの星となる。その力もまた、迷宮ダンジョン攻略の糧に出来るからな。とはいえ今回は正直、微妙だが」

身内の呆気ない末路を受けて、嫌に良く響くクレスの独り言を聴いて、周囲の悪派イヴィルス閥の雑兵たちはどうすれば良いのか迷い、動けないでいた。

大した訓練も受けていない、ヴァレッツタ曰く「ただ恩恵を刻まれただけの捨て駒ども」は思う。

——あのような、幼い少女ですら躊躇なくぶつ飛ばす怪物を前に、自分たちの願いが叶えられるのか？ と。

冒険者たちの優しきや甘えを前提とした無理心中作戦ががらがらと破綻する音を聞いて、彼らはどう動けば良いのか分からなくなっている。

そんな様子の連中を見渡して、クレスは溜息を吐いた。

「さっきの娘の遺言からして、どうせお前たちも「愛する者と冥府で再会したい」などと邪神に願ったクチか？ ……凶星だな。なら止めておいた方が良い。どうせあの連中にはそんな、七面倒臭いことに手を煩わせるような気概はない。

断言しよう。邪神どもはただお前たちの耳に気持ちの良い嘘八百を並べ立てて、自分の思い通りに命を捧げるお前らの妄信を見て、「可愛悪いなハッハー！」などと仲間内で下品に笑い転げたり自慰してるだけだぞ」

ただ流石にその暴言は聞き逃せなかつたのか、一人の邪神信者が憤りを覚えて前に踏み出る。

冷たいクレスの視線を受けながらも、彼は反骨的に己が胸中に燃える信心の暗い熱を昂らせて声を張り上げた。

「——何を知つたかぶりに、嘘をつくな！ あの方々は確かに我々に約束されたのだ！

『冒険者を巻き添えに死した暁には、あの世で妻に再会させてくれる』と！」

「いいや無理だよ。あの連中に神としての誇りがあるのなら、なおさらな。……だつて、よく考えてもみろ。自分の望みのために他人を殺すようなお前たちの魂と、お前たちの愛する恋人や家族みたいな無垢な魂。それらが死後、同じところに送られるわけがないだろうに。」

連中は無駄に職務に忠実だからな、そう言つたところだけキチンとして「ゴメンな！ お前たちと約束したけど仕事の方が大事だからナ」とかなんとか言つて平気で約束なんか破るぞ。

そつちのお前たちの絶望した顔で二度美味しいな、とか考えながらな」

「そ、そんなつ……いや、そんな訳が……」

クレスは澱みなくつらつらと男性邪神信者の希望を否定し、更に相手が膝を震わせ始めたのにも関わらず続ける。そこには嘘を述べているような軽薄さはなく、ただ淡々と

事実を語る確信だけがあった。

——そこまで言うか？ という周囲の冒険者たちの視線は残念ながら、フードに遮られているせいで届かない。

「覚えておけ。神だからと無条件に信じて、奴らの薄っぺらい言葉に簡単に流される愚かな信者など、あいつらの一番好き^嫌いな餌に過ぎないとな。

唆されただけで簡単に動く人形なんて、道楽者の連中からしたら面白みがなさ過ぎる。すぐに存在を忘れて、約束もほっぽりだして次の玩具を探しに行くだろうな」

否定、否定、否定。

邪神の信奉者たちが抱いていた今際の理想を、クレスはボロクソに叩いて砕いて踏み躪る。

お前らの絶望なんて知らないし、どうでもいいのだと……。

そう、自分たちからしてみれば大切な希望を平然と軽んじられたという怒りが、折れかけた男性信者の思考を最後に奮起させた。

「く……くそっ！ くそっ！ くそおっ！ ふざけるなっ、ふざけるなあーっ！ 貴様がこの誰かかは知らんが、我らが神を、我らが理想をことごとく侮辱するなど——その思い上がりかどうという事態を招くか、我が命を以て教えてやる！」

「いや結構だが」

クレスのずけずけとした言い分に怒髪天を突くといった様子の男性信者が、すかさず自らの胸元に手を伸ばす。

しかし、この時の彼の頭からは怒りのあまり、完全に先ほどの光景が吹っ飛んでいたのだろう。

——彼らが自爆するよりも早く、目の前の異端者^{クレス}は動いてしまえるというのに。

「……まあ、なんだ。どうせ爆発するのなら、最後までいい人々の心を和ませて散れ」

「——ダメ、待っ……！」

これからクレスが何をしようとするのか、察したアーデイが引き止めようと声を上げる。

しかし、彼女の望みが全て言葉になるより早く。

「——がっ!!」「——ぐわっ!!」「——きやつ!!」

「——どうおっ!!」「——ぎやつ!!」「——なあっ!!」

「——うわあっ!!」「——げっ!!」「——ひいっ!!」「——くっ!!」

「——いやあっ!!」「——ああっ!!」「——そんなんっ!!」

「——えっ!!」「——なんっ!!」「——ひぐうっ!!」

「——げふっ!!」「——どうわあっ!!」「——ぴぎやあああっ!!」

再び閃光となったクレスが、全てを終わらせた。

周囲で揃って白濁色の装束を着ていた連中の胸ぐらを、足首を、腕を。

握り潰す勢いで掴んで、地上約500Mの高さにまで腕力ただ一つでブン投げる。

幸いだったのは、あまりの勢いに撃ち上がる道中で彼らの意識が絶たれてしまつていたことか。

彼らは痛みを感じることなく、焼けつく大気との摩擦熱によつて懐の火炎石を着火させて――。

――連爆。

咲き誇る怒涛の連続花火が、天井に開いた風穴の向こうで紅蓮色の炎を吹かしながら派手に散つていった。

「……惜しむべきは夕方だったのと、色の種類がそんなになかったことか。花火としては微妙な出来だったが、しかし人殺しにはならずに済んだのだから、まだあの世で望みの相手と出会える確率も上がっただろう。恨むのなら、まずそこまで堕ちた自分の心の弱さを恨むんだな。それでもまだ足りないのなら、また来世で喧嘩を買つてやらんでもないが」

残るのは、自爆装置を唯一持つていなかったが故に見逃された【殺帝】一人。

それ以外のここにいた全ての悪派閥が、彼らを止めようと奔走していた冒険者たちの目前から……そしてこの世から、姿を消した。

あまりに乱暴で、それでいて至極単純な解決策。

たつた今日の当たりにした光景を、それでも「誰も死ななかつただけマシなのかもしれない」と成熟した冒険者たちは愕然としながら葛藤してしまう。

ただその中で、唯一未熟故に現実を認めようとしなかつたエルフの少女だけが彼に詰りめ寄つた。

「——貴様ツ！　なんという非道を！　何を考えていればこのようなことが出来る!?　人の命を『花火』などと、玩具のように批評して……こんなことが許されるものか!」
「非道であることは認めるが、これが遺恨を断つのに一番手つ取り早いからな。そんなに生かして捕まえた方が良かったのか?」

「当たり前だ、そうに決まっているだろう!　それだけの力があるのなら、連中の自爆装置だけ解除してしまうことも出来たはずだ!」

「ああ、それなら出来たな」

「ならば何故!　救えるはずの命を救わないなんて、そんな『正義』が有り得るものか!」
「別に俺は『正義』を掲げたつもりはないんだがな……」

責める【疾風】リユー・リオンの言い分について、クレスは先の悪派閥イヴェイルスとのやり取りのように正面切つての否定という手段を取ろうとはしなかつた。

舞夜やライラ彼女の仲間に言わせれば、青臭過ぎる『正義』。

——しかしそれは『悪』に立ち向かうべく剣を取った人が最初に抱く原風景にして、穢れなき純粹無垢な想い。

人々の根底に共通して宿る彼女の気高き志は、彼の嫌いな愚かさを持ち合わせていなかったから。

であればこそ。

今の彼女に足りないものについて、クレスは純真な心を持つ後輩へ向けて語る。

「だが、俺のやり方がお前たちを救ったのが事実だ。俺がいなければ、お前たちの幾人かは自爆の犠牲となっていた」

「……っ！ それは、そうだがっ！」

「お前の言うことは正しい。お前の理想に比べれば、俺の手法など下賤にして下種。下策にして外道だ。連中を生かし更生に導く『最善』を面倒だからと放り投げ、冥府の神々に魂の漂白をさせる『最短』を選んだからな。」

しかし結果的に多くの人命を救ったのは、お前の正義ではなく俺の外道だ。——それは、お前に『力』が足りなかったからだ」

悔しさに歯を食い縛る彼女に、彼は親切心から説明する。

クレスが最も嫌うこと、それは他人の下らない思惑で自分の意志を歪められること。

もしこの後輩が、自分と同じだけの強い信念「正義」を掲げようを持つようとしているのなら……そこに激

励の一つくらいは与えてもいいと、彼は思っていた。

「力の伴わない『正義』は偶像に過ぎん。『正義』は語るものではなく、その背中で示すものだ。俺は示した、お前は示すだけの力がなかった」

「……」

「強くなるための道はそこ迷宮にある。先達ゼウス、ヘラによる舗知識の積み重ね装もあるう。ならば積み重ねろ。そして至れ。如何なる『悪』をも屈服させられるだけの、絶対的な『力』に……それが、お前の語る『正義』に足りないものだ。

——「清濁を知れ」などという雑音もあるうが、惑わされるな。

強くあることだ、名も知らぬ後輩。その白き『正義』を最後まで貫き通したいのならな」

その善意100%の助言には、悪意や皮肉は欠片も混じっていないかった。

フードの下に覗くクレスの瞳に宿る光を、リユーは見失ってしまった。

疲れや諦めを眦に滲ませながらも、それでも強く前に向かって突き進む意志の輝き。

それは人の可能性たましいを突き詰めた先に遙か遠き神へと至る、夥しい昇華レベルアップの歴史であった。

その瞳の持ち主は、いつの間にかほんぽんとリユーの頭を撫でていた。

クレスの眼に一瞬吞まれてしまっていた彼女は一泊遅れて事態に気づき、彼の気さく

な手を振り払って射殺するような視線で睨みつけた。

「っ、私に触れるなア！」

「……ああ、エルフはそうだったな。すまない、どうも昔の知り合いの姪に似ていてな。なにぶん久々に決まりきった相手以外と話しているものだから、距離感が分からなかったんだ。謝罪しよう——と。どうやら他でも自爆が始まったみたいだな」

話の終わりを告げるかの如く、遠くから聞いたばかりの爆発音が順に鳴り響く。

同時に叫ばれる、民衆と仲間の冒険者たちの悲鳴。

阿鼻叫喚の地獄が繰り広げられているらしい外のあちこちから、連鎖的に爆発の音が響いてくる。

それを聞いて、すっかり蚊帳の外に置かれていたヴァレッタが思い出したかのように哄笑を上げた。

「ははッ——そうだ！　ここは失敗しちゃったが、外ではまだ祭りは終わっちゃいねえ！　連中は皆そいつの言った通り『花火』！　オラリオ中で爆ぜて、このクソくらえな平穩を吹き飛ばす！　ひやははははっ、そんな奴と話してる余裕がお前たちにあんのかア！？」

「そうだな。俺を睨んでいるよりも、外の仲間の応援に向かわなくて良いのか？」

他人事のようにリユーへ語るクレスに、ヴァレッタは少しばかり目を丸くする。

「なんだよ、テメエは行かねえのか、ええ!?」

「俺とて暇じゃない。元々ここには別の用事で来ていたんだ、目の前に困る連中を助けるくらいはするがわざわざ遠くにまで手を伸ばすつもりはない」

「は? ……ははっ、とんだロクデナシだなお前! 平気で自己都合のために他人を見捨てやがるたア、なんで冒険者側そっちに立つてるか分からねえな!」

「見知らぬ他人のために時間を使うほど、俺の心は高貴じゃないものでな……さてと」
クレスは当初の目的を果たすべく、近くにあつた箱に歩み寄つてその中身を確認し始める。

作業の邪魔となる特攻隊はもうこの場所にはおらず、もはや一対多となった現状、残つた上位格らしき女ヴァレットもそのうち素直に退散するだろう。冒険者たちもそれを追いかけて出ていって、探索の邪魔をされることはなくなるに違いない。

そう踏んで動き始めた彼に、リユーはまたもや近づいて手を引つ張ろうとする。

「何を言っている! 人の命がかかっているというのに——」

「——無理だよりユー。たぶんあの人、本当にそうだったことに興味がないみたい。今は説得するよりも、外へ出て皆を助けに行かなきゃ」

しかし、この短期間で何となくクレスの人となりをつかんだアーデイがそれを制止した。

「アーデイ！　ですが彼の力があれば、もつと多くの人が……！」

「いい加減にしろ青二才！　貴様には分からんだろうが、あの類の人間は他人の言うことなどまったく聞かん破綻者だ！　拘おうとするだけ時間の無駄、いいから行くぞ！」

和装を纏う【大和竜胆】ゴジョウノ・輝夜に叱咤され、彼女は半ば無理矢理外へと引きずり出されていった。

他の冒険者たちもクレスを勧誘することは不可能と理解したのか、悲鳴の止まない外への対処へ次々と向かう。その中で、残ったアーデイがクレスに頭を下げる。

「あの、ありがとうございます！　貴方のおかげで私は死なずに済んだから！」

「気にするな、次から気を付ければいい。今回のことで懲りただろう……連中に情をかけたいなら、まず連中のことを一通り知れ。仲間を捕まえたら一度身に纏っているものを全部引っぺがしてから、口から尻の中まで一通りさらって妙なものを隠し持っているかないか確認しろ。本人が自覚していなくても、周囲の手で妙なものを仕込まれている可能性もあるからな。」

敵を知り己を知る、そのためにやれることは全て行うよう徹底する。でなくては、代償として自らの、時には他者の命を支払うことになるぞ――

「は、はい！　分かりました！　……あの、じゃあ私ももう行きます。でも、出来れば最後に貴方の名前だけでも教えてもらえませんか？　私はアーデイ・ヴァルマ、ガネー――」

シャファミリア所属のレベル3！ 二つ名は「象神ウイヤーサの詩」なんだけど……」

その言葉に、一瞬手を止めてクレスは考える。

ここで実名を晒したところで、あとで厄介ごとが舞い込むのは目に見えている。

とはいえまったく名乗らないのも彼女からしたら困るだろうし、何かしらの呼び名がある方が良いだろう。

とすればここは適当な仮の名を教えるに留めておこうと、彼は昔懐かしい己の初期の二つ名を頭の奥から呼び起こした。

「それは無理だが、呼びたければ俺のことはこう呼んでくれ。読みは忘れたが、こう書いたはずだ……」【烈日卿】とな

「【烈日卿】……はい、それじゃあまたいつか！ 今度会えたら、お礼をさせてくださいね！」

「ばびゅーん、と素早く先に出て言った仲間たちの元へアーデイは飛んで行った。

それを見送ることもなく、いつの間にか消えていたヴァレットタのことも忘れて、クレスは安全な場所に一時避難させていたカオスを連れてきて搜索を続けるのだった。

クレス・■■■■■■■■と古の英雄紀行

最終的に商会の廃館からそれなりの成果を得たクレスは、重くなった鞆を引つ提げてカオスと共にバベルへと向かっていた。

一日の終わりが近くなり、いよいよ彼が迷宮ダンジョンに戻る時がやってきたのだ。

「悪くない収穫だった。次にシーラック商会の連中と顔を合わせたら、礼を言わねばな。流石の品揃え、九割がたが駄目になっていようと残りは価値のあるものばかりだった」
「うう……まさか私のような神が泥棒に手を染めてしまうなんて。クレス君の手で汚されてしまったなあ……あははは」

「人間きの悪いことを言うな、有効活用と言え」

よよよ……と鳴き真似をする女神の口を嗜めながら、彼は常に彼女の前に立って、周囲の喧騒から降りかかる火の粉をその辺で拾った剣で払い道中の安全を確保する。

「——誰か、助けてよおおおっ！」

「——死ねい衆愚共、我らが神の栄光を示さんがため！」

「——やらせるな！ 民衆を守れエ！」

先の連鎖爆発を発端として、オラリオはいよいよ地獄の様相を呈していた。響き渡る、親の亡骸に抱き縋る幼子の悲鳴。

積み重なる、栄華の象徴であった雅な建築の瓦礫。

打ち捨てられた、抵抗虚しく命を散らした冒険者たちの遺体。

崩落した歴史の残骸が地を満たし、燃ゆる破滅の炎が天を舐めんと盛り吠える。

それは冒険者たちの『作戦』の失敗をこそ雄弁に物語っていた。

「本当に騒がしいな……悪派閥イヴイルスの連中め。狂犬の方がまだ理性を感じさせるぞ」

次から次へとひっきりなしにくべられる怨嗟と言う名の薪を燃やして、憎悪の業火が
猛る。

無論その炎はクレスたちの元へも這い寄り迫り来るが——彼は全てを払い除ける。

建造物の破片が降ってくれば、剣圧を放ってオラリオの外壁の向こうまで吹き飛ばして。
て。

襲い来る閻派閥イヴイルスがいれば、足元の煉瓦を蹴り飛ばし頭部エキサイトに命中・爆散させて。

立ち塞がらんとするありとあらゆる障害を屈服させて、彼らは家ハベルへと進む。

——その歩みが、不意に止まった。

「止まれカオス」

「クレス君？ どうした——」

先に足を止めた眷属に、思わず前につんのめりそうになりながらもすんでのところまで立ち止まったカオス。

彼女はなんなんだよ一体、と文句を言いたそうにしながらクレスの見ている方向に目を向けて。

そこに、迸る『悪』の源流を見た。

崩れ、煤けた建物の隙間。

日が落ちて光の届かなくなった裏路地にありありと覗く、黒く蠢動する神意。

ゲラゲラと醜悪なる嘲笑を金属の軋むような耳障りな音と共に響かせて、突如としてその闇はぐわりと大口を開けるように彼らの下に襲来して――。

「あれはっ——待て、殺すんじゃない！」

カオスがそう叫び、金属同士の衝突した音が弾ける。

闇の中に潜む黒銀のナイフを、瞬時に抜き放たれたクレスの魔剣「ネガ・ファトゥム」が刃の向かう先を切り替えて打ち払った。

押し返されて裏路地に戻った形なき闇を注意深く見やりながら、彼は剣を握る腕を下げることなく闇の向こう側に問いかける。

「随分な挨拶だな、神ともあろうものが。カオスの言葉がなければそのまま送り還すところだったけど……何用だ？」

「ネガ・ファトゥム」——運命に介入するその属性刃は、振るい方によっては神にさえ届く。

その切っ先を何の躊躇いも遠慮もなく向けた彼に神殺しの本気を見たのか、蠢く闇の一部が次第に輪郭を為して口を開く。

「……嘘じゃないな。本当に俺神を手にかけるつもりだったのか、下界の人間風情が」

「人様の庭を踏み荒らす強盗風情が無礼を語るかよ。犯罪者に貴賤なし、人も神も俺の邪魔をするなら容赦はしない。斬り捨てる、もしくは俺の糧にするのみだ——此奴のようにな」

ふとその時、クレスの構える黒紫の刃にゆらりと朧げな光が映る。

そのちかちかと輝く微かな明滅は、何らかの意思を持っているようにも見えて——陰に潜む襲撃者の正体である神は一瞬漏れ出た気配に射竦められたかのように、纏う常闇のローブの端を揺らめかせる。

漂う、一瞬即発の雰囲気。

それを止めたのは、前に歩み出て一人一柱たりの間に立ったカオスだった。

「いや、だから待ちなさいと言っているだろうに。剣を下げるとは言わないけど、逸るんじゃあないよ。彼と少し話をさせてくれ。……それで、私を殺して何をするつもりだったのかな？ 我が子エレボス」

「——決まっているだろう、我が母カオス。なんてことはない、ただの俺たちの気まぐれさ。この身の司る『原初の幽冥』の通り、下界に破滅を齎そうと思つて絶賛暗躍中だね。その過程で、悪いが貴女には死んで送還されてもらいたかつた。……この通り、失敗してしまつたがね」

彼女の呼びかけを受けて、いよいよ闇の中から一人の男神がその全貌を見せる。

一見して、冴えない青年のような立ち姿。灰を被つたように艶を失つた黒髪は所々が跳ねており、その外面は没落貴族を出身とする情けない優男のようにも見える。

されど、その瞳に映る仄暗い情念は本物だつた。

只神と見るにはあまりに悍ましい、有り余る邪な情念を存分に湛えた陰を映し出す眼。

常人の精神であればすぐさま呑み込まれてしまいそうなどス黒い視線をクレスたちに向け、エレボスと呼ばれた神は、たつた今彼が母と呼んだカオスに突き立てようとしていた黒銀のナイフを懐にしまい、ヘラヘラと嗤う。

そうして多少大げさな身振りを以て降参を示すかのように両手を上げながら、何時でも彼を討てるようカオスの守護に立つ眷属のことを称賛してみせた。

「それにしても驚いたよ、またとんでもない忠義者を見出したものだ。神をその手にかける禁忌さえ一切厭わない破綻者。彼以外の眷属を取るつもりがないとかつて公言し

ていた貴女がまさか二人目の眷属を作り、しかもそれが更には前任者と同じイカれ具合を兼ね揃えているとはな。よくまあ、ここまで同じ資質を持つ人間を見出せたものだ。もしかして子孫かい？」

興味深そうに様子を伺う彼に、カオスは「そう言えば」と手を打つ。

——数百年ぶりに姿を現したこのどら息子は今のカオス・ファミリアについて何も知らないのだった、と。

「ああ、まだお前には話したことがなかったっけね。……悪いけど、勘違いしてくれるなよ我が息子。この私に二言など無いさ。我が眷属は過去数千年に渡って、そして未来永劫、彼一人だよ——見せてあげるんだ、あの子になら構わない」

「そうか」

カオスの指示を受けて、クレスは目深に被っていたフードをおもむろに脱いだ。

鼻まで引き上げていたスカーフも下ろして、眼を隠していたサングラスを外し、完全なる素顔を外界に晒す。

——現れたその相貌に、エレボスの目が限界まで見開かれる。

「は——嘘だろう……ッ！ まさか、君が生きていただなんて!？」

脈動する溶岩のように黒く、また燦る炉のように灰色に、そして沈まぬ恒星のように白く、光の加減によって灼けるように三様の色を映し出す赤髪。

永年の歴史を累積させてくすんだ灰色の左眼と、その中で希望の行く末を見抜く金色の右眼。

その、とうの昔に失われたはずだと自身が思い込んでいた顔に、彼は大きく身を仰げ反らせて驚嘆を露にした。

「俺を知っている神は限られる。……貴様、古き神の一柱か」

「ああ、ああつ……そうだとも！ 知っているぞ——〔†獄火の使徒†〕、〔烈日卿〕、

〔電火崩刀〕、〔活火戟伐〕、〔噴炎装〕、〔光焰皇〕、〔朱き紅の緋なる赤〕……

そしてかの偉業、〔影葬王冠〕と〔黄昏を超え征く者〕！

新しき神時代の到来を告げた英雄！

かつ最も古かりし英雄の一人でもある、『冥洞一灯伝』の主人公！

鉄と勝利の精霊『ユーリ』を従えた〔冒險家〕、クレス・テラティアリー！

「ふん、懐かしい……その名はくれてやった。今の俺はクレス・カタストロフだ」

エレボスからの賛美を下らないと断じるかの如く、クレスは冷たく切って捨てた。

遠き歴史の塵と消えたはずの過去。

それを今更未練がましく高らかに語る男神を、その二色の眼がじろりと睨む。

そこに込められた純粹な殺意に、エレボスは心底分らないといった風に首を傾げる。

「なぜ機嫌を損ねる？ 英雄と呼ばれたことがそんなに嫌か？」

「嫌だよ。その呼び名にお前らは勝手に期待を抱いては、勝手に失望して石を投げる。俺にとっては邪魔以外の何物でもない。俺は俺のやりたいようにやるだけだ」

「そうか……分かったよ、先の軽率な称賛は詫びよう。しかし、こうなれば我が母をこの英雄都へと生贄に捧げる計画は本格的に取り止めだな。本人を目の前にこう言うのも良くないが、なにせ君はマジのマジで俺たちを殺しにくる真正の気狂いだ。だけどまだ俺は死ぬわけにはいかないものでね。確か、手を出さない分には襲ってこないだろう？」

「さあな」

「辛辣だな。……え、大丈夫だよな？」

突き放すようなクレスの回答に、エレボスは思わず不遜な態度を崩してその主神たる母を見る。

「あー、流石に母の前でその子を殺すほど非道ではないと思うけれど、完全な保証は出来ないかな。だってたった今殺神未遂を犯したばかりだろう？ あまりうつかりしてると、つい彼の刃が滑つちゃう可能性も無きにしも非ずってやつだねエ」

「いやいやいや、勘弁してくれって。誓ってもいい、もう俺にはそちらの邪魔をするつもりは微塵もないんだってば。信じてくれよー？ ほら、信じる者は救われるっていう

ジャン」

「信じる者が馬鹿を見るのが世の常だ、嘘をつけ。やはり殺すか」

「だから待ちなさいってばクレス君。……とまあ、こんな調子だからね。死にたくなかったらこれ以上変な動きは見せないようにねエレボス」

「ええ……いや、うん。分かったよ」

今の自分が割と真面目に崖つぶちに立っていると理解した漸くエレボスには、カオスからの忠告に従うほかなかった。

思わず彼の考える『計画』を破綻させかねない怪札ジョーカーを引いてしまったことを嘆きながら、エレボスはガシガシと頭をかく。

「はー、まさか君がまだ生きていただなんて、この俺の眼をしても見通せなかったよ。何年にも渡って下準備をようやく終えたつてのに、どうしてここで驚愕の新事実が判明しちゃうカナー。クレス君さ、寿命とかどこへほっぽっちゃったのさ？」

「迷宮ダンジョンを攻略するまでは死んでも死にきれん、そう考えている内に今日まで来ただけのこと。理屈については知らん、カオスに聞け」

「とまあ、なんかこんな調子でいつの間にか不老を獲得しちゃってさー……試作恩恵ファルナの中で出来た混沌バグのかけらが無茶苦茶に組み合わさって奇跡的に調和バランスが取れた結果というか、ぶつちやけ本当はどうに崩壊してるはずなんだけど、どうしてかうまく機能して

るんだよね。つまり私にもよくは分からないんだ、彼の魂こころに聞いた方が良いんじゃないかな」

「うははつ、なんだそれ。主神と眷属揃って仲良すぎだろ。だけど恐ろし素晴らしいなあ、まったく俺たちの愛する『下界の可能性』というやつは。——だからこそ、試したくなるつてものだ」

一瞬、エレボスの瞳に先ほどまでとは色の異なる感情が過った。

それを受けて、察したかのようにカオスが問う。

「……もしかして、それだけのためにこんなことを？」

「おや、我が母上様には気づかれてしまったか。……そうさ。他の連中はともかく、俺はそのためにこの惨劇を引き起こした」

ぱつと両手を広げ、今のオラリオを抱擁するかの如く彼は深い笑みを浮かべる。

「英雄は惨禍の中からこそ生まれ出づる。だからこそ、この最も英雄の卵が集う都を地獄へと変え、新たな英雄候補が孵る揺り籠にする。それが、この邪神エレボスの描いた英雄設計図さ」

その壮大に見える宣言に、神々の中ではどちらかと言えば良識派だと自称するカオスは眉を顰めた。

下界を救うために、下界を犯す。

本末転倒、盛大なる矛盾に満ちた、自己中心的なふるまい。

今そこに生きる住人たちの意志を侮辱すると言つてよい、大罪中の大罪。

しかしエレボスはどこまでも本気で、下界の子どもたちを想うからこそその非道を為そうとしている——だからこそ、なおのことたちが悪い。

「本当に、そんな都合の良いことが叶うと思つているのかい」

「思う思わないじゃない、やらなければならぬのさ。迷宮は今か今かと時を待つてい

る。我々も下界の人間もちんたらしていられないんだ。革命が必要なんだよ。俺たちの用意する地獄くらい軽く乗り越えてくれて、世界を救うに至る立派な英雄を生み出すためにはな。——いくら貴女に言われようと、俺はこの計画を止めるつもりはないぜ。俺は俺なりのやり方で、英雄を呼び起こす」

カオスの向ける非難の目線を意に介さず、ここでエレボスはクレスに目をやった。

「そこで聞きたい、参考までにな。なあ、クレス・カタストロフ。最も俺たちの理想に近くて遠い君にとつて、『正義』とはなんだ？」

「己が意志を貫き通すこと」

一切の逡巡なく返す彼に、神は重ねて問う。

「では、『悪』とはそれが出来ない弱者のことを指すのか？」

「違う。『悪』とは、『正義』に向かおうとする誰かの勇気を己がために虐げることだ。人

の夢を嗤い、努力を踏み躪り、足を引つ張るような、そんな行為を平気で行う真正の屑をこそ俺は救いようのない『悪』と呼ぶ。そして、そういつた連中が俺はいつとう気にくわない」

彼はエレボスへ向ける視線の圧を強め、語気を強める。

隠すつもりのない軽蔑と敵意を腹の中に滾らせて、クレスは断じる。

「つまり貴神は紛れもない『悪』だ。世のため未来のためと謳い、現在を切り捨てる極悪神。何の瑕疵もない誰かの意志を、平和を、大義のためと進んで踏み躪る屑。果てには彼らの犠牲は無駄ではなかったなどと言い放ち、勝手に罪を背負ったつもりでいようとする傲慢な輩。俺の最も嫌いな神種だ」

「酷い言われようだな……だが、否定はしない」

三日月のような凶笑を浮かべるエレボスに、反省の色はまるで映っていないかった。

しかし、そこにはもはや相手に自分たちの前に立ち塞がるつもりも見えない。

ならば、クレスは剣を引いた。

「——俺の邪魔をしないなら、知らん。好きにしろ。ただ一言だけ……疾く死ね」

「ありがとう。ここは君の寛大な心に見逃されて、俺はみつともなく尻尾を巻いて逃げ帰るとしよう。実はそろそろ次の所に行かなくてはならないからな、あまりちんたらと昔話に花を咲かせてもいられない身なんだ。——では、さらば我が母とその眷属よ」

エレボスは影に吞まれるような形で姿を消し、波が引くようにその影も奥に消えていく。

遠ざかる彼の気配——その先で、極大の光の柱が立つ。

神々の送還が連続して行われ、オラリオに響く悲劇は更なる加速の一途を辿る。

「神の送還……しかも、あんなに。エレボス、それほどまでに君は……」

長生きしようとした見られないその光景に、しばしその場に足を止めて二人は様子を見守った。

その中で、戦火を瞳にぼんやりと映し出すクレスは眩いた。

「英雄作成か、馬鹿馬鹿しい。そんなものは理想ですらない、妄想の類に過ぎん」

誰かが言った——人の手によるものを、人に破れないわけがないと。

ならば何者かの仕組んだ神為的な悲劇にも、必ず打ち崩される切っ掛けとなる瑕疵はある。

そのような易しき悪意程度によってなぞ、彼ら^{神々}の望む英雄が見出されるものかと彼は鼻で笑った。

「英雄なぞ誰かが意図して作るものではない。ただ敵わない現実^に立ち向かうことを諦めなかつた愚か者がいて、それを後の世の誰かが勝手にそう呼ぶようになるだけのこと。……俺程度でも分かるその簡単な理屈を、俺より長生きしていて何故分からないの

か。哀れだな」

目と鼻の先で好き勝手にふるまう邪神たちとその眷属のことについて、それ以上思考を割く余地はないと彼はカオスの手を引いて再びバベルに向けて歩きだす。

「——ああ、言った通り俺の方から手を出すつもりはないさ。しかし、あの娘についてはどうかかな？」

あえて先ほどは話題に出さなかったサラのことを思い浮かべて、クレスは最後に小さく笑う。

「お前の立ち振る舞い、盛大にやつの地雷を踏んでるぞ。精々ご自慢の崇高(笑)な考えをブチ壊されて、悔し涙に憤死するがいい」

『豊穡の女主人』前には、惨劇が広がっていた。

この暗黒の時代に安穩と飯を食らう平和ボケした客を、血祭りにあげようとした悪派閥たち——彼らはその愚かさの代償として、自らの血肉でこの場所にお望み通りの屍山血河を刻むことになった。

「——聖なる食卓を汚さんとする痴れ者どもめ。せめてその命を以て、己が罪を贖うがよいのじゃ」

砕けた石畳の上に突き立つ、数多の墓標。

その正体は全て、内側から飛び出した自らの血に身体を十字に縫い留められた悪派閥イウィルスだった。

肉と皮膚を喰い破って姿を現した鮮血が、主人の肉体を串刺して磔刑に処する。

その光景を返り血一つ浴びずに成した酒場のウェイトレス——【神々の給仕ゴッズブライド】サラ・ブラッドルーラーは、クレスによつて授けられた三叉の魔槍を一振るいして周囲の熱波を裂き、塔バベルまで続く避難経路を作る。

「師匠よ、これで客を安全地帯まで連れて行けよう？ さあさ、早く行くがよい」

その手を汚させるまでもないと、後ろで店の客を守らせていたミアにサラは首を振つて合図する。

店の外に広がる地獄絵図——数多の邪神の眷属の死体によつて彩られた百の十字標に、ミアはようやくクレスの残していった言葉の意味を知ることになった。

「あの女神の連れの男が言った通り……ここまでとはね」

ミアは背中冷や汗を流しながら、目前の惨劇を改めて見渡す。

酒場を取り囲んでごちゃごちゃと前口上を喚いていた悪派閥イウィルスのリーダー格は、今やその口から血の杭を生やして息絶えている。ミアの記憶が正しければ、ギルドの手配書ブラックリストに載っていたその顔は元オシリス・ファミリアのレベル4の猟奇殺人鬼だった。

上級冒険者すら抵抗を許されず命を捧げさせられる、サラの理不尽さ。

それを開店前の店前の掃き掃除と何ら変わらぬように為した彼女の態度は、明らかにミアの常識から外れるものだった。

しかし今という非常事態において、その常識外れは心強くもある。

「分かったよ。アタシはこいつらを連れていく。だが、アンタの方はこれからどうするつもりだい？」

「妾はこれより、この食事の尊さを知らぬ野蛮で下劣な人間どもに等しく誅伐をくれて回る。止めてくれるでないぞ？ 食を軽んずる者に生きる価値無し——奴らはこれ以上にならないほどまでに、妾を怒らせたのじゃからな」

「崇高なるもの、汝の名は『食』なれば」(サラ視点)

【暴喰】^{ザルド}の剛剣が、【猛者】^{オツタル}を。

【静寂】^{アルフイア}の音魔法が、【九魔姫】^{リウエリア}と【重傑】^{ガレス}を。

ゼウスとヘラの残した昔日の亡影が、邪神の意に倣つてオラリオを打ち砕く。

その他悪派閥の幹部勢もまた己が牙を振るい、相応の敵と見定めた冒険者たちに容赦なく屈辱と泥の味を教え込む。

戦いの趨勢は今や完全に、『悪』を語る者たちの手に落ちたと見えよう——そんな中で。

「ぬわあああつ!!」

「うぎやあああつ!!!」

「ひでぶつつつ?!?!」

全域が戦場と化したオラリオにおいて踏み鳴らされる、醜い悲鳴の合唱^{コーラス}。

逃げ惑う民衆及び、それを守る冒険者たちの喉笛からのみ奏でられていたはずのその

中に——徐々に、悪派閥側の断末魔が混じり始めていた。

それまでは正しく狩人であったはずの彼らの中に、いつの間にか狩られる側に回る者が始める。

その小さな戦場の変化において台風の目となっていた存在こそは、クレスが迷宮から連れてきた異常イレギュラー。

戦える給仕バトル・ウェイテレスこと、サラであった。

「御機嫌よう皆の衆——妾、参上なのじゃ」

「ハッ、酒場の給仕まで駆り出すとはな！　いよいよ貴様らも万策尽きたと見える！

今だ同志たちよ、畳みかけ——みぎゅっ」

『豊穰の女主人』の制服のままにどこからともなく現れた彼女に、それまで戦場を支配していた邪神の使徒たちはせせら笑う。

本来ならば戦えぬ存在であるひ弱な給仕さえ駆り出すほどの、オラリオ側の人手不足。これこそまさに我らが優位を示す、蹂躪における絶好の機会だと彼らは嘲る。

そしてその口は最後まで嘲笑を完結させることなく、喉奥からせり出た血の杭によって貫かれた。

「騒々しいのじゃ。食を分かち合えぬ口などいるまい？　ならば塞がれたとて文句は言うまいな」

「はっ？　えっ……あつ、ど、同志っ?!」

戦場に有り余る悪派閥イツイルスの下っ端たちとはいえ、その最高位はレベル3にも達している。これまでに冒険者たちと鎬を削ってきた幹部勢に比べれば雑兵かもしれないが、その積み上げてきた偉業に嘘偽りはなく、彼らは平穩を害する『悪』としてこれまでに多くの弱者民衆を平らげてきた。

彼らは語る——「強き者が弱き者を蹂躪して、何が悪いのだ」と。

ならばそれ以上の強者が現れた先に——彼らが平らげられる側になろうと、文句を言える筋合いはない。

「何を慌てておるか。そら、貴様たちも仲間入りじゃ。悪質客クレイマーは即退店、また来世でのご来店を心よりお待ちしておりますぞ♡」

あつげなく自らの末路を記す墓標となつた同胞の骸に、その場にいた悪派閥イツイルスたちの足が止まる。

その明確な隙をサラは見逃さず、指揮棒のように魔槍を一振り。

絶対なる支配者として彼らの血液に下知を与え、瞬く間に体内より咲く数十の赤十字架を量産した。

「あ、えっ……はっ……」

状況がすぐに呑み込めなかったのは、それまで劣勢に立たされていたその場の冒険者たちも同様だった。

突如として目の前に現れた給仕姿の美女によって、本来自分たちが果たすべき役割を全てあつてなく終わらされてしまったという事実。

いかに絶望に打ち克とうと奮起し諦めないでいた彼らであっても、理解の遠く及ばない光景を前にしては、「なんだこれは」と思考を彼方に飛ばしかけてしまうのも無理がなかった。

「無事かお主ら。臍はらわたに穴が開いたりだとか、明日の食事が取れんような命の危ない者はおらんじゃろうな？」

サラのかけた心配の声に、咄嗟にこの場を仕切っていた一人の男性冒険者が気を取り直す。

「あ、ああ……大丈夫だ。今生きている連中に、そこまで大きな怪我を負ってる奴はいないはずだ」

「ならばよし。疾くバベルまで下がれ、今は大半の者がそうしておるようじゃ」

「確か【勇者】フレイバーからの指示だったな、分かつてる——おいお前ら、さつさとここからズラかるぞぞ！ アンタも……確か『豊穰の女主人』のサラちゃんだろ？ 俺たちと一緒に……」

「すまんがそれは出来ん約束じゃ。妾は他の連中も急ぎ仕留めねばならんのでな」

その言葉に彼女と話していた冒険者は思わず「無茶な！」と叫びかけたが、すぐに思

いとどまった。

彼らが手を焼いていた悪派閥^{イヴィルス}たちを刹那の内に全滅させた、未知^{サラ}の戦闘力。

それは自分たちの護衛として遊ばせるよりも、遊撃として好きに振るわせる方が遥かに大きな価値となる。

このいつ死ぬか分からない時代において今日の今日まで無事生き抜いてきた彼の計算は、弱い女は男が守るものと言う煩惱^{ブッパド}をすぐに脳の奥に弾き飛ばして頭を下げた。

「いや、すまない。そうだな、他の連中をよろしく頼む。それと、俺たちを助けてくれて感謝する」

「うむ。この戦いを生き抜いた暁にはどうぞ我が『豊穡の女主人』を御贖^{ミア}に、じゃ。感謝はその時の金払いで示してくれれば、師匠^ミも喜ぶじやろうて。では、またの！」

サラは別れを告げると同時に、とぶんつ、と己の足元の陰にその身を沈ませる。

種族特性の影渡り——夜の帳が落ちつつある今、彼女の色に染まりゆく世界を、その陶磁器のように白く艶めかしい脚が次なる戦場へと向けて疾駆する。

「ぐびゃあつ?!」

「ほぎよおおおつ?!」

「——ぎゅこつ!」

「——すまん、助かった!」

「——今後も主神共々『豊穰の女主人』をよろしくなのじゃ!」

例のアレ 黒い虫の如く有象無象と蔓延る闇派閥たちを、白銀の影がひたすらに狩る。

今にも冒険者たちを葬り去ろうとしていた彼らの前に、影から颯爽と姿を現すサラ。その髪が弧を描き、月の如く閃いたかと思えば——全てが終わる。

嘲笑と剣戟が消え、失われゆくはずだった命が呼吸を繋ぎ、深紅の十字が聳え立つ。それらを為す今の彼女はまさに、神出鬼没。

影を媒介として転移に近い高速移動を行い、縦横無尽に戦場を駆けては闇派閥を墓標に変え、無事助かった冒険者たちに『豊穰の女主人』の宣伝をうって影に溶ける。

懐の六文銭を確かめる間もなく彼岸に渡された悪派閥は勿論のこと。

救われた側の冒険者も、何が起こったのかすぐに呑み込める者はいなかった。

——見目麗しい女給仕に目を奪われた次の瞬間には、血の十字架が立っている。

それがサラの現れた戦場の全てで、それだけで報告を完結された【勇者】は「なんだかよく分からないが僕たちの背を押すものならヨシ!」と次の指示を下し、【白妖の魔杖】は「報連相の一つもマトモに出来んのか貴様らは揃いも揃ってオウム以下かそうだったなクソが!」と癩癩交じりの雷撃を飛ばした。

そんな冒険者側の混乱もつゆ知らず、クレスに似て好き勝手にサラが闇派閥相手に墓標作りアンダーテイキングに励んでいると、やがてオラリオの中に神の送還を示す光の御柱が立ち始める。

「——くそっ、主神の馬鹿野郎が送還されて力が……っ！」

「ふははっ、神を失った冒険者なぞ恐れるに足ら、うぎやああああっっっっ！」

「注意を怠った阿呆なぞ格好の的よ、愚か者め」

!?!?!?

その過程で恩恵を一時的に封印された冒険者たちが慌てて隙を生んでしまい、闇派閥イヴィルスたちは喜び勇んで虐殺を開始しようとするが——それもまた隙に他ならぬと、サラが穿つ。

トドメを確信した時にこそ敵は弱くなる……クレスに負けず劣らずの経験を積んでいる彼女はその学びを良く活かして、釣られた連中を悉く始末する。

「そら、神フアルナの恩恵を封印された者はそうではない者の補助に回るのじゃ！ 力を失えど培った経験を生かさなか！ 格上を相手に戦うことなぞお主冒険者らにとつては日常茶飯事じゃろうが！」

ついとばかりに、叶わぬ現実イヴィルスに屈して膝を折ろうとする冒険者がいれば激励を送つて次の戦場に発つ。

全ては明日の食事イヴィルスで彼らの胃と心を満たさんがため——サラは己の『正義』を以て戦

場に舞う。

『——聞け、オラリオ』

やがて響く邪神エレボスの声も、彼女が足を止める理由にはならない。

むしろ、その宣言に陶醉するあまり判断力の弱まった闇派閥イヴェルスを愚かな得物と位置付けて、浮足立った彼らを容易く仕留めていく。

翻るはウエイトレスの証たる深緑のスカート、振るうは武骨な擬神晶鉄製ハイフラグメントの槍。

月下の女中が暗雲を裂くように戦場を荒らし、『悪』の根を枯らしていく。

『……滅べオラリオ——我らこそが『絶対悪』！』

都合九つ、長きオラリオの歴史を見ても類のない多くの神の送還を背景に邪神は嘲笑を湛える。

されどそれを冷静に俯瞰する視点を持つ者にとって、その在り様はこれ以上ないまでの隙だった。

「終わったか。ならば貴神きさまは用済みじゃ、散るが良い」

サラの感想はただ一つ、「狩り時ポナスタムが終わったならば後は邪魔になるだけ」であった。では、ここで演説を終えた邪神エレボスの現状を書き起こしてみよう。

——自分こそが諸悪の根源である、と態々姿を晒して自己紹介してくれている神バカが一柱。

「——邪悪も暴力も静寂も、なべて等しく煮炊きの薪となれ」

手元に握られる魔槍、【86式連結式葬槍^{レギンレイヴ}】。

それが担い手の意志の下にありつただけの血液^{エネルギー}を纏い、螺旋の暴威を描いて嵐と成る。

赤き鮮血の極大槍を構えたサラが力任せに放つ、その一撃の名は——！

「崇高なるもの、汝の名は『食』なれば。——プレリユード・ファイナーレ！」

『序曲^{プレリユード・ファイナーレ}にして終曲なるもの』、それはサラの持つ必殺技にして初撃決殺を語る大技。

火は小さな内に消せ——戦いは本格化する前に終わらせてしまえ。至極単純な大技で以て、争いの種火そのものを燎原へと派生する前に消し飛ばしてしまおうという、あの種の面倒臭がり屋の極致。

それがありつただけの理不尽^{ステイタス}を乗せて、バベルの屋上諸共諸悪^{エレボス}の根源を打ち抜こうとするが——。

「ちい、しくじったか。能力^{ステイタス}が劣るとはいえ、使い方は連中のほうが一枚上手だったようじゃの」

とある理由により、彼女の戦場における必殺技は魔法もスキルも乗らない場当たり的な一撃に過ぎない。

その自覚があつたからこそ、サラは邪神の側に侍る二人の冒険者が放った炎と音の双击によつて攻撃が天高く逸らされても思考を止めたりはしなかつた。

代わりにすぐさま手元に引き戻した槍に次弾を装填して、こうなれば仕留められるまでぶつ放してやろうと意気込むのだが……残念なことに、彼らは衝突の際に生じた爆炎に紛れてとうに姿を消していた。

「一般市民に紛れられれば巻き添えにしかねんしのう。まあ良いわ、今はあつちは諦めて、兎角雑魚狩りに集中するのじゃ。主様曰く、侵略的外来生物は卵一つ残さず駆除せねばならんらしいからのー」

ここで主犯格を討てなかったのは残念だが、釘を刺すことくらいは出来ただろうとサラは思う。

——【巨悪】だとかなんだとか、民衆足元の見えぬイデオロギー妄想主義の走狗ごときが調子に乗るなよと。

まあ一泡くらいなら吹かせられたじやろうと、過ぎ去ったことは忘れて。

今は撤退の様相を見出しつつあるイヴィルス悪派閥の連中を見える内に一匹でも多く掃除してしまおうと、サラは絶望の底に沈んだオラリオの街並みに踊るのだった——。

「餓える者は満ちるまで、食べぬ者は無理をしてでも——」（サラ視点）

住む家を追われ、着の身着のままに放り出されたオラリオの民衆は迫る窮状に喘いでいた。

身を守る壁はなく、ろくに休むことの出来ない極限状況。ダンジョン迷宮で野営慣れした冒険者とは違い、一般人の彼らはいっ殺されるか分からない負の興奮によつて精神と体力を大いに削られていた。

このままではそう遠くない内に暴動が起きるのは必死だと、誰もがそう予想していた。

しかし事実として、避難してきた彼らの中にはある種の統制が保たれていた。それはなぜか。

——三大欲求の一つである『食事』だけは、『豊穡の女主人』を筆頭とする料理人たちによつて辛うじて保証されていたからである。

「はい、温かくてお腹に優しいミルクがゆはこちらニャー！」

「がつつり腹に溜めたい連中はこつちへ来な！ 魚団子と豆のごった煮だよ！」
「腹が減つては戦は出来ぬ！ 力を蓄えたくば我が芋と肉のごろつと揚げに集うがよいのじゃー！」

悲嘆に憂う人々の中に、活発に響く配給の声。

身内を失い、財産を失い、暗雲漂う未来に枯れる涙を流す中。

それでも彼らの鼻腔に、宙を漂う旨そうな匂いは訪れる。

その誘いに、彼らは亡霊のようにのろのろと足を伸ばして、与えられた簡素な器の中に盛り付けられた暖かな食事を前に手を伸ばし——食らいつく。

食つて、食つて、食つて……器が空になれば、お代わりを求めて次の列に並ぶ。

そうして手先と心が冷えようとする中で、体の芯を温めてくれる旨い食事だけが、なんとか彼らの理性の綱を繋ぎ留めていたのだった。

「うめえ、うめえよお……！」

「この皿、なんでこんなしよっぱいのに、手が止まらないの……？」

「くそ、ふぎけるなよ俺の腹つ……なんでこんな悲しいのに、鳴りやがるんだつ……！」

彼らの本能が向かう先、避難用の仮設施設に設けられた臨時の炊事場にて。

師匠ミヅと並んでひつきりなしに手先を動かす、この場の立役者の一人であるサラは全ての避難民に届くよう声を張り上げる。

「餓える者は満ちるまで！ 食べぬ者は無理をしてでも、食うのじゃ！ オラリオの興廃はお主らの一皿にありと心得よ——悲嘆にくれる前に、まずはお残しをせぬことじゃ！」

「みな、儂等があれだけの醜態を晒したというのに……今日は思つた以上に落ち着いておるな」

ギルドの作戦指揮室にて、机に広げられたオラリオの地図と睨みあうフィンにガレスは語る。

彼の想像では、ゼウスとヘラの遺産に手酷くやられた挙句にアレクトやルドラなど邪神の使徒にも良いようにされた昨晚の冒険者側の大失態が、民衆の間に抑えきれない暴動を齎すと考えられていた。

しかし、それがどうか。

一夜明けてみれば、彼らは暗く落ち込んだ雰囲気を残しながらも、予想ほどには荒れないでいる。

良い意味で裏切られたものだと、腕を組んで意外そうに語る彼にフィンはその理由を語る。

「彼女たちのおかげだね」

「ミアの所のか」

デ・ミューセル

「ああ。【小巨人】を始めとするオラリオの料理人たち。彼らが交代しながら民衆の腹を満たし続けているのおかげで、彼らは最低限の理性を保っていられる。本当に最低限度だが、文化的な生活がギリギリのところまで維持されているからこそ人々はまだ獣にならないでいられる……」

そこで漸く彼は顔を上げ、疲れた目をほぐすようにこめかみを軽く指で揉み込みながら、今現在もギルドの入り口付近で行われている配給のことに意識を向ける。

ずっと宿敵ザアレックタのことばかりを考えていたおかげで、その腕が生み出す血溜まりばかりが脳裏に浮かんで酷く不快だった。その暗い気分を振り払うように、フインは人々に活力を与えようと腕を振るう彼女らのことを考える。

その中でいち早く顔が思い浮かんだのは、サラだった。

「特に、サラ・ブラッドローラー。【神々の給仕ゴッズブライド】、彼女があの中でも一番大きな主役だろう」

「あの娘っ子か。……そうじゃな。」「とにかく飯を！」の一点張りで、儂等が「ないものねだりをされても困る」と言えば、自分から腹黒い商人連中の所へ食料とついでに配給所の建材まで諸々引きずり出させに行きおったからの」

現状、守勢側に回らされたフィンたちの手元にはあらゆる物資が不足していた。

武装・治療薬はもちろんのこと、食糧もまた例外ではない。

その中で薄く広く……満足な味付けも量もない清貧な食事で我慢してもらおうと考えていたギルド及び冒険者たちに対して、真つ向から異を唱えたのがサラだった。

とはいえ、彼らとて余裕があればもちろんそうしている。

余裕がないからこそそうせざるを得ない、と諦めるよう諭そうとしたフィンたちを前に「ならば」と彼女は自らの足で食料を確保すべく単身オラリオの商会連合に乗り込み、こう言い放った。

『買い手たる民衆の窮状に手を差し伸べずしてどの口が商いを語るか！』

!? 不当に値段を吊り上げ、よもやいつまでも自分たちだけは吊られぬと思っておるのか

ここぞと言う時に物を売らぬ商人なぞ路傍の石にも劣るわ！

秩序が回復した暁には、今の貴様らのもとで物を買おうとする者は誰もおらぬじやろうよ！』

——と。

その時の光景を思い出し、ガレスは呵々大笑する。

「あれを聞いて瞬く間に顔を青くした連中の顔、なんと胸がせいせいしたことか！ ど

いつもこいつもあの娘の言い分に何も言い返せないどころか、蜘蛛の子を散らしたように自分の所に帰って蔵を開放し始めおつた。この緊急事態によくもまあまだあれだけの品物を隠し持つておつたものよと、一周回つて感心させられるくらいにな」

「本来なら彼らも出来るだけ高く売りつけるつもりで、もつと危ない所になるまで待とうと目論んでいたんだらうさ。今のこの街は周りを悪派閥イヴィルスに囲まれているから、彼ら以外から仕入れるのが難しいからね。結託して値段を吊り上げる……経営手法としては良くある話さ。ただ、彼らは僕らに目を向けるばかりで肝心の民衆の力と言うものを忘れていたんだ。僕も彼女に言われるまで、ブレイバー「勇者」らしくもなくそうだったけどね」

フィンたち冒険者が力尽くで商品を徴収すれば、英雄の都という名声は瞬く間に地に墮ちるだろう。

だからこそ、今後の付き合いも考えれば彼らから商会に手を出すことは難しく、商人たちはそんな賢い冒険者やギルドの悔し様に歯を食い縛る姿をよそに平然と値段を吊り上げようとしていた。

しかし商会の面々は、彼らのような太客に目を向けるあまり、普通の客のことを忘れていた。

普段はどうということもない一般客——神ファールナの恩恵のない市民。

冒険者強者ばかりが目立ち、一般市民弱者が目立たないオラリオと言う特殊環境の中で、彼らは力あ

るファミリアとの取引で稼ぐ大金に目が眩んでしまい、普通の客の持つ力を見逃してしまっていた。

それは——暴動や略奪に代表される、『打ちこわし』。

富める少数が私欲のままに独占を行った果てに発生する、貧しい大多数によつて為される社会的正義。

油を搾り取るような心積もりで他人の首を絞めつけていれば、先に自分たちの首が飛ばされる……そんな事例は古今東西にありふれているのだという歴史の教訓を、サラの言葉を受けて彼らはようやく思い出したのだった。

「奇しくもこの暗黒時代、単純な個々の暴力が目立つばかりで、ボクも彼らもそんな外の世界の常識を忘れてしまっていた。だからこそ成立してしまえていた商人たちの悪徳な手法を、彼女は少しの言葉で壊してくれた。これは間違ひなく、僕たちには出来なかつた大きな成果だ……しかもそれだけじゃない、ガレス」

現実には起きた勸善懲惡劇に「勇者^{フレイサー}」として感心する中で、フィンはその目を冷徹に戦いを俯瞰する指揮官としての物に戻す。

同じく目を細くしたガレスが、つい一時間前に彼の部下がようやく取り纏め終えた報告の内容を復唱する。

「総数1465名。あの娘っ子がたった一晩で仕留めたと思われる悪派閥の連中のこと

じやな。儂等の戦果を鼻で笑うような撃破率をあの細腕で叩き出しておる。お前や
【万能者】^{ベルセウス}のような大局観を持ち合わせておきながら、力はそれ以上とはな」

「彼女のような大物が、どうしてこれまで名も知られずにいたのか……神々による冗談
のような二つ名はさておき、不思議でならないよ。まあ、それはこの際問わないにして
も、彼女のことはもう少し詳しく知っておきたいね。悪派閥^{イッイルス}にとつてのザルドやアル
フィアのように、彼女が僕たち側の切り札となるかもしれない」

「改めて言葉にしてみると、悔しいが……そうじやな。幸いにも今は襲撃も落ち着いて
おる。向こうの失った数もそのうち補充はされるじやろうが、その前に把握出来るもの
は出来る内におかんとな」

フィン^{ベル}は座り仕事ばかりで鈍っていた身体を鳴らして、ガレスは昨晚の疲労が抜け
きつていない身体に鞭うって、それぞれ立ち上がる。

彗星のごとく現れた未知の特記戦力を自らの眼で知るべく、下の配給所へ向かう
と。

彼らの立場上、人をやって呼びつけることも出来るだろうが——それは悪手だ。

なにせ今や民衆にとつてのサラの扱いは、戦火を払い、彼らの心身まで満たしてくれ
る聖人に等しい。既に一部の者たちからは、彼女を崇拜する声まで上がってきている始
末。

一方、彼ら冒険者は立て続けに不始末——決してそんなことはないが、民衆の眼からしてみればそう見えてしまう——を積み重ねている。

そんな状況でフィンたちがサラを一方的に召喚しようとするれば、せつかく落ち着いているところに「何様のつもりか！」と不和が起きかねない。

そんな打算が働いたことと、不甲斐ない自分たちの無力を補ってくれたことへの感謝から、直接足を運ぶのは当然だと彼ら二人は言葉を交わさずとも同じ思いに行き当たった。

そうしてフィンとガレスは、少し前にラウルが「サラに託された」と言つて持つてきた大きめの器が空になったものを手に持つて、息苦しい部屋から外へ出るのだった。

「いや、すまないね、配給の手を止めてしまった」

「構わぬよ。というか、別にお主らのせいでもないのじゃ。他の者どもが「この際ついでに休め」とお玉をひったくり包丁を奪い取つてゆくものでな。別に妾はまだまだ元気なのじゃが……あのままでは妾が他の者の邪魔になるばかりであったし」

昨晩から一睡もせず働き詰めていたサラだったが、フィンたちの来訪を切つ掛けとしいよいよ厨房から追い出されてしまった。

それも他ではない、同僚たちの手によってである。

単に料理を作るだけでなく、避難所全体の指揮にも加わっていたサラ。

彼女は避難民たちにも悲嘆を抱かせる暇なぞ与えんと言わんばかりに仕事を与え、配給の列に並ぶ余力のない人々の下に器と匙を届けさせ、自分で食べる力のない怪我人の食事補助も行わせたりなど、それはもう八面六臂の活躍を見せていた。

その挙句に過労を心配されて、フィンからの事情聴取の申し出をダシにされてここぞとばかりに休憩へ送り出されたのであった。

そんな訳で「こうなれば仕方がないのじゃ」と、彼女はフィンたちと一緒にギルド内にある休憩室にやってきていた。

無論、嚴重に人払いを行った上で入り口には監視を立たせて、盗聴の耳を完全に封じている。

その中で、真つ先にフィン是对悪派閥イザイルス作戦の最高責任者としてサラに頭を下げた。

「まずは感謝を。君のおかげで大勢の命が助かり、今の僕たちにも予想していなかった余裕が生まれている。避難民の多さに人手は奪われてしまっているけれど、彼らにとつても無力感を感じる暇なく働けているのは良いことだ。君がいなかった時のことを想定すれば、嬉しすぎる誤算だよ」

「気にするでないと言いたいところじゃが、その感謝は素直に受け取ろうかの。でなけ

れば話がこじれて先に進まなそうじゃし。……で、貴様らが気になっておるのはさしずめ、妾の能力値ステイタスと今後の身の振り方じゃな？」

分かったような口を利くサラに、フィンフィンは苦笑しながら頭を上げる。

無駄を省いて話を進められるのは彼にとつてもありがたいことだった。

「理解してもらえて助かるよ。それで、今更だけど教えてもらえるのかな。君の口から」
「うむ。とりあえず後者については、妾はお主らの味方と考えて差し支えなからう。妾の目的は餓える民の腹をいっぱい満たすこと。これはそちらの目的とそう大きく舵輪は異ならぬはずじゃ。そのためならば、大抵のことは協力しようぞ」

休憩室の奥に設えてあったベッドの際に腰かけて膝を組んだサラの回答に、フィンは目に見える形で喜びを顔に浮かばせた。

「ならば、君に【暴喰】と【静寂】の相手を求めても良いのかい？」

提案を受けて、彼女は顎に手を当てて考える素振りを見せる。

だが、少しして申し訳なさそうに首を振った。

「あいやすまぬ」

「……！ 駄目、なのかい？」

「違う違う、そうではないのじゃ。……というのもな、まず正直、それが誰かのことを指し示しておるのか妾は知らんのじゃ。なにぶん一年に一度しかオラリオにおらん身

じゃからのう、知っておること知らんことに偏りがある」

「フィン、落ち着かんか。お前らしくもない。焦り過ぎじゃ」

もう少し段階を踏めと嗜めるガレスに、フィンはバツの悪そうな顔を浮かべる。

「……！ ああ、つい先走ってしまったね。すまない、まずは説明を設けるべきだったか」

彼の謝罪に、サラは手を振って応えた。

「仕方あるまいよ。その顔、隈は浮かんでおらんでもろくに寝ておらんのだじやろ。不眠は判断を鈍らせる、この際多少の無礼は見逃そう。しかしついでじや、この後妾だけでなく貴様も寝るが良い。ベッドも半分なら貸してやらんでもないぞ？　なんてな」

「考えておくよ」

冗談を返す余裕もないフィンの台詞。

それはどう考えても忠告を受け取らない奴のものだと、サラはガレスに目を向けた。

「そこなドワーフ、ガレスと言ったか。貴様が責任を以てこやつを寝かせよ。この手の輩は口先だけじゃからの。ベッドに無理矢理縛り付けるでもして、決して逃がすでないぞ」

「あい分かった。任せておけ」

「ガレス！」

慌てるフィンだが、そうは問屋が卸さなかつた。

彼から目を逸らさず、ガレスもまた昔からの仲間を気遣うように、強めに言い切つた。「休める内に休めいフィン。リヴェリアも同じことを言うじやろう、【軍長勲章】に頼り過ぎるなとな。それとも、それだけ儂等のことは信用ならんか？」

「……その言い方は卑怯だろう」

頑として譲らない土の民特有の態度に、やがて観念したようにフィンは両手を上げた。

彼自身、ずっと働いているせいで自分の頭の回転速度が落ちてきていることは自覚していた。

それでも、止むことのない襲撃下で指揮官として毅然とあるべきだ——周囲から受けるその期待を言い訳にして、心の奥底に潜む【殺帝】への殺意を溶岩のように燃やし続けてきた。

そのせいか、頭に血がカツと上りやすくなっているきらいがあることは否めなかつた。

「分かつたよ、後で休むさ。ここで一度気を落ち着けた方が良さそうだ……僕のためにも、僕に従う君たちのためにも。きちんと熟睡できるように心掛ける、それで良いかい？」

「よかろう。【勇者】たる者、一度吐いた言葉を覆すなよ」

「分かつてるさ」

「ン、話は纏まったようじゃな。で、さっき言った連中について説明を頼む」

二人の慣れ親しんだやり取りを微笑んで見守っていたサラの言葉を受けて、フィンが気を取り直すように咳ばらいを一つ挟んで話し出す。

「【暴喰】のザルドと【静寂】のアルフィア。かつてオラリオで隆盛を極めたゼウス・ファミリアとヘラ・ファミリアの冒険者にして、今は悪派閥の首魁イザイルスと見られる神エレボスの懐刀さ。そして、レベル7の実力者。はつきり言つて、今の僕たちの手には余る相手だ」

「ふむふむ」

「君も昨日の演説は聞いていただろう？ あの時ここの屋上に立っていたのが神エレボス、そしてその時側に控えていた二人が彼らだ」

「……ああ、あの高笑いする馬鹿神の隣におった連中か！ あの時は仕留めそこなつたが、そうか。あれらがお主らにとっての当面最大の脅威という訳じゃな」

ようやく分かつたぞ、と納得する彼女の漏らした一言を、フィンが聞き咎める。

「仕留めそこなつた？ ……もしかして、あの時どこからともなく放たれた赤い巨槍は

君が？」

「そうじゃ、残念ながら想定よりも連中、巧くての。一撃では仕留めきれんかったのが悔

やまれるところじゃ。じゃが、二度はない」

今のオラリオで第一線級の力量を誇る二人に目線で力量を問われながら、サラは不遜に言い放った。

「あの程度ならばどうとでも出来よう。妾に言わせればお茶の子さいさいと言うやっじゃ」

グルメホリツクな戦闘給仕と偽典恩恵（サラ視点）

「どうとでも、か。……易々と言ってくれるね」

何一つ迷うことのない、確信めいたサラの言葉。

そこには誇張も妄言も一切含まれておらず、だからこそ、それを聞いたフィンとガレスは苦虫を噛み締めたかのような表情を顔に浮かばせた。

彼らがこれまで主神ロキと共に苦勞して積み上げてきた並々な努力と栄光、それを上回る千年来の英雄系譜……その中でも傑作中の傑作に勝利することを、彼女は「お茶の子さいさい」とさえ言った。

——ああ、何たる屈辱か。

これまでの積み重ねを嘲笑うかのような残酷な女給仕の自負に、二人の反骨心が思わず顔を覗かせようとする。

しかし、いざこの期に及んで自らの未熟さを克服する機会が欲しいと言えるほど、彼らは青臭くはいられなかった。

「ならば、ぜひ君を頼らせてもらいたい。サラ・ブラッドルーラー」

滾る激情に蓋をするかの如く、握った拳に悔しさのあまり血管を浮かび上がらせながら。

フィンは再度サラに対して腰を折り、頭を深く下げた。

「僕らの尻を拭かせるような真似をさせることになってしまつて、本当に申し訳ない。だけど、恥知らずと言われようがなんだろうが、そう気楽に言える状況はどうに過ぎてしまつているんだ。一刻も早く彼らを片付ける——この街の平穩を守るために、君に依頼クエストを出したい。受けてもらえるかな？」

本来であれば自分たちが成し遂げたい——否。

黒龍討伐の失敗責任を問うてオラリオから彼らを追い出した自分たちこそが、その手で過去に終止符を打たなければならぬ。

それでも、そんな我儘のような想いで民衆にこれ以上負担をかけるわけにはいられないのだ。

だからこそと、苦汁を呑む思いで願いを託そうとした彼に、サラは——。

「だが断る」

「……は？」

話の流れをぶつた切るように、完全拒否の四文字を口にした。

どう考えても提案を受け入れられる形だったはずなのに、空気を読まず断つた彼女。

その大胆な断りの言葉に、思わずフィンは顔を上げた。

「えつと……何故だい？ 今の彼らを止められるのは君だけ、今のはそういう話だったはずだ。そして、彼らは君の邪魔をする。それなのに手を出さないと言うのは、矛盾していないかな？」

「しておらん。そも、連中ももう妾の前に姿を現そうとはせんじやろうし。……先の一合で妾があやつらの技量を読み取ったように、向こうも妾の力量を理解したはずじゃ。それなりの頭があれば、態々こちらの逆鱗を撫でるようなことはしまい」

自らの頭を横からコツコツと指で叩いて、暗に「そこまで頭の足りておらん連中ではなからう？」とサラは問う。

「そしてこちらからあの二人を探し出すのもそれなりに手間がかかろう。そこに手間暇をかけるより先に、妾には満たすべき皆の腹が待つておるのじゃ。……そこに火の粉が襲い来るものなら払おうが、そうでなければ放置じゃな。よつてあの二人の討伐は自然、お主らの手に委ねられようて」

「……しかし、彼らが君の手の届かないところで民衆を虐殺する可能性もあるだろう。そちらの犠牲については許容するつもりかい？」

「いや、それは無かろう。なにしろ連中には、弱者の血の臭いが染み付いておらなんだからな」

「それはどういふことじゃ？」

サラの放った言葉の意味をすぐには理解できず、ガレスが問う。

血の臭いと一言に言っても、ザルドやアルフィアには相当数染み付いているはずだ。

いずれも若くしてレベル7に至った強力な元冒険者となれば、自然、多数の魔物を討ち取ってきているに違いない。

その中で血の臭いの云々を語られても、それが何を意味しているのか彼にはさっぱりだった。

「あー、妾はとある理由で血の臭いに敏感でのう。あの時一撃を交わすついでに連中の血の臭いを嗅いだのじゃが、濃厚なその臭いの中には一般に庇護されるべき民衆のものが混じっておらんんだということじゃ。連中から香ってきたのは全て、イコル神血の混ざった冒険者の臭い……つまり、その手で市井に危害を加えてはおらぬと妾は見ておる」

そのサラの提言に、二人は意外そうに顔を突き合わせた。

そして、これまでに齎された報告を今一度思い起こしながら精査して……彼女の言いつの裏付けを取る。

「……確かに。言われてみれば、あの二人による直接的な市民への被害はまだ報告されていないね」

「昨晚の動きもそうじゃった。我々にばかり構い、逃げ惑う市民を闇派閥らしく襲おう

とすれば良いものを、そうはしておらんかった。奴らが相手取っていたのは冒険者ばかり……見落としておったか！」

オシリス・ファミアなど古参の悪派閥イザイルスと対峙し続けてきた歴戦の彼らならば、当然その手口も熟知しているはず。

より効率的に、冒険者を虐げる術……まず統制のままならぬ弱者民衆を脅かし、危機を煽って、慌てふためく彼らを守ろうとして冒険者が弱点を晒した所を容赦なく叩く。

しかし昨晚の彼らの戦い方には、そのような卑劣なものは見出せなかった。

ガレスたち主力の戦いを傍から見ていた配下からの報告にも、そのような所見は記されていないかった。

「てつきり、僕らに追い出された恨みつらみから身も心も『悪』に屈したものだと思っただけだ……そうじゃない？　もしかして彼らには彼らなりの、また別の意図があるのか？　僕たちと【神々の給仕ゴッスブライド】のような……？」

そうなれば、とフィンフィンは新たな切り口を得て回り出した頭で考え直す。

敵の動きの前提となる目的が覆るのならば、作戦も大きく組み直さなければならぬ。

彼らのこれまでの動きから、目的を改めて推察し直し、その行動を再び想定する。

サラから提供された思いがけない視点によって以前の思考を破却せざるを得なく

なったフィンの青眼から曇りが払われて、そこに光が戻る。

「やもしれんな。もし妾の読みが外れ、連中がこの目の前にこのこと姿を現した暁には勿論その魂ごと殺してくれるのじゃ。しかしそうでない限りは、妾からあやつらに手を出すことはない。その点を踏まえて、考えを改めることじゃな」

「……ああ。だけど、ちなみにもし他の連中が避難所に来た場合は——」

「分かつておる、その時はばんばん血祭りにあげてやるのじゃ。衛生観念的にはよろしくないのじゃがな、仕方あるまいて。——ああ、そつちに人的資源リソースを割り振る代わりに、妾のいる時に護衛はいらんど。つまり、こちらを餌にして愚か者を寄せ付けるくらいは許容するのじゃ」

「……すまないね」

一瞬フィンの頭に過ぎった、『集う民衆を囿イウイルスにして悪派閥を誘い出し、サラに始末させる手法』。

それを読んだ彼女によって先に肯定されてしまって、彼は申し訳なさそうにしながらも苦笑した。

最も頼りたかった所については拒否されてしまったが、それ以外の所では協力を惜しまないでいてくれるサラの姿勢は指揮官として実に好ましいものだった。

「構わんのじゃ。ただし、こちらからも報酬を求めようぞ」

「なんだい?」

「お主、小人族バルウムの復興を目指しておるのじやろう? ならば当然、その文化にも精通して

おるはずじやな?」

突然発された「勇者ブレイバ」の成り立ちに係る話題について、目を丸くしながらもフィンは

頷く。

「それはもちろんだけど、それがどうかしたのかい?」

「そこに小人族秘伝バルウムの調理法レシビなどがあれば妾に提供して欲しいのじや。妾の崇高なる理想のためには古今東西の料理を蒐集する必要があるのでな、しかしまだまだ足りんものが多い。小人族バルウムと言えばかの女神の原型となった女傑フィアナも好んだとされる

【勇気オーデイルを謳オードう縁起卓ブルズ】じやが、前に手に入れた書籍にはその一部しか載つとらんくてな

……」

「——フィアナ騎士団でここぞと言う時に食されていたと言われる、大一番前の陣中食のことだね! へえ、良く知ってるね。……うん、生憎と僕自身が作れるわけじやないけれど、それに係る騎士フィアナの手記をこの間運良く手に入れたばかりなんだ。戦いが終わったら、『豊穰の女主人』までその写本を届けさせよう。これで満足かい?」

「それは真か!? ふっふーん、もちのろんじや! よかろう、ではその点くれぐれも忘れるでないぞ! 食の恨みは海より深く、山より高くつくからのう!」

「心得ておくよ」

交渉を終えた二人は笑みを交し、がっちり固く握手を重ね合った。

互いに文化を尊重する者同士の無言の通じ合いが、そこにはあるのだった。

そこにまったく踏み込めなかったガレスが、固く結んでいた口を開く。

「何だか知らないが、話は纏まったようじゃの」

「知らないだつて？ ガレス、それなら是非君にも教えてあげないとね」

「うむ。かつて騎士ファイアナに必勝を期して捧げられた、慎ましけれども力の漲る十五の素材から成る決戦食。その名の通りの前菜にしてはやや重すぎるとの記録が後のエルフの吟遊詩人の歌に残されておるが、一説によればそれは主皿メインをこれから平らげる敵に見立てるという意味合いも込めて、それだけで戦場に向かう騎士の腹を満たし完結し得る皿群コースとして構成されたとも……」

「知らんと言つとるだろうが！ そうではなく！ 今はそれよりも、肝心のもう一つの話をせんか！」

急に目を輝かせ始めた一人目フィンと、聞いてもいない知識を披露し始めた二人目サラ。

そんな馬鹿二人に対して、ガレスは叫びながら悟った——この二人は揃って、下手に噛み合おうと途端に面倒臭くなる性格タイプの厄介者ツラであると。

放つておいては話が変な方向に拗れていってしまうと、彼は敢えて声を荒げて話を本

筋に戻した。

「おつと、そうだね。……それで、君の能力の方については教えてもらえるのかな？」

「……むう、そうじゃな」

正気を取り戻したフィンの問いかけに、ここまでは素直に話に応じていたサラの口が途端に籠る。

「妾としては伝えて構わんと思う、じゃがのう。ちょーつとばかり色々あつての、ややこしい話になりそうじゃし……なににより、そこまでの許しをはつきりとは得ておらんからの。はてさて、どうしたものか……？」

「もちろん、君の意志を損なうようなつもりはない。無理なら無理とそう言ってくれればいいんだよ」

「無理、ではないんじゃない。妾だけでは判断を付けられんと言うか……うむむ」

——彼女が頭を悩ませている、どこまで自身の事情を明かすべきかについて。

クレス曰く「いざという時には迷うな」とのことだが、それで実際、なにが大丈夫でなにが駄目なのか、具体例までは示されていなかった。

うんうんと唸る彼女に、フィンは言葉を重ねる。

「それならひとまず、レベルくらいならどうかかな？」

「レベル？　んー、まあそれもぶつちやけ微妙なところなんじゃが……」

「――邪魔するぞ【勇者】」

そこへ、一柱の神が介入してきた。

よく火に焼けた褐色肌を持つ、逞しい老人の姿をした神。

その名を、ゴブニユと言う。

「神ゴブニユ？ どうしてここに。御身は眷属と共に武器を作られていたのでは？」

「その材料が尽きたから相談しに来た。今は人手もあると聞く、迷宮に素材の回収部隊を派遣できんかと思ってな」

後方支援系ファミリアの要の一つたる神からの依頼に、フィンクエストは一時サラとの話を中断させて向き直った。

「……うん、了解した。編成はこちらで決めて出発させるから、そちらからは神へファイストスの所と併せて必要になる素材の一覧を提出して頂きたい」

「良いだろう。ならば速やかに作成に――」

「――そうじゃ、神ゴブニユ！ 思い出したのじゃ！」

ぼん、と名案を思い付いたように手を打って、サラがベッドから飛び上がった。

彼女は退出しようとしていたゴブニユの元へ駆け寄って、その困惑する手を取って頼み込んだ。

「我が主の言う、地上で信頼できる数少ない神の一柱じゃな！ お主ならば恩恵開示ステイタスの

相談にも乗ってくれると見た。——実はの、今こやつらに妾の能力をどこまで明かすべきか考えておるのじゃが自分ではうまく判断がつかなくての。ぜひ御身に相談に乗ってほしいのじゃ！」

「何を突然……?」

いきなりの、何の脈絡もないサラのお願いにゴブニユは眉間に皺を寄せた。

しかしその目が彼女の影に向けた途端、彼の眦が鋭くなる。

「この気配……もしや、【86式連結式^{レギンレイザ}葬槍】か」

「む、気づかれたか。流石の慧眼じゃな」

サラが自身の影から魔槍を引つ張り出して手渡すと、ゴブニユはその手に持った刃をじつくりと確かめるように眺めた。

「これを保有しているということは、そうか。アレの関係者なのだな」

ここにフィンとガレスという部外者がいる手前、迂闊にクレスの名前を晒すことは止めておいた方が良さだろうと判断したゴブニユの問いにサラは首肯を返した。

それを受けて、退出しかけていた彼の足が方向を変えて部屋の中に戻る。

「よかろう、そちらの事情は少なからず聞き及んでいる。見せてみるが良い」

「うむ、ではよろしくなのじゃ」

ぱっ、とベッドに寝そべって服の上を脱ぐサラ。

その背中に刻まれた刻印の中身を、側に座ったゴブニュが神血イコルを垂らして読み解く。

「……これは」

「神ゴブニュ？」

暫し興味深そうにじつと見つめていた老神にフィンが催促する。

それを受けて彼は、蓄えていた髭の隙間から言葉を選ぶようにゆっくりと話し出した。

「この娘の恩恵は少々特殊だ。それで、どこから話すべきか」

「御身の眼からして問題なさそうであれば妾は構わん。どこからどこまで公開すべきか、全て委ねるのじゃ」

「そうか。では……名前はサラ・ブラッドルーラー。レベルは——『0』ゼロ」

「レベル0!？」

それを聞いたフィンたちは、早速驚かなければならなかった。

レベル0。ゼロ

それは彼ら冒険者の最低となる『1』すら下回る、前代未聞のレベル。

初っ端から飛ばしてくるサラの恩恵に彼らが口をあぐりと開ける中、構わずゴブニュは続ける。

「しかし、基礎能力値ステイタスは……そうだな。実質的にはレベル10を超えている、と言ったと

「ころか」

「レベル10だつて!?」

そして述べられた補足と言う名の更なる爆弾に、フィンとガレスの表情が崩れる。

レベル10。

それは【暴喰^{ザルト}】と【静寂^{アルファ}】の属していたゼウス及びヘラ・ファミリアの両団長でさえ

ついには達しなかった、二桁台。

魔法とスキルの組み合わせ如何によつては疑似的に辿り着くことが出来るかもしれないその境地に、サラが達しているという事実。

まさかゴブニュがここで嘘をつく理由もなく、彼らはまたもや空前の驚愕に襲われることになった。

だが、それはまだ終わらない。

「後は、そうだな。スキル【海魔^{サラダ・アスケデシヤ&テンフルーツ}保夜と十果の冷製和物】、効果は『対精神：食欲増進』及

び『軟体生物の調理特攻』と、『果実を扱う際の器用度上昇』」

「……………は?」

「そして魔法、【ビスク^{七海}・テ^蠟・セットクルウ^{不捨}エツト^{吸腕}】。効果は『対象の旨味を余さず抽出す

る』(ことと、『対舌感：味覚活性』」

「……………はあ!?!」

更に聞いたこともなければ中身の意味も理解できないサラのスキルと魔法に、「訳が分からない」と言った様子を露にするフィンとガレス。

一方のゴブニユの顔は顰められていると言うよりも、どこか呆れているようにも見えた。

「このようなスキルと魔法が合わせて八つ。この組み合わせ、最初は何かと思ったが……他の名から察するに、さては『フルコース連膳餐会』か？」

「その通りじゃ。ふふん、素晴らしからう」

やがて背景に宇宙を背負った猫のような顔をするフィンたちに対して、横目を向けたサラは自慢げに答える。

「妾にとって、『食』こそが生の全て。全ては食に始まり食に終わる。一般に礼節の根幹を為すと言われる衣・食・住のうちで、『食』こそが最も尊ばれるべき至高にして究極の理よ。故に我が望みを映し出す恩恵に我が人生のフルコースが載るのは当然の論理と言えよう、のう？」

「……らしいよ、ガレス」

「……訳が分からなくて、フィン」

さも当然のように持論を語るサラに、二人は返す言葉を持っていなかった。

否、持てなかつたというべきか。

「なんだ、レベル10って。……いや、それはまだ分かる。

「しかし、スキル【サラダ・アスケデシヤ&テンフルーツ「海魔保夜と十果の冷製和物」とは。

「そして、魔法【ビスク・テ・セツトクルヴェットとは。

それは……それらは一体、なんぞや？

二人は自問を繰り返し、やがて答えを放棄した。

彼らは答えを得る代わりに悟った……「これ、もしや深く考えるだけ敗北まげなのでは？」と。

「——分からないけれど、分かったよ。ともかく、あの二人を彼女が超えているのだけは理解出来た。感謝するよ、神ゴブニュ」

「構わん。儂も久々に興味深い……そう言つて良いのかはお主らと同じく分からないが、ともかく珍しいものが見れた。ここ最近はつまらんことばかりを考えてその通りの剣を打つばかりだったが、今ならば面白い武器の一つも打てそうだ」

それだけ言つて、ゴブニュは役目を終えたとばかりに部屋を去つていった。

残されたサラが上体を起こし、着直した服のボタンを閉じて軽く背を伸ばす。

「さて、もう良いじやろ？ では、妾はここを借りて暫し寝させてもらうのじや。お主にもああ言つた手前、まったく寝んわけにはいかんのでな」

「そ、そうだね。おやすみ。良い夢を……」

「うむ、お休みなのじゃあ……」

再びバタンとベッドに倒れて、そのまま鼻息を立て始めるサラ。

その潔い就寝を傍目に、フィンはガレスとたった今耳にした内容の扱いについて討議する。

「……とりあえず、最低でもリヴェリアには開示しよう」

「そうじゃのう。あやつも道連れにするのは当然として、ロキにはどうする？」

「彼女と話した後で決めよう。恐らく明かすことにはなるだろうけれど……その後で話すことになる他フアミリアへの開示については悩みどころだね。いずれにせよ、僕も疲れた。日頃の精神疲労^{ストレス}に最後の最後でどつとトドメを刺されたような気分だよ。少し寝させてもらうから、暫くの間はよろしく頼むね」

「……終わったら僕も交代で寝ようかの。というか、寝なければやつとられん気がひしひしとするわい」

サラの隣のベッドに横たわったフィンが夢の世界に旅立つのを見送って、ガレスは今も緊張を緩めず己が役割を果たさんとしている部下たちの元へと戻っていくのだった。

それから少しして、こっそりとサラが身体を起こす。

「さて、これであの二人が妾が確かな睡眠を取っておつたと証言してくれることじやろうしの。ではサラバじゃ、サラ・ブラッドルーラー^{レギュラー}は華麗^{ビューティ}に去るのじゃ……とな。ふは

はっ」

部屋の窓から外へ秘かに飛び出した彼女は平然と周囲の心配を裏切り、人知れず餓える誰かの元へ向かうのだった——。

バベル内の階段を昇り、同じ鍛冶神の元へ向かうゴブニユはふと呟く。

「世は神時代、未知なる英雄を求めて探求する時代……。言わば〔偽典：人之恩恵〕——人が魔物に『神の恩恵』を刻むことも、また神々の望む下界の奇跡の一つか……。？」

今は遙か地の底に在るであろう馬鹿弟子を足元に見下ろしながら、彼は小さく口の端を歪めた。

——だとしても、もう少し手心を加えなければ最高神の胃痛も収まらぬだろうに、と。

なお、政治に関わる気はないゴブニユ当神は「面白いしまあ良いんじゃないか」と、自身の鍛冶にこの発想が活かさないか呑気に考えており、それが紆余曲折の果てにとある白兔のナイフへ反映されるのは、また別の話である。

眞の心を引き出す（サラ視点）

サラが吹かせたオラリオ側にとつての神風は、確かに侵攻する闇派閥の頭数を大いに消耗させた。その結果として、街の被害はフィンたち首脳陣が当初想定されていたものよりもかなり小規模に留められ、多くの人々は命あることの喜びに湧いていた。

しかし、本来救われる運命になかった大勢の者が救われた、その一方で。

救われずに失われた少数の命が存在するのもまた、誤魔化しようのない事実だった。

彼女の尽力があつてもなお、冒険者たちの手から零れ落ちてしまった闇派閥の犠牲者たち——その家族は、友人は、恋人は、大事な人を失った彼らは、その他の助けられた人々とは真逆に……強い怒りと、そして悲しみを孕んでいた。

——何故、あれだけ多くの人々が救われた中で、私たちの愛する人だけが救われなかったのか……と。

周りでは、運よく救いの手が間に合った人々が無事や再会を祝して抱き合っている。

ああ、それは確かに素晴らしいことだろうさ——でも、私たちは？

その輪に加わることの出来なかった彼らは自然、手を取り合う相手のいない孤独に苛

まれ、幸運に恵まれた他人の空気には加われないことの疎外感を抱いて。

心中に底知れず湧く、負の衝動を向けるべき先を探して……その暗い瞳の向かう先に、彼女たちを見つけた。

アストレア・ファミリア。

正義の剣と天秤を掲げる、誰もが認める公的な民衆の守護者。

——そして、自分たちの平穩守ってくれなかったを守れなかった、裏切者。

その黒く塗り潰された激情を、一休みしようと帰路についていた彼女たちを取り囲んだ彼らは、喉の奥から迸らせる。

「なんで私たちの大切な子を救ってくれなかったの!? あの子を、あの子を返してよ……!」

「どうして、僕のお母さんは避難所ここにいないの!? 探してよっ、お母さんは、僕を守ろうとしてあの時……うわあああっ!」

「俺の妻は、お前らの手が届かなかったからッ……! なんなんだよ、冒険者つてのは、俺たちみたいなどうでもいい一般人には手を差し伸べてくれないってのか!」

——自分たちは……自分たちの隣人は、助けてもらえなかった!

——他の連中は、助けられたのに!

滾る感情を、どうしても抑えられなくて。

弱い民衆自分たちとは違う、強い冒険者の彼女たちにならぶつけても大丈夫だろうという思い込みから。

被害者たる彼らは次から次へと、噴出する悲嘆を憎悪の炎へと転化して、アストレア・ファミリアの面々にぶつける。

それどころか、彼らは叫ぶだけ叫んで喉を痛めたかのような素振りを見せたかと思えば、そこで追及を止めることなく、今度はそこらに転がっていた石を拾って、彼女たち目掛けて腕を振りかぶる。

その八つ当たりを、ファミリアの顔役団長としてアリーゼは甘んじて受け入れようと決意した。

「——ごめん、なさい……貴方たちの大切な人を、守れなくて」
年若い彼女自身、まだ整理のついていない悔恨の念と。

その他諸々の私情を押し殺して、これで少しでも自分の責任が果たせるのならば……と。

彼女は自ら進んで頭を下げて、救われなかった民衆の批判サンドバッグの矢面に立とうとした。

だが、彼女の身に降りかからんとしたそれら一切の物理的な責め立ては全て、突如としてその場に姿を現した影によって撃ち落とされた。

「間一髪のところまでセーフじゃな。まったく、そこまで自己犠牲を尽くすのは逆効果

じゃぞ。あまり他人を甘やかすでない」

かけられた、呆れを含んだ言葉にアリーゼは顔を上げる。

彼女の前に盾のようにして立っていたのは、フィンとの仮眠の場からこつそり抜け出してきていたサラだった。

彼女はちやうど、未だ避難所に辿り着いていない民衆にも食事を分け与えるべく奔走しようとしていたところだった。

そこで偶然にも民衆とアストレア・ファミリアとのひと悶着の場面を捉えてしまい、続く暴拳を見過ごせない出張ってきたのであった。

「貴女は……えっと」

「サラ・ブラッドルーラー。『豊穣の女主人』の、ただの一ウエイトレスじゃ。そして」

サラはアストレア・ファミリアを守るように立って、彼女らに非難と怒りを向ける民衆たちに向けて口を開く。

「話は聞こえておった。その上で、妾が問おう。——お主らの中で、真に「この娘らが悪い」と思う者はおるのか？」

「……」

「……」

「……」

「己の悲しみが、怒りが。……己に降り注いだ不運の責任が、この娘たちにこそ帰するのだと。本当にそう思っている者だけが、その手に持った石を投げてみせよ」

彼女の言葉を受けて、それ以上石を投げようとする者は果たして。

民衆は互いに顔を見合わせ——そして、メドゥーサの石化攻撃を食らったかのように、石を投げる腕を止めた。

「そうじゃ。お主らも分かかっておるのじゃろう？ この娘たちは昨晚から今この時に至るまで、文字通りその身を削って奮闘しておったのだとな。この泥だらけで血塗れな姿を見れば、全身全霊を尽くしてこの都の端から端まで必死に駆けずり回って、一つでも多くの命を拾うべく戦っておったことは一目瞭然じゃろうて」

諭すような口調のサラに、彼女らを取り囲んでいた民衆の中からそれでも、と声が上がる。

「娘はっ……！ 一度はこの人たちに救われてっ……それでも結局、助けられなくって……！」

「なるほど、お主が失ったのはやや子か。——それで。「だから石を投げる」、と。そう、言うんじゃない？」

ゆつくりと、その言動の正当性を問い直す彼女。

それを受けて、母親はうつ、と言葉を詰まらせて……泣き崩れた。

——そう、本当は分かっているのだ。

いくらアリーゼたちを責めたところで、娘が戻ってくることはないのだと。

目の前の乙女たちを含む冒険者たちは誰もが、全霊を賭して戦いに身を捧げているのだと。

——それなのに、無意識のうちに彼ら冒険者は強いんだからと言い訳して、理不尽な嘆きを訴えている自分たちの姿は、失った家族恋人に到底顔向けできるようなものではない、恥ずかしいものなのだ……。

「その様子からして違うようじゃな。良かったのう、後に後悔を呼ぶ行為に及ばずに済んで」

長きを生きるサラは、彼らの心を彼ら以上に理解していた。

「努力の結果、救われないものがあつたのは紛れもない事実。

そこに瑕疵や手抜きがあつたのであれば、責任を問うのも然るべき行為と言えよう。

しかしそれが、最善を尽くしたものであるのなら、それ以上を求めようとするのはお門違いなのだ」と。

この場集つた彼らは、心の底では理解しているのだ——と。

——だが、それでも言わずにはいられない。

発散せずにはいられない、この感情はどうすれば良いのか？

彼らの間に漂う、向けるべき先の分からない気持ちについて、サラは介入したものの責務として答えを示す。

「——さあ、食うのじゃ」

側にいた夫に支えられる母親に、サラがどこからともなく取り出したシチュー入りの器を差し出す。

彼女は首を横に振り、素振りで「要らない」と訴える。

娘を失った今は、とてもじゃないがそんな気分にはなれないと。

しかしサラはそんな彼女の固く閉じられた口を強引に開いて、その中に具を乗せた匙をぐいっと突っ込んだ。

「はむっ!? —— 熱うっ!?」

とろみのついたミルクコンソメと、ちよつとばかり焦げ目のついた肉団子。

湯気を立てる熱々のそれを口の中に押し込まれ、母親は慌てながらはふはふと嘔んで、ごっつくんと呑み込む。

いきなりの暴挙に彼女はサラへと怒りを露にしようとするが……その前に、シチューの熱が胃から次第に身体の芯に伝わって、悲しみに暮れて冷たくなつた彼女の心を溶かすように温める。

昨晚の襲撃によって子を失い、既に涙が枯れかけていたと思われていたその瞳から

……頬にかけて、一筋の小さな軌跡が零れた。

「——美味しい……」

「そうじゃろう。悲しみで腹は膨れぬ。まずは食え、食べて腹を満たすのじゃ。さすれば、己が今後取るべき未来も自然と見えてくるはずじゃ。——お主らもな」

「はぐっ!!」

「むもっ!!」

「んぐっ!!」

その光景を眺めていた他の民衆もまた、気づけば石の代わりに器を握らされて、その口の中で旨味を味わっていた。

肉と野菜と香辛料……様々な味が溶けだした、母のぬくもりのように柔らかな味わいのシチュー。

それがゆつくりと、されど着実に。

彼らの罅割れた心に染み渡って、石を投げることなんかよりも大きく深く、そして優しく、傷を慰めていく。

「……ねえ、今の動き、誰か見えた?」

「生憎と。私には見えませんでしたねえ」

「アタシの眼にも一切捉えられなかったんだが……団長でさえ無理つてなると、最低で

もレベル5の上位以上だぞ。それでやることがアレかよ……いや、確かに凄えが、どうにも締まらねえ気分だぜ……」

サラの見た少々強制摂食行為乱暴な挙動にこっそりとドン引きするアストレア・ファミリア一同。

そんな彼女らの様子もお構いなしに、サラは民衆へと語り掛けた。

「どうじゃ皆の者。美味かろう？——美食は怒りを鎮め、目に見えぬ心を癒してくれるもの。そして次なる自分を導くエネルギーを、その内に蓄えてくれる。いかに食欲が失せようと、それだけは覚えておいてくれると妾は嬉しい」

最初は無理矢理食べさせられた食事に、彼らの手は自然と次を求めて伸びる。

そして食べていく内に、彼らは自覚する——目を逸らしていたもう一つの事実に、改めて向き合われる。

彼らが知っている者の命を救われなかったことを嘆くその目の前で、手が届かなかつたことに嘆きの光を写す彼女たちの瞳があつたことを。

必死に手を伸ばしても、それでも届かなくて。

失った命に対してその場で嘆きたい気持ちや懸念に堪えつつ、それを押し殺して次の現場へと向かう、彼女らの強い覚悟の灯った瞳を、彼らは確かに知っていたのだ。

そんな彼女たちに過剰な責任を問うてしまった恥を噛み締めながら、彼らは腹を満た

す。

その光景を見守っていた彼女たちの口にもまた、いつの間にか匙が突っ込まれていた。

「何を他人事のようにしとるか。お主らもじや、食え」

「えつ、ちよつ——!？」

「なにを——!？」

「うおつ——!？」

旨味の暴力が、否応なしに彼女たちの舌にまで襲いかかる。

サラはそこにしれつと塩コシヨウを一つまみ増やして、疲労困憊の舌にも味が伝わるよう細やかな配慮をしていた。

しかしそんなことはもちろん知る由のない彼女たちは、まさか自分たちに向けられると思っていなかった口の中の熱さに慌てながらも、それをなんとか味わい呑み込む。

「——つ、美味しいわね！」

「——むう、この大胆かつ繊細な味わい……故郷の料理人にも勝るとも劣らない腕前か……!？」

「——へえ、こりやイケるな！」

素直に称賛を口にするアリーゼ、輝夜、ライラ。

民衆と同じように、疲れ切っていた彼女たちの心身にもサラのシチューは染み渡っていく。

それは、いつの間にか口元を覆う布を下げられて匙を啜えさせられていたりユーも同じだった。

「……これは……温かい——っ」

ほろりと涙を流し、一口目を呑み込んだ後、彼女の身体が崩れる。

張りつめていた緊張の糸が緩んで、追いついてきた疲労に肉体が耐え切れなかったのだろうか。

すかさず彼女の分の器をサラが回収し、輝夜がその身体を受け止める。

「ふん、青二才め。ここへ来て限界が来たか……すみませんねえ、お恥ずかしい所をお見せして」

「構わんよ。気絶するほど美味かったということじゃろう？ ならばよし、じゃ。」

「ええ、本当に美味しいわ！ アストレア様にも食べさせてあげたいくらい！」

「む？ アストレアとな？ その女神にならばもう食べさせたぞ。避難所で食欲の湧かぬ当初の民草に向けて、ここに旨い飯があると見せつけるサクラとしてな。無論次のご来店約束も取り付け済みじゃ！」

そう良い笑顔でサムズアップするサラの手を、アリーゼがぎゅつと両手で挟み込むよ

「そのようでごさいますねえ……もはや止められない暴走機関車というやつですか、これが」

輝夜もまた、ライラや他の面々とあわせて薄く笑う。

ただし、そこに浮かんでいたのは彼女がよく使う敵方へ向ける嘲笑ではない、大切な仲間を重んじる年相応の少女らしい可憐なものだった。

ここ最近は嫌^{エレボス}な神にいくわしたりと嫌なことばかりだった彼女の心に久々に差した、昼下がりの穏やかな日の光の如き料理^{シチユイ}……それは魔法や剣などよりもよほど強く、人の真心というやつを引き出すのだと、サラはアリーゼと語りあいながらひっそりとほほ笑むのだった。

神意を食らう悪意、それを食らう熱意

——迷宮ダンジョンが哭ないでいる。

その狂わしくもどこか愛おしい嘆きの声を、第201層の拠点にてクレスは聞いていた。

次なる冒険へ向けて支度を整えていた彼の耳が捉えた、言葉にならない迷宮ダンジョンの絶叫。

「この声、久々に聞くな。それに先ほど感じた力の波動とくれば……神が迷宮ダンジョンに侵入したか」

迷宮ダンジョンは、生きています。

地上では嘘や幻と呼ばれ、一笑に付されるその言説を、彼女の中で長年過ごした経験からクレスは事実だと悟っていた。

そして、迷宮ダンジョンが神々を執拗に恨んでいることも知っている——連中が己が体内に侵入を果たすものならば、決して取り逃がすことなく喰い殺して、あわよくば取り込んでやろうと、殺戮を司る子供モンスターを抗体の如く産み出して差し向けるほどに。

胎動する迷宮ダンジョンの悪意。

それが発露した暁には、迷宮ダンジョンは神を殺害し得る絶死の牙を即座に孕み、そして刹那の内に産み落とす。

聞こえないまでも、クレスは確信した——その産声を。

同時に彼は、それまで荷物を詰め込んでいた背バックパックを置いて、拠点の一角に目を向ける。

「……そう言えば、切らしていたな」

クレスの視線の先に安置されているのは、それを地上オラリオの者たち……特に鍛冶師や魔道具作成者が目にすれば、一瞬で目が灼けてしまうほどの金銀財宝——すなわち、『深々層』産の素材たち。

その中で残量が心許なくなっている一部の棚に目を向けた彼は、思い立ったが吉日とばかりに、用意していた荷物とはまた別の武器を取りに向かった。

「ちようどいい、未攻略域に取り掛かる前の肩慣らしだ」

普段であれば、上層で何が起きようが彼の与り知ることではない。

モンスターによる大量虐殺が起きようが、はたまた悪派閥イヴェルスによる大規模破壊が起きようが、彼の攻略する階層にはなんら影響がないから。

だが、迷宮ダンジョンが産んだ、神さえ殺し得る異形モンスターの素材の力——それは彼にとって数少ない、上層に目を向ける理由に成り得た。

埃を払った武器が覗かせる、朱色の穂先。

その刃に錆び付きがないことを確認して、軽く振り回し調子確かめる。

「……さて、一狩り行くか」

悪派閥側につく災神ルドラによって招来された迷宮の悪意——『大最悪』。

盟友たる邪神エレボスの提案を受けて彼が眷属と共に人造迷宮より侵入し、第37層

にて神意を解き放ったことで、怒れる迷宮が誕生させた『終焉の黒き蛇』。

それは母の命令を受けて、神を喰い殺すべくほぼほぼ一直線に地上を目指し邁進していた。

堅牢な壁を容易く突き破り、分厚い天井に豆腐の如く穴を開け、母より与えられた純粹なる漆黒の意志を全身に漲らせながら、尋常ならざる速度で瞬く間に階層を踏み越える。

そしてフィンの思惑通り、第18層『迷宮の楽園』において、アストレア・ファミア及びロキ・ファミアの連合軍に迎え撃たれる。

——そのはず、だった。

しかし、ここにモンスター知らぬ例外がいた。

現状のオラリオの最高戦略たる「勇者」^{ブレイバー}が、己より強いと評したサラ・ブラッドルーラー。

その彼女が「主様」^{あるじさま}と呼称する、迷宮の最先端を走る者。

『禁』^{アンタツチャブル}「忌」^{イヴイルス}たるクレスが、悪派閥、英雄の都、そして神々の——全ての思惑を狂わし覆す。

『——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

「見つけたぞ」

自身の存在を隠そうともせず爆走爆進する、蛇とも人ともつかない異形の怪物。

同じく迷宮^{ダンジョン}の怒りの具現たる『破壊者』^{ジャガーノート}とは異なり、俊敏性や魔法^{ミミ}反射能力^{ライコート}は持ち合わせてはいないが、それらを補って余りある膂力を与えられた化物。

その目の前に転移したクレスが、宣言する。

「悪いが時間をかけるつもりはない。一撃決殺、加減は無しだ」

突如として進軍先に出現した矮小^{ニン}な存在^{ゲン}を、『大最悪』^{テルピユネ}はその体格を以て一息に押し潰そうと襲い掛かった。

しかし、それより一手早く彼が放った左手の緋々色金の槍が、的確にその左目を貫いていた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ
!!!???』

ダンジョン
母より与えられし破格の肉体^{からだ}。その性能を以てでさえも捉えられないクレスの左腕の動きによつて片目を潰され、『大最悪』^{テルビユネ}は激痛に思わず足を止めてその場でのたうち回った。

その身に母の囁きが伝わる——案ずるな、その身はすぐに治るのだと。

『自己回復』。

ダンジョン
迷宮が特別に産み落とした個体であれば大抵所有している能力を、この個体もまた当然のように保有している。

ならばと『大最悪』^{テルビユネ}は暴れるのを止めて、眼球に突き刺さる小癩な、その巨体からしてみれば爪楊枝のようにも見える槍を引き抜いて回復に備えようとする。

しかし、抜けない。

かつて幾度となく『大最悪』^{テルビユネ}と交戦した経験のあるクレスの施した仕掛け——穂先が得物に食い込んだ瞬間に数十の鍬となつて分裂し、返しとなる機能によつて、槍は

『大最悪』の眼に深く食らいついていた。

『オオオオオオオオオオオツツ!!?!?』

それならば仕方がないと言わんばかりに、眼球の再生を諦めた『大最悪』^{テルビユネ}が歩みを再開しようとする。

己の眼に走る痛みなど二の次。そんなものよりも、永きに亘つて母を虐げる神どもを

抹殺する崇高な使命こそが重要だと。

母によって与えられた神々への殺意が、左目を苛む激痛を凌駕する。

——嗚呼、なんと健気な息子だろうか。

母を愛する子の献身、それは例えモンスターのものであろうと、確かに称賛されるに相応しいものだった。

最も、それがクレスの攻撃の手を緩める理由にはならないのだが。

そうして再び前を向いた『大最悪』^{テルビユネ}は、クレスが残る右手に構えた『朱槍』を見た。

「視を穿ち、死を穿つ——」

クレスがその手に持つ朱色の槍は、『ネガ・ファトゥム』と並ぶ超特殊武装^{ハイパー・スベリオルズ}だった。

迷宮第200層、階層の九割を占める赤海『厄束の死海』^{カナナ}に住まう海の霸王の亜種^{リヴァイアサン}『ヴィアタン』。その遺骸を削り鑄溶かし、各種超希少金属を混ぜ合わせて精製した至極の呪槍。

その切っ先から漏れ出すは、死してなお虎視眈々と所有者の命を付け狙う『深々層』の呪い。

それに構わず、『大最悪』^{テルビユネ}はクレスに迫る——地上においてミアがサラの真の実力を捉えられていなかったように、『大最悪』^{テルビユネ}もまた槍の性能、及びそれを握るクレスの実力を認識出来ていなかったのだ。

前に入る『大最悪』、対してクレスも躊躇なく前方に踏み込む。

彼の身体を殴りつけようと怪物は前肢を振り振り——それは狙いを外れて、クレスの右後方に着弾した。

隻眼による影響で、遠近の距離感がうまく掴めていないようだ。

そして、それが齎す弊害はもう一つ。

両眼であつた時には相互に視界を補完しあうことで埋められていた、『死角』の存在。

そこに狙つて潜り込んだクレスの右腕、及びそこに握られていた槍が『大最悪』の視界から消失する。

——これにて条件は整つた。

「——『シユレディンガー』……」

此れより放つは、奇しくも『大最悪』の目的とする神殺しの偉業を成し遂げた一撃。

彼の唱えた転移魔法、その手元に小さな魔力の火花が散る。

魔力暴走——死角に潜つたことで魔法の対象となつた朱槍の、存在の約半分だけが

『大最悪』の後方に転移される。

魔法の失敗？ ——否。

今の朱槍は、クレスの握る『大災悪』の前方側に49%、そして『大災悪』の後方側

レスの眼がそれらを捉えることはなかった。

彼の視線の先に映るのは、無慈悲にも存在の八割を血煙として消し飛ばされた『大最悪』^{テルビユネ}。

無論魔石など残っていないようはずもなく、神殺しの魔物の身体はゆっくりと崩れ落ち……息絶えた。

その後方に残された槍が付与効果^{エンチャント}によって、クレスの手元に戻る。

少々あつけないが、これにて『大最悪』^{テルビユネ}の討伐は一件落着を迎えたのだった。

——彼が師の教えと、自らの魔法に潜む危険性を最大限応用した、世界を犯す概念的な毒の槍。

この世界に生きる限り防御不可となるそれは、彼はそう呼ばれることを心底毛嫌いしているが——エレボスに言わせれば、まごうことなき『英雄』の御業だった。

「……たまには使わんと怒られるからな。腕の方も鈍っていないように良かった良かった。さて、楽しい素材回収の時間を始めるか」

『大最悪』^{テルビユネ}の残骸に近づき、クレスは剥ぎ取りを開始しようとする。

一時期、彼は神を連れ込んで神意を強制的^{強制的}に発動させ、出現した『大最悪』^{テルビユネ}等を狩る周回行為を行っていた。しかし残念なことに老神^{ウラニス}によってそれらの行為は一律に禁じられ、^{ドロップアイテム}素材の残量も心許なくなっていた。

そこへ降りかかった予想外の幸運に、彼は喜びながら解体用のナイフを取り出す。

——俺が召喚したのではないのだから、ウラノスも怒ったりしないだろう、と。

しかし、いざ回収に取り掛かろうとした段階で、彼の他に足音が響く。

「……どういふことだ、何故『大最悪』が倒れている？」

「それは俺が倒したからだが」

怪訝な声に振り向いてみれば、そこには一人の少女が立っていた。

喪服にも似た漆黒のドレスを身に纏い、灰色の髪を揺らす淑女。

「誰だ貴様は？——いや」

彼女は『大最悪』テルビュネと違い、クレスの力量を正確に読み取って、閉じていたその目を開

いた。

そこに見えるのは……彼と同じく、左眼を灰色とするオツドアイ。

「ヘラより聞いたことがある。私たちには、遠く、そして近い家族がいるのだと。お前が

——いや、貴方がそうだな。クレス・テラティアリエ、偉大なる太古の英雄よ」

その見覚えのある瞳と、その背中より感じる懐かしい気配、そして何よりその言葉に、クレスは何百年ぶりにか人ととの対面で驚愕を覚えた。

「そういうお前は、そうか。ヘラ・ファミアとなれば……」

「そうだ。我が名はアルフィア」

彼女はそこで言葉を区切り、一息置いてクレスと視線を交わす。

「そして、秘されし家名はテラ・テイ・アリエ。御身の後塵を拝する元冒険者であり、かつて異端と恋に堕ちた、妹君の血を継ぐ者だ——」

「——出来なければ貴様らに次の朝食がないまでじゃ」
 (サラ視点)

クレスとアルファイア——時を超えた血族の邂逅が地下ダンジョンにて果たされた、その少し前。
 地上オラリオの側においても、今まさに冒険者たちと悪派閥イッイルスによる一大決戦が行われようとしていた。

人知れず繰り広げられていた『正義』と『悪』の間答にも一つの決着がつき、いよいよ残るは真の強者同士による実力勝負。

その中でクレスの置き土産ことサラにも勿論、大きな役割が与えられていた。
 五つに別れた避難所の一つたる『円形闘技場アンファイテアトルム』。

「その巨大施設を単身守護せよ」という——誰もが聞く耳を疑うような役目である。

「まったく、今時の小人族バルウムらしからぬ大胆さじゃな。往年の騎士団ここに甦れりといった所かの？ いずれにせよ、妾も言ったことは守らねばのう」

元々「そうしてくれても一向に構わん」とサラが提案していたとは言え、図々しくもその言葉に則って彼女一人に作戦上の『囹』一つを担わせたフィン。

しかし、彼女はそんな【勇者】^{フレイバー}の提案を大らかに受け入れた。

そも、自ら吐いた言葉を引つ込めるほど恥知らずではない、と言うのが一つ。

そもそももう一つの理由は——彼女からしてみれば、オラリオの冒険者は肩を並べる仲間になり得ない足手まといに他ならない。

邪魔な足枷に気を配る必要がない分、逆に気兼ねなく暴れられるというものだった。

「つまりは視界に入る全てが敵と言うことじゃろう？ 見敵必殺、生ける者は見つけ次第磔刑に処し、血を最後の一滴まで搾り取ればよいと。ただそれだけの話じゃな——ふははっ、良かろう！」

そう笑いながら依頼を受諾したサラに、フィンはただ一言「任せたよ」と言った。

一切の余計な要素を省いた、彼女に相応しい申し入れ^{オード}だ。

その強者に対する礼儀を弁えた彼の要請に報いるべく、サラはこれまで着用していた酒場の制服を脱ぎ、クレスの手によって持ち込まれていた本気の装備に身を包んでいた。

——美神に匹敵するとまで謳われる、均整の取れた肢体を余すことなく曝け出す戦装束^{バトルドレス}。

びつちりと肌に吸い付く漆黒の伸縮布地^{ダライツ}を基調として、その上に動きを阻害しない程度の小さな金属片を当てた超軽鎧。その上に同じく純黒のヴェールを被ったその姿は、

花嫁にも暗殺者にも例えられよう。

なお、効果は『装着者を一時的に『夜の国』と同じ環境下に置く』——すなわち吸血種たる彼女にレベルにして+2の応援効果を付与するといふもの。

もとよりレベル18〜19相当の能力値を誇る彼女は今や、単純化してレベル20超の完全体と化している。

どう考えてもオラリオで振るうには過剰火力気味と言えるこの装備を着用することそのものが、フィン(とその手持ちのレシピ)を気に入ったサラの気合の入れようを存分に示している。

至高にして究極。

闇を纏ったと呼ぶに相応しい今の彼女の凜然とした立ち姿は、まさに夜そのものを支配下に置く女王として君臨していた。

……ただ、その闘い易さを追求した結果生まれた、煽情的な雰囲気につられる一部の馬鹿もいて。

「うへへ、可愛いねえサラちゃん！ 是非その姿で俺に寝屋でのご奉仕を——」

「やかましい。神ならばこの局面、もうちつと真面目にならんか。邪魔じゃ、退け」
「もぷっ!!?!」

この非常時に構わず、セクハラを働こうとした男神。

その側頭部を（もちろん手加減込みで）蹴り飛ばし、サラはゴミを見るような眼をく
れてやった。

なお、当神はその視線及び上段後ろ回し蹴りの際に見えた薄っすらとしたとある
食い込みに、「ご馳走様ですっ！」などと戯けた台詞を吐いて飛んでいく始末。

そんな煩惱塗れな神の姿を尻目に、彼女ははいよいよ開かれた戦場の様子を遠くに見据
えた。

イウイリス
闇派閥と冒険者、双方から闇の声が上がって。

まずはオラリオの外周を囲う八方の門が全て破壊され、そこからモンスターたちが雪
崩れ込み、冒険者たちが応戦を始める。

「当然、妾の存在を踏まえた上で作戦を練り直しておるのじやろう。この数日で無い頭
をどのように捻くり回して対策を導き出したのか、見せてもらおうかの。——そら、特
別に妾はここにおると教えてやろう♡」

イウイリス
闇派閥が考えてきたであろう、サラ・ブラッドロー盤外戦力対策。

それを手つ取り早く釣ってしまおうと、敵方に自身の居場所を知らせるべく、サラは
己なりの開戦の鐘ゴングを景気よく……そして盛大に鳴らすことに決めた。

つまりは、例の如く。

開幕即ぶっ放しばである。

『終局告げる序曲の音』
プレリユード・ファイナル

手元に呼び出した螺旋描く大血槍を、サラは近くに見えていたオラリオの東門目掛けてブン投げた。

ギャルルルルツ……チュドツ!!

大気突き破る炸裂音と衝撃波——大破壊を撒き散らしながら放たれた、巨槍の投擲。

それは東門からその先、後方20KMキロメートルほどの大地を軽く抉り飛ばして、そこに完全なる『虚無』を作り出した。

ついでにその場にいた神が運悪く巻き込まれたのか、天へと続く一つの光の御柱がきらきらと立ち昇り始める。

邪神が送還される哀れなその光景を眺めながら、サラはひよいと円形闘技場の外壁の最上部に立つて。

そこへ戻ってきた槍を掴んで手慰みにくると振り回しながら、悪派園彼らに独り問う。

「妾を殺せる手段モノが用意できたのか？ 食の安寧を侮辱せし愚か者どもめ。精々足掻いて、力を見せよ。ただ雑魚を並べ立てるだけでは役不足ぞ……出来なければ貴様らに次の朝食がないまでじゃ」

開幕早々、敵方の用意していた戦力の八分の一をまるっと全滅させた彼女は薄く笑

う。

それは夜空に三日月が弧を描くかの如く——美しくもまた残酷な、自ら処刑台へ登らんとする彼らへ向けた死刑宣言であつた。

……なお、開戦から暫く経つてもサラの下に『悪派閥ほくの考えた最強の対策』というやつが姿を見せる様子は一向にないのであつた。

「暇じゃのー……おかしくないかのー。なんで妾の下に来るのはお主らのような、本当に頭のない連中ばかりなんじゃ？」

そう、眠たそうな顔で嘆息するサラ。

開戦から二時間——その周囲には、数にして三十ほどの悪派閥イザイルスの礫姿が連なつていた。

他の戦場の規模からしてみれば、あまりに少なすぎる死体の数。

「上官の命令にもろくすつば従えぬ馬鹿しか来んとは。つまらぬ、あまりにもつまらぬのじゃ」

彼女が聞き込みと言う名の拷問を行ったところ、どうやら敵の首魁の一人たるヴァレットは「どうせ行つても無駄死にだろーが」と、特記戦力たるサラの所に半端な雑魚

を送らない方針でいたらしい。

しかし何処にも上司の命令に従わない半端な反骨心溢れる愚か者はいるもので、そう言った連中がちまちまとやってきては、サラの指の一振りでも立ち並ぶ墓標の列に加わるだけ——ぶつちやけ、他の戦場で繰り広げられる喧騒に比べて彼女の守る『アンファイテアトルム円形闘技場』の周りはあまりに退屈で安穩としていた。

「積極的に手を出すつもりがないとは言え、こうもガラガラじゃと流石にのー？　ぬう、こうなると分かかっていれば未読のレシピ本の一つや二つでも持ってきておったのじゃが……」

「——サラちゅわ〜ん！」

「しつこい、大人しく鳥籠に閉じ籠っておらぬか。武神でもない非力な身で外に出てくるでないわ。それともなんじゃ、こうなればお主を吊るして敵を釣るか？」

「……スミマセンデシター」

こうしてちまちまと様子を見に外へ出てくる神々の相手にも飽きてきた。

「こうなればちよいと離れた戦場の補助でもしてやろうか」とサラが思ったところで——その鼻がひくりと動く。

「……なんじゃこの腐臭？　ろくに下処理もしておらん生モノの臭いじゃ。どこかで嗅いだような気もするが、どうにも思い出せん。しかしのう、こんなものを堂々と漂わせ

てこの戦場を闊歩するとはどんな神経をしておるのか……気になるのじゃ。ふむ、ちよつと覗いてみるか」

——この様子であれば、少しばかり円形闘技場を留守にしても構うまい。なんとなしに、顔を擧めたサラは異臭の下へとしなやかに跳躍するのだった。

オラリオの南方から『ギルド』のお膝元である『中央広場』へ。

【暴喰】ザルドが、快進撃を行う。

その先には、見るからに彼を包囲殲滅するための罟である氷の結界が敷かれている。

そこへわざと誘き寄せられるかのようになり、ザルドは悠々と堂々と直進する——如何なる謀略が立ち塞がろうと構わず粉碎して自らの道を征く、悪派閥らしからぬ『覇者』の正道を見せつけるが如く。

彼の歩みを阻める者は誰一人としていない。

立ち向かおうとした冒険者の悉くが、彼の振るう強者の『牙』ステイタスによって喰い破られ、無残に散っていく。

——その『覇者』の『牙』が、不意に停止させられた。

「——臭い。臭過ぎるぞ。お主じゃな？」ひとなつ 一夏の三角コーナーや排水溝の腐敗臭を凝縮

したような死臭の持ち主は。これほどの臭いを平気で撒き散らすとは……いい加減にせんか」

「なんだと？ なにを言っている、貴様は……何者だ？」

ザルドは、自らが振り下ろそうとしていた大剣が静止させられていることに兜の下で驚愕する。

瓦礫の山に埋まった冒険者たちを邪魔だと払い除けようとした彼の剣が、眼前に現れたサラによってその切っ先を摘まれる形で止められていたからだ。

「妾はサラ・ブラッドルーラー。そして貴様は……その頬に伸びる二つ傷の風貌、確かザルドとかいう、フィンと言っておった輩の一人じやな。なんでも陸の魔獣ベヒーモスの毒に侵されておるとか。なるほど道理で、ふむふむ、そういうことかの」

「いきなり現れたかと思えばなんだ、知ったような口を。それよりも、驚いたぞ。『顔無し』が触れていた、こちら側の兵数を一夜にして千名以上削った女。貴様のような冒険者がまだ……いや、違うな。貴様、なんだ？」

サラの正体を値踏みしたザルドは訝しむ。

彼女の身体から漂う、その血の臭いを嗅ぎ慣れ親しんだモンスターの気配と、彼の主神や仲間の冒険者に通じる神気フェアルの雰囲気。本来相反すべき、矛盾したモノが同居しているその様子に、歴戦の英雄であつた彼もすぐには『未知』を『既知』に変えられなかつ

た。

そして、彼が理解を及ばせるより早く、サラは相手方ザルドの分析を完了させた。

「よう分かった。お主さては、ろくに下処理もせぬままあやつの肉を食らつたな？

ヒーモス肉の毒は超が三つは連なる劇毒よ、完全解毒せずに頬張ればその身が侵されるも必然……まったく、そんな死に体でよくそう平然と振舞えるものよ」

「っ！ 貴様、俺の身体のことを……」

「とりあえず親切な妾はこれをくれてやろう。フィンから聞いておるぞ？ お主はあの氷結界の中で猪人ホアズが迎え撃つとな。聞けばなにやら因縁があるようではないか。その戦いの前から死臭を漂わせるのも無粋じゃろうしのー？」

一人納得したように頷きながら、サラは影から引き抜いた一瓶の薬をザルドに装備の上から浴びせた。

緑の蛍光色に光る怪しげな薬、その効能をザルドが察するより早く――。

「そら、せつかくじやし向こうまで送つてやるのじゃ。くれぐれも舌を噛むでないぞ？」
「なにを――うおおおっ!？」

有無を言わせない流れのまま、サラはザルドの首根つこを引つ掴む。

そして勢いよく――フィンから彼を誘い込むと予め知らされていた『中央広場』セントラルパークを覆う氷結界のド真ん中目掛けてブン投げた。

ザルドの巨体をものもしないサラの腕力はなんと、地面とほぼ平行に彼を投げ飛ばして……予想より早い、最終決戦地への到着を成し遂げさせたのだった。

「待つていたぞ、ザルド。この手で貴様を——何故飛んできた」

「俺が知るか、糞ガキ……!」

どうにもしまらない、『執念』と『失望』の対面。

着弾の際に巻き上がった土埃の中からむくりと姿を起こしたザルドは、困惑するオツタルの前に「ふざけんな」と、予想できるはずもない理不尽に巻き込まれたことへの怒りを露にする。

ひとまず剣を構えてらしい雰囲気遅ればせながら作ろうとしたところで、彼はふと気づく。

——自らの身体を蝕んでいた忌々しいベヒーモスの呪毒による激痛が、ほぼほぼ消え失せていることに。

しかしそちらに考察を深めるよりも、今は目の前の獲物の方がよほど大事だった。

こちらを気を取り直したと言わんばかりのオツタルが双大剣を構えるのを見て、ザルドは大兜の下で笑みを浮かべ構えを取るのだった。

——なにがなんだか分からんが、今日と言う最期の晩餐の日に最上の状態で食卓戦場に座れるとは。これこそ神々の思し召しと言うやつか……などと、考えながら。

そんな、万全な状態で臨む両雄の様子を確認して、サラは『アンファイテートルム円形闘技場』に戻る。そこにはいつの間にか、彼女の対峙すべき敵という奴が姿を現していた。

「つと、ようやくお出ましじゃな。対妾専用の切り札……ほう」

悠然と歩み寄るは、全身の筋肉を大樹の幹のように膨張させた筋骨隆々の獣人。

その身に纏うは白き拘束衣。しかしそれは今にも内側から張り裂けそうなほどにパツパツになっている。

そして、力強い心臓の鼓動を離れた距離にまで響かせる男の顔には、種族を示す猫科の耳と鬣、鬣——それらの他に、白濁して使い物にならなくなった左目と、紫芋のように変色した皮膚、そしてミミズのように浮かび上がって不気味に脈動する血管という、見るからに悍ましき特徴の数々が浮かんでいた。

「素となつているのは獅子人か。そのただならぬ雰囲気の正体は、ケミカルチツク科学的で嫌な臭いからして、薬物と暗示による強化じゃな……それもかなり深い。そしてその中に幽かなれどしつかと香る、この清廉な気配の主は——精霊か」

『ヴ……ヴラララララオオオオオオオツツツ!!!』

サラの独り言が聞こえたのか、獅子人レオーネだったものが反応を示す。

涙と涎を撒き散らしながら爆ぜるように咆哮するその姿は、もはやモンスターよりも
モンスターらしい魔の者である。

——それは、ヴァレッタが急遽バسلامに命じて用意させたアパター・ファミリアの
産物だった。

彼の用意した、特定の魔道具で操作可能な『精霊兵』とは真逆の性質を持つ凶戦士^{バーサーカー}。

外部による一切の制御と持続性を放棄した代わりに、通常一振りである『精霊の短剣』
を五本刺しにし、更にはそれらを相互に干渉させることで暴走させた、一度解き放たれ
たならばその場に膨大な破壊を生み出す短期決戦型の『精霊兵』の成り損ない——
『精霊凶兵』。

レベルにして8は下らない、かつてのゼウスとヘラの栄光に対抗するべく作られた
悪派閥^{イヴイルス}のとおっておきの一つ。

その獰猛な獣^{ケダモノ}を前に、サラの顔には……。

「下らん……実に勿体ないことをしてくるな、悪派閥^{イヴイルス}よ。無駄に素材を弄繰り回すこ
とを芸術と勘違いしておる愚か者の顔が目には浮かぶわ——見よ、精霊が啼いておるでは
ないか」

……冒流的な改造人間^{リョウリョウ}を作った相手に対する、明確な怒りが滲んでいた。

「このような暴挙、許してなるものか——ここに妾が、精霊調理の手本というものを見せ

てくれるわ！」

狂乱の精霊は食卓へと還り、死の槍が空高く飛翔する（サラ視点）

『ヴウウ……グギギギイイツ……!』

「言語能力も喪失しておるな。となれば会話は不要、さあ来るのじゃ。先手は譲ってやろう」

『ガ——』

槍を持たない左手で手招きするサラの余裕っぷりに、バスラムの調整で奪われたはずの『精霊凶兵』の在りし日の理性が刺激される。

元オシリス・ファミリア出身の獅子人たる彼が持ち合わせていた、生来の残虐性……則ち「目の前で調子に乗っている女を無理矢理組み敷き、凌辱し泣かせたい」と言う悪魔的な雄の本能。

それが主人によって刷り込まれた、「サラ・ブラッドルーラーを殺害せよ」との命令と見事なまでに合致して——爆発。

『——グアアアアアアツツツ!!』

その身を覆う拘束衣を内側から引き千切り、獣人の持つ強靱な身体能力で以て、『精霊凶兵』^{バジュラビート}は両腕を顎^{あぎと}のように広げてサラに飛び掛かる。

武器は五指より伸びる鋭利な爪。『恩恵』^{フェルナ}の影響下にある本人由来のその刃は、生半可な武器よりも優秀な鋭刃となる。それで以てサラの柔肌を引き裂き、肉を抉り、ピンク色の中に見えた真つ白な骨に噛り付きながら犯すのだ。

それが、彼の本能に染み付いた、彼を悪派閥^{イヴェイルス}たらしめる襲撃の儀式。

これまでに襲った女の数は優に百を超え……その全てを、種族に由来する優秀な身体能力で以て屈服させてきた。

たとえ理性を失おうと、それは変わらない。

今回もまた、これまで通りにサラを他の被害者たちと同様に血と涙とその他体液の水溜まりに沈めようとして――。

「ほっ」

ひらり、と宙を舞う紙のような動きでサラは『精霊狂兵』^{バジュラビート}の抱き付き^{ハグ}を回避した。

薬物投与^{ドレーピング}と『精霊の短剣』によって、レベル9の動きさえ捉え得るとされた『精霊狂兵』^{バジュラビート}の視力^{レオネ}にさえ映らない神速の体捌き。

獅子人の身体はすかさず地面に足の指を喰い込ませ、皮膚と地面の凹凸の摩擦によって足元から焦げ臭い煙を上げながら急速反転。再度サラの身体を捉えようと、再び顎^{あぎと}を

大きく開けて襲い掛からんとする。

だが、既に戦闘の流れを司る権利は彼女の手に移行していた。

力の向きを切り替える瞬間、どうしても生まれてしまう停止の隙。

無論彼は素体の鍛錬と上昇した身体能力によってその高速機動の弱点を限界まで潰していたが、サラの眼はその刹那を捉えて槍を振るう。

『精霊狂兵』の心臓をすかさず狙い穿ち、サラの槍はそのまま敵の身体を地面へと縫い付けた。

『グギャツ——グガアツ!?!』

「宣言通り先手は譲ってやったぞ。ここからは後手の手番じゃ。もつとも、汝に次の手番は永遠に廻っては来ぬがな」

目打ちならぬ、心臓打ち。

肋骨の隙間を貫くことで、サラの魔槍が『精霊狂兵』の肉体の中央を固定する。

続けて彼女は影から小ぶりの槍を四つ召喚し、彼の四肢を順に地面に縫い留めていく。

橈骨と尺骨……前腕の骨二つの間に、右腕と左腕でそれぞれ一つ。

そして脛骨と腓骨……ふくらはぎの位置に存在する二つの足骨の間に、これまた左右一つずつ。

仰向けの形で計四振りの槍を打たれて、両腕両足を動けなくされた『精霊狂兵』^{バジュラビート}の姿はまさに『まな板の鯉』。

ならば続けて鯉を捌くための刃が取り出されるのが道理。

サラの影から姿を現した包丁が、特殊武装特有の輝きを放つ。

純黒の包丁《ニーヴ・ニーズホッグス》。

クレスの保有していた精霊を害する邪竜『ニーズホッグ』の爪を元にした、霊体に刃を通す《霊断属性》^{ヤツフサ}の牛刀である。

『ギャオオオオオオ——オオオンツツツ!!??』

「苦痛は素材の旨味を濁らせる。今、解放してやるからの——まずはその邪魔な『殻』から取り除いてくれよう」

憐れむような声と共に、獅子人^{レオーネ}の上げる悲鳴に構わずサラは刃を振るう。

繊細にして大胆とも呼べる彼女の包丁捌きは、瞬く間に敵の皮を剥ぎ、肉を裂いて解体していく。その肉体に都合五つ刺された『精霊の短剣』、及びをそれを起点として全身に張り巡る精霊の力には一切の傷を負わせることなく。

そうして捌き卸された物理的な肉体には目もくれず、サラは丁寧な手つきで以て、『精霊の短剣』を慎重に『精霊凶兵』^{バジュラビート}だったものから摘出した。

——なお、心臓に穴を開けられようと構わず抵抗を試みていた肉体も、流石に肉と骨、

そして内臓のいくつかに至るまでを切り離されては生きていられるはずもなく。

『オ、オオオツ……——』

そうしてあっけなく沈黙した『精霊凶兵』バジュラビートは既に脅威に在らず。

本命たる『精霊の短剣』を前に、サラは次なる調理の手順に取り掛かる。

小刀の形状を核としていた精霊の力は不正の名の下アステイに書き換えられた性質に従い、次なる宿主を求めて近くに居たサラの身体へと光の触手を伸ばし始める。

放つておけばその触手は彼女の全身を植物の根のように侵食し、魂に干渉して、先ほどまでの『精霊凶兵』のように激情にかられてただ本能のままに暴れ狂うだけの怪物へと墜としてしまうだろう。

されど、現状は真逆であった。

クレスの手によって引き出された彼女の魂の真髓スキルが、逆に『精霊』たちの有り様に干渉を始める。

——スキルグラニータ・デイ・アニマ・アヴァツロニア【楽園精霊の献上氷菓】、起動。

「——狂乱の精霊たちよ、鎮まるがよい。その穢れ、妾サラ・ブラッドルーラーの名の下に祓い濯ぎて清めようぞ」

効力の一つである『精霊交感（祈）』によって、暴走する精霊に直接語り掛ける。

サラは『精霊の短剣』から伸ばされてきた触手に抵抗することなく……むしろ皮膚を

喰い破り、体内に浸食を始めたそれらを介して、精霊たちに心から声を投げかけて、有める。

——もはやお前たちを閉じ込め、苦しめる外道はここにはない。

——故に安心して、その身を我が腕に委ねよ。今すぐ、その内に巢食う苦痛からも解放してやろう……と。

サラはいっそう細やかに《ニーヴ・ニーズホッグス》の切っ先を操作し、手に取った『精霊の短剣』の内部に介入。

迸る精霊の力の隙間に分け入り、見える『不正』^{アパテ}の毒素を除去し始める。

恐らくは邪神アパテーの神血^{イコル}に由来する対霊の毒薬を、刃一つの手術で以て物理的に取り除いていく。

「おうおう、苦しかったろうに。じゃがそれもここまでよ。主様が神より授かりし秘技、万が一にもお主らに痛みを与えることもない。妾はしよせん孫弟子に過ぎぬが、それでもこと調理の腕前に関しては「既に俺を超えているな」としつかり太鼓判を押されておるのではう」

サラの瞳に映る、『精霊』の内側に点々と存在する黒ずんだ染み。

それこそが彼らを苦しめる元凶、バスマムの呪毒である。

彼女はそれら一つ一つを慎重かつ素早く、精霊の外へと刃の先端で弾き飛ばして

く。

その手並みは熟練の職人の如く滑らかであり、彼女が最初の一振りの処置を終えるまでに要した時間はおよそ三十秒。

続く二振り目の処理は当然一振り目より早く、毒の傾向を学習したサラは作業時間の五秒短縮に成功。

更に次なる三振り目では七秒短縮し——最後の『精霊の短剣』の毒抜きに至っては、僅か三秒で完了させたのだった。

「これにて毒の処理は終了じゃ。……よーしよしよし、久々に本来の姿を取り戻した感覚はさぞ気持ちよかろう？」

イヴイルス 悪派閥の……サラに言わせれば「趣味の悪い」加工から解放された精霊たちは、『短剣』ではない光の真体となって彼女の周囲を泳ぎ、飛び、そしてまた跳び跳ねていた。

鯨、カワセミ、兎……本来彼らが置かれていた環境に生息する命の姿を模した彼らが、思いのままに舞い踊る『エレメンタルダンス精霊祝祭』。

悪質な連中の手に堕ちて意図しない形に造り変えられてしまった、耐え難き苦痛が終わったことへの悦び。

その絶頂を救いの主を囲んで全身で示す精霊たちは次第に、またその姿形を変えていく。

ただし今回は、他者の手によるものではなく——彼ら自身がそうであろうと望む形で。

サラが取り出した器の中に、各々が形を変えて盛り付けられていく。

それこそが彼女のフルコースが一つ、『口直し』に据えられた一品。

「——出上来がりじゃ」

外見は、粉雪が山のようにうず高く積み上がったかき氷のように見える。

しかしその全体が淡く発光しており、満ち満ちる生命力の瑞々しさが感じられる。

『楽園精霊の献上氷菓』——精霊を形作る自然の魔力、その『感謝』に溢れた透き通

る味わいは、一つ前に出された『魚料理』の余韻をさっぱりと洗い流して次の『肉料理』

と客の意識を向かい合わせてくれるであろう。

「それでは、いただきます。……うむ、やはり美味じゃな！」

出上来がったばかりの精霊氷菓を、サラは一口で食した。

それと同時に、彼女の魔力量が爆発的に跳ね上がる。

スキルの持つ残りの効果によって、『食した分だけ本来の許容量を超えて魔力を過剰

充填することが可能』となったのだ。

己の身体に溢れかえる魔力……それを向けるべき先はもちろん、決まっている。

「——さて、腹ごなしに付き合うてもらおうかの」

サラは獅子人を固定する串としての役割を終えた魔槍《86式連結式葬槍》を手に取

り、遙か上空に投げ飛ばす。

そして、彼女自身もまたその軌跡に追隨するように大跳躍。

高さにしておよそバベル三つ分……オラリオ全域を軽く見渡せるほどまでの座標に至った彼女は、逆さの体勢となって右脚に力を籠める。

天地が逆転した視界の中で、オラリオに蔓延る悪性腫瘍どもを一瞥し、その一切を捕捉して――。

「ひーふーみー……まあ八百ほど削ればよからう。では行くぞ、これが妾なりの感謝の表れじゃ！」

精霊を食らって手に入れた大津波の如き魔力。

その全てを脚部に一点集中し、その昂るがままに、サラは弧を描くようにして落下してきた魔槍の石突を鋭く蹴り墜とす。

通常腕の三倍の力を持つと言われる剛脚で以て、重力の勢いを加算して放つ魔槍の流星。

それはクレスが師スカサハより授かりし魔槍技の一つにして、その孫弟子サラに受け継がれた奥義。

「――宙を見よ、運命を呪え。そら、凶星が墜ちてくるぞ――『ゲイ・ボルグ・シユルゲイザ夜天穿つ血翔の槍』！」
魔力はサラの体内で血液に変換され、その膨大な量の『赤』が一滴残さず魔槍に吸い

込まれる。

そして魔槍の投擲は——穂先を一から十、十から百、百から千近くへと分裂させて、オラリオに蔓延る悪派閥ども目掛けて降り注ぐ。

「——ガフツ」

「うおわつ、なんだいったい——ぬぐわあつ?!」

『——ピギイツ?!』

「ひつ、ひいいいっ……うわあああつ! ——ギエツ」

『ブルルルツ——フゴオオオツ?!』

「た、助けっ——嫌だ嫌だ嫌だギャツ!!」

ザルドやディース姉妹、ヴァレッツタなど一部の連中——フィン曰く『因縁の宿敵』とこのことでサラがあえて見逃してやった者たちを除いて、室外にいたほぼ全ての悪派閥が突如空から降ってきた流星槍雨に貫かれていく。

『夜天穿つ血翔の槍』、それは魔槍《86式連結式葬槍》の本領発揮を意味する。

サラが血液を介して指定した複数の敵を上空から並行捕捉・追尾して仕留める、対軍から対国の攻撃範囲を有する超々広範囲殲滅攻撃。

もし回避を試みるならば、最低でも双方レベル10に達した『女神の戦車』の俊敏さと後の『幸運兎』の幸運が必要となるであろう。

つまり現状、悪派閥側イツイリスにサラの眼から逃れられる術はなくて。

その時運よく室内で戦っていた者たちを除く、ほぼほぼ全てのオラリオの敵が……人であれば心臓を、モンスターであれば魔石を打ち抜かれて沈黙した。

「ま、妾の手に掛かれればこんなものじゃ。——軽々しく『悪』なぞに手を染めた己が浅慮を悔やむのじゃな」

槍に遅れて落下しながら、サラは眼下の惨劇を見やるサラ。

小さな豆粒のように見える悪派閥イツイリスたちの死に顔は、その大半が驚愕と後悔を写すものだった——まるで「自分の最期がこんなものであつて良いはずがない」とでも言うように。

その思い込みのなんと傲慢なことか、と彼女は呆れる。

「罪を犯すということとは、自らが罰されることへの同意書に署名するのと同じことなのじゃよ。誰かを害すれば、その刃は巡り巡って自らの下に返ってくる——その多くは、復讐と言う大義名分を伴つてな」

堅苦しい説法は勿論、子供向けの単純明快な寝物語でさえ勧善懲悪を謳っているのだ。

それを与えられる機会も連中にもいくらでもあつたはずで、そこから何も学ばずに自ら道を踏み外したのだから、相応の罰を受けるのは至極当然の世の道理であろうとサラ

は思う。

……ただ、と彼女はまた思う。

「やつてしまつてから言うのもなんじやが、まーたやり過ぎてしまつたかの？」

人クレスよりもまだ人らしい感性を持つサラは、己の行為を振り返つて頭を悩ませる。

一切隠すことのない、オラリオの公衆前でステイタス及び必殺技解放。

目の良い一部の神々であれば、サラの出自に目を向けようとする輩も現れるかもしれない。

「いや、久々に精霊を食す機会に恵まれて浮かれておつたが、よくよく考えれば……いや、まあ、うん。余計な被害を減らしたと考えれば大丈夫セーフじやろ。——でもこれで、面倒臭い連中に完ツ全に目をつけられた気も……その時はカオス様を頼らせてもらうかの！ 前に「地上で困つた時は迷わず私を頼つてくれたまえ！」と言つておつたしな、うん！ そうするのじゃ！」

そんな他神任せの解決策を呟きながら、サラは地上へひゅうううう……と落ちていく。

それはなんともしまらないオチのように見えるが、愚かにも『悪』の道を選んだ悪派閥イヴァイルスたちの末路にはある種相応しかつたのかもしれない——こうして見せ場らしい見せ場もなく、大義も名分もないサラの気分一つによつてあつけなく一掃される道端の土埃く

らしい扱いで。

ちなみに同時刻、神力オスは猛烈に嫌な予感がして神ディアンケヒト謹製の胃薬の在庫を確かめるのだった。

そして運悪く切らしていたことも、ここに書き添えておく。

他力本願なぞクソくらえ、『運命』なぞ超えてなんぼの冒 険者道 by 迷宮馬鹿

「妹の血筋か。……千年も経てばいつかは絶えるものだと思つていたがな。孫や曾孫が生まれていたことまでは知つていたが、それ以降は関わらなかつたからな。神ヘラと話題にすることもなくなつたし、とうに途絶しているものだと思ひ込んでいた。

しかし、今は昔と違つて村や街が容易く壊滅する時代でもない。そう考えれば、一つの血が十年百年、千年続くのもさほど不思議な話ではないか……そうか、そうか」
顎に手を当て、クレスは昔日の記憶を掘り起こす。

彼の妹、テティシア・テラテイアリエ——それは神々の時間にして一瞬、そして人間にとつては千年も前の人物である。

彼も生きていた『英雄の都』の創成期においてヘラ・ファミリアに所属し、最終到達レベルは6。それは当時としても破格の才能であり、とある事件で若くして世を去らなければまだ上に行けたとさえ言われていた。

そんな、己と源を同じくする血族の子孫を前にして。

いくら普段は迷宮ダンジョン以外に関心を持たない彼と言えど、まったく感慨を抱かないということとはなかった。

「確かに面影がなくもない。——まあ、それはそれとしてだ」

だが、それも一瞬のこと。

今を生きるクレスにとつて過去はあくまでも、ふとした折に懐かしむ程度のものであつて、それに浸るほどのものではない。

数秒と立たずに視線を過去から現実今に引き戻した彼は、アルフィアが溢した先の台詞の方に触れる。

「この『神獣テルヒユネの触手』のことを知っているかのような口ぶりだな。もしかや、お前が意図して何処かの神に召喚させた個体だったか？」

「そうだ。神をも殺す迷宮ダンジョンの『牙』——それで以て地獄ダンジョンの蓋を開け、地上を再び渾沌と混沌に満ちた、かつての英雄時代に逆行させる我々の『計画』。その核たる『大最悪』として、神ルドラアルカナムの力の下に招来していた。……残念ながら、御身によつてあつけなく討伐されてしまったようだが」

しかし、その言葉とは裏腹にアルフィアの口調は落ち込んでいなかった。

むしろクレスの耳の調子が正しければ、弾んでいるようにさえ聞こえた。

というのも——元より意図せぬ地上側サラ・フラッドの追加戦力のせいだ、当初彼女らが目論んでい

た『計画』の形は既に破綻しかけていた。

そこへ今更『神獣の触手』が討たれたことが加わったくらいで、何が変わるといえるか？

それよりもむしろ、彼女はクレスという理想の先達と出会えた望外の幸運に目を向けていた。

ヘラ・ファミアリアである彼女は当然、拠点に遺されていた記録から知っている。

クレス・テラティアリエ——自らの祖先と血を同じくする者にして、迷宮に關わる多くの謎を解き明かし、現在の冒険都市オラリオの礎を知識面から築いた紛れもない『英雄』。

——ならばきつと、今の自分が抱いている失望も分かってくれるだろうと。

「しかし、『大最悪』がいなくなろうと構うものか。クレス・テラティアリエ。御身にも是非、力を御貸し頂きたい」

「何のためにだ」

「貴方も分かっているのだろうか？ 今のオラリオの脆弱性を。平穩というぬるま湯に頭の天辺まで漬かり切った『冒険者』の懦弱を。——これを正すためには今一度、世界には『立ち向かうべき強大な危機』がなくてはならない、と」

「……なんだ、つまりお前もあの神エレボスとやらの仲間か」

「アレを知っていたのか？」

「神をアレ呼ばわりか。その凶太さは嫌いじゃない。……まあ、つい昨日ちよつと顔を合異撃わせてな。で、あの邪神の関わる企みに乗れと言ったな？ なら答えは当然断断るだ。あんな馬鹿げた考えに興味はない、そつちで勝手にやってる」

しかしアルフィアの期待とは裏腹に、クレスが彼女の意見に同調することはなかった。

彼はそれ以上は話すことはないと言わんばかりにしつしつと追い払うような素振りを見せ、それから背を向けて肅々と『神獣テレルレヒユネの触手』の剥ぎ取り作業に戻ろうとする。

取り付く島のない、いつそ清々しいほどの拒絶の態度。

対して彼女は、そつと右手をクレスの背中へ伸ばして――。

「――【福音ゴスペル】」

「おつと」

背後から迫る不可視の音撃。

それを気配から察したクレスは危なげなく回避し、振り向いて下手人たるアルフィアに非難の眼を向けた。

「なんだ、危ないな」

「私の魔法を見向きもせず避けるか……御身が勝手に話を打ち切ろうとするからだ。そ

れに、馬鹿げているだと？ 何故だ。御身はかの栄光の時代と今の墮落した時代を比べて、その落差に何も思うところはないのか？」

「別にないが」

そうあつさりと言いつつクレスに、彼女は愕然とした面持ちを向ける。

なんなら心底面倒くさそうに溜息さえ吐いてみせる彼に、アルフィアは更に顔を顰めた。

——彼女が記録英雄譚から見た『英雄』ならば、決してそんなことは言わないはずだった。

『冥洞一灯伝』において、主人公は散り際にこう残したと語られる。

彼の知識と精霊を付け狙う連中に襲撃され、追い込まれ、下層に繋がる奈落に墮ちる寸前で、彼は襲撃者たちに向けて蔽かに呟いた。

『俺の知識に群がる死肉喰ハイエナらいども。目先の利益につられて三歩先の未来を見ようともしない愚か者どもめ。良いだろう、今は一時の享樂に精々浮かれるが良いさ。しかしその短慮さが将来、自分の首を絞めることになるのだ』

そう言い残して彼は自ら迷宮ダクジョンの奥に飛び込んだ。

後に残された襲撃者たちは主人公の遺した知識を売り払って利益を得たが、後に彼の精霊に導かれた『傭兵』たちによって、四肢を引き千切られ五体を『要塞』の五方に晒

されて終身の不名誉を受けることになったのだった——と。

当時のクレスはさぞ、襲撃者たちの愚かさを恨んだことだろうと彼女は思っていた。

——そして、今のオラリオや冒険者が安穩と平和の空気を吸って停滞に甘んじていることもまた短慮。世界には未だ『災厄』が残っているというのに、ゼウスとヘラの眷属を外に追いやってなお進歩の兆しも見せない連中のことを、かつて彼に襲撃をかけた者たちと同じく『愚者』と称して忌み嫌うのが当然ではないのかと。

だというのに、当人はそれを意に介さず、アルフィアの訴えに耳を貸そうとしない。ましてやこうも軽んじられるなどは、彼女は露ほども思っていないかった。

「であれば、誰がああ『隻眼の黒竜』ジズを討つと言う？ 神時代最強と謳われた私たちでさえ叶わなかった『終焉』を、このままでは誰も打ち倒せまい。『救世』^{マキア}は成されず、世界が滅びの路を辿ることは目に見えている。なればこそ、この温室の世界を一度破壊し、かつてあの黒竜の瞳に疵をつけた『傭兵王』ヴァルトシュテインのような、神時代到来前の傑物が生まれる魔境が必要——」

「阿呆」

アルフィアの語る、切実な『想い』。

それを、クレスは残酷なまでに切って捨てた。

「やりたければお前が自分でやれ。地獄が必要というのなら、自らそこに身を置け。誰かをお前の願いに巻き込むな。叶えなければ他人に委ねず、自分で掴み取れよ」

——他力本願など笑止、『救世』とやらを叶えたくばあくまでも自助努力を以て為せ。

そう淡々と正論で殴るクレスに、アルフィアは首を横に振って否定した。

「私には無理だった。そして、これからも……この身は【才禍代償】という決して拭うことの出来ない『病毒』に冒されているのでな。もう数年と保てば上等とさえ言われている」

「なんだ、それは？」

「この身に巢食う忌々しい病気だ。一度発作が起きればレベル下降さえ伴う不治の呪い。生まれながらにして背負ったこの病のせいで、もはや『黒竜』を滅ぼすだけの力をつける時間的余裕は私には残されていない。——故に、たとえ世界から千の恨みを買おうとも、この身を次の世代の贄として新たな『英雄』の歴史を紡がせる。それが私に残された、最後の役目に他ならない！」

「……ふむ」

クレスの瞳に映るのは、悲痛な覚悟を決めたアルフィアの顔。

自らの命を投げうってでも次代に継ごうとする、消えゆく老兵が輝かせる最後の灯。

それはなんと悲劇的で、浪漫的で、感動的な——。

神々が好みそうな、ありきたりでつまらない『覚悟』だと彼は鼻で笑った。

「だからなんだ？ そんな自分勝手な理由が他人を巻き込んでいい道理になると思うなよ」

今のアルフィアの顔は、クレスがその永い人生の中でとうに見飽きたものだった。

彼がこれまでに幾度となく見送ってきた——都合の良い言い訳で自らの力に勝手に見切りをつけて、『理想』を諦めた『敗残者』の顔。

「年を重ね過ぎたから」、「安心して『夢』を託せる後継者が見つかったから」、「自分の能力ではここが限界だから」、拳句の果てには「もう頑張ることに疲れてしまったから」などと。

ああ——まったくもって馬鹿馬鹿しい、下らない。

夢を追うことを諦めた者たちの口から吐かれる戯言なぞ耳を傾ける価値さえないのだと、彼は彼女の語る『希望』編る夢物語を蔑む。

「一つ教えてやろう、後輩。……お前は随分と自分の価値を高く見積もっているらしいが、勘違いも甚だしいぞ。悪性のスキルがあるから出来ないだど？ 甘ったれるなよ。そも、たかだが己の運命も超克できない者の安い命一つを捧げたところで、お前の言う『黒竜』討伐が叶うものか」

「……………っ！」

アルフィアの言う『計画』に隠された真意を、クレスの老獪な目は見抜いていた。神でなくとも、同じ『冒険者』だからこそ分かる彼女の『正義』。

それは……既に己の限界を見定めてしまった自分への『諦念』。

そして、現実を前に膝を屈してしまった自らへ向けた『後悔』。

だが、そんなもので形作られた人造の『英雄』とやらに世界の命運が担えるわけがないと彼は断罪する。

「俺の『想い』は俺だけのものだ。俺が決める。俺が背負う。俺を超える。『理想』ってのは、そういうものだ。——他人に託すだなんて、耳障りの良い言葉で逃げるなよ。その『計画』とやらはな、勝手に現実から逃げ出したお前がその夢だけを他人に自己都合で押し付けてるだけのものだろうが。そういうのをなんていうか知ってるか？」

「……」

「クソくらえ、だ。お前らの丁寧にご考えたご立派な脚本なんざ、そこらの素人が妄想を膨らませながら書きなぐったご都合主義塗れのチラシの裏書きにも劣る駄作に過ぎん。上から目線のご高尚なお説教、それも世間にご迷惑を振りまく問題作なんかよりも自己中の自慰語りの方がよっぽど面白いだろうぜ」

それだけ言ってもなお、目前に佇む後輩は頑なに意見を変える様子を見せない。

そんな彼女の見せる、取り澄ますような表情が。

「所詮世の中などこんなもの」と言わんばかりの達観した風な責任転嫁面が気に入らなくて。

クレスはそのこへ向けて——千年経つてなお薄れるどころかなお強く燃え盛る己の熱情を叩きつける！

「——『諦め』も！ 『悔い』も！ 自分のものなら徹頭徹尾最後まで自分で背負え！

自分の『弱さ』を他人に投げるな！ お前の『理想』を叶えられるのは他でもない、お前自身しかいない！」

厳しい目を向けるクレスに、「それでも」とアルフィアは臍を噛む思いで口を開く。

「出来るのならば……とうにやっている」

「出来ると分かっているからやるのか、お前は。はっ、随分と甘やかされて育ったらしいな。なんだってやって初めて出来ると分かるんだ。それとも神ヘラは単なる二番煎じのためにお前に恩恵を与えたとしても思っているのか？」

「っ……」

「悪性の『腫瘍』があるから無理だと？ 違うな、原因と結果が逆だ。お前が無理だと決めつけているからこそ、『才禍代償』が発現したんだ。目を逸らすな。神ヘラも言っていただろう、『神の恩恵』はお前の魂の鏡だと」

「……それは」

「才禍代償」^{ギフ・プレッシング}は紛れもない、お前自身の意志の弱さの象徴だ。もしお前にそれを乗り越えられるだけの意志の強さがあつたなら、打ち消すことだつて出来たはずだ」

確固たる自信を以て、クレスは情けない顔を晒す後輩に断言した。

——なにしろ、彼自身がそうして執念深く迷宮攻略^{ダンジョン}を諦めなかつた結果が今なのだから。

寿命だとか老化だとか、そうした一般人にとつての『絶対的な運命』は冒険者にとつて乗り越えられる『壁』ではない。

そう言ったものを尽くブチ破るための万能鍵こそが『神の恩恵』^{ファアルナ}。

後は全て、担い手の意思次第に他ならないのだと彼の存在が証明している。

——だが、ここまで言つても通じないのであれば仕方がない。

「とはいえ、そこまで求めるのが通常酷なことは知つている。仕方ないよな、アルフィアと言つたか？ お前も所詮、弱い凡人に過ぎなかつたようだからな」

「……なんだと？」

「普通の人間は限界に直面した時、超えられないと諦める。お前もそんな奴らの一人なんだろう？ お前はお前^{弱者}なりの結論を出した、だつたらその通りにやつてればいいさ。ただし、俺を巻き込むな。俺は弱者の我儘に付き合えるほど暇じゃないからな。このまま放つておいてくれ」

アルフィアの精神の根本が只人と変わらないものに過ぎないのなら、それも仕方なかったのだらう——ただし、凡人お前を英雄俺紛いの狂人を一緒にするな。

限界を突破する『資格』を持ちながら有効活用しようとしな……奇しくも、彼女もまた彼女の蔑んだ英雄都市の罪の一つに過ぎなかった。

それだけの他人こ事。

それでこの話はもう終わりだと、絶句するアルフィアを置いて彼は今度こそ『神獣テイルビュネの触手』の素材回収に取り掛かろうとして——。

「【福音】」

「またか？ いい加減にして欲しいんだが……」

二度身ふたたびに迫った音爆撃を避け、クレスは鬱陶しそうに彼女を見やる。

ただし、その気配があからさまに先ほどまでとは異なっていた。

「……言うことに欠いて、私が『弱い』とは。災禍と謳われたこの身を明確に『弱者』だと……これまで誰も、そんなことを言ってくる奴はいなかった」

全身に魔力を滾らせたアルフィアの顔からは、これまでの超越然とした様子が消え失せていた。

その代わりに滲み出ていたのは——彼女の心の奥底に封じられていた悔しさ、そして怒り。

「——そこまで言ってくれるのなら、このままご教授願いたい。御身の語る、『強者の在り方』というものをな！ 今、ここで！」

逆鱗を撫でられた竜の如き、強大な覇気が炸裂する。

八つ当たりのようなそれには、依然として『過去』英雄の幻想に縋る諦観があつたが——その中に、僅かばかりの『未来』己の超克への渴望本音が見えて。

ここまで不機嫌に近い不愛想面を向けていたクレスの頬が、極僅かに緩む。

「ハ、ここまで言われてようやく少しは見られる顔になつたか？ ……良いだろう、獲物を掠め取つた謝罪ついでだ。先輩として『冒険者の心構え』、その初歩くらいは教えてやろう」

直後、猛火と轟音の激突が迷宮ダンジョンを揺るがせた。

莊嚴なるかな九つの鐘、闇夜拓く明星劍

破壊の戦塵が舞う。崩落の轟音が止め処なく反響する。

巻き込まれ殲滅される、モンスターのア鼻叫喚が合唱を刻む。

——ここに常人が迷い込めば、すなわち地獄に他ならぬと判断するだろう。

【禁忌】と【静寂】の間で交錯する、一撃一撃が必死と成り得る絶技の風。

それが、戦場となった迷宮の環境をド派手かつ瞬く間に塗り替えながら吹き荒れる。

徐々に階層を昇る形で戦況を発展させる彼らの現在位置は、第27階層。

第25階層から伸びる『巨蒼の滝』の最下部である。

早々に会敵した階層主『アンフィス・バエナ』はとうに討伐させられており。

文句を言う主がいなくなったのを良いことに、彼らは各々の主砲を太っ腹にぶつ放していた。

【福音】【福音】【福音】【福音】——【炸響】！

「見え見えだな、ならば態々当たってやる道理もない」

アルフィアの主力たる不可視の音撃、超短文詠唱から繰り出される音撃魔法【サタナ

ス・ヴェーリオン」の連続炸裂。フルバースト

しかしクレスはその隙間を体技一つのみを以て熟練の軽業師のように擦り抜け、連撃をその余波すら一つもその身体に掠らせない。

背後で『巨蒼の滝』グレート・フォールが半ばから抉れ吹き飛んだことに構わず、彼は魔力を練る。

「攻撃そのものが見えなくとも、術者の視線に魔力の揺らぎ。狙いを推測する手段は幾らでもある——そら、次はこちらの番だ」

「ちっ、わざとらしい挑発だな！ 良いだろう、乗つてやろう！」

お返しと十の小太陽を並行詠唱破棄で展開したクレスに対し、次はアルフィアが果敢に挑む。プロメテウス

緩急をつけた複雑な軌道で迫りくる火炎球の乱れ打ちに飛び込むようにして、避けて、避けて、避けて——背後から迫る隠された一発を、足元に転がっていたモンスター_の遺骸を投げつけて対消滅させる。

「この程度か、随分と容易いものだ——ぐっ!？」
「甘かったな」

しかし、足元からの隠れた一撃が、その余波ですんでのところで命クリンヒット中を避けた彼女の半身を焼く。

事前にクレスは、あえてそちらに思わせぶりの視線を投げっていた。

「何かある」ように見えてその実何もないのだろうか?」と思わせておいてからの、「実はきちんと仕込まれていた」という虚実織り交ぜた二段構え。

「くっ、嫌らしい手を使つてくれる……!」

「そうか。この程度は当然と思つていたが、それならもう少し手緩くしてやろうか?」

「ほざけ、御身はつくづくこちらの神経を刺激するのが得意なようだな!」

「対人なら精神攻撃は基本だ。知らなかつたなら覚えておけ、後輩」

「『英雄』らしくもない、そんな戦い方はお断りだなつ——!」

漆黒のドレスが持つ高い魔法耐性さえ容易く貫通する【プロメテウス】の強力な放射熱。

焼けた部位とそうでない部位の境目に響く激痛を堪えながら、アルフィアは怪我にすかさず回復薬ポーションをかける。そうして、足を止めるどころか更に戦意の赴くままに己の身体を加速させる——。

アルフィアの持つ魔法無効化の第二魔法【魂アタラクシアの平静】は、クレスの【プロメテウス】には効力を持たない。正確には、限りなく『無』に近いと言ふべきか。

単純なレベル差もあるが、その存在を認識するや否や、クレスが命中直前で火炎球を爆発させて周囲の酸素を奪う手法に切り替えたからだ。【魂アタラクシアの平静】では魔法の放射熱を防げても、追加効果である呼吸困難までは防げない。

それで一度気絶した後に腹部への容赦ない蹴りで叩き起こされてから、彼女は【魂アタラクシアの平静】を切つて（当たるかどうかは別として）その分の魔力を全て攻撃に注いであつた。

そうして互いに敵の魔法を回避しつつ、距離を縮めて今度は接近戦へ。

「御身のそのすまし顔、少しは男らしくしつたらどうだ！」

「雄弁なのは良いが、舌を噛むなよ。危ないぞ」

加速する勢いのままに握りしめた拳を振るう彼女に対し、クレスは広げた手の平でそれを受け止め、横ベクトルに方向をズラしていなす。

すかさず地面を蹴つて攻撃の向きを転換させてきたアルファイアの肩シヨルダータツクルによる突進を今度はずねを蹴つて転倒させ、追撃とばかりに転んだ勢いを後押しするように腕を掴んで、宙に跳ね飛ばす。

ならばと彼女は空中で器用に姿勢を整えて己の状況を上空からの襲撃に変え、着地した天井を蹴つて彼に流星のような蹴撃を見舞おうとする。

それをクレスは落下してきた彼女の足首を瞬時に掴んでハンマー投げのように振り回し、更にはそこに蹴りを叩き込んで、回避と同時に遠方カウンスターへの変則巴投げに変えてみせる。

「そら」

「ぐうつ……い！」

軽く迷宮の壁を貫いて吹き飛んで行ったアルフィア、その後をクレスは追う。

そして彼女の立ち直りを待つことなく、その先に一足早く回って、更に元いた場所目掛けて蹴り返す。

「ふん」

「がはっ!？」

めき、と鈍い音を立てたアルフィアの身体。

それを遠慮なく再度ぶつ飛ばしたクレスは、再び彼女を追いかけて迷宮を駆ける。

無論、正面から反撃の一手が来ないように盾として「プロメテウス」を先行させながら。

「ぐつ……くはっ!」

【福音】!

【福音】!

【福音】!!

「左下、右上、後方か。視線を向けずとも座標指定が出来るようになったのは認めよう。それでも分かるがな」

盾代わりの「プロメテウス」を遊星のように動かして三方向からの「サタナス・ヴェーリオン」を打ち消したクレスが、一休みとばかりにアルフィアの前で足を止める。

崩れ落ちた迷宮の破片の上で、満身創痍になりながら荒い呼吸を繰り返す彼女。

己の血と土埃に汚れて膝をつく今の彼女に対して——向かい合うクレスは汗水一つ

垂らしていない。

明確な力の差を映し出す彼我の光景。

立つて上から見下ろすクレスの余裕に、アルフィアは激昂と共に奮起した。

「それで、この程度か？ お前の『想い』とやらは」

「ふざけるな！ まだまだだとも——！」

喉は枯れかけ、四肢は引きつるような痛みを訴え始めている。

されどアルフィアの動きに陰りは見られず、むしろ段々とキレが増してきていた。

その理由の一つは回復薬によるものだが、もう一つは、彼女の学習能力の高さが関係していた。

目の前にある、これ以上ない教科書クレスの存在。

もとより高い才能を有している彼女はお手本のようなクレスの動きを戦いの最中で

模倣しながら、急激に戦いの作法を身に付けてきている。

それでも、目の前に聳え立つ壁クレスはあまりに高く、そして厚い。

【福音】【福音】【福音】——

「そも、一々詠唱している時点で俺に何をしようとしているか教えるようなものだ」

駆けだしながら、自身もまた防壁として音の爆撃を展開するアルフィア。

それをまたもや掻い潜って彼女と拳や蹴りを交わしながら、クレスは語る。

「お前はこれまで何度その魔法を使ってきた？ 体内を巡る魔力の動きはどうに覚えているだろう。ならば後はそれを自力でなぞる、それが無詠唱の方法だ。俺の【寡黙不語】カタラヌモはそうして発現させた」

「何を言つて——」

「魔力も自らの力の一部。ならば『神の恩恵』フアルナの自動化に頼らず、己の意識で制御し運用しろ。それが出来なくば一生俺に疵はつけられんだろうよ」

「——ハ、そうか……っ！ その余裕、親切丁寧にわざわざありがたいなっ！」

『魔力を意識的に消費する』、単純だが神時代の冒険者にとつて無茶苦茶な理屈を平然と押し付けてくるクレスに対してアルフィアは舌打ちする。

そも、魔法とは『神の恩恵』フアルナによつて受動的に発現するもの。その燃料たる魔力を自主的に運用するなどという非常識を口にすれば、現代の魔術師メイジはいかなる高位の者であろうと「ふざけるな」と無理を訴えるだろう。

——しかし時代を遡れば、かつては確かに修行を経て独力で魔法の習得に至つた者もいたと彼女は知っている。その類の者であれば、魔力を自力で操作することも出来た……否、必須の技術であつたのかもしれない。

かといつて、このような土壇場で説明されたところで身に着けられるかは別だが。通常ならば誰にも邪魔されないような場所で瞑想等の修行で練習するものだろう。

だが、今彼女と敵対しているクレスは説明の中に容赦のない乱打を含めてくる。

「このような中でどうしろと……があつ!？」

「並行詠唱は出来るな? なら集中しろ。肉体の痛みを思考から切り離せ。一方で俺との戦いに集中し、一方で己が内に集中しろ。なんてことはない基礎の応用だ——出来なければここで朽ちる、それだけだ」

アルファイアが悩み試行錯誤しようとする間にも、クレスは遠慮なく彼女の身体を壊しにかかると。

彼女が撃ち込んだきた手刀を手首を掴んで受け止め、ついでに捻って脱臼させる。

側面からの彼女の回し蹴りを膝と肘で上下から挟んで潰し、そのまま圧をかけて骨を折る。

その度に走る激痛程度に悶えるようでは、彼に傷をつけることなど夢のまた夢だと示すように。

「魔力の感覚を一から自力で覚えなければならなかつた昔と比べれば、まだ楽になった方だ。そして自らが追い込まれるこの状況。脳の発する麻薬物質によって、集中は平常時と比べ更に深まる……新たな技術を習得するには絶好の機会だろう」

「……偉そうにぐちぐちと、^{ゴスベル}このつ!」

良いようにやられてばかりのこの状況が許せず、打破すべく発起したアルファイアの反

撃。

内に巡る魔力への思索と並行して、滾る怒りを乗せた拳——それが同時に、無意識的に使い慣れた魔力の感覚を乗せて。

打撃の先に、詠唱を忘れた音が爆ぜる。

「む」

「くっ!？」

二人の間で弾けた想定外の衝撃が、互いの間に強制的に距離を作った。

衝撃で煙を上げる拳に目をやりながら、アルフィアは思いがけず手にした『未知』の感覚に何度か握っては開いてを繰り返す。

「——これが、そうか」

「そうだ。随分と学習が早いが、今までの積み重ねの賜物か……良いだろう、今の感覚を忘れるな。この技に習熟すれば、あえて中途半端に留めた魔法^{マジックサークル}円で索敵を行うと言った回りくどい方法を必要とせず直接索敵を行えるようになる。また、周囲の魔力を意識的に呼吸で回収して魔力回復を早めることも出来る。東方で言う『気功法』がその最たる例だ」

「なるほど面白い。ならばこのまま練習に付き合って貰うぞ——!」

詠唱を捨てたアルフィアの猛攻が、苛烈さを増してクレスに襲い掛かる。

【福音】^{ゴスペル}という四文字は、他と比べれば短いとはいえその全詠唱に半秒程度を要していた。

それが今は念じるだけで発動可能——口を動かさなければならぬという制約から解放された彼女は、凄まじい勢いで迷宮^{ダンジョン}諸共クレスを爆破しようと「サタナス・ヴェーリオン」の波濤を炸裂させる。

連続する破裂音は津波のように鳴り響き、固い迷宮^{ダンジョン}の岩盤を容易く抉り貫く。

それは渦中にいる者に対して須らく空間を揺らすような錯覚を齎し、無差別に平衡感覚の喪失を振りまいていく。

そこかしこで巻き添えを食らったモンスターたちが墜落したり壁に激突したりする、そんな中で。

元より慣れているアルフィアは勿論、より酷い騒音災害を『深々層』で経験したことのあるクレスと、彼ら二人だけは先ほどまでと同じように平然と戦っていた。

「よくもまあこの中で悠々と振舞える！ 私でさえ油断すれば酔ってしまいそうになるというのに！」

「心頭滅却すれば火もまた涼し。如何なる異常にも毅然として適応するのが冒険者の在り方だ、後輩。また一つ勉強になったな」

響き渡る爆音の中でも精密に相手の言葉を選び分け、会話する二人。

周囲に幽かに響くモンスターの怨嗟は聞き流し、彼らは口と同時に手足でも意思疎通コミュニケーションを行う。

殴打、蹴撃、手刀、貫手。

掴み、投げて、挟り、引き千切る。

目まぐるしく攻守の姿勢を入れ替えながら腕と脚を交差させるクレスとアルファイア。

その周囲に彼らの避けた互いの魔法が誤爆し、モンスターと迷宮ダンジョンの悲鳴が飛び散る中で、二人は苛烈な死の舞踏を刻む。

——その、最中。

「——ごほっ！」

「む」

うまく被弾を避けたアルファイアの口から、唐突に鮮血が漏れ出る。

ギフ・プレツシグ
【才禍代償】。

彼女に与えられた才能の代償が、ここへ来て姿を現してしまった。

僅かに鈍るアルファイアの動き。

その隙を、クレスは——それでも何一つ躊躇いのない顔で穿った。

「がふっ！ ……ぐっ、ぐふっ、けほっ！ ……一切の同情なしとは恐れ入るな」

「知るか。しかし、それが先に話していたギフ・プレツシグ【才禍代償】か。——ふん、肺と脾臓、自律神

経に麻痺と混乱が見られるな」

「そんなものだ。今回はまだ優しい方を引いたな」

口元に垂れた血を拭いながら、アルフィアは自らの晒した痴態に失笑する。

——ようやく気分が乗ってきたところにこれとは、随分と運が悪いものだ。

常であれば、彼女はここで自らの症状に響かないような慎重な立ち回りを取ろうと考えていた。

だが、それでは目の前の『英雄』に一泡吹かせることなぞ到底出来やしない——ならば。

「さて、ようやく私の身体も温まってきたらしい！ この程度で止まれるものか、行くぞ！」

「そうでなくては冒険者は務まらない。……ふっ、来い」

鈍る身体に無理矢理魔力を巡らせ、言うことを聞かせる。

数秒前に学んだ能力に^{魔力操作}土壇場で応用を効かせて戦闘を再開させたアルフィアの姿勢に、クレスもまた応えるように前に踏み出る。

——鳴り止まない身体の悲鳴は無視して、前へ、前へと彼女は揺るぎない足取りで踏み出す。

目の前の憧れの『英雄』の横つ面を張ることに全身全霊を傾け、彼女は限りなく高揚

する戦闘意欲のままに戦おうとする。

クレスとの間で拳打と魔法を交わし、彼女の気分は更に高まるばかり。

内臓からは血反吐を吐き散らし、骨は折れ肉は裂け、神経が露出する中で、彼女は背中に走る灼けるような痛みと共に全能感を感じていた。

——運命が、アルフィア私に止まれと訴える。

内臓に鈍痛が響く。頭が振れるように痛い。肺は思った通りに膨らまないし、目も霞んできた。

まるで「これ以上の先はお前には用意されていないのだ」と言わんばかりに、定められた命運が必死になって足を縛ろうとしてくる。

そんな錯覚を無意識に聞きながら、彼女は背中に迸る熱に焦がされるままに疾走する。

——熱い。

普段は冷めたような感覚で世界を睥睨している自分には到底似つかわしくない、浮かれるような『熱』が自分の内側から湧き出していることをアルフィアは自覚していた。

そこには、『才』を発揮する代わりに『禍』として進行する病状によって齎される身体的な発熱も多少なりとも混じっていたかもしれない。

しかし彼女はそれを、なんとなく……己の魂り湧き出る感情の発露だと直感で理解し

ていた。

「ははっ、はははっ……！」

——この程度では止まらない、止まれるものか。

冷めていた絶望が、得体のしれない高揚感によって焼き払われていく。

生の実感を喪つて久しい、灰色の身体に久方ぶりの熱が巡っていく。

それは魔力であつて、『神の恩恵』の齎す産物エネルギーであつて。

彼女の内に知らず眠つていた、魂の渴望「想い」だ。

「ははははははっ——そうか、運命とはこうも容易く乗り越えられるものか！」

力が、無限に湧いてくる。

クレスの手によつていくら身体を物理的に傷つけられようと、内側から【才禍代償ギフ・ブレッシング】に

喰い破られようと。

その気骨が折れぬ限りは何処までも前へ進めるといふ、誰に保証されるまでもない絶

対的な確信の下に、彼女は今、自らを縛る宿命の呪鎖を振り切つて詠う——。

「——【祝福の禍根、生誕の呪い。半身喰らいし我が身の原罪】」

「……いふむ」

振り翳す足刀と同時に紡がれる魔法の気配に、クレスが目を細める。

漲る魔力の量と足元の魔法マジックサークル円の規模からして、超長文詠唱が来ると彼は見た。

無詠唱を身に着けてからの、あえての詠唱。

それはなぜか——今一度、彼女は己が魂に問うているのだ。クレスには分かった。

これは己の絶望と向き合い、答えを出すための歌なのだ。

「禊みそぎはなく。浄化はなく。救いはなく。鳴り響く天の音色こそ私の罪」

並行詠唱——本命の詠唱を一時中断・保持して張られた「サタナス・ヴェーリオン」の弾幕が、クレスと詠者アルフレイアの間に無理矢理距離を作る。

隙間のない壁を生み出す形の音爆壁。

それを彼は音速を超えた拳で殴りつけ、衝撃を相殺。

続く詠唱が、音の壁を越えたクレスの耳に届く。

「神々の喇叭らっぱ、精霊の豎琴たてこ、光の旋律、すなわち罪禍の烙印」

響くその祝詞は、彼女のこれまでに刻んだ人生そのものを現す悲嘆。

金剛石のように力強く輝き、そして脆く崩れ去ってしまう欠点を併せ持つ彼女の抱え続けた絶望。

その独白にクレスは拳で以て問う——だから、どうするのだ？ と。

震脚、崩拳、体当たりタツクル、背面回し蹴り、発勁、前蹴り……拳と蹴りが交互に連携して打ち出される高速連撃ハイスピードコンボを決めて「才禍代償ギフ、ブレッシング」以上の血反吐と胃液その他諸々を吐き出さ

せ、彼女の持つ『才』と『禍』を同時に刺激して。

アルフィアという子孫の、一度は砕けた心に彼自身の『熱』^熱をくべる。

「げほっ、げほげほっ……ぶはっ！——【箱庭に愛されし我が運命^{いのち}よ砕け散れ。私は貴様^{おまえ}を憎んでいる】」

慣れたように赤く染まった唾を吐き捨てて、アルフィアの視線が鋭く光る。

その先に見据えるのはクレスカか……はたまた、一向に己の意に従おうとしない運命か。

——もしくは、そのどちらでもあるのだろうか。

【代償はここに】……【罪の証をもって、万物^{すべて}を滅す】！】

アルフィアの背後に、神々しい大鐘楼が出現する。

灰色の雪のような魔力が舞い散る中、彼はそれが鈍く輝いているのを見た。

それは力を使い果たし、諦観を覚え荒んでしまった色のようにも見えて——。

【哭け、聖鐘楼】

その鐘が、これまで通りの絶望の咆哮を振りまこうと揺れ始める。

彼女の心中に秘める後ろめたさと懺悔、破滅願望さえ含めた呪いの鐘楼が定められた運命を告げようとする。

——しかし、その動きが不意に止まる。

クレスの見立てによれば、既に魔法は完成しているも同然のこの状況。後は解放の指示を待つだけの状態だが、アルフィアが自らの意志で鐘の啓示発動を封じているように見えた。

どういふつもりかと視線で問うクレスに、彼女はニヤリと笑う。

己の血に塗れた死化粧のままに、その首が前を向く——これまでは手を伸ばすことを諦めていた未来へ向かって、瞳が瞬く。

——そこに映るのは、絶望の灰色などではなかった。

それは今まさに力強く打ちあがろうとしている、燃え盛る鋼の覚悟色。

「黙れ運命神の鐘。私はまだ——終われるものか！」

——そうだ、御身クレスの言う通り私は今まで何度もこの力を無造作に振りまいてきた。

私の魔法は私自身が一番、良く知っている。

自らをも壊す絶望の化身——ならばこれを以て壊そう、壊してしまおう。

そう、弱き過去の自分を打ち砕き、新たな自分に生まれ変わるために——！

神々の定めた終焉を意志の力で捻じ伏せ、彼女は己自身で定めた追加詠唱を吐き出す。

「——【理想の残響、英雄たちの挽歌】」

かの黒竜との戦いで散った、もしくはは逃げた家族ファミリーたちへの失望。

そして、他でもない自分自身に向ける、これほどないまでに強い失望を——再起の燃料として心を燃やす。

「私は独り、孤高の丘に悔恨を歌う」

隣に立つ最愛を喪つた彼女の心を真に理解する者は誰もいなくなつた。

それでも構うものか——ああ、今は羨ましき英雄時代よ。

失われたその強き過去への回帰を……戻れるのならば自分こそが戻りたいという本音を掲げて。

「沈む白日。明けぬ理想。黒き月が上り、私の源罪を暴く」

ゼウス及びヘラの描いた未来は漆黒の帳に閉ざされ、ならばいつそエレボスの描く『悪』に身も心も堕ちようとしていた。

しかし目の前に現れた輝きに焦がされ、夢見てしまった——他ならぬ自らが、闇夜を貫く星に至ることを。

そのためにはこの時この場所で、運命を超えなければならぬ。

ならば超えてみせよう——他ならぬ前例がそこで見守っているのだから！

「『されど、憧憬はここに在りて——然らば、戦律は絶ゆることなどなく！』」

既に完結している魔法が、アルフィアの理想を以て新たな姿に塗り替えられていく。

鐘の輪郭がぐずりと崩れ、次第に霧がかかり始める。

悲鳴のような音を上げて軋む魔法の鐘。

それに構わず、彼女は確固たる意志を以て宣言する。

「神々よとくと御覧じろ！ 私の脚が征く、私の腕が拓く、私の血が記す！」

【開け白紙の『英雄楽譜』——我が神聖英雄譚をここに示さん！】

彼女が鐘へ向けて手を伸ばし——それを視界の中で手中に収めて、握り潰す。

圧壊する鐘。舞い散る魔力の塵。

……それが彼女の意志で編み直され、再結集し、新たな黄金の鐘樓を形作る。

「見るが良い英雄、これが私の答えだ！ 【ジエノス・アンジェラス】——【破響】！」

鳴り響くは、鍛ち直された鐘の壮麗な音。

一切の不純のない、きめ細やかな鐘の音。

澄み渡るそれは、新たに生まれた英雄の卵を祝福する天上の調べのようで——。

その『鐘音』に触れた者一切を、問答無用に虚無へと還していく。

鐘の音が内包する、微妙かつ強力な超々振動。

それが強制的に物体の組成を崩壊させ、触れたものを分子の塵に帰す。

——それだけには留まらず。

新調された【ジエノス・アンジェラス】に付け加えられた新機能、『自動詠唱』。

アルフィアが手ずから調律した鐘が奏でる音色。それは彼女が先ほど唱えた詠唱と

同じ音階を踏んでおり、それが術者の無意識領域に干渉し、自動的に次なる音の爆裂ジェノス・アンジェラスを産み出すという『規格外』。

連鎖する度に質は落ち、現状最大で繰り返されるのは九つ分——つまりは本来の『ジェノス・アンジェラス』の九倍の力を秘める音の大瀑布が、クレスただ一人目掛けて放たれる。

彼女自身、しれつと先に【シレンティウム・エデン静寂の園】を纏うも打ち消し切れず、体中の穴という穴から血を噴出さざるを得ない一撃。

「……なるほど」

それを前にして、クレスは小さく頷いた。

どうやら後輩は目論見通り一つ殻を破ったようだ。

ならば、気分が良い——こちらも一つ、祝福代わりの本気を示してやろうと。

『ゼイ・ホルグ・アシッド奔り穿つ影葬の槍』は実は師より十年に一度の制約が定められており、使えない。そもそも、あの威力は今のアルフィアにはまだ早過ぎる。

——となればここは、殻を破る前の彼女が散々喚いていた『英雄』らしさを見せてやるのも良いだろう。

「来い、『隕鉄の剣』」

クレスの呼びかけに応じて、どこからともなく彼の前に一振りの折れた直剣が現れ

る。

握り手に巻かれた布は随分と色褪せており、古びた様相を呈している。

それは、彼が通常開帳することのない太古の精靈武装——彼自身がそう呼ばれることを厭う、ダンジョン・オラトリア迷宮神聖譚に記された『英雄』の劍。

【契約に応えよ、オリエント東方の明星よ。我が命に従い常闇夜を拓け】

その刃に宿る精靈は伝承の通り、既にその身を大地に還している。

ただ、そこに宿る微量の残滓……そこに魔力を叩き込んで強制的に覚醒させ、彼は折れて失われた刃の代わりに眩い黄金の光を切っ先に迸らせる。

——その隣に降り立つは、黒紫に輝く艶髪を携えた女精靈。

眠るように瞳を閉じた精靈おんなに見守られながら、クレスは『英雄』の劍を振るう。

【ソード・オブ・ハートウーシャ】

迸るは、極大極光の劍。

曰く、かつて『大穴』に顔を覗かせた『白亜の巨壁より生まれし赫灼の巨人』を討つたという、英雄の絶技。

万物を断つ星光の刃が音より早く奔り——その担い手に迫る大音塊を、一刀の下に斬り伏せた。

「なっ……ぐううううっつっつ
!!!???」

その刃はアルフィアの身から僅かに逸れたが、代わりに迷宮ダンジョンの天井を易々と10層分近くは貫いて。

ついでに余波で以て、彼女の身体をその向こうまで吹き飛ばしていった。

「……やり過ぎたか？ まあ、手足の一二本消し飛んだくらいならどうとでもなるが……」

吹き飛ばされていった先のアルフィアの安否を確認すべく、クレスは彼女を追いかけて急ぎ上層へ向かうのだった。

——そして、遭遇する。

「——なっ、【静寂】!? 何故吹き飛んで来た!?!」

「やかましいぞ、ひよっこ共……くっ」

本来『神獣テールビュネの触手』を討伐すべく待ち構えていた派閥連合が、突如地面に空いた穴から姿を現した満身創痍のアルフィアに困惑する姿に。

「——悪いな、気が変わった」

一方、混乱する正義と道化の眷属。

「ねえ一体どうしちゃったのかしら!? 地面が爆発したと思ったらいきなりその奥から

【静寂】が飛んできて、ズガン!! って勢いで壁に埋まつちやっただけど!」

「私に聞かれても困るぞ団長! こんなもの、誰が想像できるものかつ」

「本当に何が起こつとるんじや……?」

数日前に観測された未知なる強大な怪物を討伐すべく送り込まれた彼ら地上の精鋭は、地上で邪知暴虐の限りを尽くしている悪派閥の首魁のうち一人がいきなり満身創痍になって吹き飛んできた目の前の光景に開いた口が塞がらなかつた。

——何故、迷宮に侵入できないはずの【静寂】がいる?

——何故、その【静寂】が血と泥に塗れた情けない姿になっている?

そんな彼らの、現状に追いつかない認識に更に追い打ちをかけるようにして。

アルフィアの後から飛び出してきた人影ことクレスは、彼女へと親しみを込めて口を開く。

「……どうやら、目は完全に覚めたようだな」

「ああ。御身のおかげで、ようやくだな」

壁に体を埋める形で沈んでいたアルフィアに、クレスはそつと手を伸ばす。

彼の手を取って立ち上がった彼女は、傷と土埃に塗れながらも、晴れやかな顔を浮かべていた。

もはやそこに、先ほどまで彼らが互いに向けていた戦意は露ほども残ってはいなかった。

端でただ様子を見守るしなくなっていた派閥連合の顔ぶれを前に、二人は悠々と会話を話す。

「しかし、だ。その口ぶりからして、私をあえて煽ったな？」

「そうだ。将来有望そうな後輩が燻っている姿を見れば、それとなく手助けをしてやるのも先輩としての務めだからな」

「ちつ……おちよくられたのは腹立たしいが、原因はあくまでも私の未熟にあるか。悔しいが、感謝を伝えておこう」

そう、先の戦闘そのものは、諦観を抱いていた彼女に発奮を促すためのクレスによる茶番。

その目的が達成されたと両者が納得した今、続ける理由はなかった。

手を取り合つたクレスとアルフィアが、互いを認めたと示すように見つめ合う。

——己の壁を今一度見つめ直し、そして見事乗り越えた後輩への称賛を。

——迷い堕ちようとしていた自分にわざわざ労力を割いてくれた先達への感謝を。

相互に無言の満足を示した二人の有様は正しく、短くも濃厚な時を共に過戦ごした戦友の姿であつた……。

……とは言え。

その事情を何一つ知る由のない派閥連合の側からはやはりと言うべきか、「いやいやいや！」と当然の突つ込みが上がつて。

「なんだか一昔前に流行つた青春モノの一頁みたいなのを見せてつけられてるんだけど、これってどういうことなのかしら!？」

派閥連合全員の心の声を代弁して叫んだアリーゼに、二人が顔を向ける。

「また面倒臭そうなのが来たな」「騒がしい」と目配せで会話するクレスとアルフィアに、彼女は大げさな身振り手振りで以て状況説明を請うた。

「迷宮ダンジョンにどデカいモンスターがいるらしいって言うから、倒しに来てみれば主役級の大悪役が地面から吹っ飛んできて!？」それで後から出てきた男の人と手を取り合つて、それで「全部、終わつたんだ……」みたいな満足顔してて!？」私たちには何が起きたのか、さっぱりなんだけど!？」

「相変わらずきやんきやんとよく叫ぶ娘だ。……そうだ、今お前の語った通り。この迷宮内ダンジョンで我々が企んでいたことは全て終わらされた。他でもないこの方の手によってな。つまり、貴様らもそれなりに覚悟をできていたようだが、それも無駄足に終わったということだ」

アルフィアの返答によつて、この場の全ての視線がクレスに集まる。

——これは俺が答えなければならぬ流れなのか、と彼は若干煩わしく思いつつも説明を引き継ぐ。

「あー、このアルフィアという女の言ったように、お前たちにとつて喫緊の課題だったらしき【神獣テルピユネの触手】——そもそもこいつの正式名称を今の冒険者お前たちが知ってるのか俺は知らないんだが——迷宮内ダンジョンにおいて一定量の『神の力』アルカナムの発露を以て顕現するモンスターダンジョンの一種だが、そいつなら既に俺が始末した」

「なっ……先遣隊の報告にはレベル6から7相当の能力値アビリティを有しているとあつたが、それを単独ソロで討伐しただと？ 俄かには信じがたいが……確かに、発見報告以来続いていた大地の震動が一切途絶えている……」

「リヴェリア様!! 確かにそうですが、あのような見知らぬ者の言葉をそう容易く信じるのですか?!」

顎に手を当てて思考する素振りを見せるリヴェリアに、リユーが声を上げる。

その言葉にクレスは肯定を半分と、呆れを半分示した。

「信じるも何も、気配を感じないことが分かれれば一目瞭然だろう。それに、お前たちとは一度会ったことがある。あの時も散々食って掛かってきたはずだ、一応は見知らぬ仲と呼べない仲じゃないのか？」

「……そう言えば、その声！ まさかあの時、アーデイを助けてくれたフードの人!?!」
「気づかなかつたのか」

「気づかなかつたわ！ ごめんなさい！ でもちよつとだけ言い訳するならあの時は声がちよつとくぐもつてたから、聞き取りづらかつたの！」

「……まあ良い。俺の正体など、この場においては些事に過ぎんだらうからな」

素直に頭を下げてきたアリーゼを許しつつ、クレスはさっさとこの場を終わらせるべく、彼らの先ほどから求めていた答えを口にしようとした。

彼はあくまでもアルフィアという迷宮攻略に役立つ才能が歴史の塵と消えていくことを惜しんでいただけなのであって、それ以上のことに関わるつもりは微塵もないのだ。

——つまり、彼が行おうとしているのは、端的に言つてネタ晴らしであった。

「それで、お前たちが気になつていゝるであろう残りの事情もさっさと説明してしまおうか。つまり、何故こいつがここまでボロボロになつてゐるのか。何故俺がさつきまでこ

いつと戦っていたか、だが」

「——む、おい」

「それはこの後輩が、自分への失望を的外れにもお前たちにぶつけようとしていたからだ。それは筋が違うだろうという訳で、その勘違いを正していた」

「……なに？　自分への失望、だと？」

クレスのあまりに端折った説明に、派閥連合同の頭に「？」が浮かぶ。

そんな彼女たちに、彼は仕方がないなど言った素振りで一から説明してやることにした——そう、他でもない本人の目の前で。

話の流れを敏感に察知した彼女がクレスの口を塞ごうとするが、もう止められそうもない。

「待て。何を言おうとしている？」

「何って、お前が先ほど俺に語っていたことをそのままこいつらにもう一度説明してやろうとしているだけだが。——安心しろ、後世の批評家よろしく適当に難癖をつけたりするつもりはない。先ほどの戦いの中でお前が吐露したものの、それを新鮮さそのままに伝えよう」

「違う、そうではない。私が憂慮している点はそこではない。今思えば、なんだ……急に以前の言動が恥ずかしくなってきた。それを大っぴらに話すというのはだな」

「知るか。恨みたければ浅慮のままに突っ走った過去の自分を恨め。それに、迷惑をかけた連中にはお前の動機を知る大義名分があるはずだ。俺から話されるのが嫌なら、自分から話せ」

「うぐつ……それは、いやしかし……分かった。私から話す、話そう」

結果、クレスに押し切られるような勢いで、根負けしたアルフィア。

彼女は「もうこうなればやけくそだ」と言わんばかりに、派閥連合側に向けて自身の思うところの全てを詳らかに曝け出すのだった。

——もはや未来のない、自身へ向けた限らない絶望。

——ならば未来ある後進の贄となり、糧となつて。彼らに期待をかけようとして。お前たち

——そうして編み出された、英雄時代の再来を目指す『計画』の全貌を。

余すことなく、包み隠さず。

もういつそ恥の上塗りになろうと構うものかと、彼女は心中に抱えていた悩みやそれに由来する想いを全て吐き出した。

そして。

もちろん、そのあまりに身勝手な立ち振る舞いに派閥連合からは非難の嵐が轟々と巻き上がる。

「——聞けば、なんと身勝手ではた迷惑な！　なんとたる傲慢、なんとたる理不尽！」

「——大義のために弱者を犠牲にしなければならぬだど、絶対に間違っている！」

「——確かに私たちにも非があることは認めよう。しかしそれでも、民衆を巻き込む道理はない！」

輝夜から、リユーから、リヴェリアから。

その他全ての正しき眷属たちからの怒りを前にして……アルフィアは。

「——そうだ、お前たちの言う通りだ。私が悪かった」

全て自分の非を認めると、素直に頭を下げた。

腰を綺麗に垂直に折った、一切の歪みのない謝罪。

その、これまでの彼女には有り得ない態度に思わず派閥連合の声が止む。

「私は切羽詰まり過ぎていたようだ。現実を勝手に諦め、いつか到来する暗黒を打倒するために更なる闇を産み出そうとしていた。——だが、それはとてつもなく卑怯で、また無責任な行為であると改めて思い知らされた」

アルフィアがちらりと、横に立っていたクレスに目を向ける。

その揺るぎのない立ち姿に、彼女は久方ぶりに思い出させられたのだ。

——『想い』とは、他ならぬ自分で叶えてこそ最も輝くものなのだ。

「もう、お前たちに無理矢理私たちの『想い』を委ねるようなことはしない。私の『想い』は、私が背負い続けなければならないのだから。故に今後はお前たちを巻き込むことな

く、私自ら遺された最後の三大冒険者依頼の残り一つを達成すべく精進するつもりだ」
「……何を今更！ 貴女たちの勝手のせいで、どれだけの人々が犠牲になったと——！」
「そうだな。無論、その前に罪は償おう。遺族への賠償は行うし、破損した街並みの修繕費用も耳を揃えて払う。招き入れた悪派閥も一匹残らず仕留めようとも。全てはそれら、贖罪の行脚を済ませてからだな……だが、その前に」

殊勝な態度で謝罪の意を表明していたアルフィアの顔が、上がる。

——そこには、血を滴らせ、爪が剥がれようと変わらない覇者の威圧が浮かんでいた。その視線が、油断していた派閥連合の背筋を射抜いて心胆寒からしめる。

「このままここから、お前たちを挫折一つなく返すのも忍びない。当初の想定とは少々形が違うが、強者による洗礼——受けていくか？ 後輩ども」

そう、もはやアルフィアには彼女らに『想い』を託すつもりはなかった。

ただ、それでも『計画』の上で与えようとしていた格上との実戦経験——それくらいは分ける機会を与えようと、クレスとの戦いを経た彼女は思った。

彼女が行うのは、これまでと違ってあくまでも選択肢を与えるまで。

その決定権を握るのは派閥連合側だが——果たして、答えは。

「——いえ、それは後にしましょう！ 皆、今すぐ地上に戻るわ！」

この場の指揮官であるアリーゼが選んだのは、目の前の経験値ではなく帰還だった。

冒険者としてではなく、今オラリオに必要とされる『正義の使徒』としての勇氣ある撤退。

「サラって娘のおかげでだいぶ楽になったけれど、まだまだ人手は足りてない！ 迷宮こつちでの用がなくなつたなら、まずはそつちへの対処が優先！ でしょ、ガレスのおじ様！」
「……うむ、それがこの場の最善手じやろう。もはや【静寂】に敵意は無し、ならばこの場で斧を交わす必然性もなからう」

「よし皆！ せつかくここまで潜つてきたところ残念だけど全力反転！ 地上オラリオへ向けて転換撤退後進！」

ここが正念場だと気合を入れていた派閥連合の面々は一様に不満を浮かべたものの、アリーゼの判断とそれを後押しするガレスの声を受けて、すぐさま来た道の逆走を始めていく。

颯爽と最前列から最後尾へ位置を入れ替えた彼女に続いて、彼らは胸に小さなしこりを残しながらも地上目掛けて駆けだす。

「——フ。そこは見誤らなかつたか」

潔いアリーゼの態度に僅かな微笑みを溢して、アルフィアもまた自身の後始末をつけるためにその後が続こうとする。

だがその前に、クレスが「まあ待て」と彼女を押し留めた。

「その前に一つ、餞別をやろう。背中を出せ」

「……なんのつもりだ？ 恩恵の更新の真似事でもするつもりか」

「ところがどっこい、その通りだ。……自慢じゃないが、俺格上との戦闘で割と良い感じに経験値が溜まったはずだ。東方の諺に『鉄は熱いうちに打て』とあるように、経験値は新鮮なうちに反映した方が数値の幅が大きい。だが確か今、女神ヘラは都市外でゼウスを追っかけて世界中を飛び回っていると聞く。それを捕まえるまでに今回の経験値を劣化させるのは勿体ないだろう？」

「それはそうだが、まさか下界の住人が恩恵を更新できるなど……いや、御身のここまでの埒外ぶりからして今更か。それよりも私たちの『神フルナの恩恵』には鍵が掛かっている

……『更ステイタス・スニツチ新薬』か？ そんな希少なものを、よくも……」

アルフィアはすぐさま非合法の魔法薬の存在に思い至るも、クレスは首を横に振る。

その手にはいつの間にか、二つの液体薬と一つの錠剤が指に挟まれていた。

「正確にはもう一つ上、『発現薬』も用いる。特定の系統の『神フルナの恩恵』にしか効かない代わりに『魔法』と『スキル』の発現までが可能になる、超が十個くらいつく激レアな代物だぜ」

「なんだそれは。私たちのファミリアでも聞いたことがないぞ、そんな魔法薬は」

「素材が素材だからな。だが効果は間違いない、治験も済んでいるし俺の主神にもお墨

付きをもらつてる。だから、そら。早く背中を見せろ。なに、俺はゼウスと違つて子供に欲情するほど餓えちゃあいない」

「別に今更そこに恥じらいを覚えることもない……それに私はもう二十四だ！」

「まだまだ青臭い年頃だな。せめて五百を超えてから出直してこい、がきんちよ」

なんだかんだ言つて渋々ドレスの紐を緩め、背中を露出させたアルフィアにクレスは素早く『解錠薬』『更新薬』を垂らし、そして『発現薬』を砕いて散らす。

それから彼は己の背中にある『恩恵』に意識を連結させ、そこから滲ませた神力オス

の神の力を腕から指先へうまくインクのように制御して、彼女の恩恵に神妙な手つきで干渉していく。

たった今積み重ねられたばかりの、量としては少なくとも質は極上の経験値。

それを『神の恩恵』が記録した主の願いに従つて、能力値、スキル、魔法にそれぞれ

振り分ける――。

「……なるほど、良かったな。もう、女神ヘラさえいればレベルアップできる所まで来ているぞ」

「――は？ いや、それも当然か……御身と戦つてレベルの一つも上がらない方が逆におかしいか」

「むっ……まあ、そうだな。これは未だ俺には不可能な芸当だから、そのお楽しみは次の

機会にとっておけ。『昇ステイタス・華カンキスタ・葉カ』の研究は魔法大国アルガナの知り合いに譲ったしな……ふむ、その内そっちにも久々に顔を見せるか。……それよりほら、終わったぞ。新しい自分を確認してみる」

クレスがざつと書き留めたメモを、アルフィアは手に取って確認した。

六つある基礎能力値アビリティは既に全項目が限界を突破しており、評価値SSSに突入しているものさえ見受けられる。

更には、魔法【ジエノス・アンジェラス】の一部詠唱追加。

スキル【誓寂歌姫アリシア・アッシュエンテス】——クレスの【寡黙不語カタラヌモノ】と同系統の、無詠唱スキル——の発現。

そして、最も大きな変化が、【才禍代償ギフ・プレツシング】の進化だった。

新たな名は——【才禍絶奏ギフ・アット・オーバロード】。

追加された一文は、以下の通り。

・『理想おもい』の響く限り命運突破。

「良かったな。さっきのお前の魂からの叫びは、運命の鎖という奴を見事引き千切ってみせたようだ」

「……どうやら、そのようだな」

残念ながら、未だ完全に運命の女神が定めた『代償』が消失したわけではない。

しかし、それを上書きするだけの意志を示し続ける限り、それは実質的に無力化されることだろう。

明文化された『運命からの脱却』——その短くも力強い一文を自覚したアルフィアが、いずれ自我^{エゴ}で世界の理屈を塗り潰してしまえる己の同輩になることを願って。

「そら、行つてこい。そして待っているぞ。迷宮^{ダクジョン}の奥深くで、お前たちが追いついてくることを」

「ああ。——その前に精々、孤独死しないことだ！」

それ以上の言葉は不要と、アルフィアは颯爽と地上^{オラリオ}目指して駆け昇つていった。

日の当たる場所へ再び身を躍らせた子孫を見送ったクレスの後ろで、足音が複数。

「——なんだ、何がどうなっている？」

「我が神よ、この状況は……何故、叫喚^{エレボス}の歌が聞こえていないのでしょうか？」

漸く配下を引き連れてご登場の遅刻^{エレボス}神が、クレスただ一人を除いて誰も存在しない決戦の舞台に呆然と間抜け面を晒す。

彼らに向き合ったクレスはただ一言——。

「——悪いな、気が変わった」

そも、「手出ししない」などという悪神との約束を律儀に守る方がよほど間違っているだろう、と。

彼は悪びれもせず、のこのこと現れた残党たちへ後始末の剣を振るうのだった……アルフィアの再起に要した時間及び魔法薬など諸々のコストを、彼らという『恩恵』持ちの生物都合の良い実験素材で補うべく。

さあ謡え。彼らは今日も、明日を征く……

そして、暗黒時代は急速に終焉を迎える。

闇を乗り越えて光の側に帰還した英雄^{アルファイア}。

弱者の食卓を守るために吹き荒んだ嵐^{サラ}。

その双極が台風の目となった『悪』への粛清の風は瞬く間に悪派閥^{イヴィルス}の残党の首を狩り
尽くし、戦局を『秩序』一強に塗り替えて。

『老兵』^{ロトル}は死なず、ただ時の流れに任せて静かに消え去るばかり。

新たに生まれた『英雄の卵』たちは祝杯と共に、新たな冒険への誓いを立て。
時は巡り巡って、本史へと続く――。

オラリオ南東区画、『第一墓地』。

街を支配する数多の祝声に、ベルはようやく納得を得た。

「なるほど、そう言ったことがあったんですね」

「そうさベル君。七年前の今日この日、この英雄の都からは一切の『悪』が駆逐された。しかも冒険者たちの犠牲はほぼ〇に等しい、大快挙だね。俺たち神だつて、こんなにもうまく事が運ばれるなんて誰も思つちやいなかった……冒険者の明確な勝利さ」

町中を行き交う、華々しい歓声の数々。

冒険者の、英雄の都の勝利を謳う凱旋行列。

道端にまで伸ばされた臨時の席で酒杯を煽る大人と、お菓子の詰め合わせを買い与えられ喜ぶ子供。

誰も彼もが踊り浮かれ、今日という日を盛大に祝っている。

オラリオに来て初めてこの日を迎えたベルは、街角で偶然遭遇したヘルメスに連れられて、それらとはかけ離れた墓地で祝日のいわれを聞かされていた。

「とはいえ、残念ながら誰も生き残れたわけじゃない。少なからず、あの戦いに命を捧げた子供たちもいるんだ。そんな彼らのことを忘れるのも良くないからね、こうして観測者たる俺はこの日の午前中は墓参りをすることに決めているんだ」

そう言つて、ヘルメスは手元の花束から抜いた一つの花を目の前の墓に手向け、黙禱をささげる。

そこに名を刻まれた者の顔を思い浮かべ、その業績に思いを馳せるように。

「——とはいえ、午後はもちろんいつも通りにアスファイたちと華々しく祭りに繰り出す

予定だけどね！　ベル君もそんな感じで誰かに誘われたりしてゐるんじゃないのかい？」
「え!?　あつ、へっ!?　い、いや、確かに神様やりりたちから色々誘われたりしていますけど……」

「くーつ、やつぱり隅に置けないねえベル君は！　つと、それならもしかして俺がこんなところに誘つちやつたりしたのも悪かつたかな？」

「いいえ！　そんなことはないです！」

ヘルメスから事のあらましを聞かされたベルの中に去来するのは、過去の先達たちへの素直な尊敬だった。

巨大な『悪』を前にして、それでも前のめりに倒れた冒険者たち。英雄

彼らに感謝と誓いを捧げることもまた、この祭りの重要な目的の一つだと知ることが出来たことは、彼にとつて間違いなく大切な収穫だった。

「そう言ってくれるなら良いんだが……つと。どうやら先客が来てたらしいな」

ヘルメスに付き添う形のベルは、他とはまあまあ離れた場所に立つ三つの墓に案内される。

そのうち真ん中の一つにだけ、既に二輪の花が添えられている。

燃え盛るような深紅の花と、透き通るように純粋な白の花が。

「ヘルメス様。こゝは……」

「あー、ここは当時、最後に天界に還った俺の神友とその仲間の墓さ。とはいえ、どれも形ばかりだけどね」

「形ばかり……?」

「実際には中に誰も入っていないからだよ。だけど誰かが死んだことを記録として現世の人間に認識させるために、必要な記号シンボルだとして設けられたんだ」

ヘルメスはその、既に花の捧げられていた方へ先と同じように黙禱をささげる。

そして残る二つへ、ベルに花を捧げるよう促した。

「そして、ベル君。ちよつとしたお願いなんだけど、君にはぜひその二つに花を飾つてやつてほしい」

「僕が、ですか?」

「別に大した意味はないけどね。そつちの二つは君と同じ冒険者のものだ。それも、どちらも歴史に名を遺すくらいの傑物俺でね。どちらも神俺から鎮魂を祈るより、君からの方が良いと思うんだ」

「それなら……」

ベルはヘルメスから受け取った花をそれぞれの前に添え、秘かに祈りを捧げる。

——どうか、安らかに。

「ありがとう。きつと彼らも喜んで……いや、怒られるかなあ……」

「なんでですか!？」

「いやあ、やつぱり君に余計なことをさせたつて後で追いかけるような気も……そう思うと急に寒気がしてきたな。よしベル君、今日ここでしたことは俺との永遠の秘密にしてくれよな☆ 絶対誰にも言つちやダメだぜ!」

「別に言いふらしたりとかなんてしませんけど!? えつ、ちよつ、ヘルメス様!」

ばひゅーん、と手元の花を全て手向け終えたヘルメスが足早に去つていくのを、ベルは目を丸くしながら見送るしかなかった。

やがてその姿が墓地の端で、金髪と水髪に捕まつて両挟みになるのを見届けてから、彼は先ほど祈つた墓地へと振り返る。

「……」

その墓標に刻まれた意味を、ベルは知ることはない。

ただ、そこに偉大なる先達が眠つているのであろうことを彼はヘルメスの言葉から察していた。

——貴方たちに誇れる英雄に、なりたいと。

もう一度、それだけを誓うように黙禱を捧げ、彼はその場を立ち去るのだった。その背中を、今日も燃えるような英雄願望が灼く。

「——さて、初披露だ」

今日も今日とて、クレスは迷宮ダンジョンに潜る。

祝宴も歓声も、彼には遠く。

目の前にそそり立つは、雷鳴纏う凶犬型のモンスター。

その群れを前に、彼は腰より引き抜いた双釘剣を逆手に握り交差させる。

「歌え『ヴァナ・ディース』。我が魔を縛り、薙を寄せ」

サラが毒血塗れの大男と一緒に持ち帰ってきた、かの暗黒時代の遺産の数々。

そのうち二人を、生きながらに加工した能力値操作の呪姉妹剣カース・ツイン。

刃より自ずと迸る鮮血に濡れる『悪』愛しき双剣を構え、彼は今日も迷宮ダンジョンの『未知』に

挑む。

「おまけ」クレスの三分（大嘘）??悪派閥クツキング！
 ××もあるよ〜

そこは、一寸の光さえ見えぬ暗闇だった。

「ならば此処こそがあの世だろうか？」と彼女はまず最初に疑った。

——なぜなら、自分はとうに死んだはずだから。

あの皆が殺し殺され合った素晴らしい狂乱の七日間の最後に他ならぬクソツタレの
 黒妖精ヘグニによつて首を断られたはずだと、彼女はその自らの首が寸分変わらず切断された感
 覚を覚えていた。

——だが、どうした訳か。

彼女自分彼女は生きているようだ。

訳の分からぬこの現状に対して、心臓がドクドクと脈打っている感覚が分かる。

深く深呼吸すれば薄自機い胸が膨らみ、酸素と魔力が全身に巡る快感が確として理解でき
 る。

——ならば、今の私は……？

「……ふおういふふおうふおと？」

「目が覚めたか『妖魔』の片割れ。良い夢は見れたか？」

カチリ。

小さくスイッチを捻る音が聞こえて、ようやく彼女の居た部屋に明かりが灯った。

ダイナの、声にならない——レベル5の咬合力に耐え得る頑丈な口枷の隙間から漏れ出た、その疑問に答えたのは一人の男だった。

その男は、がらがらと脚付き台ストレッチャイを押し、彼女の横までやってくる。

そこで彼女は気づいた。

男の顔を見ようとしても、首が上手く動かない。

否、それどころか、起き上がろうとした自分の五体そのものが動かない。

彼女の四肢が、頭部が、腰が……指の一本に至るまで、嚴重にかつ丁寧テイニングに拘束されている。

「さて、現状説明だ。インフォームド・コンセント十分なる事前説明という奴だ。ただしお前からの同意は既に取れているものとみなす——なにせお前という犯罪者マサイダーは、自らが積み重ねた数十数百の無垢なる犠牲の血によってとうに己が死刑執行書に署名サインを済ませているからだ」

ダイナに一方的な口調で現状を告げる男——この部屋の主ことクレスは、彼女の隣に脚付き台ストレッチャイをピタリと止めた。

その上から香る濃密な死の臭い、それを彼女は知っていた。

それはどの命よりも深く濃密に己と溶け交わった、大切な妹の臭い。

「ふえふあ?」

「そうだ、コレがお前の妹だ。その完成体だ。よく見るが良い。なにせ今からお前もこうなる」

ぱちり、とクレスが親切にもデイナの頭部から拘束の一部を外してやる。

それで首が自由になった彼女は、隣に運ばれてきた妹ヴェナを見た。

正確には、かつて妹であったもの、その成れの果てを。

そして今から自分がそうなるものを見た——見てしまった。

そこに安置されていたのは、慣れ親しんだ黒妖精の瑞々しい五体ではなかった。

隅々まで磨かれ、細心の注意を以て油を塗られ、美しく装飾された……一振りの短剣

であった。

「……ふえ、ふあ?」

「然りだ。サラの報告を受けた俺がお前の特異な魔法から考案した生体魔剣、その妹剣だ」

哀れな姿になり果てた妹の姿に目を見開く姉に構わず、クレスは説明する。

その、塞ぐことの出来ない妖精族特有の長耳にはつきりと伝わるように、明瞭な声で

魔劍デイスの製造方法改造を語ってやる。

「まず、一度死んだお前の骸をサラが眷属吸化することでその魂を黄泉の国から引き摺り出した。だが生き永グらの屍は素体として使い物にならん。故にまずはその呪詛塗れの血を透析し、蘇生した。ここまでの処理は二時間前ほどに完了している」

愕然としたままのデイナに近づいたクレスが、彼女の華奢な前腕に差し込まれていた針を抜く。

その針の繋がっていた先は何やらごうんごうんと唸る物々しい魔導機械であり、それが彼の操作によって音を止めた。

得体のしれない機械に繋がれていたことに一瞬恐怖を感じたデイナだったが、それが彼の言葉によって「既に終わったのだ」と悟り、落ち着いて……彼女は周囲を見渡して再度怯える。

なにせ彼女の周囲には——彼女の囚われた部屋の四方には、百十数年生きた彼女にもよく分からない機械の数々がひしめいており、更にはその内幾つかはまだどるん、どるんつと動いていたからだ。

——分からない。

劍の姿にされたのだと男クレスが語った妹と、呻くような音を立てて動き続ける魔導機械——不気味な『未知』に囲まれたデイナは、自分が一切抵抗の出来ない現状と並行してそ

れらを認識し「分助からない！」と怯えを抱いた。

知識を持つ者が見れば、そこを魔法使いの『工房テリトリ』と呼んだだろう。

そして彼女はその中央に置かれた検体であり、『まな板の鯉』なのだ。

「では加工施術を始めよう。まずは要らない部分を切つて落とす。——剣に手足は要らん。内臓も要らん。要るのは脳髓と心臓、それと背中の『神フアルナの恩恵』だ。それら以外の一切合切とはお別れだ」

デイナの隣に立つて彼女を上から見下ろすクレス。

その瞳には同情も、憐憫の欠片さえも何一つなく。

唯々ただただ素材に対して真摯に向き合う鍛冶師の、怜愍な熱意だけが映し出されていた。

そこに彼女は必死になって目で訴える——そんなのは嫌だ、と。

だが彼はその訴えを一考の余地もなく退ける。

何故なら彼女は悪派イツイルス閥だからだ。

『人を殺せば死刑』と云う、古今東西共通の法理に真つ向から喧嘩を売つた大犯罪者なのだ。

その法理の下において、そうすれば死刑となることを知つた上で、彼女は人を殺し、犯し、凌辱したので。

……ならば今更「嫌だ」と駄々をこねるなんて、ちゃんちゃら可笑しな話ではないか

?

クレスはその手に持った手術用の小刀^{メス}で、ヴェナの左肩に斬り込みを入れる。
 白妖精^{エルフ}の淡くきめ細やかな絹の如き素肌にスツと刃を侵入させて。

そのままびっつ、と撫でるかのように周囲の皮膚を剥ぐ。

「ふーっ!?!」
きやあつ

「騒ぐな。騒いでも何一つ変わらん」

それから、剥き出しとなった血色の良い血肉の解体にクレスは取り掛かる。

血管と神経を断ち切り、筋繊維を骨から剥がして。

見えた関節を、ゴキツ——それだけで容易く、ディナの左腕は本体から取り外された。

「ふぐーっ!?!」
嫌あああつ

大気に晒された神経の先端から、稲妻のように迸る激痛。

唐突に左腕の触感が消えた喪失感と、その代わりに響く痛みによって彼女の瞼の裏に星が瞬く。

その感覚の中で、彼女は思わず気絶しそうになった。

だが、クレスの続ける作業が否応なしにディナの意識を現実へ引き戻す。

「次、左足」

「ごきりっ。」

「右足」

ごきりつ。

「右腕」

ごきりツ……。

全ての手足が取り外され、綺麗に並べられる。

その様子をデイナは直視する……してしまふ。

自身の固定された手術台の、真上に設けられた大鏡。

その中で四肢を喪つた自分が不可逆に解体されていく様を、彼女はまざまざと見せつけられる。

「むーっ、むーっ！」

嫌だ、嫌だと首を横に振るデイナ。

されどクレスの小刀メスは問答無用と言わんばかりに、今度は晒された少女姿の『妖魔』の臓腑はらわたを切り刻んでいく。

薄い脂肪と、その向こうに存在する練り上げられた腹筋。

それらを覆う滑らかな皮膚を容赦なく縦に切り裂き、開腹。

開創器具を装着して、中で脈打つ生暖かい臓器を順に取り出していく。

肝臓。臍臓。胃。結腸。

腎臓。膀胱。子宮及び卵巣——。

身に覚えがあり過ぎるほどに、これまで彼女たちが他者から奪い、むしゃぶりついて、その中から溢れ出る命の雫を浴び、飲み乾したものたち……それら生の輝きが、自らの身体から取り除かれていくという自業自得。

一つ、また一つと外されていく度にダイナは己の身体が軽く、また寒くなつていくのを感じた。

その悍ましい感覚に身もだえしようとする最中——今度は胸部が開かれる。

外気に晒されている、彼女の慎ましやかながらもツンと立った桜色の頂上を持つ小丘。

そこに女としての価値を一切認めないまま、クレスは胸筋を左右に開いて肋骨に手を伸ばす。

彼の振るうメスが容易くレベル5の骨を断ち、彼の五指がその奥に安置されていた二つの巨大な肺を優しく驚掴みにして……どちゆり、と水音を立てて取り外される。

「■■■■——っ！」

肺を喪えば、もはや呼吸はままならず。

失われゆく生気を必死に求めて足掻こうと声にならない叫びを上げるダイナに、クレスは落ち着いた手つきでてきぱきと新たな機械——生命維持装置を繋いでいく。

「安心しろ、後で返す。ここからの作業で邪魔だからいったん外したただけだ。不要な部品を全て取り外し終えたら、残った分に必要な酸素を回すだけに加工して付け直すさ」
そこから先の手順に取り掛かるにあたって、クレスは更に素早く手を動かしていった。

とはいえ、基本的な手順は特に変わらない。

皮を剥ぎ、肉を剥がし、内臓を抜いて、骨を関節から外していく。

その光景は、サラやその他料理人が行う調理や、ダイアンケヒト配下の医者らの行う手術と何ら変わらない。

むろん、説明も忘れずに。

「ああ、そう言えば。これは昔に不正の連中から拝借した資料にあつたんだが。前頭葉に繋がる神経の一部を切断した場合、対象は多くの情動を喪失する。様々な物事に無頓着になり、自己認識が鈍化するんだ。知ってたか？」

その時の連中の団長あたまで実際にやってみたんだが、ものの見事に使い物にならなくなつてな……今回はやらんが、覚えておいて損はなからうよ」

そう言つて開頭したダイナの前頭葉をぺちぺちと触りながら語るクレスの独り言は、残念ながら恐怖によつて彼女の意識には届いていなかつたが。

「む、奥に虫歯が一つあるな。こいつは使い物にならんが……よし、幸いにして奥まで浸

食はしていないな」

がきゅつ、と麻酔無しに歯を抜かれた挙句、歯肉をピンセットで挟られながら奥の顎骨を観察されたり。

「この髪は中々に質が良いな。殺人エルフとは言え、妹と同じくその辺りの手入れは欠かしていいのは良いことだ。その他の体毛とあわせて、よく魔力を通す導線になりそうだ」

女の命とも呼べる髪どころか全身の毛を一つ残らず剃られ、更には部位ごとに分けて小瓶に詰められる恥辱を与えられたり。

「消化器系はさつさと洗わないと特有の臭みが定着するからな。部位ごとに分けて裏返して塩で揉んで、と……おい、野菜類はきちんと取っていないかったのか？ 肉食系の臭いが強いぞ、しかもこれは吸収しきれない鉄分のだな……血の呑み過ぎだ」

果てには腸内の様子から近頃の食生活を推察され、それについて苦言を呈されたりという滅茶苦茶な始末。

恐怖と緊張の狭間に揺れ動いていたその時のデイナの意識は、神経が過敏になり過ぎるあまり、そのほぼほぼ九割方について聞き届けてしまった——端的に言つて、それは彼女の生命と自己認識において最大の絶望であり、凌辱であった。

たとえクレスにその意識が1パーセントほどしか無かったとしても、彼女にとって彼

は過去の自分を映し出す鏡のように思えた。

被害者の苦痛を嘲笑う、加害者としての優越感。

その何にも代えがたい至上の快樂に包まれると同時に、彼女の瞳は常に生贄たちの浮かべる絶望を映していた。

記憶の中に氾濫するほどありふれた、それら犠牲者たちの悍ましい表情。

それらが今、自分のものとすり替わって彼女の意識上に投影される。

そう——今や被害を受けるのは自分であり、生贄に捧げられたのは自分であり、痛ましい犠牲となるのは自分自身なのだ。

その事実を狂おしいほどに自覚して、いつそ発狂してしまえばどれほど楽になれるだろうかと彼女は現実逃避を考えた——だが。

「この『大聖樹の葉』を発酵させた抽出液はエルフに強い覚醒作用をもたらす。『魂』に損傷が行き過ぎて廃人になると困るからな、入れておくぞ」

僅かに濁った黄金色の液体が注入され、ダイナの意識を無理矢理現実留め続けるといふ地獄。

彼女はどうかあつても、今自分に起きている時間の流れから目を背けられない。

やがて彼の手はダイナの美しい瞳にさえ届き、そこから光を奪ってしまう。

柔らかな耳さえ彼の指によって奥の三半規管ごと取り外され、やがて彼女は自分が何

処にいるのかさえおぼつかなくなってしまうた。

ただ自分がそこに居ること、それだけが辛うじて認識できる彼女は。

それでもなお敏感に、外界で起きている己の変化を脳と繋がったままの『神の恩恵』越しに感じ取ってしまう。

「骨は圧縮硬化して芯材に。歯は他の抽出した金属分子と合わせて刃に。皮と腸は煮溶かして接合材に。肉は筋をほぐして緒紐に……」

——今再び、彼女は最初の状況と同じく闇の中にいた。

目覚めた時とまったく同じ、無音無光の世界。

そこに冷たく響く、謎多き男が自分だったものを加工する声と音。

聞こえないはずのものが、何よりも強く聞こえる。

見えないはずのものが、何よりも鮮明に浮かび上がってくる。

そうしている内にやがて、男の手によって失われていたはずの肉体の熱が再び蘇っていく。

加工の終わったであろう、道具としての身体が組み上げられていく。

——最後にデイナは、己一人の『無』の世界に仄かな暖かさが差し込んだのを直感で

悟った。

「（……これは、ヴェナ？ ヴェナなの？）」

いつ終わるとも知れない、一瞬とも永遠ともとれる暗闇の恐怖。その果てに感じた、懐かしい妹ウエナの気配。

獲物の油脂分が髓まで沁み込んだ艶やかなチョコレート肌の温もりと、くすぐつたい銀髪の絡まり。

その愛に寄り添われたと感じたデيناは、小さくとも、確かな安心を抱いた。

生まれたその時から一瞬たりとも離れたことのない、愛しき破綻の片割れ。

生まれながらにして抱いていた生物いきものとしての欠けを互いに補完しあう至上の狂気あゐ。

それが隣に戻ってきたことを双子として確信し、彼女はようやくこの未来の見えない世界に安堵を見出した。

——暗くて、怖くて、何もかもが奪われてしまった私デينا。

——だけど、もう怖くない。

——だって、これからもずっと妹ウエナだけは一緒だから。

「——うふふ。そう、私たちはいつだって……。隣り合わせ、なんだから……。」
側に妹が居ることの確信を抱きながら、デيناは次第に暗闇にその意識を溶かして
く。

張り詰めていた意識がほつれ、暗い夢の中にゆっくりと落ちていく。

妹と仲睦まじく絡み合う幻想を抱きながら。

決して終わることのない、永遠の微睡^{あくむ}みへと——……。

魔劍の完成を迎えたクレスは、疲れを吐き出すように息を吐いた。

「終わった、な。七時間と半……妹の方で一度手順を踏んだ分、姉の方は早目に済んだか」

出来上がった姉劍を妹の皮膚と髪で作った鞘に納め、更に相對する妹劍には逆に姉から作った鞘を嵌めて、彼は真の意味で成った一対の劍を見下ろす。

外見は正式なエルフの文化様式に倣った、単調^{シンプル}と高貴を兼ね揃えた白黒の双劍。

しかし魔法の素養があれば、一目見ただけで察せられるだろう。

互いに喰らい睦み合う、双子の無限龍^{ウロボロス}を想わせるような強烈な呪詛に塗れた魔劍。

「お前の銘はどうに決めている。【ヴァナ・デイス】だ。見た目は悪くないが……問題は性能だからな。試し切りと行くか」

人によっては手に取ることさえ躊躇いたくなるその魔双劍を掴み、腰に携えたクレスが地下工房から外へ出る。

その途端、出迎えるように居間で何かしらの作業をしていたサラがぐりつと勢いよく彼に顔を向けた。

「むっ！……ああ、なんじゃ主様かの。ようやく作業が終わったのじゃな。にしてもその濃厚な臭いは我が鼻の毒じゃ。早うシャワーを浴びてこい、食事はもう出来ておるからの」

「分かった。小一時間ほどで戻る」

「応とも。楽しみにしておくが良い、あのフィンとか言う小人族バルクムから手に入れた調理法レシビの反応が見たいからの」

ふっふっふ……とよく見れば手元で鉢の中身を擦っているらしいサラを置いて、クレスは第188層《古骸戦場スパルタニア》へと転移で跳んだ。

一瞬歪む視界、その後すぐに見慣れた二勢力の殺し合う風景が現れる。

しかも今回は運よく、両陣が睨みあうその真っ只中に転移してしまったようだ。

一瞬即発の空気を形作っていた数百の殺気が瞬く間にクレスへと向けられて――。

「今回用があるのはお前らじゃない。王を出せ、王を」

その全てが、クレスの周りに顕現した特大火球プロメテウスによって蹴散らされる。

この古戦場の王個体『スパルタイ・ターバイキング』——その亜種にして、両陣営が共に九割近く壊滅することを出現条件とする特殊な戦王個体を彼は試し切りの相手として求めた。

戦場を飛び回りながら手当たり次第に遭遇した部隊を消し炭にすること十数分……

条件は整った。

「久々に起こしたな。そら、早く立ち上がってこい」

揺れる地面、隆起する砂原の大地。

その中に沈んだ数多の戦士の怨念を背負うように——呉越同舟の王が立つ。

この地で覇を競い合う両陣営の王『スパルトイ・テーバイキング』の二つ骸を核として目覚める、その個体こそは『スパルトイ・マーウオルス』。

燃える火の星の如き赫骨にて組み上げられた、両軍の協力による超巨大『スパルトイ』である。

身体に纏わりつく砂を振るい落とし、地中深くより現れた『スパルトイ・マーウオルス』。

その伽藍洞の双眼が、これまでクレスに屠られた戦士たちの怨念によって紫色に燃え盛る。

ちなみに、その名の由来は報告を受けた某老神が「この巨大さ……アレスの真体に匹敵しよう」などと呟いて、それを当時のギルド長が深く考えずに採用したせいである。

多分神アレスが聞いたら「俺の名を勝手にモンスター如きにつけるとはふざけるなや
はりオラリオは征服するしかないな！」となること間違いなし。

なお最悪なことに、この場で神神の名を騙らされたアレスの名を借りた骨王はクレスの巻き藁替わりであ

る。

「さて、お試しと行くか」

戦意を煌々と昂らせる《スパルトイ・マーウオルス》を前に、クレスは工房から出てきた時そのままの作業衣姿だ。

だが、彼の顔に焦りはない——そも、試し切りに面倒な相手を使う道理もなく。

彼は明確な格下として、《スパルトイ・マーウオルス》のことをその態度で以て見下していた。

その不遜な面構えに増々怒りを燃やす戦骨の巨王が、腰に下げた骨塊の天然武器ネイチャーウェポンを以て彼に斬りかかろうとするが……。

迫りくるその凶体相応の巨剣を前に、クレスは平坦な声色で詠唱する。

「オラクルアダプト神意接続。フアルナブ恩恵疑似励起——オールグリーン全行程良好。マジカアポクリフェン魔法強制発動……【黒き沼、赤き咎。咬み千

切り交ざり合う、汚泥のごとき我等が臓物】——【デアアルヴ・ステイージュ】

瞬間。

魔剣の素材としてくべられながらも未だ生きているデアナの『フアルナ神の恩恵』と、クレスの『フアルナ神の恩恵』が接続される。

柄を握る腕。そこに迸る、彼の背中より伸ばされた神の力が剣に搭載された神アレクアルカナムトの神意を侵食し強制的に励起させる——そして。

剣より逆流する「ディナの第三魔法『ディアルヴ・ステイージュ』」が、彼の恩恵アベリリテイの数字を書き換える。

此度必要なのは『魔力』ではなく、単なる『力』。

彼の意志に従って、クレス・カタストロフの『魔力』が半減し——その更に半分、計『魔力』の四分の一の数字が彼の『力』に加算される。

そこいらの冒険者であればともかく、レベル21の彼であれば、合計値は減少したとはいえその変動による影響は凄まじく。

『スパルトイ・マーウォルス』の振るう巨骸剣を指先で受けようとして——力加減を間違え、静止させるのではなくバラバラにしてしまった。

『!? !? !?』

「なるほど、こいつは感覚コツを掴むのに時間があるな。変動率を抑えていて正解だった。慣れるまでは想定していたような極振りキョク振りは止めておくか」

まさかたった一度の交錯で得物を破壊されるとは思わなかったのか、何度もクレスと己の手元の間で視線を行き来させる戦骨の巨王。

それを前に悠然と歩み寄るクレス。

その瞳は千の言葉よりも雄弁に彼の心情を述べていた——「今からお前を実験台シッパにする」と。

間章：2023冬イベ

フロンティア☆クリスマス～深々と降り積もれ、甘雪の祝福よ～

——『迷宮開拓計画』。

それはクレスが常の冒険の中で構想していた、冒険者の在り方を革新する施策の一つ。

^{ダンジョン}迷宮内に農地や牧場を設けることで、第18階層の《リヴィラの街》をより拡大拡張した拠点、すなわち《冒険者が地上に戻ることなく攻略行動が完結するような橋頭堡》を『深々層』に築く戦略的『計画』である。

しかしそれは残念なことに「未だ『机上の空論』に過ぎない」というのが、また同じクレスの見解であつた。

大前提として、^{ダンジョン}迷宮の有する主な資源はあくまでも魔石である。

^{ダンジョン}つまり迷宮内の大地には《雲菓子》^{ハニークラウド}のような一部を除いて、地上の動植物が成長のた

めに必要とする養分が決定的に不足しているのだ。

そのため迷宮^{ダンジョン}内で上記のような一次産業を行うにはまず肥料等を地上から輸入しなければならず、その実行には当面の循環^{サイクル}が整うまで莫大な投資が求められる。

しかし遅々として攻略の進まない現状、迷宮^{ダンジョン}内部に彼の思い描く《もう一つのオラリオ》を作るよりも、素直に地上まで戻った方が効率的なのだ。

とはいえいつかは冒険者たちも今クレスの立つ迷宮^{ダンジョン}の深淵に到達するであろうし、その時のために資料^{データ}を取っておくことは決して悪いことではない。

そんな訳で彼は試験的に『深々層』の一部を切り開いて耕し、『麦畑』を作ってみたのだが――。

――ぶつちやけ、やり過ぎた。

「さて……これだけの量、どう消費するか。保存して少しずつ切り崩すと言っても、使い切るより先に三割ほどは駄目になりそうだ」

第201層の拠点前で、クレスが見上げる先。

そこには彼が実地試験で育て上げた迷宮^{ダンジョン}産小麦およそ4T^{トネ}が、巨人が腰掛けるような小山ほどの高さにまで積み上がっていた。

……誰がどう考えても、彼とサラの二人暮らしただけでは使い切れないことが目に見えている。

「せっかくの実験だから」と彼はモンスターによる被害も想定した上で作付面積を多めに取っていたのだが、その予防策が完全に裏目に出た結果であった。

案山子代わりに吊るしておいた《スプリドルストンの竜頭骨（※第230層産）》が求められた役割を完璧にこなしてくれたおかげである。

「勿体ないが、流石に焼いて捨てる他ないか……？」

「——ちよつと待った！ ならば妾に良い提案があるのじゃが！ じゃが!!」

「なんだやかましいぞ。どうした？」

使途に困り果てたクレスの側に突如として駆け付けたサラが、「我が胸中に妙策あり！」と言わんばかりの自信満々な顔で彼に一冊の本を差し出す。

既に頁を捲られた状態のそこに映っていたのは、『クリームで白く彩られた苺のケーキ』のレシピであった。

それをビシビシと指先で叩きながら、彼女は楽しそうにクレスへ眼前の問題の解決策を提示した。

「明日は確か、地上で言うクリスマス聖夜祭とやらの日じゃろう!! ならばいつそこは有り余るこの小麦でケーキを作り、オラリオ地上で配るのが良からうて！ どうじゃ、名案じゃろう!!」

「まあ、構わんが……つまるところお前が作ってみたいだけだろう」

「まあのおう。だが問題はあるまい？ どうせ妾達だけでは持て余すのが目に見えておるんじや、ならばパーツとバラまいた方がこの小麦たちにとつても幸せじやろうし」

「それはそうだが。……そこまで言うなら、好きに使つていいぞ」

クレスとしてもせつかく地上から資材諸々を運び込んで育て上げた小麦なのだから、廃棄処分にするのが不本意だったのは間違いないかつた。

ふんす！ と息を荒くして腕をまくる、やる気十分な様子のサラに彼は適当に許可を出す。

そうして悩みの種が解消されたところで、彼は普段通り『深々層』の最新部を冒険するべくその場から踵を返そうとしたのだが……。

その肩を、サラがやたら強い力で掴んで引き留めた。

「何を「俺はこれ以上は知らん」みたいな態度しとるんじや？ 主様も料理するに決まつておろうが」

「は？ 何故だ。やりたいと言ひ出したのはお前だろう、作りたいなら一人で作れ」

「流石に明日までにこれだけの量を挽いて混ぜて捏ねて焼いてとなると、妾一人で厨房を回すのが無理なのは目に見えておるのじや。それに、この惨状を作つたのは他ならぬ主様じや。ならば腐らせずに最後まで看取る責任が、生産者にはあると妾は思うがのう

「？」

「む……」

「のう？ 妾は間違つたことを言つとるか？ なあ？ なあ？」

「面倒臭そうな表情を浮かべるクレスに、ぐぐつ……と顔を近づけて圧をかけるサラ。

迷宮出身の彼女はその経歴から《食》に対して人一倍ありがたみを感じており、特に

「食材を無駄にすること」を嫌う性格を有している。

——単一かつ平坦な味しか存在しない、彼女の種族の主食たる《血液》。

他の個体とは異なり理性を有していたからこそ、彼女は永遠に代り映えのしないその地の底の冷たく鉄臭い日々食事に生きながらの停滞死と絶望を抱いていた。

——そこへ来訪した彼女の天敵たる冒険者は、気まぐれから暖かい《料理》をふるまつた。

その迷宮ダンジョン深くにおいては革新的な、地上においては極々普通の《文明》が与えた衝撃は、彼女が《美食家》グルメに目覚めるのに余りあるものだった……。そんな過去を持つサラの料理にかける意気込みは、まさにクレスが迷宮攻略ダンジョンにかける情熱と同等のものと言つて良い。

生産者としての後ろめたさを僅かながら抱いていた彼はその勢いに押されて、肩を竦めながらも頷いてしまうのだった。

「……分かった、お前の言うことの方が正しいさ。それにここへ辿り着いて以降料理は任せっぱなしだったし、一度腕の鏝を落とすのも良いか。手伝おう」

「ふははっ、それで良いのじゃ！ では——いざ行かん、我らが死キョウジツ地に！ なのじゃ！」

「はあ……」

サラのどこから借りたかも分からない決め台詞をやる気なく受け流したクレスの顔だが、次の瞬間には引き締まっていた。

決まったことにいつまでもケチをつけるよりも、手早く全力で終わらせた方が楽だと彼は数百年にも及ぶ経験の上で理解していた。

どこからともなく取り出した前掛けエプロンを装着し、料理人としての顔になった彼はサラにこれからの段取りを問う。

「で、俺は何をすればいい。凝った菓子は作った記憶がないんだ、きちんと計量する必要があること以外はさっぱりだぞ」

「うむ、そうじゃな……ともかく、ここにあるだけの小麦の量に見合うその他の材料を地上から仕入れるのは不可能じゃ。ならば第一に、それらを集めばならん。モンスターの《卵》と《乳》、甘味系統のドロップアイテムから抽出する《砂糖》、それと飾り付ける《果実》といったところじゃな。あと、製粉もしなければならぬし……主様にはまず、それらをお願いしようかの」

「良いだろう。粉挽きだな、任せておけ」

「どうしても焼きに時間がかかるからの、疾く頼むぞ！　では妾は素材の回収に行ってくる故——よい、ドンっ！　なのじゃ！」

クレスに仕事を振ったサラは早速己が役割を果たすべく、身体を大量の蝙蝠に分裂させて迷宮内ダンジョンに散らばっていった。

普段はずっと人型を取っていて「《吸血皇鬼》？　……ああ、妾のことか！　すっかり忘れとつたのじゃ、許せ！　ふはははっ！」などとほざく彼女がその種族特性である蝙蝠化まで使って取り掛かるとは、いよいよ本気らしい。

ならば自分も本気で取り組もうと、クレスは目前の大量の小麦に改めて向き合い、製粉する方法を考える。

「……必要なのは石臼、それと篩か。だがこれだけの量を一気に処理するならまあまあの規模がいるな。素材は《ギガント・タートルの岩甲羅》と《クライオゼニツク・ドラゴンの髭》がちょうど良さそうだ。後はついでにオーブンも用意しておいてやるか、つと。その前に一応、話を通しておくか——「シユレディンガー」

クレスが転移して向かった先は当然の如く、ギルド長であるロイマンの執務室である。

彼がいつものように音もなく侵入したその部屋では、嫌らしい顔を浮かべた主人が黄

金に輝く貨幣を数えていた。

「ひひひ……ひー、ふー、みー……いつ手に持つても、この重みの有難さは素晴らしい……」

「随分と趣味が悪いな、ロイマン。まあお前の特殊性癖は置いておくとして、諸々あつて明日の聖夜祭でケーキを配ることにしたから職員を貸せ」

「は、はっ!? 誰だ断りもなくギルド長の部屋に侵入するとはこの無礼者めっ!! ——と、貴様かクレス・カタストロフ!」

「げえつ、とマズいものを見られたとでも言いたげに机に積み上げていた金貨をロイマンは慌てて懐に隠した。」

それに構わずソファーに腰かけて茶菓子に手を伸ばすクレスの凶々しさに、彼は遠慮なく文句をぶちまけるのだった。

「そも、誰が貨幣で興奮する特殊性癖だ! いくら儂とてそこまで落ちぶれてはおらんわ! ——しかも、ぬわあーにが「諸々あつて」だこの愚か者がっ! いきなりやつてきて明日職員を貸し出せ、だど? しかも言うことにかいてケーキを配るなどと、何を考えておる!」

「こつちだけで食べ切れない量が、あー……2、3万人分ほど出る予定だからな。なに安心しろ、本職の菓子職人の仕事じゃない、料理が趣味なだけの素人(※数百年単位で修

業済) が作る代物だ。ある程度の味は保証するが本職には劣る、商会の戦略を邪魔することにもならんだろう。対象も普段ケーキなど買わんような、ダイダロス通りの住民なんかを想定しているしな。あと人件費はいつも通り俺の金庫から差っ引いておいてくれ」

「うー(うー)っ……だから、なんでもそう思い付きで済ませようとするなど言っておるのだっ！ それにそれだけのケーキの材料など、いったいどこから仕入れて——」

『深々層』だが」

「ふざけるなこの大馬鹿者めがあああつ!!」

ともすればギルド全体に響くような大声で叫ぶロイマンが、ぜえーっ、ぜえーっ、この短時間で切らした息を整える。

「……そもそも『深々層』の素材を地上にばら撒くのは貴様とウラノスの間で結んだ盟約に違反する行為だろうが！ 慈善事業をするのは——儂さえ巻き込まなければだぞ——いくらでも結構だが、そんなこと出来るわけがなからう!!」

「別に武器や防具の素材になるわけじゃない。食べればそこで終わりなんだ、お前らの危惧するようなパワーバランスの崩壊を招くことにもならんし良いだろ。……たぶん」「たぶん、だど!? 今貴様「たぶん」と言ったか!? そんな不安になるようなことを言うんじゃない、この——!」

『そこまでだ、ロイマン』

「神ウラノス!？」

泡を吹いて倒れそうになるのを懸命に堪えながらクレスの浅慮を糾弾するロイマンの声を、突如として響いた老神の声が遮る。

どうやら執務机に置かれた水晶型の通信用魔道具マジックアイテムを介して話しかけているようだ。

『《暴喰》のような例外を除けば問題はなからう。クレス・カタストロフ、今回は特例で認めよう。ただし……』

「ああ、分かっている。こんなことはもうこれっきりにするさ。俺だって本意じゃないんだが、今回は色々あってな……という訳で職員の選定と説明は任せた。俺は調理に戻る」

それだけを言い残して、ロイマンが次に瞬きすると同時にクレスは姿を消すのだった。

老神ウラノスの気配も消え、残されたのは部屋の主であるロイマン一人。

つい先ほどまでは一人静かに黄金色の輝きを眺めて悦に浸っていたというのに、今の彼の心はまるで潮風に晒された錆び付いた銅貨のようにザラついていた。

「——ふ、ふぎ、ふぎけるなああつ!!! クレス・カタストロフうつつつ!!! 貴様つ、今度という今度は絶対に許さんからなああ——つ!!!」

狂乱するロイマンの涙声などつゆ知らず。

拠点に戻ったクレスは任された製粉の作業をこなすべく、道具の作成から取り掛かるのだった。

「……さて、まずは《クライオゼニック・ドラゴン》から仕留めてくるか。氷山を消し飛ばすついでに良質な《水》になる《万年氷》も回収するとして……」

クレスの『計画』に係る失敗と、サラの唐突の思い付き。

そして地上を巡る季節的な事情が偶然にも絡み合って始まった、『最前線から贈る聖夜祭』。

今日も賑やかで騒がしい、迷宮での日常が幕を開ける——！

『カリギユラの船』編

プロローグ：夜天に囁く　＋　静養の冒険者

《プロローグ　夜天に囁く》

空を見よ。

宙の彼方に輝く無数の星々——その中に一際大きく瞬く、銀の大鏡を見上げよ。

其は貞淑である。

清廉である。

下界の安眠を見守る、静かなる美である。

汝らの快く崇める日輪と双極に位置する、高貴なる女神の唯一無二たる写し身である。

——されど、その名は一つにあらざ。

嘆かわしいことに、大いなる月を騙る痴れ者どもが幾つも蔓延る現状。

——ああ、どうして許せよう？

月を司る神は一柱ひとりで良い。

ああ、愛しき皇帝けんぞくよ示しておくれ。

かの憎らしくも誉れ高き【無双オの狩人オン】にすら勝る我が象徴よ。

息子の血を、娘の骨を与えよう。

我が尽きぬ愛を、喜んで捧げよう。

故に、赤き父祖の名の下に——落陽よ、二度昇ふたたびれ。

偽りの月を撃ち落とし、我らが威光を今一度世にしらしめようではないか。

【銀月の皇帝】の名を——再び!!!

《静養の冒険者》

誰かが言った——迷宮の奥深くには、楽園があると。

七彩絶華の花々が乱れ裂き、傾政無法の女たちが代わる代わる美酒を注ぐ至上の極楽。

第176層に位置するその空間の名こそは、『幻想樂園』。

来訪者を紛い物の快樂にて酔わせ狂わせ誑かした挙句、果てには魂の一片たりとも残さず喰い尽くして、己らの養分にしてしまう……そんな、魔性の者どもの巢窟である。

そして今日も、その花園に訪れた哀れな男が一人。

食人花は一嗅ぎするだけで陶醉するような甘い蜜を垂らして。

淫魔は生まれ持った蠱惑的な肢体を惜しげもなく晒して。

酒灯鬼^{ドウジ}は手にした杯に、零れんばかりの薄く桜色がかった魔酒を張って。

やってきた男を囲い、知らず知らずのうちに身も心も手籠めにしてしまおうと迫って——振るわれた剣の一閃が、その悉くを一蹴した。

「……チツ、発達^ト部位^{ロツ}はなしか」

舌打ちを一つ鳴らした『楽園』の侵入者が、刹那の内に身体を塵に還すこととなったモンスターたちの唯一の遺品^{魔石}を勢いよく蹴り飛ばす。

それらはひゅうと音を立てて風を切り、近くにいた他のモンスターたちの口元へと命中^中。

食人花^{トレント}の魔石は食人花^{トレント}へ、淫魔^{サキユバス}の魔石は淫魔^{サキユバス}へ。

酒灯鬼^{ドウジ}の魔石は酒灯鬼^{ドウジ}へと——彼らの顔面に、突如走る衝撃。

『ギイツ!?!』

『ギヤアツ!?!』

『グオツ!?!』

侵入者の蹴った勢いが強過ぎるあまり受け止めようとした前歯が折れたり、喉につつかえて嗚咽を漏らしそうな感覚に襲われるモンスターたち。

だが、その場でのたうち回りながらも、彼らはなんとか窒息せずに同族の魔石^{それ}を呑みほすことに成功して……その身体に新たな『力』が漲る。

迷宮ダンジョンのモンスターが共有して持つ『魔石喰らい』の能力によって、ステイタスが強化されたのだ。

ならば次に為されるべきは、いきなり行われた狼藉に復讐することであつて。

彼らはその全身に力を込めて——一步踏み出すことすら許されず、その『力』の源となつた餌同族たちと同じ末路を迎えた。

『ギイイイツ!?!』

『ギヤアアアアツ!?!』

『グオオオオツツ!?!』

またしても転がる、先ほどよりほんのちよつとばかり大きくなつた魔石。

その周りに散る黒い塵の中に目的のものが落ちドロップていなかつたことを確認して、侵入者ことクレスはまたもや舌打ちを溢した。

「チツ。……まあ良いさ、そうはなから手に入れられるわけもない」

左腕に握つた剣にこびりついた血を振り払いながら、眉を顰めるクレス。

珍しく不機嫌な様子を漂わせながら、彼はまたもや魔石を他のモンスターらの口元目掛けて蹴り飛ばした。

うち一体が先ほどの光景を見ていたのか吐き出そうとするも、瞬時に近づいたクレスによって脳天を殴りつけられて無理矢理呑み込まさせられる。そうして全身に魔石が

取り込まれたことを確認してから、彼は再びそのモンスターを屠って魔石を回収する。

今回の彼の狙いは、『魔石喰らい』を利用した効率的な希少^{レア}素材目的の周回だった。

人間には通常持ち得ない、モンスターが同族の魔石を食らうことで成長する^{システム}権能。

一般的な冒険者であれば「それは避けるべき事態である」として、持ち帰らない魔石などがあればその場で碎いてしまおうと言った対策を取る。

しかし彼のようなちよつとした上級者であれば、それを活用することもままある。

わざとモンスターに魔石を食わせることで強化し、^{ドロップ}発達素材をより落ちやすくする行為。

——いくら強化されるとはいえ、自分が屠れる範疇であればこれを利用しない手はないだろう？

そんな持論を元に、クレスは蟲毒染みた周回をこの『楽園』で行おうとしていた。

「さて、今回は何体殺せば落ちるか。出来ればさっさと終わらせたいものだが……」

そう思っているときほど、欲しいものは手に入らないのが世の常。

神々曰く「物欲センサーは悪い文明」らしいが、それはさておき。

モンスターたちが「どうやら目の前の来訪者には自分たちの能力が通じないようだ」と悟った時——表裏一体とばかりに、天国は地獄へと変貌する。

見目麗しい外面を自ら引つ剥がした彼らが、その醜悪なる本性をさらけ出す。

鮮やかな色彩の花弁を持つていた食人花は、地中に隠していた丸太のような根茎を引きずり出して巨体を形作る。

瑞々しい身体が自慢だった淫魔は黒目と白目をぎよろりと反転させ、更には体皮を毒々しい紫に変色させつつ、男を物理的に溶かす毒を垂れ流し始める。

そして女姿の酒灯鬼は顎を頬の奥まで引き裂いて剣山の如き凶悪な牙を見せつけ、手に持っていた酒を浴びるように一息に飲み干して酩酊状態へと至る。

それぞれ真の姿に成った『エンゼリック・トレント』『トラプトリクス・サキユバス』『ドウジ・オーガ』らが一堂に会する様は、まさに百鬼夜行さながらの光景。

その中心に立たされたクレスは、されど呑気そうに左脚でこつこつと地面を叩いていた。

「シー、今日は特に調子が悪いな。妙に疼くし、苛々する」

『キエアアアアツ!!』

「うるさい。その猿叫にすらならないただの金切声を一々飛び掛かってくる度に上げるのはなんだ？ そう迷宮に教わったのか、ええ？」

鼓膜を突き破るような甲高い声を上げて、鎌のように伸びた爪を振り翳す淫魔。

その鳩尾を撃ち抜くように蹴り上げたクレスは、相手が怯んだ隙にすかさず首を切り落とした。

続く食人花^{トレント}の太い茎部分による殴打を剣で真つ二つに断ち、そのまま芋類のようにでっぷりと太った根茎ごと唐竹割りにして枯らす。

そして、この中で最も『力』の高い酒灯鬼^{ドゥッジ}が本能のままに振るってくるラリアットを、彼は剣を槍のように突き出す刺突で以て受け止めるようにして貫く。

魔石を壊してしまつては元も子もないので、そこだけには細心の注意を払いながらも。

真つ向から相手に立ち向かつて始末するという、どこか彼らしくない暴力的な立ち回り。

鋭くも荒々しく剣を振るいながら、クレスは次なる個体目掛けて取り出した魔石を投擲する。

そうして——斬つて捨てては次に魔石を引き継がせて。

嫌がる素振りを見せるモンスターがいれば強引にでも呑み込ませ、口からの摂食が不可能なほどに魔石が大きくなつてくると、今度は直接腹を切り裂いてそこに押し込むという暴挙にすら躊躇わず手を染めて。

彼は延々と、モンスターたちの生死を握つて暴れ続ける。

一帯に飛び散つた淫魔の体液やら鬼の美酒やらが蒸発した退廃的な臭いが立ち籠る中、彼はまだまだ目的の素材が落ちぬと無言で語つて剣を振るう。

その目は何処までも冷静で冷淡で、そして冷徹であつた。

「……」

クレスが師スカサハより教わつた奥義が一つ、『明鏡止水の奥義』。

およびそれを元として成長したBランクの心眼アビリティが、場を満たす淫蕩な雰囲気^{クワイ}に彼を溺れさせない。

彼の五感を犯そうとするこの階層のモンスターたちの能力は、残念なことに彼の魂に對してまつたくの無意味であつた。

故にこそ叶う周回行為——徹頭徹尾機械的で、効率厨な殺戮行為。

天国から地獄へと真なる姿を見せた第176層が、彼の手によつてその上から阿鼻叫喚の第二園へと塗り替えられる。

『——ギヤアアアアッ!!』

「……こんなものか」

最終的に都合百ほど仕留めては食わせてを繰り返して、出来上がったのは三つの異形なる異形。

一つ。狂つたように咲いては枯れて、弾けた種からまた生えてを繰り返す食人花^{トレント}。

一つ。男を魅了するだけに過ぎなかつた体液^{エキス}が濃縮の限界を迎え、ついに自らすらも耐え切れなつてビクビクと震えるばかりになつた淫魔^{サキユバス}。

一つ。浴び過ぎて脳が完全に酒蜜アルコールに浸食され、ケタケタその場で笑い転げることしか出来なくなつた酒灯鬼ドウジ。

既にモンスターと呼ぶことさえ憚られる姿になつたそれらをクレスが仕留めれば、ようやく狙つていた素材たちが黒い塵に半ば埋もれながら姿を現した。

『エンゼリック・トレントの種』、『トラプトリクス・サキュバスの唾液』、『ドウジ・オーガの酒雫』。

それらを拾い集めたクレスは拠点に戻ることすらしないままに、その場で座り込んで急ぎ調合を始める。

両脚で挟んだ乳鉢に種子から取り出した胚乳を入れ、そこに残る二つの液体を少量ずつ注ぎながら丁寧に磨り潰していく。

やがて出来上がった乳白色の液体に懐から取り出したキツイ薬草臭ハーブの液体を同量注いで、更に念入りに掻き混ぜる。

「……完成だ」

最後に、出来上がった薬を前に座り込んだままの彼はおもむろに左手を右肩に添えた。

——がちやり、と何かが外れる音が響く。

同時にクレスの右腕が支えを失つたように、地面に落下した。

否、それは彼本来の右腕ではなく、マジック・アイテム魔道具の義肢であつた。

更に左脚の付け根にも同様の手順を行い、繋がつていた義足を外す。

そうして五体から三体となつた彼は、出来上がったばかりのクリーム状の薬を指先にとつて、少し前まで右腕と左脚のあつた場所に残る生々しい傷跡に満遍なく塗り込んでいく。

「まだまだ先は長い、か」

クレスが目をやつた二つの傷跡には、うごうごと蚯蚓が蠢くような黒い呪詛カリスが轟めいていた。

それこそは彼が先日、やつとの思いで攻略した迷宮第200層『厄束カの死海ナ』に住まう海の霸王の亜種、『レヴィアタン』による報復と恩讐の呪いである。

おおよそ二十年がかりの大討伐——かの地に住まう原罪の黒獣を討つた紛れもない偉業と引き換えに、彼は右腕と左脚を失つた。

とはいえ取り戻す目途はとうに立っており、今の彼は三百年ぶりの静養中なのだった。

『エンゼリック・トレントの種』が豊富に持つ栄養分、『トラプトリクス・サキュバスの唾液』及び『ドウジ・オーガの酒雫』の鎮痛作用、その他諸々を配合した医テイアンケヒト神お墨付きの再生薬。

それによつて傷は徐々に癒えつつあるが——完治までには討伐に掛かったのと同程度の時間を要するだろうと、レベル19に達したばかりの彼の直感も察していた。

討伐を報告した当時、ウラノスは『リヴァイアサン』の主たる生息地を突き止めたことに珍しく興奮を隠せなかったし、主神カオスは眷属が死に体ながらも生きて帰ってきたことに涙を流して喜んでいた。

しかしクレスの内心はただ一つ。

その間迷宮ダンジョンの攻略が滞つてしまうことに対して、大きな怒りを孕んでいた。

このような状態で新たな階層に挑む蛮行を犯さない彼の理性が、逆に今の彼を苦しめていた。

「……また一年が過ぎる。約束の時か」

——きつとまた、眷属を溺愛する主神にべたべたと引つ付かれるに違いない。

大切にしてくれる分には構わないが、もう少しどうにかならないものだろうか。

預言者系統のスキルを持たずとも分かる、地上に待っている面倒くささに溜息を漏らしながら義肢を装着し直したクレスは地上で使う分の薬を包んで魔法を唱える。

「我は此処にありて、尚あらざる者なり——『シユレディングー』」

目指すは久方ぶりの地上。

今を生きるゼウス・ファミリアとヘラ・ファミリアのせいで年がら年中騒がしく、こ

の世においてもっとも退屈とは縁遠い最盛オの都ラ——オ。

変態どもと怒れる乙女たちの、ちよつとした一騒ぎ

地上に着いたクレスは、味わい慣れた迷宮ダンジョンのものと異なる新鮮な空気を吸つて鼻をピクリと動かす。今を生きる人々の活気が溢れんばかりに含まれたそれは、彼の嗅覚と舌先に決して小さくはない違和感を抱かせる——まるで、遠い異国に足を踏み入れたかのような。

ダンジョン 迷宮に住み、ダンジョン 迷宮に生きる。

その生活を続けて久しい彼にとっては既に、ダンジョン 迷宮特有の閉塞感漂う緊張に張りつめた世界こそが肌に馴染む日常となつていた。

なんとなく落ち着かない、そわそわとした感覚を身体を一度身震いさせて振り落としてから、気を取り直した彼は転移先として予め確保してあつた隠れ家の一つから外へ出る。

途端に、世界がいつそう騒がしくなる。

地上に來たのだと言う実感を本物の日光と共にその身に受け止めながら、しかし彼は、どうやらいつにも増して大きな騒動が街を賑わせているらしいことに気付いた。

「それにしてもこの街は相変わらず賑やかだが……なんだか今日は普段よりもどんちゃん騒ぎが激しい気がするな。何かあったのか？ ……ああいや、そういうことか」

少し風の声に耳を傾ければ、彼はすぐさま喧騒の正体を理解した。

どうやら今日のオラリオでは、彼基準で言うところの『クソしようもない馬鹿騒ぎ』が繰り広げられているようだ。

しかも嫌なことに、それは彼もよく知るところに原因を帰しているときた。

——ままある悪神の信者どもの暴動ほどではないにせよ、やかましきで言えばそれに限りなく匹敵するひと騒動。

ただ間違いないく、下らなきで言えばこれに勝るものはないと断言できよう——その正体は。

「またか。またあの変態エロススケベ老神ジジイのやらかしか。……しかも『眷属どもまで巻き込んだのヘラ・ファミリアの大浴場での覗き騒ぎ』とは。まったく、性懲りもない……」

クレスも思わず呆れた喧騒の中身。

それは自らの下半身に滾る性の欲望の忠実なる下僕となった、一柱の老神及びその神意に率いられた男バカどもの浅慮が引き起こしたなんとも情けない犯罪行為であった。

むさ苦しい男連中が自派閥内に色気が皆無であることを理由に暴走して、主神の妻が率いるファミリアに夜の（現在は真つ昼間だが）隠密行動を仕掛け、それがバレて追い

回されている——それが、今回の大騒ぎの正体ということらしい。

つまりはこのオラリオで度々発生する、ゼウス・ファミリアとヘラ・ファミリアの抗争。

というより寧ろ、被害に遭った女性たちによる加害者どもへの天誅と言った表現の方が相応しかろうか。

いずれにせよ……ああ。

なんと地上らしくて、阿呆らしいことかとクレスは嘆息する。

「あの老神のやることなすことには毎度見下げ果てさせられる。たまには……極々稀々にはマトモな所も見せるとはいえ、それで果たして補い切れているのか怪しい所だ。これは俺でも擁護しきれない自信がないぞ？」

視界の端には、街の空を自慢の能力値で疾駆する冒険者たちの姿が見える。

見たいものは見れたと言わんばかりに笑いながら「後は逃げ切るだけだ」と言わんばかりに、蜘蛛の子を散らすようにして建物の屋上を駆けながら撤収していくゼウスの眷属たち。

そしてその背中を、ヘラの眷属たちが三者三様の顔で追いかける。

ある者は恥じらいに顔を真っ赤にして。

ある者は怒りに顔を修羅のように転じて。

またある者は、一切の感情を削ぎ落した能面のような虚無を顔に浮かべて。

街の各所で激しい衝突音を響かせながら、彼女らは自らの裸体を許しなく目にした無作法者どもに罰を下すべく獵犬となつて疾駆する。

両者ともに最低限の配慮は忘れていないようで、幸いなことに街には大きな被害は出ていない。

それどころか、民衆たちは冒険者たちの繰り広げる高次元の戦いっぷりをまるで祭りのように眺め盛り上がる始末。

道理で騒々しいわけである。

果てには昼間から酒に吞まれている一部の酔っ払い共が「今回は（男どもが）何分持つか」などと賭け事をしている——現状はヘラ・ファミリアの抱える冒険者の方がやや平均レベルが高いため、大抵最後にはゼウスの眷属たちがとつ捕まえられて痛い目を見させられるオチが待っている——その側を通り抜けてバベルに向かいながら、クレスは被ったフードの下で独り言ちる。

「だから女神ヘラには何度も忠言しているというのに……ゴブニュでもヘファイストスでもいいから、貞操帯を作ってもらつて夫に嵌めさせろと。そのためなら『深々層』の素材も提供すると言っているのに、毎回簡単に許すからつけ上がるんだ」

浮気癖の激しいゼウスのことを、それでもなんだかんだ言つてヘラは愛している。

それはもう、心の底から。

故に何度叱りつけ折檻をしたとしても、結局最後にはゼウスの「愛しておるぞ我が妻よ」の一言で容易く許してしまうのだ。

クレスは彼女から愚痴を聞かされるたびに「やはりここは頑丈な貞操帯を着けさせてしまうより他はないだろう」と何度も提案しているのだが……そうしようとする都度に、ゼウスはあの手この手で妻をかどわかして逃げおさせるのだ。

「至極度し難い男の屑、『下半神』とはまさにこの男神のためにある言葉だ」とは、その夫婦間のやり取りの一部始終を傍で見ていたクレス並びに歴代のヘラ・ファミアアの団長たちの共通認識である。

「——百の知を持つ我は百の口以て百の魔を語る」！ 「ラルバ・パヴォーネム」！

「ぐおっ!?」 街中で戦術級魔法使うとか正気か「百の識持つ女傑」!?

「うっさいわ痴れ者め、貴様らが常識を語るなぞ百年早いのじゃー!」

どうやら東の空で、全身に魔眼を埋め込んだ異形のエルフが複数の属性を内包した虹色魔砲をブツ放したようだ。

その美しき光線がうまく馬鹿のうち一名を討ち取ったようで歓声上がる中、今度はクレスの後ろからドタバタと複数人の駆ける足音が聞こえてくる。

「——くそつ。あの爺なんて速いんだ!!」 冒険者のアタシたちでも追いつけないなんて

「!？」

「——ふははつ、年季の入った儂の健脚じゃ！ 高々十数年しか生きてない小娘どもに捕まえられんのも道理じゃよネ！」

後半に聞こえた調子に乗ったその声は、まさしく今クレスがその評価を地面にめり込ませて……それ所か、地中深くのマントルにでも埋めようかと考えていたゼウスのものであった。

そちらに顔を向ければ、見慣れた逞しい顎髭の老神がすると人ごみの合間を擦り抜けて、後にく女冒険者たちの手を巧みに攪乱している様子が見て取れる。

懸命に追いかけるヘラの眷属たちを後ろにしながら呵々大笑して逃げるその足捌きはまさしく、かつて彼が入れ込んでいた道アルゴノウト化わざの技術そのもの。

——しかし、それが女湯の覗きのために利用されていることはなんとも情けない……否、そう言えばあの白髪の英雄も似たようなことをして何度も妹に怒られていたような？

そんな懐かしい過去に思いを馳せながら、クレスは偶然にもちようど横を通り過ぎようとした老神の首根つこをきゅつと引つ掴んだ。

「——ぐびゅつ!？」

「ちようど良かった。貴神アンタの血ちが切れかけていたからな、いつも通りちよつとばかり分

けてもらうぞ」

潰れた蛙のような変な音を口から漏らしたゼウスの首筋に、クレスはすかさず懐から取り出した注射器の針をプスツと突き刺した。

そのまま一瞬のうちに必要な分の神血イコルを抜き取って、そして彼は続けざまに神の老体を地面へと押し倒して更に腕を背中側に固定する。

その取扱いはまさしく、犯罪者に対するそれ。

流れるようにして完全にキマった腕関節の痛みにも、ゼウスは反射的に悲鳴を上げた。

「アイタタタ!? なんじゃいったい!? つーか今血イ抜かれたよネ!? 儂をあの大神ゼウスと知っての狼藉か!」

「知っているとも。あの、妻を放って若い娘たちを手籠めにするのが趣味の下半神だらう?」

「酷くない!? ナニソノ偏見!? ……つて、その声はお主、クレスか? 戻ってきとったのか!」

「生憎と今日がその日だな。戻ってくるなりこんな馬鹿騒ぎでお出迎えされるとは思ってもみなかったが」

ゼウスの問いに辛辣な言葉遣いで返したクレスは、そのまま冷たく言い放つ。

「それに偏見も何も、事実だろうが。既婚者なのだからいい加減妻に夫として相応しい

姿を見せてやれ、といつも言ってるだろうに」

「うぐつ……だつて仕方ないじやろう？ 儂の熱いパトスが女の尻を追いかけると叫ぶんじやもん！」

「戯言を往来で叫ぶな、他人の迷惑を考えろ」

不変の特性を持つ超越存在らしい妙に芯の通つた叫びに対して、クレスは眉間に皺を寄せる。

その次いでに、彼はゼウスの腕にかける力をギギギ……と僅かに強めた。

「痛い痛いっ！ 痛いぞいつ！ 儂つてば一応神様なんじやから、もう少し優しく扱わんか！」

「女湯覗く元気があるんだ、これくらいがちやうど良いだろう。……それに、そう言われなくてももう手は放すさ。どうやらお迎えが来たみたいだしな？」

「え？」

ゼウスがクレスの言葉の意味に気付いて顔を上げた先には、怒り心頭の女冒険者たちが立っていた。

彼女らは囚われの身となつた覗き魔ゼウスの前に、一様に頬をヒクつかせている。

そんな彼女たちに、クレス是一寸の躊躇いもなくゼウスを引き渡した……両手両足を芋虫のように縛るといふおまけ付きで。

「ほら、もう逃がすなよ」

「すまねえな。オラ立てクソ爺、アタシたちの裸を見た罪はその身体でキツチリ支払ってもらうからなア……!」

アマゾネスにしては珍しく肌面積の小さい、ヘラの眷属らしい貞淑さを持った褐色の女戦士にクレスは「気にするな」と手を振る。彼としては特段、大したことをしたつもりがないからだ。

しかし一方、素直に受け渡されたゼウスからしてみれば、今後のことを考えればこれは大事であった。

「くッ！ 裏切つたなクレスウツツツ！」

「裏切るもなにもない。かつて色々と世話になった義母^{ははうえ}上とだらしのない下半神、どちらの意向を優先させるかなど常識的に決まっているだろうが」

「くっ……真面目な好青年染みた言い方をしておって!」

「その何処に問題がある? 言えるものなら言ってみろ」

ヘラの眷属に腰縄を握られた哀れな敗北者^{ゼウス}の遠吠えを軽くあしらって、クレスは彼女たちの方に目を向ける。

それに反応して、どうやら彼女たちの中で一番レベルの高いらしい女冒険者が一步前に出てきた。

紅茶のような赤髪を肩口で切りそろえた、凜然とした女騎士。

彼の見立てではレベル6になったばかり、といった所か。他のファミリアであれば団長格だが、ヘラ・ファミリアではようやく派閥の幹部候補生になれた辺りだろう。

彼目線からしてみればまだまだ初々しい雰囲気のあるその女性は、表情を固くしたまま口を開いてクレスに頭を下げた。

「ご協力感謝する。御身のおかげで早く片付いた」

「構わんさ。それより、今日という今日も苦勞させられているようだな」

「ああ、そうだな……。この老神は常人と同じ身体能力のくせに、異様に逃げ足が速くてな。そのおかげでいつも苦勞させられるんだ」

「この神は『弱者の戦い方』を熟知しているからな、仕方あるまい。……コツを一つ教えとすれば、遠慮しないことだ。なんならお前たちと同じレベルを相手するくらいの勢いでかかった方が良い。いつそ腕の一つくらい折るくらいの心構えで「ちよっ!!」なに言うとするんじやクレス!？」うるさい。ともかく、それくらい無理矢理やってしまつて構わん」

なんならそれくらいししないと懲りない、しても懲りるかどうかわからんと肩を竦めて暗に伝えるクレス。

側のゼウスの絶望顔はさておいてそう語る彼に、女騎士は真剣な様子で答えた。

「なるほど、それは是非参考にさせて頂こう。「いやしなくて良いからね!」やかましい。……それはそれとして、今回の礼として後に貴君のファミリアまで何か届けさせたいのだが。良ければ御身の名前を伺っても?」

「クレス・カラストロフ。所属ファミリアの本拠地ホトは一般には公開していないが、女神ヘラに聞けば教えてくれるはずだ」

「了承した。では後日、改めて仲間たちと共に謝礼を伝えに伺わせていただく。——行くぞ皆、主犯格は捕まえたとその他の部隊に伝達しろ!」

きびきびと周囲に指示を出しながら、彼女は一刻も早く主神ヘラに下手人を突き出そうと仲間を連れて再び動き出す。

しかし諦めの悪いゼウスが、悪足掻きとばかりにまた騒ぎ始める。

しかもその矛先は面倒なことに、同じ男ながら浪漫を共有しようとしないうクレスに向けられる。

「ぐぬぬ……クレスよ、何故お主にはこの『想い』が分からん!」

「分かってたまるか。そも、同意を得ていない相手の裸を勝手に盗み見るのはただの犯罪だ。そんなに女の裸が見たければ、正々堂々付き合っただけの筋が通っているだろう」

さっさと話を終わらせたいと正論で殴りつけるクレスに、されどゼウスは懲りず応戦

する。

「馬つ鹿もん！ 良いか、お主は何も分かつたらん！ 若い乙女が男に覗かれて、意図せず恥じらうところが良いんじゃないやろうが！」

「普通の女なら見知らぬ男に覗かれたら恥じらうより先に恐怖を覚えるだろうが。そこまでして悦楽に浸りたいとは俺は思わん。それに、そんなにその状況シチュエを味わいたいのならそこらの春本エロ本か風俗で我慢しろ。何の関係もない他人に手を出す時点で、有罪ギルティは免れ得んに決まつてるだろうが」

こんな下らない猥談で時間を取られるのは、どう考えようと無駄に他ならない。

クレスはさっさと別れたいのだが、そうなれば後は妻ヘラの厳しいお仕置きが待っているだけのゼウスはなんとしてもこの時間を引き延ばそうとしてくる。

もつとも彼としては、引き延ばす分だけ逃亡の算段を立てる猶予を手に入れたという老神の裏の思惑は百も承知の上だ。

そのため、彼は手早く物理的に相手に黙らせることにした。

「これ以上下らないことを言つてないで、早く叱られて来い。その無駄に饒舌な口をいくら動かそうと現状は改善されないし、なんなら抵抗するだけ余罪を重ねるだけだぞ。……店主、これはいくらだ？」

「うぐぐつ、嫌じゃ！ 儂は決して諦めん——諦めんぞ！ 女の子の大きなおっぱいに

埋もれてウハウハするこの世の春を！ その為にはヘラの乳二つだけでは足りんじやー！」

「だからそう言う破廉恥なことを公の場で喋るなど。こつちまで恥ずかしくなってくる……十ヴァリスだな、分かった」

「お主も男なら！ その真面目腐った面の下に同じ欲望を抱えているハズじゃ！ それら、儂に続けて言ってみい！ 巨乳こそ至高！ 大きければ大きいほど、たわわであればあるだけよし！ 巨峰ビツグバストそれ則ち正義なりやー！」

「聞くに堪えんな。——もう良い、暫くこれでも噛んでいろ」

口先ばかり達者な道化ウザい奴擬きを黙らせるには、古今東西その舌を切り落とすのが一番と相場が決まっている。

しかし仮にもゼウスはオラリオの双翼を担う巨大ファミリアの主神であるため、そこまで強い対応を行うことは難しい。

よってクレスは面倒臭がりながらも、近くの露店で売っていたハンカチをくしゃやくしゃに丸めて簡易的な口枷を作り、その口に突っ込むことにした。

更にその上から縄を二重ついでに三重と噛ませて、完全に黙らせる周到ぶりを披露した。

「むーっ！ むーっ！ むーっ！
!?!?!?!」

「これで良し。後は女神ヘラが如何様にでも処分してくれるだろう。この爺の発言は一言一句正確に伝えてやってくれ……どうした？」

ふと見れば、女騎士姿の冒険者が顔を赤くしながらちらちらと彼とゼウスの間で視線を右往左往させて連行の手を止めていた。

……どうやら、口調の通り真面目かつ純朴な性格であったようで、今のゼウスの馬鹿な発言を真に受けて恥ずかしくなってしまったらしい。

——確かに、女性ばかりのかのファミリアの中で育てば露骨な男性の欲望に弱くなってしまうのも無理はないか。

ゼウスの度し難さに目を細めながら、クレスは後輩に助言を贈ることにした。

「はあ……こんな痴呆爺「むーっ!」の語る外見至上主義など一々気にするな。見かけはあくまでも人を気にかける切っ掛けに過ぎない。外面が麗しくとも中身が腐っている例など、歴史を振り返ればこと欠かん。——何よりも大事なのはそいつの内面であつて、これまでに成してきた努力だ。その面から言えば、お前に恥じらうことなど何一つないだろう。こんな馬鹿げた言葉なんて、自信を持って弾き返せばいい」

「……そうか、そうだな。いや、すまない。こほんっ……クレス・カタストロフだったな？ 貴殿は少なくとも、この老神及びその眷属の男どもよりは信頼に値するらしい。このことも含めて、後に改めて礼を述べさせてもらおう。我が名はハーマイオニー・サ

マーヴイル、二つ名は「不沈箱舟」^{アークシッブ}。覚えておいてくれたら嬉しい……なにを見ている、行くぞお前たち！」

クレスの言葉を受けて案外早く立ち直った素直な女騎士こと「不沈箱舟」^{アークシッブ}を筆頭にしてい、ヘラの眷属たちはようやく自身の最期を受け入れてがつくりと項垂れたゼウスを引き摺って行くのだった。

きつとあの老神にはこれから、ヘラによる凄惨なお仕置きが待っているのだろう。以前に彼がカオスから聞いた話によれば嘘か誠か、その悲鳴はオラリオ近郊の港町メレンにまで轟いたとか。

——まあ、どうせそれでも少し間隔が空いたらまた同じことを繰り返すのだろう。その連行の様子^{ドナドナ}を見送るクレスに最後、ゼウスが視線で何かを伝えてくる。

——自分だけうまくこの娘^{サマーヴィル}にコナかけおつて！ 相手が貧乳とはいえずらいぞ！ 彼はその何処までも救いようのない今際の言葉を黙殺し、バベルに向けて再び歩き出した。

それから暫くして、ようやく普段の適度な騒がしさを取り戻し始めたオラリオ。その中を歩くクレスの耳に、されどまた珍しい声の一つ届く。

「——誰か、この女の子を見かけた人はいらっしやいませんか!!」
と。

搜索依頼：【消えた少女の行方を追え】

バベルに向かうクレスの目的は二つあった。

一つは主神カオスに一年ぶりに顔を見せて、無事を報告すること。

もう一つは当代のギルドの長と意見を交換すること——彼からは『深々層』で得た諸々の知見を提供し、代価として彼女からは上層で新たに発見された未開拓領域等の情報を貰うことである。

「しかし、どちらから先に済ませるか……難しい問題だな」

段々と近づくバベルの陰の前に、クレスは悩まし気に自分に問うた。

と言うのも、何しろ現在——彼からしてみればどちらの対応も中々に面倒臭いのだ。

主神カオスは言わずもがな。

片腕片足を失うといった通常の冒険者であれば引退間違いなしの大怪我を負ったクレスのことを大切にしようとするあまり、帰った時には限界を超えて必要以上にベタベタと引っ付こうとしてくる。

とうに過ぎ去ったはずの思春期における親への反抗期が蘇ってしまいそうになるく

らいには、ごほんごほん。

そして当代のギルド長である小人族バルウムの女。

彼女は種族由来の賢しきさかで以て、口八丁と手練を駆使してあの手この手でクレスに厄介な話を押し付けようとしてくる。しかも毎度彼の許容範囲をギリギリで超えてこない辺りが、特に面倒なことこの上ない。

「それはそれとして、攻略出来ない暇に調合をし過ぎたせいで素材も枯らしかけているからな。そっちも買い集めなきゃならん。ふむ、いつそそちらを先にして面倒は後に回すか？」

嫌いなものを先に食べるか、後に食べるか。

そんな次元の話をぐるぐると頭の中で堂々巡りさせているうちに、いつの間にかクレスの足はバベル前の大広場まで辿り着いていた。

辺りを見渡せば、今日も今日とて迷宮ダンジョンに潜ろうとする勤労働勉な冒険者たちの姿が見受けられる。

その中で、彼に見覚えのある紋章エンブレムとそうでない紋章エンブレムの割合はおおよそ7:3といった所か。

また彼の知らない内に、新たな神々が着々と地上に根を下ろしてきているようだ。

——さて、その新興ファミリアの中でいったいいくつが名を上げ、いくつが歴史に一

文すら残さず消えていくのか。

彼としては、願わくはなるべく多くの後輩が育ってほしいと考えているのだが……そんな先達としての祈りは、得てして届かないことが世の常だ。

「ま、そんな下らん常識に捕らわれないよう精々頑張ることだ。俺も頑張るから……よし、と」

希望に燃えた若人たちを前に、クレスもウダウダと悩んではいられない。

まずは特に厄介そうなギルド長との情報交換から先に処理してしまおう……そう考えて巨塔の門を潜ろうとした矢先、その前で一組の男女に呼び止められる。

「あの、すみません——この女の子を見かけませんでしたか!？」

「む?..」

同じデザインの指輪を左の薬指に嵌めているところからして夫婦であるらしい、壮年の男女。

その彼らが、クレスに対する声掛けと同時に胸元に抱えていた紙束のうち一枚を彼の手に押し付けてくる。

それを仕方なしに受け取った彼は、さっと中身に目を通した。

そこに大きく書かれていたのは、大きなはしばみ色の瞳を持つ可愛らしい少女の似顔

絵。

名はユリア・ダルシア、年齢は5歳。

その彼女が、三か月ほどまでにお使いを任せたつきり姿を消してしまったのだとか。

——よくあることだな、とクレスは特に目の色を変えることもなかった。

強い光はより濃い陰を生むと言ったように、一見して時代の最先端を行く輝かしいオラリオの裏側にも何時の時代においても相応に黒い陰が付き纏っている。

例えば悪派閥イヴァイルスに代表されるように、実際の所はこの英雄都市も誘拐や暴行、建造物の爆破に至るまで犯罪とは無縁でいられないのだ。

ガネーシャ・ファミリアなどが治安維持に走ってはいるが、人数に限りがある以上、手を伸ばせる範囲にも当然限度がある。

そして冒険者たちは本業が犯罪の取り締まりではなく迷宮ダンジョンの攻略であるから、知り合いがその禍に巻き込まれない限りは基本的に発生した事件の解決に自ら関わろうとはしない。

現に、先ほどからクレスが眺めていた冒険者たちはみな夫婦の訴えに耳を貸すことなく側を通り過ぎていくばかりだ。

未だ天界に居ると言う『正義』や『秩序』を司る神々が地上に降りてくれば、またこの状況も少しは改善されるのだろうが……神の御心は人たるクレスには分からない以上、いつたいてい何時になることやら。

「あの……」

ずっとチラシを手にして佇みながら世の無常について考え込んでいたクレスを「心当たりがあるようだ」と勘違いしたのか、通りすぎる冒険者たちに声をかけていた夫婦が話しかけてくる。

「もしかして、見覚えがあつたりしましたか?」

「いや。悪いが、普段は迷宮ダダジョンに籠りつきりで地上のことはあまり気に留めていないものでな。考えていたのも別のことだ」

「そうですね……すみません冒険者様、お邪魔をしてしまつて」

クレスの答えに落胆し俯く妻の肩を、夫が慰めるようにそつと抱きしめる。

その際にちやりつ、と彼の胸元に下げられた飾りが小さく音を鳴らした。

ついそちらに目を向けたクレスは、思わぬ物を目にしたとばかりに今度は彼の方から夫婦に声をかけた。

「すまない。貴方たちの娘の話とは別件で申し訳ないが、そのペンダントを見せてはもらえないか?」

「は? 構いませんが……」

夫の方が不思議に思いながらも、クレスに首の細鎖を外してペンダントを手渡す。

その持ち主の気軽さとは裏腹に、彼は慎重な手つきで以てそれに目を凝らした。

手触りと質感からして、単なる木製の彫刻のようにも見える装飾具。

丸い球状に削った表面の上から複雑に絡み合う蔦のような保護具が取り付けられており、その奥にはよく見れば隠されるようにして神聖文字ヒエログリフが書かれていた。

「——『我、麗しき金枝の使徒なり。偉大なる女神のために祈りを捧げん』」

「おや、なぜその文言をお知りに？ それは我が一族に伝わるお祈りの言葉なのですが……」

「ここにそう書いてあったからだ。しかし、この祝詞は……なるほど、そういうことか。これは『ウイスクム聖金樹』、エルフの崇める『大聖樹』と祖を同じくする代物。そしてその枝を加工した装飾品を持つことを許されたのはひどく限られている——そうか、古きローマーナの末裔か」

クレスの発したその問いかけに、夫は妻と一度顔を見合わせてから確と頷いた。

「よくお分かりになりましたね。その通りです、貴方の仰った通り私はかの偉大なるクラデイウスの末裔。とはいえ今はこの街のしがなシガナの一大工をしておりますがね」

「大工か、この街ではおおよそ仕事にこと欠かない重要な職だな。しがななんて評価は相応しくないだろう。それに、建国王である初代は同じ造る者として良い仕事を選んだと喜ぶはずだ。最もクラデイウス朝の面々は顔を顰めるかもしれないがな」

なにしろ彼らの祖先であるところの皇帝の一部は、とある大工の息子が率いたとされ

るファミリアとよく争っていたことで知られているからだ。

かつての宿敵が腕を磨いた仕事に自らの子孫が携わることになったと知れば、今頃彼らの中には冥界でキレ散らかしている者もいるかもしれない——それはさておき。

それにしても、とクレスは手にした『ウイスクム聖金樹』の宝玉をよくよく観察して考える。

「この『ウイスクム聖金樹』、当時のロマーナにおいて再生と繁栄の象徴として崇められただけあつてまだ生きているな。大元は既に戦火に焼かれてとうに消えたと聞いたが、例え破片になろうと、潤沢な魔力があればすぐにそこに根を生やして元の大樹の姿を取り戻すだろう……それに」

『ウイスクム聖金樹』、別名『聖なるヤドリギ』は優秀なポーション回復薬の素材として、当時のロマーナでも大変重宝されていた素材である。

今のクレスにとっては喉から手が出るとまでは言わないものの、それでも手に入れておいて損はない代物だ。

——更につけ加えるなら、オラリオで起こる犯罪と言えば大抵が悪神の眷属どもが関わっている。

リジエネレータ再生薬の調合実験の過程で失った検体の確保もちょうどしたいと考えていた矢先に、それが叶いそうな話が舞い込んできた。

ならばせっかくだ、とクレスは夫にペンダントを返すと同時に口を開いた。

「先ほども言った通り、俺は貴方たちの娘を見ていない。しかし、良ければその搜索を依頼として請け負おう」

どうせ現状では迷宮攻略も満足に出来ない身なのだ。

ならばせめて身体を鈍らせないよう、たまには冒険者らしく普通の依頼を受けてみるのも良いだろう。

そう軽く考えて提案したクレスの手を、夫婦は驚きと共に喜びを浮かべて強く握りしめた。

「それは本当ですか!? ……ですが、申し訳ないことに私たちの血筋は元皇帝一族のものとは言え、とうに落ちぶれた身。大した遺産を引き継いだわけでもありませんし、冒険者の方に満足いただけるだけの報酬を用意することが出来るかどうか……」

「金は不要だ。ただし、事後報酬としてそのペンダントを譲り受けたい。全体とは言わない、極僅かな一部分を削り取らせてもらうだけでも構わない。ただ、代々受け継いできた家宝に傷をつけることに変わりはない。それでも良いのであれば、だが」

「構いません!」

まず間違いなく、あのペンダントは彼らにとつて家宝に等しい代物に間違いない。

クレスの見立てによれば、当時皇帝に仕えていた由緒正しき彫金師一族の手による代物である。歴史的価値は勿論のこと、売却すれば彼らの孫世代まで不自由しない暮らし

が保証されるだろう。

それをいきなり「寄せ」と言うのだから一晩くらいは迷う時間が必要かもしれないとクレスは考えていたのだが、しかし夫婦は構わず彼の提案を即座に受け入れた。

「娘が戻ってくるのであれば、装飾品の一つくらい喜んで差し出しますよ。お婆様やお爺様が生きていればそれはもう盛大に怒られたかもしれないませんが……娘を取り戻すためとなれば、きつと偉大なる父祖もお許し下さるでしょう」

「そうか。——娘も立派な親を持つて誇らしいだろう」

娘の身柄と家宝を天秤にかけて、迷わず娘を選ぶ。

世の全ての親にとって鏡となるべきその選択は、クレス個人としても好ましいところであった。

悪意を向けられれば容赦なく悪意を返す彼だが、人の善意を見せられれば相応の善意を施してやりたくなるくらいの心は残っているつもりだ。

「良いだろう。では当時の状況について、知っていることを一通り話してもらおうか。場所はギルドの一室を借りるとして……ついでにあの女にも情報を出させるか」

——きつと「迷宮^{ダンジョン}狂いの貴様らしくもないですね。さては拾った雲菓子^{ハニークラウド}でも食べましたか？」などと揶揄されるかもしれないが、どう返してやろうか？

そんなことを頭の隅で考えながら、夫婦をつれてクレスは改めてバベルの門を潜るの

だ
っ
た。

「罪人狩り（クライム・ハント）の開催をここに宣言しよう」

残念ながら、ユリアの両親から得られた情報は皆無に等しかった。

そも、彼らからしてみれば知らぬ間に子供が消えていたのだ。

直接誘拐された場面を見ているのでもなければ、その道を専門とする探偵ほど観察力や推理力に優れているわけでもない。

そんな彼らから得られたのは精々、親として知っているであろう当然のものばかり——少女の外見的特徴や好きな食べ物、それと最近出来た気になる子のことくらいであった。

それでもと分かる限りのことを詰めて纏めた一枚のペラ紙を手にも、クレスは今代（バブルム）のギルド長である小人族の女と相対していた。

情報交換を終えてなお珍しく居座っていた彼が「誘拐された少女の搜索依頼を請け負った」と伝えた時の彼女は、それはもう、クレスがあらかじめ想定した通りの反応を返した。

「——あらあら。まさか貴方様が心底愛してやまない恋人ダンジョンのことでなくて、そこらの端
 依頼に浮気してしまうだなんて！　こんなこと、この私の瞳を以てしても見通せません
 でしたわ。正気ですか？　それともついに狂われたのですか？　いえ、元々イカれては
 いましたわね」

「……（やつぱりこうなったか、という顔をしている）」

「まさかまさかの迷宮ダンジョン狂が遂には善人落ちするなど狂気も凶気……いえ、一応は正気を
 保つておられるご様子ですわね？　つまりは狂気が一周回つてマトモな冒険者様に戻
 られたということですか、これは喜ばしい。今日は天から槍が、地から剣が、そして海
 からは斧でも飛んでくるのでしょうか？」

「そいつは迷宮ダンジョン内の天候に比べれば物理的に対処できるだけマシな方だな。それはそれ
 として、その嫌味を一息で言い切れるあたりお前も十分狂気じみてるだろうよ」

「そこは否定しませんわ。この街オラリオで曲がりなりにも長の責務を負うには、氣の一つや二
 つは狂っていないなければやっていけませんもの。ろくでもない神々や異国の名ばかりの
 王族との折衝、常にこちらの寝首を搔こうとしてくる部下の驥、後先考えずに突つ走る
 冒険者への支援フオロ……それらに心を削られる内に自然と舌鋒を鋭く尖らせてしまう。
まつりごと政治の世界に身を置く者の宿命ですわね。ふふふっ」

メーヴ・ナクナ・レイ。

クセのある栗色の髪を伸ばした、左目を覆い隠す欠けた金属製の眼帯が特徴的な彼女は、残るもう一つの琥珀色の瞳でクレスを見据える。

【魔女】（偽子老女）【腹黒女狐】などと通常不名譽極まりない呼称を嗤って受け止めるその女傑は、みっちりとクレスの冒険の記録が詰まった超重要書類をばいっと机の端に投げ、「まあ良いでしよう」と組んだ両手の上に顎を乗せた。

「こうなればむしろ本題が副題で副題が本題。報告の方は後でじっくり読ませて頂くとして、今は貴方様が珍しく気まぐれを起こした理由から知りたいものですが……」

「報酬は『ウイスクム聖金樹』だ」

「なるほど！ それはまた面白いものを見つけられましたわね。ロマーナの復興を狙う末裔共にとっては喉から手が出るほど欲しい国の象徴樹……それほどのものなら確かに、貴方様を動かす理由にもなりますか。——で、態々それを私にお話になるからには要求があるのでしよう？ 良いですとも、オラリオの秩序を保つこともまた我らギルドの掲げる至上命題。さあさ、どうぞ仰ってくださいな。罪のない幼気な少女を見つけ出すために、私たちに何をして欲しいのか」

メーヴのわざとらしい親切な口調はその裏に何かを企んでいると言っているようなものだが、そんなものを一々気にするようならそもそも彼女に相談したりはしない。

どうせ押し付けられる対価としての仕事も、面倒ごとであつても神々の試練のような

達成不可能が前提の難事ではないのだから……。

薄い笑みを浮かべる彼女に、クレスは構わず率直に要求を提示する。

「俺からの要求は二つ。ギルドの資料室の使用許可と、消費して構わない囚人の提供だ。欲しいのは各悪神の一派閥につき一人ずつ、質は問わんし最悪拷問で頭が壊れてしまっても構わん。あとはそうだな、ゼウスとヘラのところに顔が利く職員がいると便利になるか」

「良いでしょう。それで、代価はいかが支払うおつもりで？」

「迷惑料で十億ヴァリスもあれば良いだろう。ついでこの街の大掃除を済ませるのだから、十分お釣りがくると思うが？」

クレスのとおりあえず金で解決しようと言う単純な暴力に、メーヴは少しばかり悩むような素振りを見せた後、それを受け入れた。

ただし、もちろん彼の想定していた通りの余計なおまけ付きで。

「ふむう……ま、ひとまずはそんなところで良しとしましょう。今回は間違っても、国一つを消し飛ばしたりはししないでくださいましね？ ああ、あとは追加でウラノスからの討伐依頼も処理しておいてくださいな。140層近辺に『偽神』が出現中とのお達しです。迷宮越しなので、司る権能までは雑音がかかって知り得ないとのことですが」

「む、もうそんな時期か。面倒な奴だな……」

『デミ・ゴッド偽神』。

かつて迷宮ダンジョンで果てた神が天界に還ることなく、そのまま迷宮ダンジョンに権能ごと存在を捕食された暁に産み落とされる影法師。

モンスターであるが故に神々が定めた規則ルールに従うことなく、躊躇なく世界を書き換える神アルカナムの力を行使してくる厄介極まりない敵。

とはいえそれだけの力を持つ子供を作るのは迷宮ダンジョンとしても大きな負担であるようで、産み落とされる周期は200年に一度程度。

ちやうど忘れた頃にやってくるくらいの認識の相手の出現情報に、クレスは分かりやすく溜息を吐いた。

「だが良いだろう、傷が治ったら速攻で片をつけてこよう」

「ええ、お願いいたしますわ。私風情では談笑に付き合うのが精々、激しい舞踏ダンスのお相手までは到底務められませんので。では話も纏まったことですし、貴方様につける職員を呼びましょう——」

メーヴが机に置かれていた鈴を鳴らすと、少しして一人の痩せこけた若いエルフが入ってくる。

「はっ、はっ……失礼します。お待たせ致しました、ギルド長。それで、どのようなご用件でしょうか？」

見かけは完全に事務畑の男で、どうやら肉体より頭脳を働かせるのが得意なようだ。彼女の呼び出しを受けて急ぎ下の階から駆け上がったてきたらしいが、その短い距離の移動だけで既に脂汗を流している。

いくら事務職とはいえ運動不足にもほどがあるなこの男、とまあまあ失礼な感想を抱きながら、クレスはその初対面の男についての説明をメーヴに視線で求めた。

「紹介しましょう。これはロイマン。貴方様のご希望通りの職員ですわ」

「はあ、ご紹介に預かりましたロイマン・マルデールと申します。それで、この冒険者は……」

見覚えのないクレスの姿に困惑するロイマンに、メーヴはさつと情報を与えた。

「彼はクレス・カタストロフ、貴方に分かるように言えばアンタツチャブル「禁忌」ですわ。今後長い付

き合いになる相手でしょうから、覚えておきなさい」

名前と二つ名のみのも端的な紹介だが、その名を聞いた瞬間、一瞬だけロイマンの眼の色が変わったのをクレスは見て取った。

だがすぐにロイマンは表情を戻し、とぼけたように首を傾げる。

「はあ？ 生憎と私めにはそのような冒険者には聞き覚えがありませんが……」
「余計なあーだこーだは不要です」

ぎろり、と睨みつけたメーヴの視線にすぐさまロイマンは顔を青褪めさせた。

「私が唯一認めたその頭が飾り物だったと告白するつもりなら、とつと今座ってる席から蹴り飛ばして差し上げますが？」

「はっ、申し訳ありませんでしたあっ!! 知っておりますとも、かの英雄殿にあらせられるのでしよう!」

慌てて謝罪するその様子を他人事として眺めながら、クレスは考える。

そも、機密である彼の情報をギルド長でない一職員のロイマンが持っているというのはおかしな話だ。

となればつまり、この男は自分に権限のない情報を勝手に盗み見た愚か者ということである。

しかしメーヴの方には、どうやらそれを咎めるつもりはないようだった——その気であれば既にこのロイマンとかいうエルフは誰に看取られることもなく息絶えてしまっていたであろうと、クレスは彼女との長い付き合いで知っていた。

「このような男です。中身は俗物なうえ神経質。しかし意欲とその目には人一倍の価値があります。なにせ密かに私の執務室に忍び込んでまで、こちらを蹴落とす材料を探そうとしてくるくらいですからね?」

「ぎ、ギルド長……まさか私が、そのような……」

「言い訳は結構! ……なに、安心なさい。貴方をクビにするつもりはありませんよ、む

しろ褒めたいくらいです。こちらからいくつかヒントを散りばめていたとはいえ、私から見事機密を掠め取ってみせたのですから。与えられた椅子に座ることしか出来ない、そのような愚鈍な連中にこの街の政治は任せられませんので」

「はっ……はあ？」

何を言っているのか分からない、とばかりに目を丸くするロイマンをよそにクレスは事情を察した。

——どうやらメーヴはここへ来て極秘中の極秘たる彼と顔合わせを行わせたあたり、将来的にロイマンに長の席を譲ることを見据えているのだろうと。

つまりはそれだけ使える便利な駒を今回クレスに貸し与えて、情報漏洩の償いとして働かせるついでに、その付き合い方を勉強させるつもりということか。

「というわけで、ロイマン。暫く貴方を彼に預けます。……細かいことはそちらの裁量に任せますので、どうぞご自由にコキ使ってやってください」

「分かった、期待させてもらおう。では先に囚人の方から済ませるか。行くぞ、いつまでも頭を下げていないでついてこい」

「は、はい……失礼します」

にこやかな顔で手を振るメーヴの執務室から離れ、クレスは血の色が失せたままのロイマンを連れてバベル内の階段を地下に下っていく。

その間、二人に会話は無い。

片やもとより会話が好きでなく、片や蹴落としたかった上司に弱みを握られた挙句笑って送り出されたばかりで恐怖に思考を支配されているのだから、それも仕方ないことなのかもしれない。

ただどんよりと肩を落としたロイマンが他の職員と擦れ違う都度にぎよつとした目で見られていたことが、彼の印象に残った——そんなにもこの様子が珍しいのだろうか？

「……」

「……着いたな」

クレスとロイマンが辿り着いたのは、暗くジメジメとした地下牢だ。

ろくに換気が行われていないことが分かる、初見の者なら思わず顔を顰めてしまうような空間。石材が露出したままの壁と床から伝わる肌寒さは、そこに居る犯罪者たちの身体から熱を奪い、逃亡や反逆といった思考を鈍らせる役割を十分に果たしていると言えよう。

事務室に設置されていたストープで暖を取っていた管理人に、クレスは職員であるロイマンを介して要求を告げた。

「囚人共の一覧が見たい」

「はっ……おい、一覧はどこにある？」

「こちらです」

「よろしい。お前は自分の持ち場に戻っている」

管理人によつて案内された、ここにいる囚人たちの情報を纏めた棚の前に立つたクレス。

彼はそこに無造作に押し込まれていたファイルの背表紙をざつと流し見る。

刻まれている名前はいずれも、オラリオの長い歴史の中に生まれた闇の断片だ。

「アパテー、アレクト、オシリス、ルドラ、アヌビス……有名どころは一通り揃っている」

「……仕方なからう。悔しいが、連中の積極的な勧誘につられる新人が後を絶たんからな」

「微笑ましくもない就職活動だ。いくらギルドが注意喚起を行おうとあの手の輩は次から次へと手を変えて無知な若者を絡めとっていくし、それに人生経験の少ない者たちに相手の裏を疑えと言つてもそう簡単には身につかん。いつの時代も為政者の悩みの種だ」

そんな話をしながら、クレスは棚の中からギルドにとって用済みとなつた連中を選んでいく。

まともな情報を持たされていなかった者、尋問を終えて抜き取れるだけの情報を取り

終えた者。

そうして後は処刑を待つだけの囚人を選んでいく中で、彼は同時に相手のロクでもない犯罪歴を目にすることになる。

強盗殺人、人体実験、故意の爆破……それらを記す筆跡はどれも聞き取りを行った職員の内義感からか、太く、また強いものであった。

「……よし、こんなところか」

その中から必要な連中を一通り選び出したクレスは、今度は看守から鍵を借りて実際に犯罪者たちの收容されている牢に向かう。

その後が続くロイマンは顔を青くしたまま、彼に今回の行いの意味を問うた。

「そう言えば聞かされとらんのだが、そやつらで何をするつもりなのだ？」

「最期に一仕事してもらっただけだ。言っても詳しくは分からんだろうし、まあ見ていろ」
クレスは最初を選んで相手の牢の前に立ち、鍵を開けて中に入る。

その中には檻褻切れのような服に身を包みながら、四肢を極太の鎖で繋がれた男がいた。

名をガーク・ランドルフ。二つ名は「毒蛾」。

オシリス・ファミリア所属のレベル3にして、違法薬物販売の元締めを行っていた売人である。

全身が拷問もとい尋問によってひどく傷ついており、指やら耳やらが欠けて、治療が行われなままに放置されたおかげで腐りかけている。

それでも息があるのは、流石は上級冒険者といったところか。

「ああ、なんだあ？　これ以上手前らに話すことなんざ何も——」

「黙ってる」

「がふっ!？」

今回クレスに必要なのは男の言葉ではなく、またこの手の輩は口を自由にさせていれば大概口クなことを言わないので、彼は手始めにガークを殴って気絶させた。

「お、お前……正気か？」

「こんな連中に良心の呵責はいらん。そうメーヴには学ばなかつたのか？」

手慣れた様子でガークを黙らせたクレスにロイマンが怯える中、彼は構わずガークの服だったものを引き千切って、その背中の『神の恩恵』を露出させた。

そして彼はゼウスにも使った注射器の魔道具をそこを突き刺し、『神の恩恵』を形作るオシリスの神血イコルを採取する。

「こんなところか。で、レベル3だったか？」

ついでクレスは、ガークの全身に目を走らせる。

元は屈強だったらしい刺青だらけの体は尋問とここの環境のせいでやつれており、拳

句傷が膿んでいるせいで綺麗な所が一つも見当たらない。

「まあ、レベル2以下だと使い物にならないからな。……仕方ない、こいつで我慢するか」
クレスは懐から一つの回復薬を取り出して、ガークの身体に満遍なく振りかけた。

『深々層』製の薬効は、一瞬のうちに相手の肉体を癒していく。

それを見届けた後、彼は「何をするつもりか」と作業を覗いていたロイマンの前で、続けてナイフを取り出す。

そしてロイマンが止める間もなく、彼の刃が手早くガークの身体から皮膚を剥ぎ取った。

「——ぎゃあああつ?!」

「もう一度寝てろ」

身体を扶かれる突然の激痛に飛び起きたガークを再び拳で黙らせ、それっきり用件は済んだとクレスは今度は傷を治すことなく牢の外に出た。

一連の流れを見守っていたロイマンは、先ほどのメーヴの視線による詰問に加えて、たった今彼の働いた凶行に顔色を青から更に白へと変化させていた。

「き、貴様っ……!」

「別に良いだろう、どうせ死刑だ。今あの出血で死んでも後で首を絞めても結果は同じだ、問題はない。ちよつと書類を書き換えるだけだし、その程度はお前の力でどうとで

もなるだろう?」

「……」

「そういう話ではない!」と今にも目の前の光景の生々しさに吐き出しそうなのを堪えるロイマン。

忍耐を試される彼をよそに、クレスは他の牢の囚人たちからも神血イコルを採取していった。

そうして一通り主要な悪神の神血イコルを手に入れたクレスは、集めたいくつかのガークの皮膚を縫い合わせて出来た大きな人皮紙を近くの床の上で伸ばして、その上に自前の触媒を乗せて呪詞カウスを紡ぐ。

「契約に応えよ、徘徊する襲撃者の呪よ。我が意の下に血鎖を打ち鳴らし、響く魂の共鳴を以て、連なる命脈をここに示せ」——「アプト・ノーグツド」

クレスが唱えた呪詞カウス名と同時に、触媒が黒い染みと溶けて波打つ波紋のように人皮紙の全体に広がっていく。

その上に彼が囚人たちから採取した神血イコルを垂らすと、全く間に紙の上に複数の名前が小さな文字で浮かび上がり始める。

十、二十と名前の数は増えていき、その数はやがて百ほどにまで達した。

「その力、呪詞カウスだと……なんだ、なんなのだそれは?」

「別にそう恐れるほどのものじゃない。元は昔に【学区】でやんちゃをしていた悪童どもが作った悪戯道具に過ぎん。それを俺がオラリオでも使えるように改造したものだ。使い道は——言うより見るが易し、か」

そう言つて、クレスは手にしていた紙——出来上がった《地図》に目を凝らすよう口イマンに促した。

エルフだからこそわかる、そこに漲る呪詛の強さに恐れを抱きながら、彼はその紙に浮かび上がった名前を恐る恐るいくつか読み上げて……目を見張つた。

「ヴァレッタ・グレーデ……アニマート・ペルデイクス……オリオン・ブラック……メルティ・ザーラ……こ、こやつらは……！ まさか！」

「そう、これを見れば一目で分かる。連中がどこで、何をしているのかがな」

ロイマンの眼が捉えたのは、いずれもオラリオに潜む悪名高き連中の名前。

それらがまるで生きているかのように、人皮紙の上で動いている。

これこそは「カース・アイテム「アプト・ノグッド」、その昔に【学区】で名を馳せた四人の悪童たちが作つた呪いの道具『マロスターズ・マツプ忍びの地図』の派生版である。

連中の悪戯にほとほと困り果てた当時の神バルドルに依頼されて彼らをとつ捕まえた際に取り上げたのだが、その『学区内に存在する全ての人間の足跡を複写・追跡する』性能にクレスは「これは便利だ」と目を付けたのだ。そしてこれまた昔に魔法大国アル

テナを訪れた折に、とある魔法使いから買った『探索者の粉』なる魔法道具と掛け合わせてこの呪いを作り上げたのである。

効果は『垂らした神血イコルを持つ者の居場所と名前を、地図上に表示する』というもの。その評価は——眼球を蛙より大きく飛び出させているロイマンの表情から推して知るべし。

「後はお前たちが持つているオラリオの地図と重ね合わせれば、正確な配置が特定できるはずだ。——さて、罪人狩りの開催をここに宣言しよう。ゼウスとヘラのところ情報をやれ、そして連中にはこう伝えろ——『今ならギルドのかけている懸賞金に更に十億ヴァリスを特別に追加してやる。借金で尻に火がついた者も、買いたいものに手が出せなかった者もいずれも気張れ。全ては次なる冒険のために』、とな」

最後に付け加えた一文があれば、両神はこれがクレスの差し向けたものだど即座に看破するだろう。

後は彼らに布告の信頼性を担保された眷属たちが暴れるだけ。

覗きを行うほど血気の有り余った連中も、滾る怒りのやり場を探していた者たちも喜んでこの狩猟劇に参加するに違いなかった——なにせ冒険者という生き物はなにかと金欠なので、後は深く考えずに暴れるだけで済むこの状況はまさに絶好の機会なのだから。

「ああ、俺は先に資料室に行っているからな。連中の手綱を握るのはお前に任せた」
 「は、は、は……はあああああつっつ!!」

クレスの見た地図のあまりの便利性と、その後の面倒をすべて任されたことへの驚きにロイマンは思わず絶叫する。

だが、早く慣れてもらわなければ、彼の望むギルド長の席など夢のまた夢。

彼はメーヴのことを信用して、彼女の信頼できる部下たるロイマンに容赦なく追い打ちの一言を投げた。

「早くするんだな。その地図だが、大元の素材の^{冒険者}レベルが足りてないせいで一日ともたず灰に還るからな。あと、追加の賞金のことには気にするな。俺が払う。計算だけ済ませて、後で纏めて口座から引き落としておいてくれ」

「はあっ!! お、お前っ、これがそれだけで済むとっ……このっ——ふざけるなっ! ふざけるなあああっ!!!」

もはや一刻の猶予もなし、とばかりに人皮紙《悪血の地図》を握りしめて駆けだしたロイマンを見送って、クレスは呑気な足取りで資料室に向かった。

雑事は腐らせっぱなしだった貯金をバラまくままに任せて、彼本人はこれから誘拐事件近辺にあった事件の資料を洗うつもりだ。

悪人どもの隠し持つ資料とギルドの資料、その全てを漁れば今回の誘拐事件における

手掛かりの一つも掴めるだろう。

そんな軽い考えから始まる、たった一人のための採算度外視の大掃除——ロイマンの
苦^畢勞^食の歴史はここから始まるのであった。

吟遊詩人マーカス・ダルサス（マルクス・ドゥルースス）

元々の莫大な懸賞金に、更に十億ヴァリスもの大金を上乗せした『気前の良い報酬』。無辜の大衆を害する卑劣な犯罪者どもを叩き潰すという、『社会的道義』。

そして、そんな毒蟲連中が蔓延る巢穴の場所は既に特定されているという『絶好の機会』。

それら三拍子が綺麗に揃ったクレス仕立ての据え膳を前にして、常に武装や女やらの都合で懐事情に頭を悩ませる冒険者たちの食指が動かぬことがあるだろうか？

——否。

無論、そんなことがあるはずもなく。

「——アヌビス・ファミリア第三拠点、撃破されました！」

「【血斧】エリック・ソーヴァルド撃破！ つて、戦利品の斧をほったらかして行くなあつ！」

「なんだ【不沈箱舟】？ ……都市北東に残党が集結する動きがあるだと？ させるな、その前に各個撃破するよう仲間に伝達しろ！」

「アストラベ轟雷」より連中がダイダロス通りへの逃亡を図っているとの報告あり！ あの裏街に逃げ込ませるな、情報共有急げ！」

ギルド内に喧々囂々と響き渡る、職員と冒険者たちのやり取り。

突如としてギルド長の名を以て発令された『クライムハンター罪人狩り』の影響によって、現在のバベル一階の受付は行き交う靴踵の音が止まない戦場と化していた。

次から次へと飛び込んでくる、ゼウス及びヘラの冒険者たちによるイヴイルス悪派閥撃破の報告。

それらを捌きつつ寄せられた情報を中継するための臨時窓口すら設けられ、不運にもそこに配置された職員たちは、訳の分からぬままに怒涛の如く寄せられる吉報を処理していた。

「しかしなんでまた急にこんなことになったんだ?！」

「ギルド長あの人のことだ、深く考えるな新人！ 数年に一度はこの手の無茶苦茶が起きる、最終的にはうまく行くはずだから俺たち下っ端は黙って手を動かしてればいいんだよ！」

「ええ分かりましたよ！ ただしその分残業代は弾むんですよね?！」

「普段鬼ババアだとか側がガワ子供で中身が卑劣様だとかの悪口さえ叩いてなけりやあな！」

もし一回でも言つてたらゴ愁傷さまだ、あの地獄耳にこの機会にガンと抜き使われるぞー！」

「そんなあー!？」

などという職員同士のじやれあいも混じった騒ぎを遠くに聞きながら、一方でクレスはギルドの資料室に綴られたこれまでのオラリオで発生した事件の記録を漁っていた。

今回の少女誘拐事件の直前直後に類似した事件があったのなら、そこから解決への糸口を手繰り寄せられる可能性があるかと踏んでのことだ。

弾くように頁ページを素早く捲りながら、中身を流し見る。

そんな彼の正面では、ゼウス・ヘラの両ファミリアから帰ってきたロイマンが同じようにして調査作業の一部を任せられていた。

忙しい目つきでえっほえっほと行ったり来たりを繰り返す彼の仕事は、各悪神系ファミリアの根城アヅトから運び込まれてきた新鮮な事件資料をクレスの要求に応じて選り分けることだった。

「…………ふむ…………違うな…………ほー、これはまた…………」

「ぬぬぬうっ…………!! 何故だ、何故今更私がこのような雑事をつ…………!」

——ロイマンは当然、ゼウスとヘラの冒険者を動かした後には今のような猫の手すら借りたい状況が発生すると予測していた。

故に彼は先手を打って、あらかじめ何も知らない他の職員たちにこれからひっきりなしに訪れるであろう冒険者たちへの対応を任せた上で、自分はこっそり後ろに構えるだ

けで楽をしようとしていたのだが……そうは問屋クレスが卸さなかった。

万の群衆の中から一つの足音を聞き分けるクレスの耳は、仕事の振り分けを終えたロイマンがギルド内で人目につかない場所へそこそと移動しようとした瞬間をすかさず捉え、逃げようとする彼に「待っていたぞ、ロイマン。何処へ行こうと言うんだ?」「げえつ、クレス・カタストロフ——っ!?!」と次なる仕事を与えたのだった。

今のロイマンが取り掛かっているのは、冒険者たちが無造作かつ大雑把に積み上げた資料の山を分類して整理する作業である。

その中から特に今回クレスが必要とする誘拐及び人体実験に係る資料を規則正しく抽出するのは、一般の職員にとっては中々に頭を悩ませる仕事だろう。

ただでさえ一目見ただけで胸糞悪くなるような資料が辺り一面に散らばっているのを、中身がある程度理解した上で順序良く並べ立てるといふ精神的苦行にも似た仕事を。

それでも流星は現ギルド長が見出した頭脳の持ち主だけあって、ロイマンは苦悶の声を上げながらも手早く進めていく。

——もつともこの一時においては、彼が山を崩すより早く冒険者たちが積み上げていくのだが。

終わりの見えない地獄の前に、愚痴を叩くロイマンの瞳は既に光を喪いかけていた。

「オシリス・ファミリア団長メルティ・ザーラ、討伐を確認!」

「アパテー・ファミリア団長のマグス・ハーメルンも捕縛されたぞ！」

「——うぬおおおつ!! 喜ばしい! 外から聞こえる報告はまず間違ひなく喜ばしいつ! ……のだがっ! 今はこの吉報が、何より恨まれるわっ……!!」

職員たちの興奮交じりに叫ばれる報告は、ロイマンも手放しに賞賛したところだった。

しかしながら、その吉報の余談おまけとして彼の前には更なる資料の山が積み上げられていくのである。

それは彼の抱いた希望を瞬時に押し潰すに足るほどの、残酷な光景であった。

彼は愚痴をぐちぐちと垂れ流しながら、側で資料を読み進めるこの件の元凶をふと見て舌打つ。

その恨みつらみの籠った目を向けられたクレスは、ロイマンが一つ資料を読み進める間に三つのファイルペーヅを読破していた。

あまりに速く頁ペーヅを捲る彼の動きに、ロイマンはストレス発散の意味も込めて唾を飛ばした。

「貴様つ、その速さで本当に中身を理解しているのか!? まさかただ適当に流し見しているわけではなからうな!」

「無駄口を叩くな。そら、次が来たぞ」

ただ、クレスから返された回答は非常にそつげなく。

それから自身の後ろでどんっ☆ と置かれる新たな資料の音に、ロイマンはまた絶叫せざるを得なかった。

「ぬぐうおおおあああつっつ!!!」

「……駄目だな。これも違う……違う……違う……全然関係ないな……」

——なお、ロイマンの推測は半分間違っていて、半分正解であった。

クレスは資料を一つ一つ頁の隅まで読み込んでいるわけではない。

ざっと一目見た中で重要だと思った核^{キーワード}だけを抜き出し、それを記憶の中で検索にかけることによって、今回の事件に関係がありそうかを感覚的に識別している。

それはロイマンのような地の頭の良さによる論理的な思索ではない、単純な長年の知識の積み重ねによる反射的な直感。

古今東西のありとあらゆる悪事を目にし、また実際に巻き込まれた経験のあるクレスは、その身に蓄えた重厚な歴史の観点から『悪』の思考を分析していた。

「ぬがあああつ……!!! 何故私がこんなクソみたいないな実験資料なぞに目を通さねばならんのだつ……!!!」

「【骨喰】、【無名之権兵衛】、【武者鬪體】討伐ウ!? 嘘だろ、こんなに多くの連中の首が並ぶところなんて初めて見たぞ……!!!」

唯一その価値を他人に認められた脳味噌を全力回転させて唸り声を上げるロイマン。運ばれてくる悪神の眷属らの亡骸に「壮观だ」と浮かれたような声を上げるギルド職員。

それらを背景に、クレスは静かに目前の資料へと目を走らせ続ける。

——だが、中々彼の勘に引つ掛かる情報が見つからない。

身寄りのない子供たちを養う慈善施設に偽装された、暗殺者養成機関。

ギルドの目の届かない遠方の村一つを丸々潰して建てられた、人体実験場。

政治と経済を裏から操って戦乱を無意味に拡大させ、難民を作って奴隷に落とす人身売買事業。

どれ一つとっても決して許されざる蛮行だが、しかし少女の誘拐に関わらない以上、クレスはそれらの件についてさして気に留めることなく次の資料へと思考を移していく。

「……ぬ、なんだこれは？」

その中でふと、ロイマンが手を止めて一つの資料にじつくりと目を落とした。

若干禿げあがりつつある前頭部の汗を拭いながら、彼は羊皮紙に刻まれたとある実験の目的を読み上げる。

『『神の恩恵』の引継ぎ、だと？ 一体どういう……』

「——アパター・ファミリアとオシリス・ファミリアの共同実験だ。詳細が知りたいのならこちらを見る」

ギルド内に保管されていた最近の資料を一通り漁り終え、ロイマンの選り分けた資料にも眼を通してしまい、ついには他の手付かずの山に手を付け始めたクレスが一つのファイルを抜き取って彼に差し出す。

——【プロジェクト・サクセスライフ実験名・恩恵継承】。

それは『リアル神の恩恵』を媒介することで、死した冒険者の魔法やスキル、果ては魂を新たな肉体に転写・発現させることを目的とした実験である。

結論としては、近親者同士の間では一応の成功を見たとのこと。

ただし制限時間があるようで、親子で一時間、双子で半日、クローン複写体で一週間しか保てない。

最終的には被験者の肉体が二つの魂の結合に耐え切れず崩壊してしまうため、実用性がないとして失敗の烙印を押されている。

「ぬぬぬう……嫌味のつもりか貴様っ！」

「なにを言っている？」

瞬時に参考となる押収資料を投げ渡したクレスがそれなりに資料を読み込んでいることを悟り、深読みしたロイマンは「先ほど訴えたことへの意趣返しか！」と猶更唸っ

た。

もちろんクレスにそんな意図はないのだが。

そうして濃密な調査の時間が半日ほど経過した頃に、ようやく事態はいったんの落ち着きを見せたのだった。

「……かひゅー、かひゅー……」

ぐったりとした様子で擦れた息遣いを響かせるロイマンの姿は、まさに屍のようであつた。

一方のクレスは腕を組み目を閉じて、今回目を通した資料を改めて記憶から掘り返し、頭の中で再整理する——しかし。

「……駄目だな、今回の作戦は失敗だったか」

しかし、集められた情報の中には少女ユリアの誘拐に関わってきそうな情報は見つけれなかった。

悪神のファミリアが計画的に仕込んでいた、もし達成されたならば世紀的な事件となる大犯罪にも、その眷属が衝動的に起こした軽犯罪にも、少女の気配は見当たらない。

となれば結論は一つ。

クレスは探すべき場所を間違えていた、ということになる。

これまではオラリオ内の何者かが行った犯行と見ていたが、そうではないとなれば――

「見るべきものはギルドにはない、か。ならば次はガネーシャ・ファミリアでオラリオの出入りの記録を見たい。行くぞロイマン、もう十分休んだろう」

「ま、待て、せめてもう少し休ませて……」

「ふん」

「——わぎやつ!？」

甘えたことを言うな、とばかりにロイマンの背後に回ったクレスがその首筋に向けて引き金を引く。

プシュツ、と音を立てて打ち込まれたのは彼も御用達の『深々層』製栄養剤。

途端、うつらうつらと閉じかけられていたロイマンの瞼がカツと見開かれた。

「こ、これはっ!?! 眼が、頭が冴え……うおおおっ!?!」

「これで大丈夫だな。なに安心しろ、あの女も一時期病みつきになって俺に帰る都度にあの手この手で強請りに来たほど大きく代物だ。安全性は俺で確認済だし、効果もあいつのお墨付きだ」

「この戯けがあつ! それは中毒になっていると言おうのだろうかあつ!! 安心なぞ出来るかああつっつ!!」

「慣れる。奴の後を継ぐと言おうのなら、この程度は日常茶飯事だと思え」

クレスの襟元を掴んで、ロイマンは訴えるようにその首を揺さぶろうとする。

しかしもちろん、彼の身体は大樹の根が張ったかのように微動だにしない。

逆に諦めの悪いロイマンの首根っこを引っ掴んで、ズルズルと引き摺りながらクレスはガネーシャ・ファミリアの拠点へと向かうのだった……。

「——うむ、見るに堪えん！ その男は解放してやるが良い！ ガネーシャ忠告！」

「そうか。御身がそう言うのなら仕方あるまい。ではメーヴにもまあまあ役に立ったと伝えるか」

民衆の王を名乗る象頭ガネーシャの神との交渉はつつがなく終わり、いざ都市の出入記録を閲覧しようとしたところで、ロイマンに対して見かねた彼から安静ドクターストップにするよう止められた。

しかし、そこにロイマンが必死になって食いかかる。

「いや、神ガネーシャ！ どうぞご心配なさらず！ 私はまだまだ働けますとも！」

「聞けば十二時間もぶつ通しで働いていたと言うではないか！ 下界の人間には休みが必要だとガネーシャも重々承知しているゾウ！ と言う訳で無理せず休むが良い！」

「い、いえ！ 大丈夫です！ その男によく分からん栄養剤を与えられたおかげで元気澆刺でありますので！」

「まあ落ち着けロイマン！ 元々その身はそこまで仕事に精を出すというタマでもなかったはずだが……そこまでして働かねばならぬ理由があるのか？」

「い、いえ、それは……」

ロイマンは思わず、神ガネーシヤから目を逸らして右往左往させる。

——言えぬ。まさか上司から情報漏洩を咎められて罰として働かされているなどと、今後に響く失態を迂闊に公言など出来る訳が無かるうが！ と。

「なに安心するが良い！ 俺からもきちんとメーヴに話は通してやろう！ なぜなら俺は、ガネーシヤだからだ！」

「ああ、いえ、その……」

純粹にロイマンの身を案じて、休ませようと圧をかけてくるガネーシヤ。

それに対してなんとか言い訳しようと頭を回転させるも、半日の疲労が彼の思考を鈍らせる。

結局うまい言い訳を思いつかず、疲れ切った彼の頭が選んだのは——思考回路の気絶ショートだった。

「あ、ああ……あの、そのっ、このっ……どの？ うーん——あガフツ」

ばかり、とその場に倒れたロイマンを見て、目をぱちくりとさせたガネーシヤは代わりに事情を知っていきそうなクレスの顔を見る。

「……なにがこの男をそこまで急かしていたんだゾウ？」

「俺は知らん」

——そんな訳で、気を失ってしまったロイマンの代わりとしてクレスは新たな協力者を神ガネーシャから与えられたのだった。

青錆色の髪をざんばらに刈った逞しいその男は、呵々として彼に握手を求めた。

「クレス君と言ったか？ 俺はメルギイ・ヴァルマ！ 二つ名は『象神ヴィクネーシュヴァラの盾』！ 最近息子が立派な花嫁を迎えて、感激のあまり三日三晩妻と咽び泣いた世界一の果報者だ！」

「そうか」

元気で陽気な彼に手を掴まれ、クレスはぶんぶんと腕ごと振り回される。

ガネーシャ・ファミアアの冒険者は大きく分けて、主神に似て過剰に活発な者とそれを見て呆れる者の二通りに分けられるとカオスはクレスに語っていたが——どうやらこの男は前者にあたるらしい。

そんなメルギイに連れられて、彼はガネーシャ・ファミアアに設けられた保管庫に向かう。

「オラリオの出入記録ならここにがある！ それで俺は何をすればいい！」

「俺と一緒に記録を洗ってくれ。絞る条件は次の三つだ。一つ、出ていった日付が誘拐

のあつた日から7日以内であること。一つ、常連の商人関連ではないこと。そして一つ、署名が代筆で無いことだ」

「分かった、良いだろう！ ではさっそく取り掛かるぞ！ うおおおおつ!!」

あまりに話が早いと言うか、さほど考えることなく愚直にクレスの指示に従つて仕事に取り掛かるメルギイ。

ロイマンと違つて物分かりが良いのは助かると思ひながら、クレスもまた調査を始める。

まずオラリオを出た日付から絞るのは、外部の人間が街の中で罪を犯した場合には即座に脱出しなければならぬからだ。

オラリオで犯罪に手を染めた場合、まず間違ひなく悪神の眷属から「ナニ俺たちの縄張りで勝手やつてんだオイ」と目を付けられる。彼らに一度絡まれたならば後はズルズルと引き込まれていくだけなのだから、大抵は目的を達成すれば速やかに街を出ていくことを目論む。恐らく一週間程度を目途に脱出しているはずだ、とクレスはこれまでの経験から読んでいた。

そして常連の商人を調査対象から省くのは、偏に彼らに誘拐に関わる利益がないからだ。

既にオラリオと言う世界最大の市場に食い込んでいる以上、彼らにはそれなりの利益

が転がり込んでゐる。その状況を壊す危険リスクにあえて手を染めることは、通常有り得ない。

最後に、署名が自筆であることを条件にしたのは、対象を知識の面から絞るためだ。

一口に誘拐と言つても、その流れには大なり小なり計画性が求められる。それだけの頭があるのなら、文字も書けるくらいだろう。近隣から文字のかけない観光客も多数訪れることから、これでもだいたい省けるとクレスは踏んでいた。

ギルドの資料室にいた時と同じように、黙々と作業を続けるクレス。

一方メルギイは黙って仕事を出来ない性格のようで、積極的に彼に話しかけてきた。

「いやあ、それにしても結婚とは実に目出度い出来事だ！　そうは思わないか!？」

「……」

「あの子は俺に似ず奥手でな！　恋人とは長い間じれつたい距離感を保つてばかりで親としては悶々としているばかりだったが、ついに『水船スライム・アクアの匙』で一世一代の告白を成し遂げてな!」

「……」

「妻なぞもう孫の名前を考えているものだ！　俺としてはちと気が早いと思うのだが、うん！　初めて祖父母になるのだから、気が昂るのも仕方あるまい！　俺としては男児であればアルシュやドウルヴ、女兒ならばシャクティやアーデイなどが良いと思うのだ

が、いかんせん気が早いと義娘に言われてな！　がははっ！」

「……そうか。まあ、実際に名づけを行うのは祖父母ではなく両親なのだから、他のことを教えてやれ。赤子を育てるのには様々な気苦労がある、そのコツを代わりに話してやると喜ぶだろう」

ベラベラ話すとは言え、メルギイの作業の速度が落ちていくわけではないので、クレスも適当に返事を送る。

そうして記録を追っていく中で、彼の手が一瞬止まった。

「む……？　これはなんと読む……マークス・ダルサス……で、良いのか？」

「どうした。——いや、違うな。それはマルクス・ドウルーススと読む。しかし共通語コイネーではなく神聖文字ヒエログリフを使うとは、今時の人間にしては珍しいな」

メルギイの手元を除いたクレスが、一つの署名を読み上げる。

神聖文字ヒエログリフで書かれているが、かなりクセが強い。

読み間違えるのも無理はないと彼が思った、その矢先。

——クレスの直感が、違和感を訴えた。

「いや、待て。ちよつとそれを貸せ」

クレスは記憶の底から、神聖文字ヒエログリフの知識を掘り起こす。

目の前の書類に書かれた字体のクセは、個人的なものと言うよりは……数百年ほど前

にはまあまあ見慣れた様式のもの。だからこそ彼も、そこまで悩むことなくスラスラと読み上げることが出来た。

その書体クッセの名は――。

「そうか、ロマーナ式……!」

「ロマーナ? それがどうかしたのか?」

メルギイの不審がる声をよそに、クレスはその書類の中身にじっくりと目を通す。

職業欄に書かれているのは『吟遊詩人』――今時英雄譚の一つくらい誰でも諳んじられるだろうし、なにかと誤魔化しのきく仕事と言える。

持ち込みの所有物は金銭とその他旅の必需品、そしてケースに入った弾き語り用の大琴ハレブ――それは、子供一人くらい容易く入る大きさでもあるだろう。

更に決定的だったのは、付記されていた当時の門番の所見。

試しに彼が一曲語るよう促したところ、マルクス・ドゥルーススと名乗る男は「珍しく、神聖迷宮譚ダンジョン・オラトリアに記載のないカリギユラ帝――かつてのロマーナ皇帝の栄光を謳った」とある。

つまりは、この男が今は失われしロマーナに深く関わることは確定的。

それでいて、今回攫われた少女はその皇帝の由緒正しき子孫である。

「――これか」

クレスはようやく、自分の頭にピカンと来るものが来たと直感した。彼はすかさず審査書類に添付された他の書類を確認する。

オラリオに入る時に提出された身分証明書——そこに使われているインキは船乗り等に好まれる水に強い類のものであり、紙には微かに潮の香りが残っている。

となれば次はオラリオ近郊の港町を調査すべきだと、クレスは立ち上がる。

「メレンだ。メレンへ行くぞ」

「お、おう？　よく分からんがこの際だ、俺も付き合おうぜ！」

水平線が太陽を呑み、世界は月の祝福に満たされる

港町メレン。

オラリオの目と鼻の先にある海洋の出入口に辿り着いたクレスは、休む間もなくガ
ネーシャ・ファミリア所属の『象神の盾』ヴァイグネーシユヴァムラことメルギイ・ヴァルマの権限の下にギルド
支部の保管する商船等の出着港記録を精査していた。

支部長を務める犬シアンスローブ人は一介の冒険者に過ぎない彼らが内部に足を踏み入れることに
対して良い顔をしなかったが、都市の憲兵としての役割を持つ象神ガネーシャの威光（十面倒な手
間を嫌ったクレスの殺気ガクン飛ばし）を前にしては首を縦に振るしかないのだった。

紙の劣化を防ぐための、潮風から隔離された黴臭い部屋の中で彼らは再び書類を漁
る。

クレスが目をつけた吟遊マルクス・ドゥルース詩人の痕跡は、さほど手間を要することなく見つかった。

「足は個人所有の小型汽船ランヂ、船体名は《レオンティーナ》。動力は燃薪メラエタイト鉞か。……なるほどな」

「おお、もう見つけたんだな！ では早速、他の港に着港履歴を確認して——」

「いや。その必要はない」

クレスの呼び止めに、喜び勇んで記録庫を出ようとしたメルギイの足がキキーツ、と音を立てるかのようにして止まった。

勢いよく振り向いた彼の顔には、ありありと疑問符が浮かんでいる。

「何故だ!?!」

「ギルド職員が検査したこの船の性能スペックからすると、最大航続距離は2,000Kキロルだ。だが俺の記憶上、その範囲にあるめぼしい港は全てここと同じ大陸のもの。わざわざ船を使うまでもない所に行くのに、お前は船を使うか? 使わないだろう」

「……そういうことか! なら確かに無駄足だな! しかし、だとしたらそのマルクス・ドルウーススとやらの船は何処へ行つたと考えられる!?!」

「普通に考えれば、その距離の半径内に存在する小島のいずれか——もしくは、それ以外の……ふむ、ここで推測をいくら口に出しても詮無きことか」

「可能性の話を論ずることの無意味さを認めたクレスは、口に出しての考察を止め、手元に開いていた書類の綴りを棚に戻した。

それから彼は少し考えた後、メルギイの心身に漲る溢れんばかりのやる気に水を差すような問いを発した。

「確認だが、海中もしくは海上戦闘の心得はあるか?」

「俺はない！ 『潜水』アビリティの持ち主が必要か？ それなら別途手配するが……」
 「海は迷宮ダンジョンの水場とは話が違う。アビリティ換算で言うなら最低でも『潜水』のCは必要だが、ガネーシャ・ファミリアにそんな物好きはいるのか？」

「ぬ——残念だが、ウチにそこまでの者はいないな。そちら方面の能力を求めるならむしろ、メレンメレンに拠点を置くニョルズ・ファミリアの漁師たちの方が高いだろう」

「だが、こちらは逆にレベルの高が知れている、か。……分かった、ここから先は俺一人だな」

クレスが持たない、公での権力の出番は恐らくここまで。

これから先は地位でなく技術、彼の秘する魔道マジック・アイテム具がその役割を果たす時のようだ。

しかし、彼の保有する超遺物オーバーバース——今の時代にそぐわない魔導機アーティファクト構類をメルギイらの前に晒すことは、「みだりに『深々層』の情報に衆目に晒さない」というウラヌスとの契約に反する。

表立って話すことの出来る『潜水』アビリティ云々を付き添いを断る理由にして、クレスは最後に感謝を伝えるべく手を差し出した。

「ここまで世話になった、メルギイ・ヴァルマ。初孫が生まれた暁には出産祝い……：：：そうだな、迷宮神聖譚ダンジョン・オラトリアの絵本などが良いか？ ……まあ、そんな何かしらを神カオスを通して送ろう」

「そうか……力不足ですまん！ 初孫が生まれた時には、是非顔を見に来てくれ！ 歓迎するぞ！」

一瞬悔し気な顔を見せるも、メルギイはすぐに気を取り直して笑顔に戻った。

暗に「役立たず、足手まとい」と言われて腹の立たない者はいない。

特に実力主義に基づく誇りプライドの高い冒険者であれば猶更だ。

しかし、その腹に据えかねる想いをすぐさま「己の努力不足にある」と呑み込んだメルギイは、流石ガナーシャが眷属にしただけのことはあるとクレスは感心した。

その彼に再び握られた手を邂逅時の二割増しの勢いで振り回された後、「またな——」と激励を送られてクレスはギルド支部を後にした。

それから彼が向かったのは、ここメレンにも当然設けてある隠れ家セーフティベースだ。

東部の波止場の一角に建てられた、一見宿のようにも見える木造の古家。

数十年単位で利用していないせいで外壁が黒く変色しかけているその建物の正面に立った彼は、玄関の鍵穴に数多のひっかき傷がついているのを見てとった。

やはりと言うべきか、ろくに管理もされていない様子この家に不法侵入を試みた連中が数多くいたらしい——もつとも、全て無駄骨に終わったようだが。

建物の裏に回り、人目につかないことを確認してから彼は鍵を唱える。

「シユレディンガー」

一般的な家屋に見せかけるための裝飾に過ぎないこの建物の玄関は、例え正しい家主に対してであろうと物理的に開くことはない。

唯一の正しい入り方である転移による侵入を果たしたクレスは、その中に据え置かれていた『船』に触れながら再度詠唱を行って空間を跳躍した。

共に向かうのは、大海へと繋がるロゴグ湖の入り江——その地下に存在する小さな空洞。

唯一水中の路ルートを通ることでのみ外へ出られる彼の秘密の港に『船』を着水させた彼は、手始めに燃料槽内の残量を確認した。

「前に使ったのが残ってたか。……ま、これだけあれば足りるだろう。長引けばまた持ってくればいい」

魔石を燃料に駆動する魔導動力機マジカエンジンを積んだ魔法船マジック・ボート、『ナキア・ラクリミス』。

『深々層』の亀型モンスター『アクバーラ・タートル』の甲羅を利用したクレス特注の船だ。

外周を軽く視認して疵や経年劣化がないことを確かめ、その船先につけられた対りヴァイアサン用の試作撃竜衝角の輝きにも欠けがないようだナキアと小さく頷いて、彼は眠る王妃船ナキアに目覚めの接吻キスを落とすかのように優しく点火した。

——かくて炉が稼働を始めた船は、久々の主の搭乗に歓喜を示すかのように嘶く。

動力源より伝わる振動にかすかに揺れる操縦桿をしつかと握り、クレスは彼女に出港の合図を下す。

「発進」

ゴポゴポ……と泡あぶくの音を立てながら、喫水線を超えて《ナキア・ラクリミス》が沈み始める。

船室にて窓の外側が水面下に潜る様子を尻目に、クレスは操縦桿を前に倒した。

彼の目の前に広く展開された画面モニターが映し出す水中の光景が、急速に後ろに流れ始める。

船後方の魔力推進機構マジジェットスラストが生み出す小規模かつ連続的な水蒸気爆発が、彼の操作する船に文字通りの爆発的な加速力を与え、操舵者の意志のままに突き進むのだ。

やがてロログ湖の湖峡を超えて大海原へ飛び出したところで、彼は船を浮上させた。

水平線上に幽かにメレンが見えるくらいの位置まで到達したところで、彼は一度手元の小型船舶用探信儀レーダーを操作して周辺の状況を測る。

「……この辺りにはモンスターもしかいないか。まあ、漁師の行動範囲に腰を据えるはずもなし。遠洋まで出なければ話にならないだろうよ」

クレスは再び動力機エンジンを吹かして、《ナキア・ラクリミス》号をぐんぐんと加速させていく。

海面をV字に切って快進する船、その真横で激しい白波が弾けては消えていく。

その道中で適宜探信儀レイドから電磁波を放ちながら、彼は少しずつ《レオンティーナ》号の行動範囲を埋めていく。

——しかし当然のことながら、相手方の痕跡は中々見つからない。

途中で見つけた小島には漂着した漁師たちが浜辺に残したのであろう焚火の痕跡くらいが辛うじて見られたものの、島の奥部へと続く足跡などが見つからない以上は実質的な無人島だ。

見つかるのは、そんな島々ばかり。

となれば、ギルドでメルギイの前にて口に出さなかつた別の可能性が考えられる。

例えば、常人の目には見つからない海底基地。

しかし、念のためにとその存在は海上と並行して別途海中にも音波を走らせることで潰していたのだが、その類のものは見つからない。

他には例えば、行動範囲の広い大型船舶や飛行船への収容。

より大きな輸送機関への乗り換えが行われた……こちらの方が怪しいか、とクレスは海原を駆けつつ唸る。

「ふうむ……よし、物は試しだ」

現在彼が使用している汎用の探信儀レイドに映る範囲に、相手がいなかったら？

——だがこんなこともあるうかと、《ナキア・ラクリミス》には別の探知機構が搭載されている。

《学区》をモデルとしてこの船を開発した魔法大国の研究者曰く「いずれ星の大海へ漕ぎ出す時のために」開発した物をクレスが投資者権限でブン取った、対惑星用巨大探信儀——《ファゼカス式：擬似神力波探信機構》である。

出力こそ船体のサイズ相応に落とされているものの、その探索範囲はクレスたちが今立つこの星の表層のおおよそ六分の一までに達する。

『深々層』に生息する階層主の核魔石を複数個投入してようやく稼働する大喰らいだが、その程度の消費を今更彼が惜しむはずもなく。

「——む？」

幸運にも、一回目からクレスの目は魔道具の画面に巨大な二つの光点を捉えることに成功した。

一つは国家にも匹敵する多くの魔力の集合体——恐らく《学区》だろう。クレスの放った擬なる神力のせいか、一粒一粒の動きが騒がしくなっている。

ちようどオラリオ近海を航行していたようだが、そちらの動きは捨て置くとして。

——その世界最大の『船』に迫るかとも思われる、もう一つの大きな光点はなんだ？
こちらは光粒の数こそ少ないが、その中央に一際大きな魔力の反応が瞬いている。

「確かめてみるか」

《学区》に匹敵するほどの巨大船が建造されたなどと言うニュースがあれば、まず間違
いなくカオスが彼に伝えるはず。しかしクレスは、そんな話を聞いたことがなかった。

善は急げとばかりに、彼はさつそく不審に思った謎の光点へ向けて舵を切る。

距離にしておよそ5, 000 K^{キロ}。

その大陸一つ分に相当する距離を、《ナキア・ラクリミス》は一挙に踏破する。

半ば海面から浮くほどの勢いで、自動操縦形態に切り替わった彼女は大気の壁を突き
破りながら一時間と半で光点の近くまで駆け抜けた。

その間手持無沙汰だったクレスは船内に常備していた非常食で腹を満たし、目的地に
到着した頃には、既に空は暗くなっていた。

水平線の彼方で、赤く燃える太陽が没する最中。

紫茜に染まる空の向こうに、クレスは肉眼でその光点の正体を捉えた。

「……………ほう？」

それは、全長500 Mにも達するかという巨大『艦』^{メドル}だった。

とはいえ外形は《学区》のような人工物で無く、切り立った崖のような断崖絶壁となっ
ており、まるで陸から一部を切り出したかのような自然物に見える。

その周囲を幹と見紛うほど極太の植物の根らしきものが這って補強しており、それが

ヤドリギのものであることをクレスはすぐさま看破した。

そして偶然にも、彼はこの『艦』を——『陸』の本来の姿をかつて目にしたことがあった。

「何処のどいつだ、こんな遺物を引つ張り出してきた奴は。……前に俺が沈めてやったはずだが」

それは——かつてこの海の上に存在した浮遊移動式『大陸戦艦』、『アトランティス』。ムー・ファミリアの国土として利用され、そして八百年もの過去に『封神大戦』^{グローススマキヤ}でク

レスがそこに居た主神及び眷属諸共その文明の全てを海溝に沈めたはずの『国家艦』。

恐らくはその残骸の一部を引揚^{サルベージ}して流用したのだろうその船の頂点には、かつて太陽神ラ・ムーの祭壇として利用されていた巨大大理石の奉神碑^{モニュメント}が見えた。

ただしそこに刻まれているのは、かつて彼が見た太陽の紋章ではなく、真円——満ちた『月』。

そしてご丁寧に側面に書かれていた船体の名前を、朧げに降り注ぎ始めた月明りの下でクレスは眉を蹙めながら読み上げた。

「——『ネモレンシス』」

古の情景、実るは奇妙な『事実』

クレスが発見した謎の巨船《ネモレンシス》と彼が追う少女ユリアの誘拐事件を紐づける証拠ものは一つもない。

ただし、その船体を取り巻く巨大なヤドリギが、かつてのローマーナにおいて国の象徴たる神樹として崇められていた歴史的事実を彼は知っている——そして、少女の血を遡ればそこにローマーナ行き着くことも。

『事実』が結びつかなくとも、彼の経験に基づく『直感』は強く訴えていた。

——目の前の巨艦について、「これは怪しいニオイがプンプンするぜ」と。

「百聞は一見に如かず。関係があるにせよないにせよ、ひとまず乗り込んで内部を偵察してみるか。となれば何処から侵入するか……ふむ」

幸いなことに、《ネモレンシス》が慌ただしくなる様子は今のところ見受けられない。どうやらクレスの船は未だあちらからは見つかっていないようだ。

ならばこのまま未知の優位を活かそうと、この先の方針を定めた彼は素早く《ナキア・ラクリミス》を操舵して仮想敵船の外壁の一部に寄せた。

《ネモレンシス》の外周を形作る断崖絶壁。

その内で特に傾斜の激しい箇所は、接岸ならぬ接崖する。

上部が大きくせり出している地形の關係上、これでもし警備の人間が崖上にやつてきたとしても、よほど身を乗り出して覗き込まなければ崖下のクレスの船を見つけることは出来ないだろう。

「船の方はこれで良し。……さて、崖登りは久々だな」

眼前にそそり立つ崖壁の様子を慎重に見定め、クレスは両手を何度かぐつぱつ、と握っては開いてを繰り返す。

そうして指の調子を確かめてから、頭の中で思い描いた道筋を反芻して——彼は、その常人には登り難いどころか落下必至の強傾斜の崖を一息に登攀した。

足場は崖の各箇所には爪先ほどせり出た僅かな岩片と、ヤドリギの根。

それらを取つ掛かりにして、彼は猿のような器用さですると崖の淵まで後一步の所に辿り着いた。

「……誰も来ない、な」

そこで一度耳を澄ませ、監視の気配がないことを確信してからクレスは今度こそ崖上に身を乗り上げた。

崖の淵は木々が生い茂る雑木林となっており、これまた身を隠すには好都合だった。

その中に躊躇なく飛び込んだ彼は藪になっていく足元より移動しやすい樹上に移り、枝から枝へと飛び移るようにして奥へと進んでいく。

「そこかしこにヤドリギが共生しているな……」かつ、やはり侵入者^{ネズミ}除けが多いな」

鳴子やトラバサミなど一部物騒な罿が藪下の見え辛い所に仕掛けられているのをよそ目に駆けるクレスは、やがて林を抜けて《ネモレンシス》の内部を伺える場所にまで辿り着いた。

その先には、やはりと言うべきか。

夕闇に沈む世界の中で、確かに息づく文明の光が瞬いていた。

「これは……」

クレスが辿り着いた先に広がっていたのは、立派な一つの都市空間だった。

多くの背丈のある建物が形作る影の中を数多の人々が忙しなく行き交っている。

くたびれた身体に哀愁を漂わせる、少し腰の曲がった老人が。

子連れだろうか、元氣な男の子に手を引つ張られて進んでいく柔らかな表情の女性が。

ぐいぐいと酒杯を傾け、同僚らしき同じ卓につく男に頭を叩かれている氣の早い労働者が。

なんの変哲もない人々が、ちかちかと点灯を始める魔石灯に照らされながら、日の暮れる街並みの中で生計を営んでいる。

その光景を、クレスは林の入り口付近に立つ百日紅サルスベリの枝の隙間からひっそりと観察する。

「……やはり間違いない、ここは《アトランティス》だな。細部が少々異なるが、この都市構造は見覚えがある。碁盤状に整理された緻密な区画割りと、その上で多くの人口を抱えるための立体的な超高層建築群……すなわち、ムーの《摩天楼》」

見渡す限りに聳え立つ建築物はいずれも、最低でも10階以上の高さを誇っている。最大でも20階程度に抑えられているのは、かつて彼が轟沈させた名残に違いなかった。

ところどころ建物の先端が変に折れ曲がったオブジェのようになってるのが、まさにそうだ。

それより上の階層部分は須らくかの『封神大戦』グーシンスマキアにおいて、彼が愛用する焰の余波で溶け落ちたのだ。

本来ならば最低でも30階は下らないはずなのだが——この船を引き揚げて再利用している者たちには、そこまでの建築技術はなかったようだ。

「しかし、雰囲気は大分異なるな。とかく素材の質感が剥き出しで、超硬金属アダマンタイトやら不壊晶石オルガクォーツの黒一色で無機質なのがムーの都市だったが……今は無駄に凝った装飾やら暖色系の塗装が施されて、そんな雰囲気は微塵もない。予想はしていたが——まあ、

間違いなくローマーナ式だな」

クレスの目で見たところ、独自の『魔導機巧』マジカ・マキナ文化——エレクトロニクス電 力を中心とした先鋭的な発展を遂げていたムーの都市機能はほほほ残ったままだ。

その利便性をうまく踏襲しつつ、ローマーナの文化様式で表面を染め上げていると言った所か。

そう分析した彼は内心で感心するとともに、都市の中心部分を——うず高く盛り上がるような船全体の地形の中で最も高所に位置する神殿を見上げる。

「それにしても、元が戦艦だからどんな孤島の要塞かと思えば中々立派な生活を営んでいるものだ。それもここ数年の規模じゃない、数十年……いや数百年単位だな。これだけのものが世界に見つからず悠々と海洋を行き来していられたのも、ムーの遺産の賜物と考えれば説明はつく。年がら年中内輪揉めで争い合つて知識の積み重ねだけは人一倍あつた連中だからな。……しかし、こんな連中の墓標をわざわざ掘り起こしてまで運用しようとする神の存在を思えば、目的はロクなものやなさそうだ」

外からも見えた大理石の祭壇を奥に据えたその神殿は、唯一この艦の中で木材から造られており、軽く見ただけで分かるほどに特異な存在感を放っている。

正確には、聳え立つ大樹のうろを流用して神殿の形式を整えていると言うべきか。

青々と葉を茂らせるこれまた巨大なヤドリギから溢れる生命力と、その中に崇められ

る超越存在の明瞭な神意の燐光が入り混じって、天へと向けて薄く白く立ち昇っている——いわば、地上に降りた月のように。

「この気配からして、あそこにはまず間違いなく本物が降りているな。覚えのない神意だが、恐らくロマーナに関わる神のいずれか……マルスは《王国》、メルクリウスは《魔法大国》、ミネルバは《学区》に居たのだったか？ それ以外の誰か知らんが、まあ会えば分かるだろう」

一通り観察と考察を終えたところで、クレスは手つ取り早く「この地を支配する神と接触してしまおう」と腰掛けていた樹上の枝から飛び降りた。

彼は一陣の風となった彼は手始めに近場の建物の屋上へと駆け上り、そのまま別の建物の屋上へとまるで忍者のように駆け抜ける。

彼の『神の恩恵』外スキルである隠密能力を以てすれば、音もなく疾駆することも朝飯前。

およそ30Mほどの距離がある眼下に人々の営みを眺めながら、彼はこの《ネモレンシス》の主の坐すると見られる根城へ向けて突き進む。

その過程で彼は、かのロマーナの文化を踏襲した古式ゆかしい人々の生活様式を垣間見た。

今の時代では神々くらいしか着ないような、貫頭衣と一枚布の組み合わせ。

エールやワインを揃えた酒場にはパンや魚が籠に入った状態で積み上げられており、オラリオでは「行儀が悪い」と咎められるような、寝つ転がって食事をする台も設けられている……なお、流石に中毒の危険性がある鉛製の器は廃されているようだ。

遠目にはロマーナの代名詞の一つでもある公衆浴場^{テルマエ}が煙突から湯気を昇らせており、量販店を流用したらしい兵舎の前には馬のような鬣上の飾りをつけた兜を被る兵士たちの姿が散見される。

「まあ、普通だな。やたら情景が懐かしいことを除けば、誰も彼もが危険とは程遠い安穩とした顔で——いや、待て」

その過程で、クレスの目はとある一つの違和感を捉えた。

神殿へ向かう足を止め、彼は通りを歩き交う人々の様子を改めて観察する。

そして、気づく——奇妙な『事実』に。

というのも、彼の足元で言葉や杯を交わす人々の容貌が全て、やたらと……似たり寄ったりなのだ。

「顔立ちに体格、雰囲気……誰も彼もが似通っている。双子や複製体^{クローン}ほどではないが、三、四親等くらいか……むむ、ここにいる全員が親戚同士なのか？」

一直線に中央へ向けて駆けるクレスの目は、決してこの船の全てを捉えたわけではない。

しかし、その道中で目にした全ての人々の瞳や髪の色、耳の形、骨格などと言った遺伝的要素が悉く相似しているのは、偶然の一言では済ませられない。

「まあ、外界からの出入りを封鎖した閉鎖的な環境であればそうなるのも必然だが……だとしても種類が極端に少ないな。それどころか……むう、ここにいる全員がほぼほぼ一つの血族に統一されていると見て間違いなさそうだな。昔の王族や支配階級の間にはまま見られた風習だが……」

つまりは、近親相姦による貴血の保持。

いと同じ士や時には親兄弟の間で婚姻関係を結ぶことで、一つの属性を後世まで保とうとする手段。

その人類社会における『悪徳』の一つをふと思いつき起こしたクレスは、その流れで思い至った——思い至ってしまった。

《ネモレンシス》にいる住民のほとんどの間に共通する血縁的特徴。

——それらが、彼の知る件の少女の似顔絵にも共通していやしなかったか、と。

「ここで繋がったか。……なるほど、段々と事件の霧が晴れてきた気がするな。これが思い違いでなければ良いが……もしそうだったとしたら、義母上などは特に激怒しそうだな」

クレスは思いついた可能性を胸に秘めたまま、辿り着いた神殿の前で一度足を止め

た。

——もし、この先で顔を突き合わせるであろう神の御心とやらが彼の想定の通りであるのだとしたら。

「絶対確なことになるん」

それだけは間違いない、と嫌な確信を抱えながら、クレスは衛士の巡回をすり抜けて神殿内部へと侵入するのだった。

月下の号令

ヤドリギの枝々が絡み合つて形を成した太柱の隙間から、朧げな月明かりが差し込む。

通路を抜ける、夜の冷気に雑音を吸い取られた清廉な風が頬を撫でる。

日の光が完全に落ちた時間帯の神殿は、人知を遠くに置いた風光明媚な異界としてクレスを迎え入れた。

「(……懐かしい。この気分も久々だな。慣れない場所に足を踏み入れる、この感覚……初めて迷宮ダンジョンに潜つた時のような、得体のしれない肌寒さがある)」

影の落ちた視界の先へ向けて、クレスはその濃淡の深い場所を伝つて静かに移動を始めた。

その足遣いは糸を渡る蜘蛛のように滑らかかつ素早く、一切の余計な音を伴わない。

研ぎ澄ました五感で慎重に先の様子を探りながら、彼が奥へ奥へと進んでいくと、不意に先の曲がり角からぼんやりと人工的な光が漏れ出てきた。

「……」

「(……警備の目は起きているか)」

武器という争いや血を連想する『穢れ』を神殿内部に持ち込むことが許されない衛士の代わりに見回りをしているのであろう、携帯灯カンテラを持った不寝番の神官及び巫女の二人一組。

それを、天井に張り付いたクレスは逆さまの視界で見送ってやり過ごした。

「(……次へ行こう)」

見回りの二人が十分に離れた頃合いを見計らって、天井から降りたクレスは先へ進む。

神殿内の通路はそれほど狭くなく、人が4、5人は横に並んで通れるほどだ。

またその壁には幾つもの凹凸の大きい装飾が施されていたり、立派な美術品が飾られていたり、彼が監視の目から逃れられるだけの余裕スペースが至る所に点在している。

この調子でいけば、まず見つかつて騒ぎとなることはなさそうだった。

神殿内にある程度慣れてきた彼の目は、奥へ進むついでに、この神殿に存在する数多くの『ローマーナ』を捉えることになった。

当時の兵士の間で広く用いられていた、小剣グラディウスを模した魔剣。

芸術家(気取りを含む)が特に好んだ、青年ならではの肉体の黄金比を映す精悍な石

の彫像。

どこから切り出してきたのか、当時の民衆が公衆浴場で議論する風景をそっくりそのまま切り取った漆喰画。

更には彼も知る顔がちらほらと並んでいる、恐らくは歴代皇帝のものらしき胸像の数々。

いずれもれつきとした、古代ローマに所縁のある代物ばかり。

さながらここは、神を祀る神殿であると同時に、ローマの由緒正しい歴史を綴る博物館としての機能も有しているのだろう——と、その中を歩くクレスは勝手ながら推測した。

「全ての道はローマにこそ通ず、だったか……？ 奔放かつ刹那的な快楽を愛する神々が掲げるには珍しい、一途な国粋主義がここにはある。きつとこの主たる神は、心からあの時代を愛しているのだろう。良くも悪くもな」

クレスは通路に飾られていたローマの風景画のうち二枚に注目する。

そこには確かな人々の活気が——狂愛しいほどの情熱と残虐が描かれていた。

獅子と徒手の異端者集団を、逃げ場のない闘技場にて殺し合わせる……公開処刑場。

十五に満たぬ少年少女が、麗しき花園の中で激しくかつ見境なくまぐわいあう……酒池肉林。

現代では忌避されて当然とされる豪放磊落的な価値観が、それらを眺めるクレスの前で「さも当然」と言つた顔で胸を張っている。

栄華と崩落、人の善性悦びと悪性血を何百何千と積み重ねて築かれた『大帝国』ロマーナ。

その大河の如き歴史を己の瞳めでもまた少なからず見てきた者として、少しばかり懐かしい気分になりながら。

クレスはそれら有形の歴史に彩られた廊下の中を流れる神気に導かれるようにして、最奥の部屋へと至るのだった——。

「——絶海の遊艦たる我が神殿ネモレンシスへようこそ、名も知らぬ人の子よ。礼節を弁えぬ身なれど、珍しき来客なれば、言葉の一つすら交わさずして返すほど狭量な我が身ではありません。歓迎致しましょう……して、何用ですか？」

謁見室にも似た広々とした空間の中で、上座に設けられた祭壇の方から響くデウスデア上位存在の声。

それは鈴の音のように軽やかであり、また祭儀に使われる銅鐸のような重厚さを伴っていた。

一言一言の隙間から滲み出る……存在としての格の違い。

文字通り上位の次元から声をかけてきた女神の神意が強く浮かび上がった挨拶に、クレスは不躰にも目を逸らさずに応じた。

「礼を失したことは謝罪する。その上で、俺は仕事でここに来た。……御身は確か、女神ディアナだな」

クレスは偶然にも、以前に彼女の御姿を目にしたことがあった。

世の穢れさえも塗り潰して『善』としてしまうかのような、高原に咲く一輪の花の如き白肌。

一筋一筋が光の如き皇輝を放ち、『神の力』がなくとも後光を形作る透き通った髪。

そして人知を超えた視界を持つ者に共有される、博愛主義的な微笑み。

その中央に瞬く絶対なる神の黄金瞳が、「一切の嘘偽りを許さぬ」といった威迫を伴って眼下に立つ侵入者を射抜く。

「いかにも。この身こそはかつてロマーナにて崇められた一柱、『狩猟』と『貞淑』、そして『月』を司るディアナ。それで、貴方の言うその仕事とは具体的に何を意味するのですか？」

「誘拐事件の解決だ、神ディアナ。近頃オラリオから一人の女兒が攫われてな、俺はその両親に頼まれて行方を追っていた。——そして、見つけた」

常人であれば目が霞む、もしくは潰れてしまうほどの女神の威光。

ディアナが背負う、下界の禁忌をギリギリ冒さないほどの『神の力』の瞬きの向こうに、クレスは探し求めていた少女ユリア・ダルシアの顔を発見した。

彼女は女神ディアナの側に控えながら、その小さな身体を余すことなく使つて、懸命に植物の葉を模した巨大な扇を煽いでいた。

……《魅了》に犯された瞳で、女神の忠実な下僕しもべとして。

「俺の目的はただ一つ。その娘、ユリア・ダルシアを返してもらいたい。それだけだ」
「断ります」

神ディアナは一切の逡巡なく、その澄み渡る声でクレスの要求を却下した。

……この件における非は間違ひなく彼女の側にある。

だというのに、彼女はさも自分に正義があるのだと言わんばかりの強気な態度を示した。

その短くも傲慢な物言いに、されど彼は憤るよりむしろ内心「だろうな」と納得した。
——なにせ神と言うやつはいつも、どいつもこいつも自分本位で、勝手気ままに動いては周囲に迷惑を振り撒くのが常なのだ（覗ゼき魔ウとか痴漢ゼとか寝ス取りクズとか）。

根本的な価値観が下界の者たちと異なる彼らからしてみれば、むしろデメテルやタケミカヅチと言つた物静かな神の方が逆に異端だと言える。

故にクレスは彼女を非難するための無駄なやり取りを省き、率直に説得を試みようとした——どうせ叶わないことは分かっているのだが。

「その娘一人さえ手放して貰えれば、俺がここのことを口外するつもりはない。そんな

れば御身としても大きな面倒ごとに発展せずに済む、その方が良いだろう。……そう言つてもか？」

「ええ。愛故に——我が最愛を取り戻すために、この小娘はどうしても必要なのです」
「愛……『愛』ときたか」

今度こそ、クレスは「面倒なものが出てきたな」とでも言いたげに目を細めた。

——『愛』。

それは理知ある命が共通して抱く数ある感情の中でも、特に異質で、かつ厄介なものだ。

「虫けら一匹殺せぬ者でさえ、愛故に人を容易く殺し得る」と古代の詩人も言つたように、愛はその所有者に底知れぬ情念と倫理を犯すための免罪符を与える。

しかも、それが悠久を生きる神の口から漏れ出た時。

それは世間一般のものよりも何十何百、いや何千倍も粘着質で、陰湿で、それこそ融けた鉛のように熱く、また重たくなるのだ。

彼が神殿に入る前に感じた嫌な確信は、どうやら見事に的を得ていたらしい。

やはり口だけで引き下がってはくれなさそうだ、とクレスは思考を巡らせつつ再三にわたつて言葉を重ねた。

「しかし、愛それを取り戻すか。やはりそういうことか……だが、なんにせよその言い分でこ

ちらが引き下がる道理はない。そもそも魅了チャームをかけるような一方的な神の愛よりも、懸命に子の行方を捜して世に訴える親の愛の方が勝ろうさ。違うか？」

世の道理を矛として口を開きながら、力づくで取り返すことも辞さないと再度交渉による少女の身柄の返還を求めるクレス。

対してディアナは、反論の代わりにその神意を彼への牽制として放った。

彼の狙いであった言葉による解決の明確な破綻を示す、膨大な霊的圧力が指向性をもつてクレスの心身へと叩きつけられる——が。

「そよ風だな」

「……小動こどう一つしませんか。この艦に辿り着けたことから薄々察してはいましたが、ただの子どもではなさそうですね」

今クレスを襲っているのは、体感にして重力が10倍ほどにも増した精神的重圧プレッシャーだ。

常人なら良くて失神、悪くてショック死。

上位の冒険者でも膝をつくこと間違いなしの、目に見えぬ暴威。

しかし、今更その程度で折れる彼ではない。

なにせ、クレス・カラストロフは《神殺し》である。

従者サテラと同じく、己の目的のためならば神さえも弑することを躊躇わないこの下界の破綻者。

そんな彼の見せた『下界の只人があることか天上界の神を見下す』というこの世界における最大最上級の無礼に、ディアナはその端正な顔立ちを分かりやすく正した。

「大人しく引き下がるならば見逃すのも止む無し、と考えていましたが。我が愛を奪うというなら、容赦はしません」

「結局こうなるのか。……先に愛を奪ったのは貴女だろう、神ディアナ。何を目論んでいるかは知らんしどうでも良いが、誘拐は貴女の愛する古代ローマの法にも犯罪として明記されていたはずだ。此度において責められるべきはそちら、分かりやすく言えば『ユースティティアの剣は我が手に在り』というやつだ。返してもらおうぞ、その娘を」

もはや言葉は不要、とクレスが娘ユリアの奪取に向けて動くべく重心を前方に傾けた。

その微細な予備動作を、しかしディアナははつきりと見切っていた。

狩りの女神でもある彼女は獣の動作を読み取る業にも優れており、そして広い範囲でくくれば人もまた獣の一つである。

文字通りの神業的な技量で以て、ディアナは瞬時に背後に飾られていた銀色の弓に矢を番え無礼者に射かけようとしたが——遅い。

その目だけは辛うじてレベル19の動きに追い付いても、下界のルール物理法則に縛られた平々凡々な身体は彼女の思うように動けなかった。

急に遅く感じられた視界の中で彼女は、彼我の距離を瞬時に詰めたクレスが悠々と少女を取り返す光景をただ茫然と見送ることしか出来ないのだった。

一瞬のうちに百段近い祭壇を土足で駆け上った彼が、ユリアの手から扇を奪い放り捨て、その身を抱えると同時に跳び退る。

「きやつ——止めて、放して!」

《魅了》されたままの少女ユリアは敬愛する女神の下に戻ろうと、クレスの腕の中でじたばたと抵抗する。

その無意識化を占領するディアナの《魅了》をこの場で解除するのは困難だ。

心身ともに成長の過程にある幼子の《魅了》を無理矢理解除した場合、その負荷で精神こころが壊れてしまう恐れがあるからだ。

例えるならば、一つの湖に溶けたたった一滴の顔料を再び回収しきることに等しい。

彼も不可能とは言わないが、ここは万全を期して専門の処女神を頼り解祝してもらおうのが一番だ。

「寝てろ、その間に全て済む」

「——うっ!」

とりあえず当面の処置として、クレスは少女の額を小突いて気絶させる。

それで「用は済んだ」と言わんばかりに、彼はすぐさまこの場を離脱しにかかった。

「ではお望み通り退散しよう。余計な気は起こさぬよう、くれぐれも御身が賢明であることを祈る」

そう言い残して、元来た道を速やかに戻っていくクレス。

だがもちろん、神がたかが一人の矮小な人間の言葉に素直に従うはずもなく。

腰を落ち着けていた豪華な椅子を倒す勢いで立ち上がったディアナは、その自らが語った『愛』の深さを示すかのように——その身に秘めたる神意を爆発させた。

『——決して、逃すものか』

仮面染みた無感情な相貌を露わにしたディアナの唇から、人間性を排した『神の声』が響き渡る。

その身に立ち昇る神威が銀の御柱となつて、天へ向けて迸つた。

その様子はまるで、空に瞬く月とは異なる——地上に降りたもう一つの月。

眩いばかりの極光が、神懸かり的な力の波動を放つて覚醒する。

『——告げる。我が血を与えし眷属たちよ』

真昼と見紛うばかりの眩い光の奔流が神殿内を満たし、その中心から現れた月女神ディアナが、身に纏う神の力を細雷のようにバチバチと打ち鳴らしながら艦全体に命ずる。

『神域を汚す侵入者が現れた。探せ——見つけ次第男を殺し、汝らが同胞を取り戻せ！』

女神が直々に下した託宣を受けて、寝静まりかけていたはずの艦が揺れ動き始める。

疾走するクレスは神殿に設けられていた窓から、その脈動の正体を見た。

夜の帳の落ちた都市全体に急遽瞬き始める地上の星々……それらは全て、クレスのよく知る『神フアルナの恩恵』の気配。

すなわちこの艦に住まう誰もが、オラリオでいう所の冒険者。

それら月女神の下僕たちが一斉に、恐れ知らずの愚クレスか者に鉄槌を下すべく集結を始める――。

『月』の発した凶光の号令によって、今まさにロマーナに愛されし血宴が始まる。

汝、星を穿つ白銀

駆ける、駆ける、駆ける。

『少女を取り戻す』という当初の目的を達成したクレスは女神ディアナに宣言した通り、「後のこの船ネモレンシスでの面倒事色々諸々などいざ知らぬ」と艦の外周部に接舷した己が船を目標してただ尾を引く流星の如く疾駆する。

夜の摩天楼の空は天に近い分だけ肌寒く、天神意に弓引いた彼に罰を与えるかのように乾いた冷たい逆風を吹かせていた。

されどたかが地上の環境負荷程度デバフが超級冒険者レベル10の足を遮れるはずもなく。

彼は保護した少女ユリアの未成熟な体に負担をかけないギリギリの速度を保ちながら、屋上から屋上へと来た道をぐんぐんと逆走していた。

——突如、その視界に頭上から百余の影が差す。

「む。来たか」

月明りに淡く照らされた高層建築群の頂上。

輝きを遮るものが何もないはずの場所で自身以外に影を作る者がいると言うことは、

つまり。

——やはり。俺一人ならともかく、か弱い荷物があれば追い付いてくる奴らもいたか。

追手の影がクレスを足止めするべく攻撃を仕掛ける。

その手から、更なる千もの小影が放たれて……背後からの投擲物の雨に晒されることを防ぐべく、彼はこれまで足場に使っていた建物を盾にして地上に降りることを即決した。

彼一人ならば加速一つで回避出来る話だが、少女の身体がそれに耐えきれないからだ。

抱える矮小な荷物への負担を鑑みて、何度か建物の壁面を蹴って落下速度を殺しつつ、これまで見下ろすばかりだった《ネモレンシス》の地上へ。

着地と同時に全身の関節を緩衝材に使って衝撃を吸収し、彼は猫のように平気な顔で即座にその場から離れようとする。

見渡せば、彼の落下した場合は三叉路の中央だった。

そのうち、外周へ続くであろう道に飛び込もうとして——彼は、突如として出現した大勢の妨害者にまたもや足を止めなければならなかった。

そこへ、遅れて降り注いだ先の襲撃の正体の一部がガガッ！ と鋭い音を立てて足

元突き刺さる。

その姿かたちを視認したクレスは困惑の唸りを漏らした。

「これは……」

追手が降らせた足止めの正体は単なる鉄の雨ではなかった。

十字に卍字、竹葉型に風車型等の特徴的な形をしたそれらはまごうことなき手裏劍^{テリヤク}。

主に極東の隠密の間で使われる得物だが、それ以外にもその武器を扱うとある種族がいたことをクレスは知っていた。

しかし、その種族は彼の知る限り既に滅んだはずだ。

他ならぬ、彼の手によって——かつてのこの地^{アトランティス}の名と共に。

「生き残りがいたのか？ いや、それならそれで昼間に見かけたはず。あの光景の中には、お前たちムー人の特長たる白髪に褐色肌、そして刺青を入れた者はいなかった……なんだ、お前たちは？」

クレスの問いかけに、ディアナの神意をその背中に宿した包囲者たちは手中に握りしめた魔道具——『太古^{オリバー}の遺物』と魔法で答えた。

彼の正面に立つた集団の内、緑衣を纏った者たちが《大振り^{フウマシユリケン}の手裏劍》を構えて詠唱する。

「二——【我らは影に忍び影を討つ者。即ち疾風^{シノビハリケン}夜行】……二」

そしてクレスの右後ろの路地に立った半裸の赤い腰衣を巻き付けた連中が、頭に
 《竜の頭骨化石》^{キョウリユウセキ}を被り、咆哮する。

「二【我らは覇を唱え覇に賭す者。即ち暴竜万丈】!!!」^{ダイノガッツ}

更には彼の左横の道路上に立った鋼の鎧を装着した者たちが《金色の線が走る大剣》^{イナズマケン}を掲げて斉唱する。

「二【我らは剣に生き剣に死ぬ者。即ち雷刃繚乱】——」^{ブレイドブレイド}

その詠唱が意味する所を結実させるべく、彼らは最後に共通するその魔法名を唱えた。

「—————」^{【トライブ・オン】}「—————」

——木の葉の嵐が吹き荒ぶ。

——火岩流が噴き出す。

——白き雷鳴が轟き落ちる。

続けてその中から現れた懐かしい気配に、クレスは改めて名乗られるまでもなくその正体を察した。

「忍者、恐竜族、狂戦士……なるほど。太陽神ムーの遺物を基に、その眷属だった連中の力を降ろしたか。まさか今になってお前らの顔を見ることがあるうとはな……これも神々の言う下界の未知というやつか？」

今クレスの前に再び顕現した彼らこそは、かつて栄えたムー・ファミリアの三種族。闇に駆け奸智を張り巡らせるシノビ。

敵と己の血に塗れて戦火に名を馳せたベルセルク。

内に秘めた暴獣性に任せて破壊と略奪を繰り返したダイナソー。

彼の認識上、連中はこの神時代における負の遺産の一つである。

「全ては神ムーに供物を捧ぐため」と宣って、テルスキニア鬪国のような内部での殺し合いに飽き足らず世界へ繰り出してまで大々的に戦争を吹っ掛けるような生粋の殺戮狂ども。

そんな連中が女神ディアナの眷属を依り代に顕現した——という現状。

世界的に見ればかなり重大な事態なのに間違いないのだが、それを前にしたクレスはそこまで深刻そうにするまでもなく、むしろ面倒オパーツそうな顔を浮かべて独り言ちた。

「それにしても、月女神の配下が太陽神の遺物を使うのか？ 俺としてはまあ、どうでも良いんだが……一つだけ教えてくれよ。なあ、お前らのロマーナは何処へ行った？」

そんな彼の軽い皮肉に、彼らは「これが答えだ」と言わんばかりにクレスへと襲い掛かる。

数を二倍三倍にも増して再び降り注ぐシノビの手裏剣雨。

クレスを挟んだ反対側からは、ダイナソーの腕に装着された竜頭の砲から火炎放射が放たれる。

そうして生まれた灼熱鉄雨の真つ只中を、構わずベルセルクたちが雷鳴を踏み鳴らしながら果敢に斬りかかる。

——その眼は全て、《魅了》の白銀に染まっている。

「……面倒だな」

通常向かってきた者は容赦なく冥府の神の誘いに委ねるクレスだが、今回はそうもいかない。

《魅了》の支配下にある彼らは本人の意志が封印された、いわば心神喪失状態にある。その行動にまで責任を問う等の人道にもとる一部行為については、彼の神力オスから直々に「人間性を損なう行為」として非常事態を除き禁止されていた。

故にクレスは少女を負いながらも尚、総じて平均レベルが3はあろう下界基準で精鋭に当たる彼らに対して、手加減してやることを決めた。

それだけの傲慢が、レベル差の名の下に許されてしまうのが下界の理だから。

「殺しはせん。だが、少々痛い目は見てもらう」

わざわざ三つの種族全てを正面切って相手取る必要はない。

クレスは戦う上で最も少女にかかる負担の少ない相手を素早く見定め、そちらへ向けて足元にぎやりつ、と地面の焼け焦げるような摩擦を残しながら呐喊した。

彼が突破先に選んだのは凶剣士の一団。

シノビのカワリミのように厄介な術がなく、ダイナソーの火炎のような範囲攻撃がない彼らの攻撃は、強力であるが《凶化状態》故に単調だ。

「うおおおつ!!」

「借りるぞ」

嘶きを上げて襲い来る狂戦士の懐に飛び込み、その上段からの振り降ろしが終わるより先に肩からの体当たりを食らわせて吹き飛ばす。

後方の敵まで巻き込んで飛んで行ったその一撃は連中の背後まで続く道を作り、クレスはそこへ勢いに任せて飛び込んだ。

衝撃に怯まざるを得なかった連中のうち一人から、彼は立て続けにその黄雷を帯びた剣のうち一振りを奪う。

『タタカエ……タタカエ……』

「魔道具というより呪道具なのか。——下らん」

『……ギヤアアアツ?!?!』

どうやら遺産にはムーの亡霊の遺志が宿っているらしく、握ったクレスの頭に直接おどろおどろしい声が響いてくる。

それを魔力を流して強引に祓った彼は、人々の壁を突破し切った後一度立ち止まって振り返る。

そして、万が一にも少女に害が及ばないよう一度その身体を宙に放り投げてから、両手で剣をしつかと握り、記憶の底から彼らの剣の理を引き出す。

——その剣に、黒い雷が宿る。

「確か、こうだったか？ ——【サンダーボルト・ブレイド】」

左から右へ、右から左へ。

陣を突破された《ネモレンシス》の住人達がクレスを追おうと振り返ったところへ彼は強烈な横薙ぎを二連続で食らわせ、たたらを踏ませる。

生まれた一瞬の隙を見計らい、彼は大量の魔力を刀身に宿して派手な三撃目を振り下ろした。

その稲光はまさしく、地上に落ちたる神の怒り。

広大な範囲に打ち付けられた稲妻が、彼を追おうとしていたディアナの眷属たちを諸共に薙ぎ払った。

「つと」

用済みの雷鳴剣を放り捨てると同時に、落ちてきた少女の身体を優しく受け止める。

ひとまずの邪魔者を打ち倒したクレスは、麻痺もしくは気絶して動かなくなつた彼らをおいて先へ進む。

殺しはしないが、彼らの正気を取り戻して女神の領域から解放することまでは夫婦の

依頼外であり、報酬のない余計な仕事をするほど彼はお人好しではない。

今は少女ユリアの身柄をオラリオまで届けることが彼の責務であり、それを果たすべく、彼は再び風となつて《ネモレンシス》を突き進む。

「トライブ・オン」——ガアアアアツツ!!」

「——」

雷鳴轟かせる剣士の凶撃を、火花一つすら少女に届かせないよう注意を払って蹴り飛ばし。

「トライブ・オン」——「ジエノサイド・ブレイザー」——

吠える恐竜の業火流を、熱が少女の髪を溶かさぬよう余裕をもって躲した上で肝臓を殴り抜き。

「トライブ・オン」——「フウマシップウジン」——

またもや降り注いだ手裏剣の雨霞をいっそ潔く進路を変えてやり過ぎし、追いかけてきた連中を置いておいた魔法の遅延爆発で返り討ちにして。

相手の支配領域内だけあって次から次へと闇の中から現れる連中を退けつつ、クレスは着実に外周部へ距離を詰めていく。

「……ほう?」

その最中、クレスは2つの遺物を持った相手にも出くわした。

手裏剣と大剣を構えた青年——恐らくレベル5はあろう、神ディアナの手札の中でも奥の手に近い敵。

既に「トライブ・オン」を終えて鈍色の忍装束を纏った彼はなんと、その手にある手の平ほどの魔法具で魔法の詠唱を代替しながらクレスに斬りかかってきた。

『アクセスコード・フウマシユリケン』——電符演算開始。【トキヲツゲルハ剣士の鼓動、血雷よ、我が意に依りて凶笑よ】——【ウオリアープラツケンシノコドウケツライヨワガイニヨリテキヨウシヨウセヨ】——【ウオリアープラツド】。【シヲソウスルハヌレバノシラベヨウトウヨワガチニヨリテザンカクセヨ】——【ムラマサブレード】

「あー、そういうのもあったな」

魔法を電子化することで疑似的に再現する、ムーの魔法具製作者の技術結晶の一つだ。

クレスの記憶が確かなら、目の前のシノビとベルセルクの混合戦士——都合上ベルセルクシノビと呼称すべき相手の魔法から推測される戦法は、『時間経過とともに体力減少を伴う代わりに攻撃力を上げる』である。

しかし逆に考えれば、「さっさと倒してしまえば大したことはない」とも言える。

2種族の力を纏った相手だろうと、クレスは構わず真正面から踏み込んだ。

大胆にも見える態度だが、『魅了』下にある青年は驚く素振りを見せることがなく、冷

静に「ムラマサブレード」と「イナズマケン」の二刀流でクレスを仕留めようと目論む。交錯する刹那、クレスが少女を抱える腕の代わりに自由な足による蹴撃を狙ったところで——唐突に敵の身体がタヌキを模した人形にすり替わる。

そして後ろに気配を現出させたベルセルクシノビの双剣が、容赦なくクレスの背中を切ろうとする。

「で?」

「——っ!」

かつてムーの戦士と何度も相対した経験のあるクレスは、その手の内を彼ら以上に知り尽くしている。

「カワリミ」を読んでいた彼は相手が位置を入れ替えるより先に、振り向きざまの背面蹴りを置いていた。

自らクレスの蹴りに飛び込むような醜態を晒した相手はそのまま防ぐ間もなく胸に吸い込まれるような衝撃を受け、近場にあつた閉店後の酒場の中に吹き飛ばされていった。

「とはいえ、いい加減受け側だと面倒臭いな。恐らくこの辺りに——あつた」

クレスは走る先で見つけた、苔むした置物の前に立つ。

傷一つなく磨かれた石造の操作台^{コンソール}。

どうやら今ここに住まうディアナの使徒たちにはついぞその使い方が理解できなかったらしく、長年放置されていた様子のそれに彼が触れると電源が入る。

そこへ彼がすかさずいくつかの図形を組み合わせた文字を入力すると、息を吹き返したかのように先ほども聞いたばかりの電子音声の流れ出す。

とはいえ放置されていた分だけ調子が幾分か悪いようで、そこには雑音ノイズがかかっていたが。

《『アクセスコード・■■■タ■■』——》

「この状況を解決するには……これが良からう。まあ、死にはしまい」

《電符演プログラムのキヤト開始——「ホロビヲヨブハリユウノハドウリユウセイヨワガイニヨリテ
ホウコウセヨ——〔ゼツメツメテオ〕》

ムーの電力を吸い上げて物質マテリアライズ化した、絶滅を招く流星群が《ネモレンシス》全体へ降り注ぐ。

大気との摩擦で燃える高温の大岩が船の各所に突っ込んでは大爆発を起こし、地響きを立てる。

クレスは戦闘要員とならない赤子や老人を見ていないことから恐らく屋内に引っ込んでいたのであろうと見込んでおり、そちらは無事だとしても、現状野外にいる戦闘員たちはそれなりの被害を被るだろう。

「こんなもので良いだろう。さて、「シユレディングー」……む？」

隕石メテオの方に気を取られざるを得ない今、誰も自分を見ていないだろうと踏んだクレスが短縮詠唱を行う。

しかしどうやら発動条件を満たせていなかったようで、小船への転移は不発に終わった。

彼が確認のために周囲を見渡すも、確かに誰もいないはずなのだが――。

「――そうか」

クレスは咄嗟に空を見上げる。

そこには神ディアナの瞳が――寒気立つほどに美しい真円を描く月が浮かんでいた。

彼が神殿の方を向けば、遠目に、屋上に立つディアナの顔が見える。

その機械的な相貌は、間違いなくクレスの現在位置を睨んでいた。

その口が小さく動くのを、彼は読み取った。

『ニ・ガ・ス・モ・ノ・カ』

それに舌打つ間もなく、彼は膨大な神意が天上に向けて凝縮されているのを察知した。

――見上げる先の月が徐々に欠けていく。

それは神アルカナムの力が充填されている証。

もはや神が下界に存在することを許されないほどの強大な力場が、月に投射されるように形成されていく。

「む……それはもはや、俺はどうでも世界が放っておくまい。なのに、そこまでするか神
ディアナよ」

『篡奪者よ、その命を以て贖罪せよ。……ああ愛しき我が眷属よ、この矢で汝の心を再び射止めよう。——【偽現・月神の聖光弓】』

「神創兵器まで出す、だと。——いよいよ正気のようにだな」

あれを食らえばマズい、と今度こそクレスの全身がけたたましく警鐘を鳴らす。

高レベルの今の彼を傷つけられる存在は、下界には今や迷宮程度しか存在しない。

だが、天上界は違う。

事象の理がまったくと行って良いほど異なる神々の武器は、容易くクレスを屠る必殺の一撃となり得るのだ——それこそ、齡3歳に満たぬ子供が自分の落書きを消しゴムの一撫でで消してしまうような。

瞬時に彼は逃げ場や隠れる場所を探すも、当然の如く見当たらない。

いくら過去の超遺物たる《ネモレンシス》の船体と言えど、しよせん彼に沈められる程度の頑強さしか持たない。

つまり、この場に月女神の神意を防げるだけの盾はなく。

『我が真名は月女神。夜天に輝く孤高の鑑、唯この胸を射止めし王に至上の愛を注が
ん。悪とは条理、正とは神意。今、天に弓引く愚者に天罰を下そう。すなわち愛あいがた為、破
魔の月弦——』

空の彼方で、皆既月食の弓が厳かに引き絞られる。

女神の激昂に浸食された月光が神アルカナムの力と織り交ぜられ、凝縮される。

其をありきたりな言葉で示すなら——衛サテライト・キャン星砲。

「——仕方ない。こうなればいつそ……」

もはやクレスも出し惜しみしてはいられなかった。

彼自身が心底忌み嫌い、神カオスの力を借りて背中に封じていた『奥の手』を使わざ
るを得ない——そう覚悟を決めた時。

「……待て。今回はオレがなんとかしよう」

「は？」

『——ミューテイアフオース・アリキアー「汝、星を穿つ白銀」』

降り注ぐ、膨大な神意と月光の集積ダイク・ロイック・レーザ複合重奏大砲。

しかしそれはすんでのところ、狙いを逸らし、海の方へと駆け抜けていった。

——遠方から、遅れて極大の衝撃と拳を連打するかのよう音が届く。

月光の砲撃が海を底まで蒸発させ、そこに周囲の水が瀑布のように流れ込んでいるの
だろう。

同時に潮風によつて迷い込んできた海水の霧が周囲の景色を覆い隠し始める中、クレ
スは突然の声の主に尋ねた。

「ひとまず危機を脱せたことには感謝しよう……それで、何の用だ」

「——頼みがある、ヘラクレス「神造英雄」」

その声は、いつの間にかクレスの腕の中から降りていた少女の口から響いていた。

しかしそれはひ弱な彼女の外見に不釣り合いな低音の男声で——恐らくは少女に一
時的に宿つたのであろう何者かが、彼に頭を下げた。

「神祖ロムルスとの盟約に基づき協力を要請する。かつての東方オリエントの賢者よ、どうか我が
女神あを殺して欲しい。あの方は既に——どうしようもなく、狂っておられるのだ」

《エーゲリアの受胎儀式》

「御身も既に察しているとは思うが——改めて名乗ろう。オレこそは栄えあるロマーナ皇帝、ガイウス・ユーリウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクスである。またの名をカリギュラ、此度は我が子孫たるこの娘の身を借りて一時的に顕現した」

「……」

少女ユリアの身体を使う何者かは、自身のことをそう名乗った。

それを聞いても無表情を保ったままのクレスを「突然のことに困惑している」と勘違いしたのか、彼は下げていた頭を上げ直して、慣れない少女の肉体でぎこちない身振りを示しつつ説明のために口を開いた。

「ああ、この身体の本来の精神のことを気にしているのか？ 心配せずとも良い。我が女神の《魅了》による自我の封印が逆に強固な盾となつて、オレの精神による上書きを防いでいるが故な。それとも次なる光撃レイザーのことか？ そちらは魔法で一時的に女神の認知をズラすことでこちらの座標を誤魔化している……長くは保たんが、少しばかり話をするだけの猶予はあろう」

その情報を流し聞きつつ、クレスは相手の発した名を頼りに記憶を手繰り寄せていた。

カリギユラ——山ほどこいる古代ローマの皇帝のうちの一人。

大した功績も残さず歴史の露と消えた者もいれば、そうでない者もいる中で、彼の名が後世に残すところの意味と言えば……。

「……思い出した。銀月の狂気に堕ちたと評される、ローマ人屈指の暴君か」

彼から見て遙か後の世の評論家がそう纏め上げた、侮辱とも言える評価。

されどクレスが発したその評価を、とうのカリギユラは否定する素振りを一切見せることなく受け入れた。

「しかり。賢帝と呼ばれ調子に乗り、月女神を口説いたまでは良かったが、しよせんはその愛に応えきれずに吞まれてしまった愚帝よ。その後のオレが女神に捧ぐ愛を勘違いしてしまったせいで、民に苛政を敷いてしまったことは今でも深く悔やむところである。だが、オレの後悔よりも今は現状をこそ語らねばなるまい」

借りた少女の顔に深い自責の念を浮かび上がらせながら、カリギユラは月女神が座標の設定を修正している隙を利用してクレスに語る——この艦、《ネモレンシス》で秘かに行われている計画の全容を。

「既にオレと言う皇帝の概要は知つていよう、その末路もな。女神の寵愛に魅入られ過

ぎたオレはその愛に相応しい国を作ろうと独裁を強化した結果、当然の如く暗殺された。死の間際に正気を取り戻したオレとしては「それで良い」と受け入れられたのだが……しかし、我がディアナはその終わりを良しとしなかった。本来ならば天に還るべきオレの魂を、その御力アルカナムを使い秘かに下界に留めていたのだ」

「それだけでも既に神々に許された範囲を超えているな。見逃されていたのは……ああ、まだ具体的な下界での規則ルールが定まっていなかった時期だからこそか」

神々が現代まで続く『下界の規則ルール』を明確に定めるまでには、それなりに悲惨な出来事があった——例えば、『視界いっぱい広がる砂浜の粒全てほどの不死』を与えられたが、『不老』ではなかったために肉体が風化してしまい、五感が喪失した中でそれでもなお孤独に『生かされ続ける』老婆がいたように。

その当時の天上界ゆる☆ふわ的な価値観からすれば確かに、死後冥府に送られるべき魂の一つや二つを手元に留めておく程度のこととは軽く見過ごされていただろうとクレスは納得した。

カリギュラもその神ディアナの判断そのものは特に非難するつもりがないようで、話を続ける。

「うむ。そして、当初は手元にひっそりと隠したオレの魂を愛玩する程度で収まっていたのだが、我が女神の愛は次第に膨れ上がり、それだけでは満足できないようになって

いったのだ。オレの肉体的不在と併せて……とうに絶頂期を過ぎ、衰退していくばかりのロマーナを眺めながら。あの憎き大工ヨゼフの息子が説き広めた異端の教えに侵され、正しき信仰すら失われていくロマーナを見ながら」

「……」

「その『時代の移ろい』が、不変を是とする女神には耐えられなかった……それと同時期に、ロマーナ外で名声を高めつつあったアルテミス・ファミリアという名の派閥があったのだが悪かった。同じ事柄を象徴する女神アルテミスは隆盛を極めていくのに、自らの国ロマーナは零落の一途を辿るばかり……『何故だ！ あの小娘と私、何が違う!?!』とよく仰っていた」

「……ただでさえ心が弱っていた時期に他者との比較を覚えて、下へ降りるばかりの螺旋階段から思考が抜け出せなくなってしまうたのか」

「そうだ。神と言えど人と同じように思考するのだと、あの時ほど強く実感したことはない……。それから更に経って、いつからだったか……あの御方はかの正当なる時代を復活させようと、オレの復活を目論み始めた」

「當時を思い返すかのように、瞼をキツク閉じて顔を顰めるカリギュラ。」

彼は女神ディアナのお膝元で長きに渡り彼女と視界を共にしていたからこそ、その超越存在デウス・デアの心情を少なからず理解できていたのだろう。

生の後半ではその在り方こそ歪んでしまったとはいえ、その口振りから、彼が間違はなく自らのロマーナを愛していたことは疑いようがない。

それが目の前で廃れていく光景をまざまざと見せつけられることに彼自身、「思うところになかった」とは言えないようだった。

しかしそんな己の思いの丈を語るよりもあくまでも現状を語ることに徹しようと、彼は閉じていた目を一瞬の逡巡の後に開いた。

「魂は既に女神の手中にあつた。ならば残る復活に必要なものは肉体だ。血の通う、生きた肉体がなければ『神の恩恵』^{フアルナ}を刻むことも出来ぬ。それを留意すべく、女神は世界中に散つたオレの血を集め始めた。世代を経て薄まったロマーナ皇帝の正当な血筋……それを交配させることで、再び濃く高めていく。そうして出来る、かつてのオレの肉体と遜色ない容れ物に中身^魂を注げば、晴れて「銀月の皇帝」の復活という訳だ」「この艦の連中が全て似通つていたのはそのためだ。果てしない近親相姦を繰り返してきた結果、ここでは誰しもが親であり子であり兄弟であり姉妹である。全ては求めるただ一つの器のため……」

「しかり。それこそがこの艦の正体。女神ディアナの神殿《ネモレンシス》——そちらは内実を覆い隠すための虚構の偽名に過ぎん」

ここに至つて、クレスは漸くこの艦の真名を知るに至る。

「またの名を、《エーゲリアの受胎儀式》。あの方はかつての分御霊であった水の精霊エーゲリアの『繁栄』の権能を用いて母胎の受精出産を加速させ、愛して病まぬオレを再びこの世に産み落とそうとしているのだ……!」

それこそが、神ディアナが少女ユリアを攫った目的。

彼女の中に眠るカリギュラの遺伝子をも計画に組み込み、祖先の肉体を再構築するための一片にする予定だったのだ。

クレスも薄々感づいていたこの場所の正体がカリギュラによって詳らかにされたことで、彼が女神の様子に対して抱いていた疑問も腑に落ちた。

「神ディアナはオレを復活させるためだけに、オレの子孫を生まれながらに《魅了》に墜たし、有り得てはならぬ……あのお方にはもはや、愛すべきロマーナの姿が見えてはおらん。オレを取り戻す、その一点以外全てが些事に過ぎんだ」

「……それが最初に言った、「狂っている」ということか」

「業腹だが、そう言わざるをえまい。現実に干渉する術を持たない魂のオレは、あの方が狂うまでの全てを側で見ていることしか出来なかつた。悔しいことにな。——だが偶然にも、こうして御身が現れた。〔神造英雄〕、燃え燦るような灰の髪を持つ神祖ロムルスヘラクレスの義父が」

「……」

——かつての話だ。

迷宮……ダンジョン当時の『大穴』の攻略に必要な物資、特に強力な武器を調達するために、クレスは度々そこを離れて世界中を渡り歩いてきた。

そして、地上に溢れるモンスタアのせいで人々の心に無限の暗雲が立ち込めていた当時、その旅の過程で数々の問題英雄譚に巻き込まれるのはある種必然であった。

ある国に、シルウイアという一人の女がいた。

本来の立場を奪われ、望まぬ地位に押し込められかけていた不幸な女。

それを当時下界に降りてきたばかりだった神アレスが——美女と言うこともあつて——気にかけて、当時旅をしていたクレスに加護を与えることと引き換えに彼女の救出を依頼したのだ。

結果クレスは色々とすつたもんだの挙句に彼女を神アレスと共に祖国から連れ去り、ついとばかりに二人の仲人を務めさせられたりして、その果てに彼らの息子……のちの初代ロマーナ皇帝ロムルスとその弟レムスの養育係を任されたりしたのだが。

子の養育と言えば通常何年もかかるものであり、それを辞面倒した呉がったた彼は適当な所から賢い老狼の精霊を連れてきてそれを代理とし、「代わりに一人前となつたお前たちが真に困った時に手を貸そう」という約束を残して再び『大穴』の攻略に戻つた——。

「神祖はついで、貴方に助けを求めることなくその生涯を終えたと遺された書簡にあった。ならばその血を引くオレが残ったその権利を行使したとしても父祖はお許しくださるだろう。——故に、頼む。どうか御身の手であの狂われた女神を討ち、我が大切な子らを救うと共にこの悪しき儀式の場を終わらせてはくれまいか」

再び頭を下げ、カリギユラはクレスに懇願する。

そこには派手に着飾った皇帝の見得等はなく、真摯に主神の安寧を願う一人の眷属の姿があつた。

神殺しという下界最大の咎をクレスに押し付ける傲慢さ——それを他者に委ねることしか出来ない己の無力感を押し殺して、希う。

その心からの願いが彼の心に響くかは分からなくとも、尽くせるだけの誠意を尽くして、カリギユラはクレスからの答えを待った。

「むろん、報酬も与えよう。この船には失われた本来の動力源の代替として、かつてオレが設計した対海の魔物用の魔力増幅機関『リヴァイアサン赤竜機心』というものが搭載されている。もつとも、到底吊り合わぬと思うが……もはやオレには、それくらいしか残っておらんのだ」

——投げうてるならば五体を投げ出してでも構わない、それこそ命を捧げたとして惜しくはない。

ただ、間借りした子孫^{少女}の身体に自分のエゴで傷をつけるわけにはいかない。

だからこそその、今のカリギユラに出来る精一杯の誠実な対応として、頭を深く下げる。そんな誇り高き皇帝の遜った態度に、クレスは。

「良いだろう。依頼の目的は子孫の救出と神殺しだな。請け負おう」

カリギユラの浮かべる真剣さとは裏腹に、明日の天気を確認するくらいの気安い口調でその依頼を受領した。

「え？」とトントントン拍子どころか坂道を転げ落ちるような速さで都合よく進んだ展開にカリギユラが目を丸くする中、クレスは久々の『破神』へ向けて計画を頭で練りつつ理由を教えた。

「あの様子だと、どうせ殺さねば何処までも追ってくるだろう。下界の規則にも抵触していることだし、お前からの依頼があるにせよないにせよ、少女ユリアを送り届けた暁にはウラノスに言われてやっていた。その『咎』も今更問われるまでもない。なにせこの身は既に神殺しだ」

「——っ」

下界の住人にとっての最大の禁忌であるはずの事柄を、悔いる素振りもなく、かといつて自慢げにする様子もなく、淡々と口にするクレス。

その己の常識とは大きく異なる在り様にカリギユラが思わず息を呑む中、クレスは背

に負った解放しかけの恩恵の調子を確かめるようにしながら、彼にとつての事実を語る。

「それが一つ二つ増えたところで変わらん。お前の言う子孫の保護も——数こそ多いが、まあやってやれんことではない。女神の庇護下を離れた後の生活もメーヴに任せれば、愚痴を言いつつなんとかするだろう。強かな女だからな、あいつは。……そら、背中を見せろ」

クレスが少女の服を捲つて後ろ側を見れば、そこには女神ディアナの眷属の証であるカシワの葉の冠と月、弓の紋章が刻まれていた。

「やはり『魅了』の媒介として『神の恩恵』を刻んでいたな。貰うぞ、その血」

例の如く抜き取った神血イコルをクレスはすかさず纏っていた外套を拡げてその上に垂らし、悪派閥イツイルにも使った同属捕捉アプトの呪詛ノグッドを唱える。

じわりと滲むようにして出来上がった簡素な血地図を見やうと艦全体の人員配置を把握しつつ、クレスはこれからの自身の振る舞いを確定させた。

「数は……3万と少しか。連中を一人残らず救い、ついで神を一柱殺すだけと。ここへ来るまでもう十分時間を無駄にした、暇じゃないんだ……さつさと済ませるか」

気怠げな声色によって示される確定づけられた事項に、もはや見守るより他ないカリギユラは自身の手が震えていることに気が付いた。

数多くの矛盾や悪徳を孕んだ^{ローマ}垣塙の支配者として君臨した皇帝でさえ理解の及ばない、^{イレギュラー}盤外の条理。

神々の見せるそれに等しい、下界の常識を易く踏み躪るクレスの『傲慢さ』に彼は覗いてしまった。

——己が主張するまでもなく、その背中に他者が勝手ながら見出してしま^極う称号を。
人はそれを、『英雄』^{怪物}と云う。

【君よ、一を拓く炎熱たれ（アナムネシス・イーリア）】

一発目の超距離^{汝星を穿つ白銀}月光大砲から生まれた潮味混じりの霧が、そろそろと晴れていく。

その内側にいたクレスたちの視界が確保されていく一方で、神ディアナもまたカリギユラの認識阻害魔法の影響から脱したようだ。

再び略奪者^{クレス}を視界に入れた彼女は「今度こそは外しません」と強い神意の光を黄金色の瞳に湛えて、肩から一直線に伸ばした右腕で再び狙いを定める。

その白く滑らかな指先に、命を奪う『狂気』を宿して。

『——《精神汚染》の解呪を確認しました。標的を再捕捉します。《月光距離導^{ルナースサイト}》、弾道補整を開始……計算完了。エネルギーの再充填を開始します。決して逃がしはしません、逃げるというのなら地の果て冥府の奥底まで追いかけて必ずや殺してみせます——すべては、我が愛しきカリギユラのために！』

抑揚の喪失した哀しき天上の調べが、世界に響く。

二度神^{アルカナム}の力が銀光を食して月輪の弦に番えるまで、その間およそ10秒^{リチャージ}。

海に大穴を開けるほどの大破壊をもたらす神の主砲の再装填^{リチャージ}は、下界の論理からして

みればあまりに常識外だった——無論、早過ぎるとの意味で。

並の冒険者にとつてみれば絶句に値し、見慣れた神々からしてみれば『天上の理』持ち出すなよおー、これだから堅物女神様はさあー？ あ、俺たちも巻き添えにするって？ ……フヒヒ、サーセンww」と面白半分ブレイクに非難ブレイクまっしぐらな、神創兵器の平均的『速射』機能。

しかし、ことこの期に及んで——それは融通が利かない『機械的怠慢』だった。「歯を食い縛れ、俺は女として容赦はせん」

『な——!?!』

彼我の距離、およそ200Mメートル。

その長距離を詰めるのに、邪魔な手荷物少女の身体を下ろした本来のクレスの速度は10秒も要しない。

一足。最硬金属オリハルコンの地面が融け焦げる臭いと共に、距離100Mの半分を踏み潰す。

二足。残る半分100Mを、爆ぜる大気の壁と共に突き破る。

『つ、【偽現・月神の聖光弓】、緊急発射を——光量充填不足？ くっ——』

そして三足目。

バリバリバリイッツッ!!! と雷鳴のような衝撃波を伴うクレスの流麗な跳び膝蹴りが、反撃の間に合わなかった女神の整った鼻っ柱に叩き込まれる。

怒る西^{ゼヒューロス}風の咆哮の如き轟音をがなり立て、女神を文字通り足蹴にする物理的不敬。

それをなす術なく正面から受けてしまった^{ディアナ}は、理不尽なまでの勢いで遙か後方へと蹴り飛ばされることと相成った。

「ガッ、アッ、アッ—— ツツツツ!??!?!?!」

「——柔い、同じ神とてわが師^{スカサハ}とは比べ物にならん」

スカサハ直伝、《蚤撥ねの妙技》。

脚の関節を寸分のズレもなく同時に駆動させることで、自身の背丈を超えるものさえ容易く飛び越える脚力を生む奥義。

その武の粋が生み出した威力は神^{エネルギー}ディアナの身体に後方の巨大^{モニュメント}石碑に風穴を開けさせてなお足るを知らず、その御体を《ネモレンシス》外の海面にまで弾き飛ばす。

更には水切り石のように何度も水面に跳ねさせて、彼女を遙か大洋の彼方にまで送り届けるのだった——。

「——がふっ! げふっ! ごほっ! ……神の尊顔を躊躇いなく蹴り砕くとは、なんたる不忠ですか。神意に従うことも知らぬ、下界の恥晒し者……! お前のような人間に、決して我が『計画』を中止させはしません——私は絶対に我が愛を取り戻しましう。我が愛こそが、世界の全てなれば!」

「不忠? 俺は別に、お前に忠義を捧げた記憶はないが……」

クレスはディアナの吹っ飛んで行った先に、少しばかり遅れて海面を駆けることで追いついた。

何のことはない、片足が沈むより先にもう一方を踏み出すだけの《妙技》とも言えない力技だ。

辿り着いた先は一面見渡す限り遮るものが何も無い、水平線を仰ぎ見るだけの新たな戦場^{大海原}だ。

そこで、彼は空中に姿勢を整え直した神ディアナに分析の眼を向ける。

その端麗な顔にはレベル19の蹴撃を見舞ったというのに、傷一つついた様子がない——今も尚彼女の周囲に後光のように噴出してる神の力が自動修復を促しているためだ。

神々を真の意味で屠ろうとするならば、下界に属する攻撃はそも無価値に過ぎない。「この、不義、不誠、不信心、不忠不孝反道徳——神を崇めることを忘れた愚か者。御覧なさい、汝の攻撃は私に通用しませんよ。諦めるのです。膝をつき、泣いて許しを請いなさい。さすれば一瞬の痛みもなく、死の神プルトの下に送り届けて差し上げましょう。……ああ、待っていてください我が愛。ようやくここまで辿り着いたのです。貴方に相応しい身体^{からだ}まで、たった後2割なのですよ？ これだけの数字を詰めるのに、神の力を極限まで抑えてどれほど経ったか——我が愛を邪魔立てする無粋者も、今退け

てみせますからね」

「長いな、話が。更年期か？ 妄想は頭の中だけにしておけ、おかしな目で見られたくなければな」

ディアナの告げた降伏勧告を、クレスは鼻で笑う。

そも、先ほどの蹴りに彼女を殺す意図など毛頭なかった。

彼はただ戦場を《ネモレンシス》から移したかった、それだけだ。

——血地図で把握した《魅了》兵の配置は艦全体に広く散らばっているもので、女神と戦火を交えるのに先んじて一人ずつ避難させるのは面倒だった。

——加えて、下界での神の力アルカナムの行使を底上げアップする『神殿』そのものから彼女を引き剥がすのは必然。

そんな訳で彼にとって色々と不都合の多い巨艦から、神ディアナを別の場所エスコートにご案内さし上げただけなのだ。

故に「被害ダメージがなくて残念でしたね？」などと煽られたところで「で？」と返す他ない。

とことん不遜な態度を崩さないクレスにディアナは眉を吊り上げながら、蹴りで意識を逸らされたことで中断していた月矢の充填を再び始める。

「どこまでも苛立たせてくれますね——その顔、今に恐怖に歪むことになるというのに。座標再々修正、中断中のエネルギー充填を開始——」

「……ここからが本番だな」

自らの手元にも『神殿』内で扱っていた弓を出現させ、ディアナはクレスに牽制の矢を連続して放つ。

しかし彼も、対獣用の単調な射掛け程度にみすみす仕留められはしない。

爪弾くように連射される狩女神の矢は、彼の動きを先読みするかのような巧みな軌道を描いて標的^{クレス}に迫る。

彼が『魅了』下のディアナの眷属に行った「移動先に攻撃を置いておく」程度のことなど造作もないのだぞ、とでも嘲笑うように。

まるで詰将棋のようにクレスの回避先へ放たれる光輝の神矢。

その神意の鏃が作り出す白き檻を、クレスは人体の可動域を無視した動きで潜り抜ける。

「……なるほど。自ら関節を外し、内臓まで動かして重心を操ってみせますか。気味の悪い」

「冒険者なら普通のことだ」

「ですが、そのような軟体類の如き動きでも範囲攻撃は避けられないでしょう？ 先ほどの不命中は不意の錯乱魔法によるもの……本来、神々の攻撃とはそれ則ち必中なのですから」

見上げれば、月光を貯め終えた【偽現・月神の聖光弓】（ディオス・エクリプス・パリスタ）が二射目を繰り出そうとして
いる。

極光が収縮し、一拍の隙間を置いて、神意の下にクレスに吸い込まれるように放たれて――。

「我が愛のために消えなさい——」（ミューティアフォース・アリキア）「汝、星を穿つ白銀」

『隕鉄の剣』＋『ネガ・ファトゥム』——『契約に応えよ、東方の明星よ。我が命に従
い常闇夜を拓け』、『ソード・オブ・ハートウーシャ』！

握り締められた精霊武装（隕鉄の剣）と運命属性（ネガ・ファトゥム）の合わせ技が、降り注ぐ光の中に微細な隙間を穿
つ。

そこへ身を躍らせ、クレスは断罪の光から間一髪で脱出した。

またもや目標を打ち漏らした月よりの御柱は海を深くまで抉り、幾つもの海流の層を
突き抜けて、一瞬だが白砂の底を露出させてみせた。

彼の態度の通り、真つ向から立ち向かえば到底敵わない神創武器（デウスウエボン）の『必殺』であれど、
指先一つほどの一部を破損させて活路を見出すことは出来る。

——ただし、『必死』を『生』に転じたことの代償は決して小さなものでは済まなかつ
た。

「動きが多少おかしいと思えば、義手、それに義足でしたか。その偽物の身体で我が光を

耐えたことは素直に認めてあげましょう。しかし一度は耐えられても、あと何度耐えられるのでしょうか？ ふふっ、ふふふふふ——見るのです、我が愛よ！ 私と貴方の前に立ち塞がるものなど、こうして滅びゆく定めなのです！ ふふふ——あはははははっ！

自身の優勢を示す敵の姿に、ディアナは高笑いを隠さなかった。

あくまでも代替品でしかないクレスの義肢は（彼基準で）そこまで強固なものではなく、神の一撃の余波を受けた段階で半壊していた。

表面の偽装皮膚は溶けたチーズのように焼け落ち、露出した内部機構も悲鳴を訴えるようにバチバチと火花を散らしている。

神の威光を迎え撃てるのも、もってあと二度か三度が限度だろうか。

そしてそれを斬った二つの名剣も、その刃先が僅かに溶融を始めている——いかに『深々層』に適合し得る聖剣と魔剣と言えど、そう何度も『運命』を斬り抜けないだろうことが窺える。

その悲惨な予兆を流し見たクレスは、それでも余裕を崩さなかった。

「なに、十分だ」

「……っ、生意気な！ 下界の人間如きが、こうも神意を軽んずることなど——ああ、気に入りません！ 気に入りません気に入りません気に入らない気に入らない気に入らない気に入らない！」

ない——滅びなさい！ 疾く滅べ！ 死して我が憤懣を慰めなさい下郎！」

女神ディアナは三度、己が腕による牽制を行いつつ、成層圏に浮遊する神創兵器にエネルギーの充填を命じた。

心なしか苛烈さを増した矢雨を《矢除けの妙技》で回避しつつ、彼ははいよいよ先ほど切ろうとしていた『切り札』を出すべく、片目を閉じて己が内側に意識を集中させる。

彼は強く想起する。

背中に負った『神の恩恵』、その内に封じられた『焰』を。

——その臉の裏に、複雑な色彩を湛える『光玉』が揺れ浮かぶ。

その『焰』は、計3つの頑丈な鎖神意によつて縛られていた。

「一つ。これは『救界』^{マキア}に通ずる戦いである」

天空神ウラノスによる封——『救界』^{マキア}に係る事柄で無ければ、この『力』は振るつてはいけな

い。

もしこのまま女神ディアナの狼藉を見逃せば、世界は神アルカナムの力の氾濫により終焉を迎え

よう。

それは神々の悲願を阻害する危機であり、であれば、今この場において暴走する女神を完膚なきまでに滅ぼすことは世界の正義となる。

「一つ、これは『人』としての戦いである」

知恵と炎の神による封——この力を振るう時には、『想い』がなくてはならない。

かの女神は冷徹な使命を以て敷かれる天上の『法』ではなく、多少危うかろうと前へ進む下界の滾る『意志』こそを求めた。

——女神の暴走に伴うムーの二の舞が起きれば、また迷宮攻略の邪魔となる。

その前に禍根も遺恨も諸共に消し飛ばさんと、クレスは己が熱意を燃やす。

「は、下らない——なにを企もうと無駄なことです！ 下界の者がいくら抗おうが、我々の導き示す運命の流れから逃れること能わず……充填完了、主砲発射。

【汝、星を穿つ白銀】——」

「ソード・オブ・ハートウーシャ」ツ！」

三度放たれた宙からの砲撃を前と同じく斬り抜けたつ、クレスは『恩恵』に意識を向け続ける——その内側から今にも溢れようとする『力』の制御を離すまいと。

「一つ、これは『誇り』に背かぬ戦いである」

最後に残る、混沌と原初の神による封——それは単純に、『力』を振るう行為そのものを嘘偽りなく主神に告げられるか否かを彼に問う。

「たとえ間違つていても構わない、それが君の、恥じ入ることのない本心に由来するものであればね」……かつて聞いた主神の言葉が、幻か、クレスの耳元に響く。

それに「当然だ」と彼が心の中で返した時。

封印が、解かれる。

「——神意開放。『神の恩恵』より第一魔法欄へ。偽装解除。封印溶融。……
オラクル・オーブン フアルナ マジック・スロット コード・レット シール・ロスト
ノール・セツト 真名発火」

三神による嚴重な施錠を外した今、クレスの『恩恵』が——燃える。

彼の背中から業火が怒濤の如く噴き出し、一帯の海面を煌々と照らしだす。

その様子に女神ディアナは何故か、不吉な予感を抱かされた。

まるで、カリギュラの後を継いだ皇帝ネロの治世に愛を焼いた火炎旋風のような——。

「……なんです、なんなのですか、それは——まさか!？」

遅れて『焰』の正体を理解した彼女は、感情を超越したはずのその顔に大きな驚愕を浮かべた。

「その『焰』は……何故、それが下界の人間の手に——!？」

瞳目を禁じ得なかった彼女の前で、今にも荒れ狂いそうな『焰』の手綱を握るクレスはその額に珍しく脂汗を滲ませていた。

迷宮第200層由来の呪詛すら平然として抱え込んでいた彼でさえ、制御に苦労する

『じゃじゃ馬』。

——『恩恵』の内側から漏れ出づるその『焰』が、ついには偽りの魔法名を灼き剥が

して。

『焰』は彼の装着していた壊れかけの義肢を焼き落とし、代わりの二肢として形を成す。

そうして炎によって形作られた彼の新たな右腕には、今や空欄となつた第一魔法の代わりに『光焰を先端に灯す赤金色の砲塔』が握られていた——否。

これこそは砲ではなく『炬火台』。

採火したオリンピアの『聖火』を灯すための『薪束』。

「拘束、完全解除……疑似神造兵器、【デミ・デウスウエボントリジンタマリア・トーチ智炎女神の炬火台】」

その先端に坐す『焰』こそは、女神プロメテウスの名の下にクレスが『炎鷲の嘴』からくすねることを許された『力』。

神さえ殺し得る、まごうことなき『天上界の火』である。

「何故、何故何故何故何故何故何故——理解不能です。まさか下界の命如きが、その『焰』を制御できるはずが……！」

「さてな」

ディアナの無意識から出た問いかけを短く打ち捨て、クレスは『焰』の制御に集中する。

——どうせ、今から死にゆく者に知らせたところで意味はないのだから。

これまでの余裕ぶった仮面がはがれ、およそカリギュラの言う通り「正気を失った」とでもいふべき彼女の本来の有様をよそに、クレスは厳かに口を開いた。

元より彼女を弑することは彼の中で決定づけられていたのだから、そこに同情も憐憫もなく、彼はただ面倒ごとを片付けることにのみ集中する。

「――『不滅の光焰、天に叛きし叡智の女神よ。我が人志を此処にくべる』」

これは詠唱であつて、詠唱にあらず。

この『焰』は彼の魔法でなくて、本来人の手に余るべき『奇跡』。

そこに『理想』をくべる祝詞を以て――クレスとしてはこの表現は誠に遺憾なのだが――人の卸しうる『英雄譚』に降ろす。

「運命よ、汝の真名は虚構はいつと知れ。絶望は彼方にこそ燃え失せよ。悲劇は人知れず無垢の装幀へと還る」……」

古代の哲学者が火に万物の源を見出したように、火という『力』は何にでもなり得る。時に破壊を呼び、時に命を育み、時に嘆きを与え、時に安らぎを誘う。

全ては持ち得た者の『想い』次第。

ならばクレスの思う『焰』とは……即ち、『人の意志の具現』である。

「我は天を踏む者。地を抜く者。即ち人理、進む者」

そこにいかなる障害が立ち塞がろうと、諦めが悪く、愚直ながら先に進み続ける者。

諭されようと、嗤われようと、責められようととも、「邪魔だ、退け」と言つて、不可能をいずれ可能へと転じる『進化』の可能性。

その身体は小さく儂くとも、精神は宇宙より広く、天上の星々より強く輝けるのだから。

だからこそ彼は、神々の定めた身の丈を超えて歩むことを是とする『意志』を以て、『天上の火』の欠片を振るう——「色ボケも迷宮に陥りたい」と。

「破滅の烈火よ、我に下れ。共に、創造の燎原をこの星に拓げよう——」

そこでクレスは一度、言葉を切つた。

——本来ならば身の丈を超える『焰』を彼が操れるのは、ひとえに神プロメテウスが認めただからだ。

その為に払つた採火の代償は決して安いものではない。

その一つとして、彼は今一度、彼女お手製の仮面を被らなければならない。

——こんなもの、第一俺には似合わんだろうが。

内心そんな思いを吐き捨てながら、彼は内心渦巻く嫌悪と共に最後の一節を告げた。

「——『我』、『英雄』の冠を頂く者なれば」

天空の神、知恵の神、混初の神に見初められた者の一人として、ここに『救界』の助を為す。

今回の件はただ、運悪く地上に帰還した彼と少女の夫婦が邂逅しただけ……その上で、彼が攻略に注力できない事情があった……それらの偶然が重なっていなければ、彼は女神の悪行を知った所で放置していただろう。

その不運に同情を捧いで、それからもう少しだけ「念のために」と暫く照射した後、本当に終わったことを確信してから、彼はようやく『焰』を終息させた。

「終わったか。まったく、まさかこんなことになるとはな……」

そうボヤきつつ、クレスは己が身体に起きた異変を見やつた。

「……またか。だが、今回は前ほどでもない」

これまで外見上25歳程度を保っていたクレスの身体は、およそ2、3歳ほど若返っていた。

加えて、『レヴィアタン』の呪詛により失われ蝕まれていたはずの右腕と左脚が、健全な形で復活を遂げている。

それが、時に『不死』をも意味するところの天上界の『焰』を扱ったことの『祝福』代償だった。

「面倒だが、仕方ない……また感覚を慣らしていけないとな」

騒がしい光が消え、夜の海には静寂が戻る。

空に輝く星々の瞬きが水面に乱反射して、見る者の心を揺さぶる風靡な光景を生んで

いた。

その中に独り立つクレスの瞳はしかし、その自然の神秘とはまったく別のところに向いていた。

「戻るか——俺たちの迷宮ダレンジョンに」

その前にやらなければならぬ諸々の雑務（ギルドへの報告、神々への言い訳等）が残っていることを思い出して、クレスは今度こそ大きく顔を歪めた。

エピソードかくして筆は置かれ、名もなき英雄は次の冒険へ向かう

——数日後、ギルドの一室にて。

依頼者である夫婦に少女を引き渡したクレスは、彼らにしつこいほど何度も頭を下げられていた。

「ありがとうございますっ……ありがとうございますっ……い……ありがとうございますっ……い……ありがとうございますっ……い……」

「ユリア、よく無事で……い……うう、本当にありがとうございますっ……い……ああ、ユリアっ……ありがとうございます、ございました……っ！」

父親は立ち上がって深く腰を折り、母親はユリアを強く抱きしめ、両者ともに感謝の言葉を繰り返す。

クレスが壁に備え付けられていた時計の針を見れば、既に彼らがこのようになって三時間近くが経過しようとしている。

……ぶっちゃけ、彼はとうにこの状況に飽いていた。

「あー、感謝は分かったが、それでだな……」

「ありがとうございますっ……！！　ありがとうございますっ……！！」

「ユリアっ……！！　ユリアっ……！！」

「……（気持ちには理解できるが、せめてこっちの話を聞いてくれないものか？）」

もつとも、それも無理のない話。

英雄の都と謳われるオラリオは、その反面、底知れぬ闇と陰謀が渦巻く地でもある。

その住人として、夫婦は「消えた娘の安否を天秤にかけた場合、当然悪い方に傾くだろう」と内心覚悟を決めていた。

死体だけでも帰ってくれば御の字、最悪訃報一つだけを伝えられる可能性も十分に考えられた。

だというのに娘は五体満足で無事に帰ってきたのだ。

それも、目に見えるような後遺症を抱えた様子もなく。

これを喜ばない親などいるはずもなく、そういう訳で、彼らが事件を解決に導いた立役者クレスに尽きぬ感謝を捧げようとするのも無理はないことだった。

「この度は本当に、なんと申し上げれば良いか……娘を怪我無く連れて帰ってきてくださり、誠にありがとうございます……！！」

「実は、夫とも何度も話していて……もしかしたら、帰ってこられないこともあるかもし

れないと。だけど、こうしてユリアはまた再び私たちの所に戻ってきてくれました……それが本当に嬉しくて……っ！」

「……ああ」

「しかも、報酬は要らないとまで仰つて！ その、本当によろしいのですか？」

「別に気にすることもない。そんなことよりも、貴方たちはその子供のことを気にかけてやれ」

クレスが夫婦に提示していた報酬——ローマーナにて祀られていた『ウイスクム聖金樹』の破片。

しかし、もはやそれは彼にとつて無用なものと成り下がっていた。

というのも彼は此度の事件の成果として、舞台となつた《ネモレンシス》そのものを大きな損傷もなく接収していたのだ。

そこには古代ムーの失われし秘術ロストテクノロジーが数多く搭載されていると共に、女神ディアナの手で植え育てられ、半神殿化した『ウイスクム聖金樹』が聳え立っている。

今更彼らの家宝を傷つけてまで、そのちっぽけな《破片》を手に入れる必要もない——それだけのことなのだが、そんな事情を知る由もない夫婦はひたすらに無欲そうに見えるクレスの態度に感銘を受けるばかりだった。

つまりこうして話が長引いているのは、偏にクレス自身のせいには他ならないのである。

それを一応理解している彼は、夫婦がこちらに意識を傾けたこの隙に話を終わらせるべく畳みかける。

「それでだ。もし今後しばらくの間、娘に変な様子が見られた場合……例えばだが、急にぼーっと宙を見つめるようなことが数度繰り返された時などは、ディアンケヒト・ファミリアを頼ると良い。あの老神は貪欲だが、俺からの紹介だとさえ言えば不当な診察料を請求されることもなからう」

ついでとばかりに、クレスはここで師たる医神ディアンケヒトを推薦しておく。

女神からの《魅了》の後遺症など早々見られる症例ではなく、きつとかの神は「また面倒なものを寄こしおって！」などと騒ぎながらも興奮するに違いなかった。

こうしてささやかな恩を積み重ねておくことで、ここぞと言う時に返して貰えるようにしておく——強欲な師に相応しい、弟子としての役目だった。

「分かりました。その時には是非、ディアンケヒト様を頼らせて頂きます！」

「最後まできちんとケアしてくださいるなんて……本当にありがとうございます、冒険者様……！」

そこへ、母親の胸元から顔を出した少女が言葉を挟む。

「……ねーパパ、いつまでこの人とお話しているの？ 私、お腹がすいたよー！ なんだかね、ママのピッツアがすつごく食べたいのー！ トウガラシペペロナオイルをたっぷり塗った、

ママ特性のピリ辛ピツア！」

「こらユリア！ 恩人の前ではしたないわよ！ いい、この方はね……！」

「良い、この子は何も知らない……そちらの方が貴方たちにとつても悪くないだろう。そう怒つてやるな」

呑気な少女のことを叱ろうとする母親を、クレスは「これ以上話が長引いてはたまらない」と制止する。

——そう、幸いにして彼女の記憶は《魅了》されていた間の分だけすつぽりと抜け落ちていた。

だが、「それで良かったのだ」とクレスは思う。

見知らぬ地で、見知らぬ神の下で。

一人寂しく、操り人形の如く働かされていた……その影響がこれからの少女の人格形成に響かない方が、冒険者でもなんでもない彼女には相応しい。

自らその記憶を取り戻すか、もしくは向き合おうとするのでもないのなら。

そのまま忘れてくれた方が彼女の家族にとつても、（これ以上の面倒を嫌う）クレスにとつてもありがたいから。

「そら、もう行くんだ。娘も久々の我が家が待ち焦がれて仕方がないようだし、それに、俺もいい加減感謝は聞き飽きた」

「はい……その、本当につ、ありがとうございます！ ……ああ、もし今後この街で家を建てるようなことがあれば是非私たちを頼ってください。その時は全力を尽くして、立派な館を建てさせていただきますから！」

「私からも重ね重ね、ありがとうございます！」

「？ ……ありがとうございます——！」

よく分からないままに両親に倣って頭を下げる娘と手を繋いで、ようやく彼らは去っていった。

大事な一人娘の誘拐事件、それが無事解決したことに大いに安堵し、感謝する普通の両親。

彼らは何も知らない。

事件の裏側に潜んでいた数百年来の女神の『計画』も。

齡十にも満たない娘ただ一人を取り返すためだけに、神がひとり一柱弑されたことも。

——そして実の所、彼らの依頼した冒険者の真名さえも。

『娘が無事帰ってきた事実』のみを以て、彼ら一家は日常に帰っていくのだった——。

……家族を見送り、クレス一人がソファアに深く腰かけるだけになった部屋の中で。

姿かたちのないもう一つの声が、彼の懐の中から響く。

『……良い娘だ。我が姪に似て、きつと花や蝶のように美しく育つことだろう』

「そうか」

その声を聴いたクレスは懐からこぶし大ほどの一つの宝玉を取り出した。

鏡面状に磨かれた艶やかな朱色の『珠』——それこそはロマーナの至宝の一つ。

『魔力を込めることでより大いなる魔力を産み出す』効果の魔道具マジック・アイテム、『赤竜機心』ローマン・リアクター。

またそれは、少女ユリアの身体から離れた古の皇帝カリギュラの魂が新たに宿る先として選んだ仮の身体でもあった。

朱珠の表面をピカピカと光らせながら、カリギュラは反響エコーがかかった声でクレスと会話を話す。

『オレもあのような子孫の顔が見れてよかった。国としてのロマーナは潰えど、その脈流は確かに受け継がれているのだな』

「盛者必衰、されど全てが泡沫の夢と消えるわけではない。人が降り積もる歴史の塵の上に立っていることは、人が人としてある上で必然の事象だからな」

『新たなロマーナの威光が芽吹くのも、古き良きロマーナがあればこそ。……オレという過去が大事に過ぎた我が女神には、その人として当然の移ろいがどうしても受け入れられなかった。オレが、そして自らが新たな後継者継者の立つ大地過去となることが認められな

かった。……悲しいことだが、これが有限を生きるオレたちと、悠久を生きる神の感性の違いというやつだったのかもしれないな』

どこか達観したような声で語る朱色の宝玉を手の中で転がしながら、クレスはそこに宿ったカリギュラの魂を見つめつつ問う。

「それで、お前は成仏しないのか？ 女神ディアナは依頼通り殺した、もう現世に未練もなからう。冥界に行く路が分からなくなったのなら、適当な冥府の神をツテで見繕わせるくらいはしてもいいが？ 昔一度死んで以降、奴らの使徒はそれなりの頻度で俺の前に現れる」

『……いや。本来ならばオレの魂もまた神プルートーの御手に委ねられるのが当然なのだろうが、もう少し我儘を通したい。つまり、オレはこの宝玉の中で眠りにつこうと思う。我が女神が再び、目を覚まされるまでな』

その選択に、クレスは彼の覚悟を確認する。

「……神が蘇るまでには途方もない時間がかかると聞く。それまで待つつもりなのか？」

『ああ。オレはいつまでも待とう、我が女神のことを。それがあの入らずネモレンシスの森から彼女を連れだしたオレの負うべき責任だ。それに……』

刹那、クレスは唐突に幻視した。

——深い懐古の念を込めたカリギユラの、言の葉の向こう側に佇むとある美しき光景を。

かつて、森の神殿でしんしんと降り注ぐ月光と清流の奏でるせせらぎを友としながら、少数の信者に囲まれてひっそりと暮らしていた、世間知らずな女神ディアナ。

彼女に一目ぼれしたカリギユラがその手を取って広い世界へと連れ出した——その時の一幕を。

『私は月。夜の静けさに、愛し子らの安眠を見守る者。それだけが全て。それだけで良いのです……』

『ハ、それだけではつまらんだろう？ 共に来い、女神よ。そして我が不夜のロマーナを見よ。たとえアポロの暎が落ちようと、万民は変わらず呑み、騒ぎ、熱く議論を交わす。そして愛を言祝ぐのだ。オレは貴女にも愛を贈りたい。闇に輝く大輪の白百合よ、オレはなんとしてでも貴女を逃さぬ。何故ならば、御身は既にオレの心を奪ってしまったのだから！』

きつとその記憶を共に振り返ったのであろうカリギユラは、最後にこう付け加えた。

『それが、オレの夫としての『愛』だからな』

「……なるほどな。まあ、そうしたければそうするが良い。俺の邪魔にさえならなければ、どうでも良い」

その淡白な声色とは裏腹に、万感籠ったカリギユラの声を聴いたクレスは思う。

——やはり『愛』とは他の感情とは一線を画すものだ、と。

我が為にでなく、誰が為になされる感情。

人が人であるが故に持つ、他者を尊ぶ在り方の最も強い表出。

それが力による蹂躪しか知らないモンスターに弱き人類が打ち克てた最大の要因の一つであると、彼は歴史の傍観者として識っている。

……なればこそ。

カリギユラは本当に、ディアナの復活まで待ち続けられるだろうと彼は確信した。

『では暫しの別れだ。感謝する、古代の英雄よ。我が女神を狂気の檻から解き放つてくれて……』

それつきり、宝玉の明かりは明滅を止めて沈黙した。

カリギユラの魂がその内奥で深い眠りについたからだろう。

彼はこれから永い時を待つことになるのだ——それこそ、クレスのこれまでの人生が時計の秒針の僅かな傾きに感じられるほどの長い年月を。

「別に、感謝されるほどのことをした覚えはないんだがな……」

無反応となった『赤竜機心』ロマン・リアクターを再び懐にしまい込み、クレスは部屋を出る。

鍵を近くを偶々通りがかった獣人の職員に渡し、彼はバベルの階下に降りて、ウラノ

スに今回の一件についての報告を済ませ、それからカオスのいるファミリアの拠点『時空の狭間』に帰った。

眷属たる彼の接近を感じ取っていたのか、かの女神は当然のように外で待ち構えていた。

しかも、腕を組んで仁王立ちしている——どうやら怒っているようだった。

「ただいま、カオス」

「おかえり、クレス。——じゃ、なくって！ なーんで君は『智炎女神の炬火台』を開放してるのかな!? 地上に戻ってきたことは知ってたけれど、まさか私のことを放って遠くへ行って、それでまた何かやらかして帰ってきたんだねエ！ どうせこないだの神意の開放に関わってたんだろう！ これだから君って眷属は……まあ良いよ、事後承諾の代わりに何があったのか余さず教えること！ いいね?!」

詰め寄るなり、怒涛のように言葉をぶちまけるカオス。

そこに余すことのない眷属への愛が含まれていることは疑いようがない。

変わらない主神の様子に「よく舌を噛まず早口に言えるものだ」と感心する一方、クレスはふと考える。

——もし彼女が彼を愛するあまり世界を敵に回そうとした場合、俺はどうするのだろう？

「……（愚問か）」

彼の中での判断基準答えは既に決まっている。

それが自らのためになるなら放置知ったことかする。

だが、最終的に己の邪魔をしようと企んだのであれば——。

その時は、長年の恩を受けた彼女でさえ彼は手にかけるに違いない。

「どうしたんだい、なんだか怖い目をしていているけれど……」

彼女を見るクレスの瞳に宿った、一瞬の剣呑な気配。

それを逃すことなく察知したのは、流石主神の眼といたところか。

嘘偽りを逃がさない彼女の美しき瞳に向き合ったクレスは、いつもの不愛想な無表情

から頬を僅かばかり吊り上げて、小さく笑いながら首を振った。

「なんてことはない、下らない考え事さ。そら、飯でも食べながら気になっている今回の

一件について話そう。なにせ久々の神殺しだ。それなりの土産話であることは保証し

よう……」

——こうして、知られざる英雄譚がまた一つ筆を置かれた。

それは歴史盤外編の裏側の一頁、どこにでも散逸している『書き手知らずの英雄譚』の一つ。

それらは後の面倒名を嫌い、自ら名を語らない主人公クレスだけが真実を知る歴史エピソードの断章。

ただ、事情を知る一部の物好き神々は、その幾つもの短編英雄譚を一つの本として綴り、表紙に題名を与えた——『とある名無しの英雄譚』と。

即ち、クレスの第二魔法。

フルランドやヴァルトシュテインのように確たる主人公としての名を表の歴史に残していない、されど広大な歴史の裏に細々と点在することが数々の歴史家によって確実視されている、とある未観測の英雄の仮の名。

それこそが彼の持つ唯一の自己の魔法、「シュレディンガー」の意味するところである。

幕間：それは希望が実る霊峰の巡礼

求めるのなら、探すが良い。

この世に数ある霊峰おっばいの中から、最も自分に相応しい希望おんなを――。



旅を、していた。

古ぼけた焦げ茶色の外套と幾つかの小物に身を包み、人生の最大目的たる迷宮ダンジョンを離れ、クレスはひたすらに長距離を移動していた。

足元はろくに整備もされていない、ただ人の足によつてのみ踏み固められた凸凹の土路。

周囲には見渡す限りの青々とした麦穂が風の誘いに波打っていて、それを狙う小鳥どもがしきりに宙を跳び回っては鳴き叫んでいる。

「……にはなにもない、だけど全てが揃っている」……なんて小恥ずかしくなるフレー

ズが似合うような、そんな、どこか牧歌的な春の光景。

その中を歩いていた彼は、己の脚の向かう先に一つの小さな人影を認めた。

「アー、少し良いか？ この先に村があると聞いたのだが、君はその村の——」

「こんにちは、旅のお兄さん！ ところで好きなおっぱいはなんですか!!」

「——ふむ」

どことなく見覚えのある白髪の子供が出合い頭に発した、衝撃的な問い。

相手によつては「なんだこのクソ生意気なガキは」とも取られるような唐突な問いかけに、しかしクレスの目は正しく、その後ろ育てのバカ親の顔を知らずにいたにいる背景を見抜いていた。

思い浮かぶのは——口元に逞しい髭を蓄えた、老骨だが屈強な体をしている、性に関してかなり奔放であることが特に定評な、自ら口説いた妻をほつたらかしにして他の女に手を出しては「前が見えねエ」となるまでボコボコに躡シバかれてられているばかりの、いっそ清々しくなるほどの好々爺ス。

それが少年の後ろで、妙に輝かしい笑顔でサムズアップしている……そんな気がして。

「とりあえずお前にその馬鹿な挨拶を教えた爺はどこだ」

クレスは確信した。

間違いない今回の旅の目的が——あの愚かしい浮気雷爺ゼウ爺が、少年の村にすることを。

同時に決めた。

先ほどふと幻想した爺神のニヤケ面に妙に腹が立ったので、とりあえず後で罰として妻に報告してやろうと。

なお、罰は既に執行されていた。

「お、お爺ちゃーんっ?!?!」

家の床板をぶち抜いて、その中に上半身が埋められた所謂犬神家状態。

帰るなり、そんな情けない姿を晒していた育ての老神の姿を見て、少年は慌ててその側に駆け寄った。

その理想的な孫（と耄碌した祖父）の様子を家の玄関先に立たされたまま傍観していたクレスに、その惨状を為したこの家の住人が振り返る。

「そんな変態なぞ放っておけベル。それよりも客が来たのだろう、茶を出す準備を——誰かと思えば御身か」

「久しいなアルフィア。地上で名前が聞こえないと思えば、こんな僻地にいるとは」

彼が声をかけた、どこか幽世的な雰囲気を漂わせる女性こそはアルフィア。

かつて【静寂】の名を冠し、オラリオに大いなる英雄譚を刻み、そして終には闇の歴

史を齋さんとした女傑である。

暗黒時代の終わりを経て、主神の下で都合二度のレベルアップを果たしたはずの彼女が何故このような安穩とした場所に腰を落ち着けているのか。

じろりとどこか暗い色合いを含めたクレスの視線に、彼女は肩を竦めた。

「ああ……その健気な子が私の甥でな。親代わりの育て方が余りにも悪いもので、仕方なくここに留まっている。決して怠けているわけではない。それで、御身こそどうしてここに？」

「その神血を買うためだ。定期的に取引している。——さて、いつまでそうしている」
 クレスは床に突き刺さった養爺を引き抜こうと懸命に頑張っていた少年をどかして、見えているゼウスの足をむんずと掴む。

そしてずぼっ!! と乱雑に引き抜いた。

もとより超絶残酷破壊衝動女と言われた妻の折檻に耐え得る身体の持ち主である以上、そこまで労わってやるつもりもなかった。

「あ痛っ!! なんじゃ、もつと丁寧に——つてお主か」

「ああ。変わりがないようにで安心したぞゼウス。顔を合わせる都度に最低評価を更新してくれる、その情けない姿に安心したよ」

「毎度思うケドお主ワシに辛辣過ぎない? ……それよりも、いつものじゃな?」

「ああ。代金は此処に置いておく」

度し難い変態でも神峰オリュンポスの最高神に変わりはなく、クレスはその神血イコルには相応の価値を認めている。

その対価に相応しいだけの貨幣が詰まった袋を近くにあった机に置いて——中身は現在のオラリオで第一線級と評されるファミリアのおよそ五年分の予算に匹敵する——近くの椅子に腰かけた彼は、アルフィアの甥だという少年が持ってきた茶を貰いながら話しかける。

「ありがとう。……しかし、まさかあの老神が直に子育てを行うとはな。下界こちちに降りてくる前はよく無責任に女を孕ませてはほったらかしにしていたと聞いたが、驚かされたぞ。正直今からでも神へらに任せた方が良いと思うが」

「それは私も同感だな。とかくこれはベルの教育に悪い」

「嫌じゃ！ こんなに可愛い孫を引き渡すなぞ例え天地が引き裂かれようと儂は断固抵抗するぞい！ そう、KO☆BU☆SHI☆DE!」

「お前が夫婦喧嘩ガチンコでへらに勝てるか？ 無理だろう」

「無理だな。十中八九我が主神に分がある、賭けてもいい」

「ワシつてばホントどんだけ信用がないの!？」

そりやそうだろ、とクレスはここで一つ爆弾を投下する。

隣に、というより何故かもう少し彼に近い場所に陣取ったアルフィアの耳に聞こえるように。

「なにせ、子供に公の場で女の乳の好みを問うように育てるくらいだからな？」

「——ほう？」

「あ、いやそれは……ぎやびいつ?!」

アルフィア、迫真の福音真拳!

本日二度目のそれは一切合切反論を許すことなく、またもやゼウスを床下に沈ませた。

「お義母さんっ?!」

「お前もだべル」

「ぎやふんっ?!」

ゼウスに向けられたものと比べて幾分か手加減された（それでも痛いことには変わらない）ゴスペルパンチが、ベルと呼ばれた少年の頭を正確に捉えた。

あまりの痛さに涙ぐむ少年は、思わず余計な一言を漏らしてしまう。

「ひどいです！ お爺ちゃんが、「最近流行の都会での挨拶はこうだ！」って言ったのに……」

「少なくとも俺の知る都会オラリオでそんな戯けた挨拶が流行った記憶は一度もないが」

「やはり殺しておくべきか」

「殺しちやダメですよ!」

薄く開いた瞼から殺意を覗かせるアルフィアに、それでもベルは義祖父を庇おうとする。

その必死さは少年の愛らしい顔立ちも相まって健気なものに見えた。

——親の愛情は子に表れる、と言う。

少なくともこの様子を見る限り、幾分か……まあまあ……恐らく、それなりに……真つ当な愛情をゼウスはこの子に与えていたのだろうと推し量れる。

それを見て、アルフィアは仕方なしと振り上げた拳を下げるのだった。

「……仕方ない、今日の所はこれくらいにしてやろう」

「おい、凄いい音が聞こえたが何かあったのか!? ……ああ、いつものか」

ひよこっ、とたった今農作業から帰ってきたらしい土塗れの男が顔を出す。

クレスはその顔にも見覚えがあった。

少し前に目の前のアルフィアと共にオラリオで暴れようとして、そして何の因果か、ズタボロになって満足げな表情で逝きかけていた所をサラが連れ帰ってきていたザルドという名の男である。

こちらにもアルフィアと同じように、サラ、s ブートキャンプ——もとい『フアルナ神の恩恵』任

せに陸^{ベヒーモス}の魔獣のフルコースを四六時中彼女から食わされた挙句、なんやかんやでかの終末の獣の毒を克服させられ改心したという経歴を持つゼウス・ファミリアの冒険者だ。

全て件の魔獣の肉で構成された満漢全席を前に「食うのじゃ」と言われ顔を青褪めさせていた光景がやけにクレスの印象に残っている。

ついとばかりに分不相応な『深々層』の肉を食らって腹を下していたことも彼の記憶に残っていた理由の一つであるが、それはさておき。閑話休題。

「で、今回はなんでこうなっちゃまったんだ？」

「かくかくしかじか、という訳だ」

「……あー、そりゃあ確かにお前の逆鱗に触れるのも無理はない。——ちなみにベル、俺は爆乳が良いぞ。いっそこっちの息が出来なくなるくらいの巨大な乳はそりゃあもう平らげ甲斐があつてだな、なおかつ中身がお淑やかであれば猶更……」

「死ね」^{ゴスベル}

何故かキメ顔でそう言ったザルドは——やはりゼウス・ファミリアの恩恵血は争えないらしい——アルフィアの福音真拳ゴスベルパンチで空の星となった。

なんで今この話を聞いてわざわざそれを口に出せるのか、クレスにはその頭が理解できなかつた。

——主神に倣って、頭上ではなく下で物事を考えているからだろうか？

「おじさーん!？」

思わずザルドの消えていった方向へ手を伸ばすベル。

しかし、さほど慌てて探しに行こうとするほどでもないようだった。

どうやらこれがここでの日常的なやり取りらしい。

「……邪魔をした。そろそろ帰るとしよう」

これ以上付き合うのも馬鹿臭くなつたので、クレスはいい加減帰ろうと考えた。

いつの間にか今度は自力で床から這い出していたゼウスを睨みつけ、彼は取引の対価を求める。

「で、イコル肝心の神血を早く出せ。金はもう渡したぞ」

「ふっふっふ……お主だけ逃げようつたつてそうはいかん！ 答えよクレス！ お主の乳の好みはなんじゃ！ ——「ゴスベルくたばれ」——おぐうっ!？」

最後と言つたな、あれは嘘だ。

アルフィアのゴスベルパンチ福音真拳で三度沈むゼウス。

しかし何度痛めつけられても女湯の覗きを止めなかつた時のゴキブリのような生命力をいかになく發揮して、すぐさま復活して拳句しつこくクレスに詰め寄ってくる。

「——巨乳か!?! 貧乳か!?! ペったんか!?! 爆乳か!?! 美乳か、もしくは奇乳の類か!?!」

答えよ！ さもなくば今回の取引は無しじゃあ！

「馬鹿か？」

まったく意味のない駆け引きを仕掛けようとしてくるゼウスに、クレスは呆れるばかりであった。

そも、金は既に渡したのだ。

しれつと机に置いた貨幣の袋は回収されており、ゼウスが大事そうに胸元に抱えている。

だというのに品物の受け渡しを拒んで、変な追加報酬を要求してくるとは何事か。

「そちらがそう来るなら、俺としても容赦はせん」

まともに売買の契約を履行しようとしめない相手に、こうなればいつそ鋼鉄アイアンメイデンの処女よりしく縛って殴って直接血を絞ろうかともクレスは考えたのだが……

「……………」

なぜかそこには、目をキラキラと期待に輝かせてこちらを見てくる少年ベの姿があった。

——そこに、何故か昔見た道化道化の顔が重なって。

「そうだな……………」

それは、今は昔。

古の王都ラクリオスで刹那行った、交流。

当時、『神の恩恵』^{フアルナ}に依らない原始魔法をとあるエルフの吟遊詩人から教わっている最中に声をかけてきた、やけに馴れ馴れしい白髪の男にもクレスは同じ問いをされたことがあった。

珍しく面倒臭さよりも懐かしさが勝った彼は、一息置いて、当時の情景を思い描きながら同じように口を開く。

あの時は、なんと答えたのだったか、そう——。

「——そも、一つの乳に拘る方がおかしな話だろう。全ての乳には個性があり、それはその女の持つ他の要素と掛け合わせることで様々な面を見せ得る。真に平らかなる乳も、天を貫かんばかりに聳え立つ巨峰も、中身が伴えばこそ如何様にも花開く。大事なものは、そこを見極めることだ」

「誤魔化すでない！——もっと欲望に素直に、正直に語れい！——」^{ゴスベル デユオ}「福音・二重奏！」——
「あべしっ！」

単純計算で二乗の威力になったアルフィアのパンチで、ゼウスはザルドの後を追うように吹っ飛んでいった。

残されたベルに、「それはそれとして」と前置きしてからクレスは続きを説いた。

「俺の好みとしては、慎ましやかな乳が良い。大きくはなく、かといって全くの平坦ではない程度で、細身でしなやかな体に控えめに主張するくらいがちょうど良い」

「御身も何を言っている！ 福音・四重奏——なう！」

いつの間にかザルド・ゼウスと同じことを話し始めたクレスに、アルフィアは「御身もか」と呆れた顔で四乗轟音福音真拳を向ける！

「しかし、クレスには、効果がないようだ……」

「ちいつ、やはりか！」

「——ええっ!?」

祖父もおじさんも何度も討ち取ってきたお義母さんの拳骨が効かない！

自分もよく知る所の一撃を、防御すらすることなく受け止めたクレスの姿に、ベルは口をあぐりと開けることしか出来なかった。

これまでアルフィアの天下しか知らなかった無知な少年の耳に、先祖からの最後の言葉が厳かに響く……。

「初めは手の平に収まる程度の小さな蕾……それを春の日差しのように優しく慈しみ、時に凍てつく冬の如く激しく揉みしだき、愛を注ぎながらじつくりと育てる……そうすれば、いずれ己にとって最も良い乳へと花開いてくれる。覚えておけ、ベル。女の乳は恋を知り、愛を注ぐことで大きくなるのだとな。初めから完成されたことを前提に語るなどつまらん」

アルフィアの福音真拳を受けてなお堂々たる威容で語るクレスに、じつと聞き入って

いたべル。

その頭をぼんぼんと軽く叩いて、彼は隣の、何故か今度は自らの胸元を見つめているアルフィアに目をやりつつ少年に彼なりの答えを与えた。

「世を知れ、べル。そうすればいつかはお前にも、お前だけの希望おっばいが見つかるだろう。……ただし、あまり母親アルフィアに負担をかけてやるな」

それで、終わり。

先ほどアルフィアが殴りつけた際にゼウスが落とした神血イコル入りの瓶をさりげなく回収していたクレスは「用は済んだ」とそれを丁重に懐にしまい込んで、寂れた村を後にしたのだった……。



懐かしい記憶が、少年の脳裏を駆け巡る。

——どうして今、それを思い出したんだろう？

分からないままに、少年は今日もオラリオの風を肩で切つて、迷宮ダンジョンへ向かう。

『お前もいつか、望むのならば……』

そう言い残して先に家を発った家族の後を追いかけて。

『ベル、ハーレムを作れい！ ワシの夢は、お前に託したぞ！』
崖下に落ちて死んでしまった^{妻から雲隠れした}祖父の理想を想って。

—— 全ての答えがそこに待っているのだと、なんとなしにそう思っ

『双花魔人譚（モンストルム・オラトリア）』編

絶対至死領域ドウアト・アヌビウム

——深い紫紺の炎に燃ゆる大地。

その場は身が芯まで凍えるほどに寒く、『生』と隔絶された冷気に満ちていた。生けとし生ける者の存在を許さぬ絶対零度の領域。

満ち満ちる冥府の大气が、転移によりこの階層に訪れたクレスの体温を瞬く間に収奪し――、

「っ——!？」

驚きに目を見張るも、時すでに遅く。

クレスの足から、地面に立つ感覚が奪われる。

重度の酩酊に陥ったかのような、悪寒伴う謎の浮遊感に襲われる。

そのまま彼は……薄れゆく視界の奥に広がる、遠い闇の向こう側へと意識を手放させられた。

その感覚を、彼は知っていた。

長い冒険の旅路においても片手の指で数えるほどしか味わったことのない、身も心も闇水の彼方に奪われるような感覚。

即ち、『死』。

今この時において、クレス・カタストロフは間違いない息絶えたのだ――。

――迷宮第222層、『鏡面世界』。

そこかしこに露出した鏡面水晶クリスタライザという鉱石が煌びやかに輝く美しき階層だ。

出現する主なモンスターは動く鎧騎士リビング・アーマーこと《ポローラー・ナイト》。

天然武器である光の魔剣を振るい、鏡面水晶クリスタライザに攻撃を反射させて敵対者の死角から

斬りかかろうとしてくる習性に気を付ける必要がある。

その他《アルカンシエル・ドラゴン》、《ソーラー・リザード》、《ウィッチ・サモンバースト》等が放つ光線レーザーもまた気を払うべき攻撃だ。

迷宮ダンジョンの悪意の仕事ぶりがいかに残酷に発揮された鏡面水晶クリスタライザの配置は幾度となくモンスターの光線レーザーを乱反射させ、いつそ芸術的なほどに緻密な光の檻を構成して侵入者を切り刻まんとする。

クレスがそんな階層に降りたのは、偏にとあるモンスターの出現情報を掴んだから

だった。

種族名を『偽神』。

かつて迷宮内ダンジョンで下界における『死』を迎えた超越存在デウスデアが、その何層にも渡るぶ厚い天蓋によって天上界への帰還の路を閉ざされ、そのまま迷宮ダンジョンに魂を囚われた果てに魔石マジックを与えられて迷宮ダンジョンに都合の良い下僕と化した元神モーションであつたモノ。

ウラノスからの情報提供討伐依頼を受けて、クレスは万全の用意の下にその偽神デミ・ゴッドの出現箇所デミ・ゴッドに足を踏み入れたのだが——それとほぼ同時に、彼は一切の抵抗を許されることなく死に至つた。

その、あまりにも理不尽な画を描いたものの正体とは？

それこそが偽神デミ・ゴッドの最も厄介な特性——『神威顕現』アルカナム・リリースである。

今回の偽神デミ・ゴッドの素材もととなつた超越存在デウスデアは、冥府の神アヌビス。

司る権能は『死』。

生ある者から命の熱を奪い、その魂を没薬と共に冥界へと連れていく一神話体系の死神。

それがモンスター化に伴い、地上に降りた神々の盟約など知らぬ迷宮ダンジョンによって強制的に天アルカナムの力を解放される『神威顕現』アルカナム・リリースを与えられたことで、この第222階層は踏み入れたものを問答無用で死に至らしめる冥府の大地へと変貌していたのだ——いわば、

『生命特攻』の領域。

そんな相手を前にしては、如何にクレスとて成す術なく『死』を迎えるのも仕方のないことではあつた……。

——しかし、この程度で終われるほど冒険者は終わつてはいない。

前述した通り万全の準備を終えていたクレスは、「こんなこともあるかと」と秘策を残していた。

レベルアップに伴う魂の昇華により、ほんの僅かに残された『死』へ向かうまでの一呼吸。

その瞬間に、彼は懐から取り出した『薬』を呑み込んでいた。

主たる素材は、『吸血皇鬼』の処女血。

それと磨り潰した月精石、一角獣の銀血、青い彼岸花を混ぜ合わせ、金星の光の下にことごとじつくり煮込んだ特性の魔薬。

その効能はただ一つ——『呪魂創成』、即ち生きながらの死を迎え入れること。

とどのつまり、クレスは吸血皇鬼の眷属として。

不知死の魔人として、この死の大地を歩む権利を今この瞬間手に入れた——！

「——カハッ！」

息を吹き返したかつ、と目を覚ましたクレスは倒れていた地面から素早く起き上がり、周囲の様子を

伺う。

——気を失っていたのはおよそ5秒ほど、か？

見渡せば、周囲は濃い紫紺色の鬼火に満ちた闇の燎原と化している。

『光の都』であった『鏡面世界』^{ミラー・ワールド}の面影は見るべくもない。

死して朽ちた極光騎士《ポラー・ナイト》の魔石が点々と、うず高く積もった黒塵の中心に墓標のように鎮座しており、鏡面水晶^{クリスタライザ}は鬼火の妖しい色を反射してちろちろと冷たい揺光を放っていた。

「……危ない所だったな」

あと少し薬の服用が遅れば、クレスは真の死を迎えていただろう。

一つ上げること^{ダンジョン}に神への階段を昇ると言われるレベルアップを20回以上積み重ねたこと、そして迷宮^{ダンジョン}という魂すら天界に向かうことのできない隔離領域という空間の特性が功を奏した形だ。

しかし代償として——クレスが胸に手を当ててみれば、心臓の鼓動がまったく聞こえない。

脈がなく、体温もなく、よくよく呼吸してみれば肺が酸素を取り込んでいないことも分かる。

鏡を見れば、今の彼の肌は間違いない滑らかな石灰色に染まっていることだろう。

「まあ、良い。——さて、仕留めるか」

クレスは、この身体になって一層強く感じられるようになった『死』の気配の強まる方へと急行する。

その先に立っていた、犬頭がついた人型のモンスターこそが《偽神》アヌビス。

かつてクレスを「死の運命から逃れた異端者」と呼んで襲撃し、撃退・捕縛されて以降は数々の『破壊者』や『殲滅者』の召喚媒体として酷使され、最期には彼に加減を間違えられてぼっくり逝ってしまったという経緯があるのは……ここだけの秘密だが、それはさておき。

そんな過去もあつてか、かの神は当然の如くクレスを恨んでいるようで、迷宮によって強く自我を縛られた状態にあつてもなお、彼の姿を認めるなり唸るような遠吠えを上げた。

『UruWooooooNunnnnn——!!』

「やかましい」

アヌビスの全身からはもはや隠す必要のなくなった神の力がオーラのように漏れ出ており、それが常に空間を侵食して、死の世界へとこの場を塗り替えている。

かの偽神が歩く度に『死』の足跡が迷宮に刻まれ、そこに残る残火が徐々にこの地を固有の領域へと上書きしていく。

『生』ある者は一瞬たりとも存在することを許されず、かの神に一瞥されるだけで死に至ることだろう。

この中で自由を許されるのは、正しく死後の世界の住人だけだ。

その一人と化したクレスは、この場に最も相応しい武器を取り出してかの神に斬りかかった。

「——【ネガ・ファトウム】」

司るは運命属性。

只人が逆らうことを許されざる運命の奔流を切り拓くこの魔剣こそが、その実、かの神の遺骸を素材とした名実ともに神殺しの武器であることを知るのはクレスとカオスだけである。

クレスの所有する武器コレクションの中でも数少ない、神に通用する刃。

その理を正しく理解したアヌビスは、己が遺骸尊敵が凌辱されている眼前の事実に打ち震え、また戦慄きながら、怒りと共に千を超える紫の鬼火をクレスの下に解き放つ。

『UruWoooonmnnnnnuu——!!』

「【最初の火よ、人理の歩みを照らせ。大神より磔刑を受けし貴神あなたに敬意を捧ごう。精神こころ在る限り我が歩みは終わることなどなく、やがて英知の指し示す果てへと至らん】——

【プロメテウス】——」

対するクレスは、完全詠唱の「プロメテウス」で以てそれら死の絨毯爆撃を迎え撃つ。爆ぜる紫と赤の連続火花。

『死』の冷氣と『生』の熱が打ち消し合う神秘的な光景の中を、疾走するクレスは剣を振るう。

「ふっー！」

『U r r u w o o N h u !!』

振り下ろされるクレスの魔剣。

迎え撃つはアヌビスの死爪。

神の魂を幽閉する檻としての役目も持つ肉体は相応の頑丈さを誇っており、確かな衝撃を以てクレスの斬撃を弾いた。

だが、そのまま彼は距離を取ることなく接近戦を選ぶ。

『死』の権能を畏れずに踏み込む彼の選択——肉弾戦。

そこにこそ彼は勝ち目を見出していたが故に。

「——っー！」

『U r r u w o o ——— n n n n u u u !!』

始まるは魔剣と鋭爪、柔拳と剛牙、武術と暴力の応酬。

クレスの理を以て振るう武術と偽神アヌビスの肉体が激しくぶつかり合い、階層全

体を揺るがす轟音が響く。

一挙手一投足が凄まじい衝撃を生み、上下10階層以内のモンスターは瞬く間に逃げ出した。

20階層以上離れたモンスターの直感にも警鐘を鳴らされ、それより遠くのモンスターたちも、迷宮の中はでなにかしらの異常事態イレギュラーが起きていることを察した。

そんなことはいざ知らず、【禁忌アンタクトチヤブル】と偽神はその渦中にある相手のみを意識してその命死を篡奪しあう。

獣頭の威を以て、アヌビス神が強靱な四肢と共に猛る。

黒ずんだ爪による引スラツシユつ搔シユき、涎でてらてらと輝く牙の噛バイテイニングみつき、千年大樹のように太い脚の蹴キツり突クき。

その全てが大気の壁を突き破り、連続する破裂音を伴ってクレスを付け狙う。

只人と比べて一回りも二回りも筋肉の隆起した体格から繰り出されるそれらは、魂ハイの格の違いもあり、触れれば容易くクレスの身体を引き千切るは必至。

だが逆に、命中しなければどうということもないのもまた真理であった。

触れれば死に至る冥府犬アヌビスの誘いを、クレスは悉く退ける。

相手が知ればまた怒ること間違いなしだろうが——彼は目前デマ、ゴツドの偽神の動きに見知つた狼ウエアラフ人の骨格を重ね合わせて、己の技を適合させる。

爪がくれば剣で切り結び、顎アギトがくれば顎下を拳で打ち抜いて強引に閉じさせ、後脚による蹴りがこようとすれば残る軸足を引つ掛けて転倒を狙う。

そうして相手の呼吸に合わせながらも、クレスはその間隙に的確に反撃を差し込んでいく。

爪を当てるために腕を伸ばさうものなら、戻されるタイミングで腱に傷をつける。

噛みつきを空振りにさせれば、その顎が完全に閉じきる前に僅かばかり側面を叩いて齒同士をうまく噛み合わなくさせる。

蹴りを繰り返してくるものなら、回避し擦れ違うと同時に肉を削ぎ取る。

堅実に、しかし着実に敵の力を削ぎ取っていく立ち回り。

それこそがクレスが師スカサハより賜った妙技の一つ、魔獣狩りの妙技。

——そんなクレスの攻撃を小賢うつつとしいしいと思つたのか。

一度大きく飛び退いたアヌビスの胸元が大きく膨らむ——咆哮ハウンド。

魂バに直接衝撃ダメージを与える冥狼アヌビスの猛声が、距離を取ることを許すまいと猛追しようとしたクレスを退けた。

そしてアヌビスは一度腕を自身の身体の前で交差させたのち、背中を大きく丸め——まるで何かを溜めチャージする込むかのような姿勢を取って——『吠えた』。

『GURUwwoooooouuu——UruwwooooooNnnnnn!!』

『冥府犬の咆哮』。

遠吠えと共に撒き散らされる、濃紫紺のオーラ——この空間にうつすらと満ちる冷氣の源流、『死』の概念。

生物・非生物を問わず一律に『死』を与えていく無差別攻撃が、全方向へ向けて放たれた。

彼は視界の先に、目視できる形となったそれを見た。

オーラに触れたもの全てが『死』していく光景。

形ある岩が、枯木が、モンスタードロップアイテムが……形あるものがひたすらに朽ちていく。

本来ならば永年の果てに風化すべきものが、一瞬のうちに虚無の塵と化して、迷宮の大地を骨より白い無垢の砂漠へと埋めていく。

生あるものは問答無用に息絶え、死すらも葬られる死の大地の顕現。

それこそが死の神であるアヌビスに許された天上の力。

ありとあらゆる存在を強制的に自らの領域内に帰属・隷属させるといふ、理不尽な——
デウスデア神々の中では、まあそれなりにありふれている程度の能力。

それに晒されるなど、下界の者としては到底たまったものではない。

肉弾戦ならいざ知らず、神々の持つ概念的な権能に打ち克つ手段など通常存在しない

のだから。

——しかし、クレスは笑っていた。

「漸くか」

放たれる絶望の大技。

だが、彼は既にそれを識っていた。

およそ200年の周期で発生する迷宮ダンジョンの災厄の一つ……冥府神アヌビスの偽神デミ・ゴッドを、彼は400年前に一度討伐している。

無論、クレスはそれつきりで考察を終わらせることを良しとしなかった。

迷宮ダンジョンから与えられた魔石を核とした身体にくを壊され、今度こそ天上に還ろうとして——

再び帰還を遮られ、迷宮ダンジョンに取り込まれ、意識を屈服させられて子供モンスターとして産み直される。

その一巡サイクルの中で、彼は初見でなくなった偽神デミ・ゴッドの倒し方を考えていた。

迷宮ダンジョンに大半の意識理性を封じられ、ただ無作為に神アルカナムの力を振り撒くばかりの存在となった偽神デミ・ゴッド。

それが有する切り札、『神威顕現』アルカナム・リリスの最大開放——しかし、見よ。

大技を放つ偽神デミ・ゴッドは今、己が支配領域アルカナムの中央で佇むばかり。

つまり、反動——圧縮した力の解放という一連の流れにおいて今、かのモンスターは

動けないでいるのだ。

そう。

つまりは自らの存在すら危うい今こそ、かの神を屠る絶好の大隙でもある——！

「——堕ちたる神霊、なにするものぞ」

狙いを定めたクレスが、《ネガ・ファトウム》を投擲する。

元来アヌビスの身体にくであつた魔剣は、それが作り上げた死の領域に刃を突き入れてなお崩壊することなく飛翔し、錨としてアヌビスの身体をその場に縫ステタンい留めた。

そして、クレスは本命の一撃を開帳する。

取り出したるは朱色の槍。

迷宮第200層の主《レヴィアタン》の遺骸から削り出された魔槍の柄を逆手にしつかと握りしめ、己が身体全体を弓に見立てて大きく振りかぶる。

——ことこの場において、小細工アレンジは不要。

魔法の歪みバグを利用した空間ごとの大破壊をもたらす『奔り穿つ影葬の槍』ゲイ・ボルグ・アシッドなどやり過ぎにも等しい。

故に彼が選んだ、本家本流の絶死の一撃。

一撃目で敵を時間軸・空間軸ともにその場に縫い留め、本命の二撃目で確実に仕留める。

それこそが本来の、神スカサハより彼が継承した『投槍の妙技』。

「我が神殺しの妙技、とくと御覧じろ——！」

絶技、解放。

クレスの練り上げられた五体から、影を置き去りにした光の槍が解き放たれた。

魔^{ネガ・ファトゥム} 剣の斬り開いた軌跡を寸分違わず、一直線に飛翔するその槍の本領こそは——、

「『貫き穿つ——死翔の槍』！」

魔槍にして神槍の一撃。

その刃が、アヌビスの魂を封じていた魔石を穿つ。

巻き起こる光の爆発。

肉体の牢獄から解き放たれたかの神の魂が天上に還ろうと、光の御柱を形作つて——

そのまま迷宮^{ダンジョン}の天蓋へと吸い込まれていく。

その、クレスがこれまでに何度も目にした光景が再現される。

そうして数百年の時を経て、再びあれは使い回されるのだ……他の《偽神^{デミ・ゴッド}》のように。

「……しくじったな」

濃密な『死』の気配が晴れていく中、手にした報酬を弄びながらクレスは不甲斐ない

己自身に舌打つ。

哀れな神の末路などには露ほども同情せず、《デミ・ゴッドの神核》——入手手段がこ

れしかない、魔剣《ネガ・ファトウム》の補修材——を懐に仕舞いつつ、彼は内心に詰問する。

既に完成されていた『死』の世界へみすみす飛び込んでしまった自らの不覚。

それが招いた代償は、クレスをしてそれなりに大きなものだった。

『生』からの解放——裏を返せば、『死』という停滞に陥ったクレスの身体。

無論、死ぬ手段もあれば生き返る手段も彼は用意している。

しかし、そのためには『神の恩恵』に頼らない前時代的な——中々に面倒な儀式を年単位で幾つも執り行う必要がある。

しかもそれらのほとんどが『地上オラリオで行うことが求められる』となれば猶更、彼が顔を顰めるのも無理はなかった。

「カオスあたりは久方ぶりの長期休みバカンスだと大喜びするのだろうか……こうなっては仕方あるまい」

普段通りの一日の帰郷では済みそうにない今回の休みに、「致し方なし」とクレスは自戒する。

迷宮ダンジョンはいつだって、油断した者を悪意を伴って飲み干さんとしているのだから。

その慢心の罠に引っ掛かった己こそが一番悪いのだと分かっているからこそ、冒険の遅滞という未練を切り捨てて、彼は潔く地上へ戻ることを選択する。

——見渡す限りに残る、冥府神アヌビスの残響。

骨より白く塗り潰された無味乾燥の『死』の砂漠。

それは、見る者の意識を遠く彼方へ吸い込んでいきそうなほどに——いつそ虚美しくしくて。

兵どもが夢の跡、『生』ある者がいずれは還る虚無を、未だ『冒険者』であることを止めるつもりのないクレスは後にした。

向かうは地上。

最新最先端の冒険譚オラトリアが紡がれる地である、迷宮都市オラリオ。

そこに待ち受ける、ある一つの眷属たちの物語——【魔人モンスタームの神聖譚オラトリア】の存在を、彼は未だ知らない。

恩恵封印

巨塔バベルの地下深く。ウラノスの坐する『祈祷の間』同様、迷宮ダンジョンに杭を打つかのよう
 うに設けられた拠点ホーム『時空の狭間テラス』へ帰還したクレスは、これでもう何度目になるか分
 からない主神カオスからの抱擁ハグによって出迎えられた。

身長差によって彼の胸元から顔を出す形になったカオスへと、クレスはいつものよう
 に声をかける。

だが、平常と変わらないクレスの態度と比べて、彼女の様子は普段と幾分か違ってい
 て——？

「ただいま戻った、カオス。急な帰りですまない」

「おかえり、クレス君。それにしても——ふふつ、おかしなことを言うね？」急な帰り
 ですまない」だなんて、いやいや全然構わないに決まっているじゃあないか！ という
 より寧ろ全然ウエルカムさ？ だって愛しの君が帰ってくるんだよ！ なら主神の私
 はいっだって全力全開で大歓迎に決まっているじゃあないか！ まったく君ってやつは
 私たち神の『愛フアリア』というものを今一ツ理解し切れていないところがあるねエ、良いよ。何

度だつて教えてあげようじゃないか——。

——例えば下界の子供たちは「海より深く山より高い」なんてよく言うけれど、天上デウスデアの存在デアたるところの私たちの愛はそんな矮小な表現じゃア到底図り切れないどころか下界の構造と比較できるほど矮小な感情じゃないことをいい加減理解すべきだと私は思うよウン。この『愛』つて感情ヤッはその他のものと比べて一線を画すどうしようもなく御し難いじゃじゃ馬なんだよ？ 古来「人は『愛』に生き『愛』に狂う」なんてよく詠み詩ウタわかれていたかは君もよく知るところだろう。永い時を生きる神々ミタチにとつてもそれは同じさ。

イヤ、むしろ下界の君たちが思うところの愛ソレよりも、私たちの持つ所の愛コレはずつと強いと言えるねエ……。なにせウン千ウン万年が一瞬に等しい神にとつて、『愛』とは究極的に一義的な『指針』に等しい。ありとあらゆる娯楽や興味を消費し探求し尽くした先に残る唯一にして無二なるもの。それが自己の他に存在する他人への『正』なる執着だからさ——『復讐』もそれに近しく真逆なる感情モとして有名だけれど、あいにく私たちカレは復讐者カレほど真面目で純粋な存在で在れないからねエ、君も幾人か具体例を知つての通りサ。ははつ、それは兎も角——だつて、自分という存在や世界の法則コトワリはいくらでも哲学的に探究することは出来るけれども、『他人』ばかりは己の思考だけで完結させることがどうやったつて出来ないんだもの。雑に言えば、いくら掘つても尽きない金鉱脈みた

いなもの、それ一ツだけを追い求められればずっと自我を保っていられる拠り所……ウ
ン、『生き甲斐』かな？　それが神々が君たちに見出す所の『愛』ってヤツさ。

なにせ自分かみという一つの完成形として生まれながらも感性なかみは下界きの子らたちに近い私た
ちは、意外と精神構造が脆くてね？　並大抵のことはこの瞳一つで見透かしてしまえる
のさ——子供たちの嘘偽りと同じように自分のことですらも。そう、君たち向けに括弧
つけて言うところの『欲 視 力』改め『愚道者デビルアイ』だね。既に完成済で突き詰めるところ
のない私たちは自己探求を卵の殻を割るより易く済ませられるけれども、それはつまり
自己の限界を早く認めてしまえるということなんだよ。

分かり切った神生つてのはそれ即ち終わり切った神生に等しい。だからこそ私た
ちは『未知』を、同じ『完成終わ』を持つ神々なんてпойつと捨てて下界に降り立つワケさ。私
たちとは違って自己の内に留まりきる所を知らない傲慢で強欲な、羨ましい限りの可能
性を持つ君たちに執着したくなる。隣の芝が青く見えるように子供たちは私たちの
完成不を羨むけれども、その実私たちこそ、君たちの未完成不をそれこそ宇宙を灼いてしま
うほどに強く熱く恋焦がれるほどに『愛』しているんだよ？

確かに私は地上に降りてからこれまで他の女神たちのように——国一ツや大陸一ツ、
あと星一ツなんてのもいたっけ？　まあいいや——ナニカを滅ぼしてまで君を手元に
置いておこうなんて馬鹿げたことをしでかしたことはないけれどね。だって、本当にい

い女神おんなってのはそんな他人に迷惑をかけるようなのじゃあなくって、お家にドンと構えて相手の好きな味付けのお味噌汁を炊いてお淑やかに待っているような良妻賢母だからって天照大神アマテラスちゃん家の分け御霊ミタマちゃんモが教えてくれたからねエ。

だけどさクレス君？ だからと言つて私の『愛』がそんな節操のない女神たちと比べて劣っているだなんて思われているんだとしたらそれは心外だよ？ 表に出さない分だけ、私は愛情をこの胸の内にたつぷり溜め込んでいるのサ。ほら胸むねを触つてみると良い、分かるだろう、私という女神の内に脈打つこの混沌あゐが——熱あつくく、甘あつくく、重あつくく……濃厚あつくで、芳醇あつくで、照あつくつて、硬あつくくて祝あつくいで滾あつくつて迸あつくつてとめどなくて狂あつくおしくて透あつくき通るほどに純粹な『想い』——それが私の、私なりの、普段は決して誰にも見せない『愛』なんだって、いい加減理解してくれても罰は当たらないと思うけれど、そこところ君はどう思う？」

「長い。いったいどうした？ 三行で纏めてくれ」

「急に感じてた君の『神フアの恩恵ルナ』が変質したかと思えば珍しく3か月足らずで帰つてきたものだから、心配で心配でたまらないんだよ！」

「そうか、悪かった」

ギユウウウウつ、といつそう強く抱き付き始めた主神の身体を支えながら、軽く謝罪の言葉を述べたクレスは拠点ホームのリビングまで足を運んだ。

そこで離れて対面へ座るように促すも、ちよつと魂の様子が変わった眷属のことを案じて決して離れようとする彼女と仕方なくソファーに隣り合わせで座って、彼は大まかに今回の経緯について語り始めた。

「ウラノスの依頼もあつて偽神デミ・ゴッドを倒してきた。素体は冥府を司る犬神アヌビスだが、かの神固有の領域に不用心に脚を踏み入れたせいで死んでしまつてな。仕方なしに『鬼化霊薬』ドラクワイソアを使った。一応治験は終えていたからな」

「そうかい、あの子の血を……そのせいなんだね、君の心臓の音が止まつて聞こえるのは」

「ああ。全ては俺の気が緩み過ぎていたが故の過ちだ。しかし、こうして生きて帰れたんだ——次はない」

くつついたままのカオスは、クレスの胸にそつと恋人のように耳を添わせる。普段ならばそこから感じられる、活火山のように激しい心臓の脈動はない。

まるで伽藍洞のように静かになってしまった眷属の身体。

——しかし、その奥には未だ確かに、燻る灰の如き魂の熱があることもまた彼女は感じ取っていた。

「俺自身の咎だ、今回のことは甘んじて受け入れよう。だが何度も同じ過ちを許せるほど暇ではない。次こそは必ずや、油断も隙もなく奴をこちらの意中に嵌めて討ち果た

す

そう語るクレスの顔に宿るのは、ただ偏に自らへの叱咤一色だった。

下界の者たちを侮っているが故の、上位存在デウスデアの怠慢じやくてにして傲慢じやくてん。

「そこを上げば恐れるに足らず」と判断してしまっていた自身の慢心じやくてんをこそ、クレスは猛省していた。

次こそは、もうこのようなことがないように……一分一秒とて惜しい迷宮ダンジョン攻略の時間を奪われなかったためにも、ついで主神を悲しませないためにも、クレスは頭の隅で次へ向けて思考を練っている。

涙をクレスの胸元で拭う彼女の頭を撫で擦りつつ、彼がこれまで弑逆し、そして迷宮ダンジョンに取り込ませてきた神々敵の司る概念を反芻する——もう、彼らに何をもさせることなく、クレスの側から一方的に仕留められるような計画ハメ方を考える。

「心配させたことは謝罪する。次からは最初から俺の持てる全てで以て奴らを迎え撃ち、滅ぼし尽くそう。だから泣き止んでくれ、カオス」

「うん、うん、うん……」

「故に、今必要なのは現状確認だ。俺は今、どうなっている？」

「……ふー、分かったよ。ううん、ちよつと待っててね……」

シャツを脱いで横になったクレスの上に、カオスが「うんしょ」と馬乗りになる。

そこへ己が神血イコルを垂らして恩恵の施錠ロックを開放した彼女は、神々の持つ直感で察した眷属の異変をその目で直接観察した。

「つ、これは……」

「カオス」

絶句。

もう千年も付き合って久しい眷属の見せる『未知』なる光景に主神が戦慄していると、ふと示し合わせるかのようにクレスがその名を呼んだ。

その声に含まれているのは——全福の信頼。

「我が主神ならば一切の嘘偽りなく自身の現状を開示してくれるだろう」という眷属の想いに応えて、彼女は己が瞳が告げるままに、眷属の背中の真実恩恵をその麗しい桜色の唇から説明することにした。

「……安心しなよ、クレス君。結論から言うとな、まア、今の君の状態はそんなに悪いものじゃあない。今の君の中では私の力とサラちゃんちゃんの力が相克している……打ち消しあつてる、と言うべきかな。君という強靱な『器』の中で、私と彼女が呪呪いあつてて上手くバランスが整つてる。イメージとしては、アー、太極図みたいなものかな」

「なるほど」

自身の与えた恩恵を通じて、神眼を以てクレスの魂を観察するカオス。

彼女の視界に映るのは、白き神デウスデアの力と黒き魔モンスターの力が互いに鎬を削り合う光景だった。互いに暴風の如き猛威を以て相手の力を削ぎ落とし、屈服しさせんとする祝福と呪詛のの闘ぎぎ合い。

なお恐れるべきは、その力の衝突を魂魄に収めながらも苦悶一つ浮かべないクレスの胆力か。

一つ誤れば内側から崩壊・爆発四散しそうなエネルギーの衝突を、本能的に御しながら『器』として機能している。

そんな自身の眷属の強靱さに、カオスは安堵半分呆れ半分の表情になる。

だが、こんな不安定な代物を「今は大丈夫だし、なにより面白そうだから」など放っておけるほど彼女は神として真面目ではなかった。

カオスはすぐさま顔を引き締めて、自身の決定づけた神託を告げた。

「だけど、このままと言う訳にもいかない。……良いかい、クレス君。極めて残念だけど、今から君の恩恵を封じるよ。君の昇レベルアップ華を一時的に全て対呪詛アンチ・カースに振り分ける。ただでさえ君の『神の恩恵』は厄介なものを2つも抱えているんだ、それでもしないとサラちゃんハイ・カリスの上位呪詛にその内押し負けてしまっただろうからね」

「そうか、了承した。貴神あなたが言うのならそうなのだろう。疾くやってくれ」

カオスの授けた無慈悲な決定に、されどクレスは一切の異を唱えることなく頷いた。

これでまた迷宮ダンジョンが遠ざかる……その悔しさが彼に一粒もないと言え、嘘になる。

だが、その非が全てに自分にあることを彼は既に受け入れている。

それに、自分よりも恩恵の取扱いに詳しい神の言葉なのだ。

素直に受け入れるより迷宮ダンジョンに戻る道が近づくことはない——それを悟っているからこそ、素直な納得。

代わりにと己が不甲斐なさに恥じ入らんと拳を秘かに握りしめるクレス、その眷属の心中を見通しながらも、カオスは神アルカナムの力耀くその五指を躍らせた。

——蝶が繭へと戻るかのように、クレスの背中から恩恵の光が鎖されていく。

そこへ刻まれた膨大な歴史の力の潮流が、ベクトルを変えられて対呪詛アンチ・カースへと効力を変えていく。

念入りに十分ほどの時間をかけて、カオスは見事その目的を果たしたのだった。

地上に降りた最古の女神の一柱として、如何なる神々よりも恩恵ファルナの扱いに詳しいと自負する彼女の手によって施された堅牢な施錠ロック。

百重千重の神意で以て形作られたそれは、確かに眷属の魂を蝕む上位呪詛ハイ・カースを封じ込めることに成功したとカオスは見て取った。

「……ふむ。退いてくれカオス。今の身体の調子を確かめたい」

「えー、どうしようかな？ だって今の君は久方ぶりに一般人くらいの力しかないんだ

よ？ このまま組み敷いちやつて愛を確かめなおすつても私的にはアリかなーって、きやうん!」

「馬鹿なことを言うな」

手をわきわきとさせながら急にヘンなことを言い出した主神の下からするりと抜け出し、改めて只人として地面に立ったクレス。

——嗚呼、その身体のなんと言うことを聞かぬことか。

ただ呼吸するだけで、灰が鉛のように重い。

腕や足は骨に棒を差し込まれたかの如く固く、視界も光が幾分か遮られたかのように暗く見える。

これが冒険者としての力を失った代償か——このような状態で『■■■の■■■』として戦っていたかつての自分が嘘であるかのように思えるほど、クレスは己の身体が己のものではないかのような感覚に襲われていた。

レベルアップ
昇華の際に伴う全能感とは真逆の、倦怠感。

「これは慣れるまでに時間がかかりそうだ———そう思いながら、クレスはカオスから離れるようにして別のソファアへと改めて腰掛けた。

「暫くはこの身体との付き合い方を覚えるまで療養リハビリだな。解呪の儀式を始めるのはそれから、か」

現状のクレスの力量は軽く見積もって、レベル5から6程度。

物理法則すら突き破れない肉体の脆弱さを改めて噛みしめながら、彼はこれからの行動指針について、眷属に距離を取られて頂垂れる己が主神に打ち明けた。

「さてカオス。御身のことだ、既に分かっていると思うが俺はこれから暫く地上で動く。サラの呪血を解くにあたっては、どうあつても日の光による『禊』が欠かせないからな」
「!! ——それじゃあー！」

「ああ。解呪の儀式を完遂させるためには、どうしても時間がかかる。その間に持て余す時間も出るだろう。その余暇は全て御身の意のままに使おう」

そのクレスの宣言は、ズーンと遙か地の底へと向けられていたカオスの機嫌を180度転換させるに足るものだった。

「すぐさまびよこん！ とソファアーの上で跳び上がった彼女は声を弾ませながら彼に向けて顔をほころばせた。

「やったあ！ うふふつ、それは嬉しいねエ！ ……いや、本来喜ぶべきことじゃないのは重々承知の上だけど、それにしても眷属の久々の長期休暇ともなれば主神にとつてはこの上ない喜びだよ！」

「構わん。たまにはこんな主神^{おや}孝行も良いだろう。最も、そこまで多くの予定を設けられるわけではないが」

「ふっふーん、なアに構わないとも！ その分一分一秒君の側にいる時間を噛み締めるだけだからね！ さーてどうしようか、こういうこともあるうかと色々計画を練ってはいたんだけれど……そうだ！ 知ってるかいクレス君、最近数年前からガネーシャ君の所で『怪物祭』なんて催し物を始めてね、そこが絶好のお出デーかけトチヤンス機会と有名なんだ！ 運よく直近のチケツトもあるし、まずはそこへ一緒に行こうよ！」

『怪物祭』？ ……ああ、前に聞いたことがあったな。モンスターを使つて行う調教タイム興行か。良いだろう、俺も調教タイムはあまりしたことがない。興味がある。後学のためにも是非観覧させてもらおう」

なお、ここでのいうクレスの調教タイムとは、竜騎士ドラグナーの如くモンスターを相棒として颯爽と駆る英雄譚のようなものでは断じてない。

『ゴールデン・ワイアーム』の宝ストレージ・オーガン胃袋を無理矢理抉じ開けて金属精錬の道具にしたり、一つでも首が残っていれば他の首を無限再生させる『エイトヘッド・スネーク』に魔石を延々と食わせてその顔に宿る魔眼石を一度に大量に採取したりするような、彼らによる被害者でさえドン引きするような血生臭い『利活用』である。

その眷属の行いを少なからず知るところのカオスは、苦笑いでクレスの真剣そのものと言った顔を見ていた。

「そーいうんじゃないんだけどな……」

「分かつている、もちろん御身を楽しませることが主目的だとも」

「あー、うん、まあ……よーし、ならまあいっか!」

だが結局、自身の楽しみが一番とばかりに彼女はクレスの勘違いを訂正することを止めた。

よつぽど人道にもとる行いに手を染めているのもなければ、彼女はその他の神々と同じく眷属の行動を全肯定する女神色ボケであつた。

「では当日を楽しみにしていてくれ。俺は暫し外へ出て、ロイマンに今回のことを話してくる」

「良いよー? と、そうだ。ちなみに食材の買い足しはいらさないよ? ちようど彼らが次の一週間分を買い込んできてくれ——あ、戻ってきたみたいだね」

そこへ、ガタゴトと玄關から荷を運び入れる音が響く。

本来であればクレスとカオスしか——ウラノスは言わずもがな、ロイマンは権限があるとはいえ好き好んで足を運ぼうとしない——踏み入ることのない『時空アの狭間モ』。

彼らの前に姿を現したのは、見覚えのある二人の男女だつた。

「——む。戻ってきていたのか? 随分と早いな」

「おう、おかえりクレスの旦那。なにかあつたのか?」

姿と気配を絶つ『透明外套』を脱いだ彼らの正体は、一方が黒き装束ドレスに身を包んだ女

であり、一方が同じく漆黒の大兜と鎧に身を包んだ大男であった。

その正体こそはアルフィアとザルド。

前者は自ら堕ちようとしていた所をクレスによって導かれ、後者は何の因果かサラに目をつけられて死にかけていた所を救われた、前時代の遺物にして残響である。

クレスたちによって命を繋がれ、また捨て去っていた理想英雄願望を取り戻した彼らは、個人的な事情によって少しばかり辺境に離れていた後、このオラリオへと戻ってきて再び冒険者家業に身を賭していた。

とは言え、闇時代の象徴として一度君臨してしまった彼らの存在は依然として公に晒せるものではない。

表向きには凡百の一つに過ぎないカオス・ファミアリアに一時の眷属として仮契約している二人は、実はこっそりとここに設けられている迷宮ダンジョン第77階層直結の転移用マジックアイテム魔道具魔道具（クレスの転移魔法を魔道具に落とし込んだもの、推計二兆ヴァリス）を利用して迷宮ダンジョンに出入りしているのだった。

「色々あってな。暫く地上地上に居ることになった」

「そりゃ珍しいこともあるもんだな。……ところで、今回はあの女はいないのか？」

「サラのことなら、今回は迷宮ダンジョンに残っているぞ。一応誘ったが、なんでも「面白い食材を発見したのじゃ」と言ってみる耳持たずでな」

普段はむしろ彼女の方から「地上に行きたい」と言つてやまないサラがクレスの誘いを蹴つてまで迷宮ダンジョンに残る理由——それはむしろ、『食』の探求のために他ならない。

厨房にて鍋の切身に真剣に目を凝らしたまま、まったく彼に視線を寄せさなかつたサラの語りがクレスの脳裏に鮮明に思い起こされる。

『ダークブリンガー』。お前たちの知る所で言う……ウオーシャドウの上位種だな』

『ウオーシャドウ？ 食えるのか、あいつが？ いや確かに『食べる』だけなら出来なくもないが……？』

ザルドはかつて食べたことのあるその味を思い返し、顔を大きく顰める。

ウオーシャドウの落とす『爪』は剣の代理にもなり得るように、鋭利で金属的な質感を持つ。

決して食べられない代物ではないが、それはその辺りに落ちている土を強引に水で流し込むことに等しい。あくまでも臓腑に流し込めるだけで、特別なスキルでもなければ消化されることなく排泄されるだけの代物だ。

そんなものを食材と呼ぶことは到底受け入れがたいとばかりに渋い顔をする彼に、クレスはもう少し詳しく説明してやることにした。

「らしいぞ。なんでも食べると「虚無っぽい味がするのじゃ！」とか。俺も実際に喰つたわけじゃないから、具体的な味を教えることは出来んが」

「イヤ、虚無っぽい味ってなんだよ」

「俺に聞くな」

「そうか……」

複雑そうな声で、ザルドは思わず身体を震わせた。

それもそのはず。

同じ美食を好む同好の士ではあるものの、彼はサラに大して若干の苦手意識トラウマを抱いているからだ。

なにせ陸の魔獣ベヒーモスの毒に侵されて生死の境界を彷徨うばかりだった彼に、サラは「毒を食らわば皿までじゃ」とばかりにその身体がベヒーモスの毒への抗体を獲得するまで延々とかの魔物の血肉で作られた料理を与え続けたのだから。

ベヒーモスのステーキ。ベヒーモスのハンバーグ。ベヒーモスの生姜焼き。ベヒーモスの南蛮揚げ。ベヒーモスの刺身。ベヒーモスのカツレツ。ベヒーモスの肉饅頭。ベヒーモスのレバーペースト。ベヒーモスのブラッディソーセージ。ベヒーモスのハギス。ベヒーモスの血割り酒。ベヒーモスの毒腺シチュー等々……。

確かに味はうまい。どれも丁寧に下拵えされたものばかりであって、彼の舌を満足させるに足る皿であったのだが……やたら舌はピリピリするし頻繁に腹を下していた。

挙句の果てにはそんなベヒーモスで満たされた満漢全席さえ完食させられた彼の記

憶は、いくら食事をこよなく愛しているとはいえ早々抜け切るものでなかった。

「今度もまさか、同じ劇物にはならないよな?」——そう遠くはないであろう未来に戦々恐々とするザルドをさておいて、アルフィアが閉じてばかりの瞳を薄く開いてクレスの現状を見て取る。

「そんなことはどうでも良い。それよりも、その情けない身体はどういう事情があつてのことか?」

鋭く詰問するかのような視線に、特に隠しているつもりもないクレスは素直に己が事情を吐露した。

「ああ、今の俺は一時的に恩恵を封じている。高く見積もって、精々レベル6程度が限度だ」

「はア? 恩恵を封じてる? なんでわざわざ……しかもそれでレベル6ってどういうことモブツツ?!?!」

「黙れザルド。そこまですなければならぬ理由があつた、ただそれだけのことだろう。それに……その昔、恩恵もなしに戦った英雄たちは『神の恩恵』^{フアラナ}がなくなるとも今で言うところのレベル5、6はあつたそう。ならばこの御方がそうであつてもなんら可笑しくはなからう」

「お、おう。そりやそうだが、だからって一々殴んなよ……」

恨めし気なザルドの訴えを黙殺し、アルフィアはクレスに鋭い目を向けた。

彼らの関係性は変わらず、女王とその召使いのようなものであるらしい。

「それで？　なにがあつたかは知らないが、戻れるのだろうか？」

「もちろんだ。ただ、その為には幾分か厄介な手順を踏む必要があつてな。そのために地上に居ることが必要、という訳だ」

「そうか……なにか私たちに助力できることがあれば遠慮なく頼れ。この身体は御身によつて救われた、迂遠ではあるがその木偶男もそうだ。返し切れなだけのこの恩を少しでも返せるのならば、惜しむことなどなにもない」

「おうともさ。俺だつて旦那には恩を感じてる。なにせ俺が喰つたベヒーモスの肉はほとんどアンタが取つてきてくれたつて話だからな。ただ救われただけじゃなくて、今もこうして武装に拠点と、色々提供してもらつてる。返せるものはキツチリ返さなきゃ、元ゼウス・ファミリアの名が廃るつてモンだぜ」

そう協力を申し出てきた彼らに、クレスは「ならば」と遠慮なく頷く。

なにせこれから解呪の『儀式』を執り行うにあたり、少々の人手が必要だったからだ。

その中でも特に、元大派閥である二人の人脈は大いに活用できるだろうとクレスは踏んでいた。

「そうだな。欲しいものは色々とある……だが、その中でも最も欲しいのは『情報』だ」

「情報？」

二人と一柱が傾注する中、彼は今回の『要』となる最大にして最難の要素について厳かに告げた。

「そう、『精霊』の目撃情報だ。神々が盟約によって天上^{アルカナム}の力を十全に振るえないこの下界において、それに次ぐ力を持つ奴らの力こそが今の俺には必要だ」